

---

# 大怪獣現る

蚕豆かいこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大怪獣現る

### 【Nコード】

N9196V

### 【作者名】

蚕豆かいこ

### 【あらすじ】

大西洋を航行中の米原子力空母が沈没した。奇跡的に救出された乗組員は重度の放射性物質の汚染を負っており、彼は巨大生物の襲撃によって艦が撃沈されたとの旨の証言を残し、息を引き取った。果たして巨大生物は米本土に上陸。核物質を含んだ炎で都市を焼き尽くす。この未曾有の軍事的脅威に対抗すべく、米大統領は全世界の米軍基地から戦力を撤収、総力で本土での決戦に臨むと表明した。それは日本の米軍基地も例外ではなかった……。空洞化する防衛戦力、混乱する世界情勢。その間隙をつくように、北朝鮮が日本に宣

戦布告。米軍のいない日本は瞬く間に侵略され、自衛隊を指揮する内閣総理大臣、以下閣僚や官僚は国民を見殺しにして、各々諸外国に逃亡、亡命してしまう。世界は、そして日本の命運は……？

## 一 アメリカ空母轟沈す

青くかがやく大海原が無限に広がり、それを写したような蒼穹と  
はるかかなたでまじりあう。海洋と天空の突き抜ける水天一色の青  
さはまさに生命の喜びと恵みの色、目にも鮮やかな悠然たる大パノ  
ラマは見るものの心を包む。

その海上に、隊伍を組む鋼鉄の巨獣の群れ。山脈にも比肩する巨  
体、その背に、翼をたたんで休む鉄の天使達を大勢乗せた艦が、多  
くの護衛艦を引き連れ、青き海を行進している。それこそまさしく、  
アメリカ合衆国海軍が世界にほこる原子力空母、ニミッツ級8番艦  
＜ハリー・S・トルーマン＞の英姿だ。島がそのまま移動している  
かのような圧倒的質量の航行、それだけでも壮観無比の光景だが、  
さらにイージス巡洋艦、イージス駆逐艦、艦隊のバックアップ、兵  
站を担当する高速戦闘支援艦などの何隻もの護衛艦が脇を固め、海  
中にはロサンゼルス級原子力潜水艦がサポートについている。原子  
力空母を中核とした各種艦船群の一大兵力、無敵とさえいつてよい  
「力」の象徴がそこにあつた。

空母の甲板上には、主翼を折り畳んだ、艦載機のトップスター、  
F/A-18スーパーホーネット戦闘攻撃機数十機が、適切な角度  
をとって所狭しと駐機され、大空に飛び立つその時を首を長くして  
待っている。防空の索敵になう早期警戒機や電子戦機も陽光を浴  
びて燦然ときらめく。そのあいだを、幾人もの整備兵が忙しく縫っ  
て走りまわり、おのおのの仕事に追われている。さえぎるものがな  
もない洋上の強烈な日射から保護するためのヘルメットとサングラ  
スは必須の装備だ。

空母の航海日程は長期におよぶため、さまざまな施設が内部に用  
意されている。病院や商店、理髪店もあれば今日の懺悔もできる教  
会もあるし、アイスクリーム・バーだってある。アイスクリーム・  
バーはいつ行っても行列ができるほどの大盛況ぶりで、航海員や飛

行士だけでなく士官がならんでいるときもある。だから同僚とならんでいるときに、日ごろ憎々しく思っている上官の悪口で話に花を咲かせていると、前にその本人がならんでいたたりすることもしゅうぶんあるわけだ。

小規模の都市といってもよい空母の一角、テレビのあるレクリエーション・ルーム。今日は訓練や任務の予定がない十数人の非番の飛行士たちが暇潰しに集まり、テーブルでポーカーをしたり、テレビのチャネルの権利を争ってアームレスリングをしたり、たわいもないことで談笑したりして、めいめいに時間を過ごしている。いずれ劣らぬ、屈強で優秀な戦士たちである。

ランプとにらめっこしているひとりの男が、一種のポーカーフェイスのつもりか口を開く。

「やっと帰れる。半年もこれじゃあな」

煙草を片手に紫煙をくゆらせ手持ちのランプを眺めていた男が静かに笑って反応し、

「ペルシャ湾はきらいか？」

会話をしかけた男が肩をすくめる。

「二度とごめんだね。あんなクソ暑い甲板にいたら、『スプーン』のアル・シモンズみたいになっちまう。さっさと帰りたいよ。そんなもつ金輪際、来たくない」

<ハリー・S・トルーマン>は今回、ペルシャ湾にて、第5艦隊の海上治安活動の支援任務を帯び、出港。六ヶ月にわたる作戦日程を遺漏なく消化し、いまは帰港の途についていた。海の上での六ヶ月は長い。なによりペルシャ湾の凶悪な太陽に熱せられた空母甲板は殺人的酷暑となり、艦載機を発艦させる蒸気カタパルトのスチームもあいまって、日中は摂氏六〇度を上回るなどざらであった。地獄である。その地獄の任務もひとまずは終了し、みな帰還と休暇に胸を踊らせていた。大西洋をぬければ母国はすぐそこだ。男の言うのもむりはなかった。

「なんだってタリバンの連中はさつさと降伏しないんだろうな。そうすれば戦争も終わって、おれたちもこんなところに来ることなかったのに」

トランプの采配にすべてを懸けるひとりがガムを噛みながら言う。「リオの連中がサンバに狂うのと同じさ。あいつらにとっちや腐れジハードが生きがいなんだろうよ」

「つきあわされるこつちのことも考えてほしいよ……」

ガムを味わい、札を捌く。

「アメリカも弱気だよな。戦闘終結宣言をしたはいいが、自爆テロで死んだアメリカ兵の人数は、とつくに戦争中の戦死者数をこえてるんだろ？　いつまでこんな泥沼の状況を長引かせる気なんだ」

煙草を深く喫い、煙と息を長く吐く。

「いつそ核を撃ち込んでなにかも吹き飛ばしてやればいいのさ。日本だって原爆を二発落としたとたん従順になった。無条件降伏どころか、占領してくれてありがとう、在日米軍基地も出ていかないですつといてくださいと、六〇年以上たつたいまでも言ってるくらいだからな。いつまでもチマチマやってないで、核でイラクを世界地図から消してやればいいんだよ」

「核を使えば世論が黙っていないぞ」

トランプを持つ手が閃き、場に置かれる。

「じゃ、何か？　このままイラク派兵が長引いて、おれたちの仲間がこれ以上やつらのジハードごっこで殺されてもいいってのか？

冗談じゃねえ」

みなスートと数字をさぐりあいながら、トランプをくる。

「大統領も大統領さ。この期におよんで核兵器削減を表明するなんて。核はアメリカの特権であるべきなのに」

「日本の与党は誉めちぎってたな。核廃絶への大きな一歩とかなんとか」

短くなった煙草を憎々しげに灰皿に押し潰す。

「あの国は安全保障の観念がなくてねえ。戦争がない状態が平和だ

の、世界から戦争をなくすにはすべての国から軍隊を取り除けばいいだの、まるで見当ちがいのことをほざいてやがる。問題の根元がわかってねえ証拠だ。それに……」

胸元のポケットから箱をとりだし、新しい煙草をぬく。

「今度の核兵器削減案には、イワンは応じるらしいが、中国はそのそぶりもみせなかった。世界の核保有国がすべての核を捨てたとしても、ズボンを穿かなくても核武装なんてスローガンを掲げてた中国は、絶対に核を一発たりとも捨てやしねえぞ。そうなるといちばん困るのはどこの国だ？ 発射から十分程度の射程内にいる日本じやねえか。実際問題、核軍縮の潮流は、中国に有利にはたらいてる。なにしろ中国にとっちゃ、よその国が勝手に核を減らしてつてんだからな。相対的に核保有率があがるわけだ。そうでなくとも、いまこの瞬間、台湾で有事が起こったらどうする？ 核をもってる中国に、日本はどんな要求でも吞まざるをえなくなるぞ」

星の紋章が刻印されたジップで煙草に火をつけ、紫煙を吟味する。「それでも日本は鸚鵡みたいに『核はダメ、核はダメ』と繰り返す。核兵器の脅威と有用性は、唯一の被爆国の日本が一番よくわかっているはずなんだが」

「幼い国だな、日本って」

そばかすだらけの兵が鼻で笑い、煙を長く吐いた男が引き取る。

「だから、おれたちアメリカが面倒みてやらなくちゃいけないのさ。オモイヤリヨサンってやつをもらってな」

「核兵器をもちたがる国よりかはマシじゃないか？ まだ身の程をわきまえてる」

外野でアイスクリームを舐めている兵が口を出す。例のアイスクリーム・バーで一時間ならんで買ってきたものだ。兵士が、その大西洋よりも青い氷菓子で真っ青に染まった舌を見せびらかすと、ポーカーの成り行きを見守っていた兵のひとりが、

「北朝鮮なんか見てみるよ、核をもって、おれたち安全保障理事国と対等になつたつもりでいやがるぜ」

煙草を喫っていた飛行士が不敵に笑う。

「だからだよ。核をもつのは、アメリカだけでいいんだよ。アメリカこそ核を保有するのにもっともふさわしい国だ。アメリカは正義なんだから、な」

「そういうこと！」

最初に会話を仕掛けた男がカードをテーブルに展開して見せつけるように置く。

ハンドは、ハートの8、クラブの9、ダイヤの10、スペードのジャック、そしてクラブのクイーン。文句なしのストレートだ。それを見た参加者の何人かが呻く。

「くそ、あと一枚でフルハウスだったのに」

そばかすの飛行士が手札を叩きつける。勝ち誇った笑顔で”ストレート”が言う。

「役にならなかつたら、一枚足りないのも全然足りないのも同じさ」その笑いのまま見渡していると、煙草を喫っていた男の不敵な笑みが無言で待っていた。男は胸いっぱい煙をいれ、一息ついてから、テーブルに五枚のカードを置いた。

全員の目がその役に吸い寄せられた。そして、宝くじの番号を見るように、何度も何度も確認する。

「おい、嘘だろ……？」

その言葉を言うのが、精一杯だった。

ハンドの中身は、10、ジャック、クイーン、キング、エース。そしてスーツはすべて、永遠の輝きを約束するダイヤ。だれかがうわずった声で叫んだ。

「ロイヤルストレートフラッシュだ！」

観衆はみな沸き立ち、特大アーチを打ったメジャーリーガーにチームメイトがそうするように、勝者の肩をかわるがわる叩いた。勝者は誇らしげに煙草をのんだ。そして足を組んでふんぞりかえたまま、ここ一番で敗れることになった”ストレート”に言った。

「おまえな、ポーカーの途中に自分から話を仕掛けるなんてのは、

素人のすることだぜ。いいカードが回ってきて、興奮してるってのが一目瞭然だ」

“ストレート”が天国から地獄へ落ちたような顔で返す。

「そんな役、そうそう出すもんじゃない。一生分の幸運使っちゃったかもな。今日にでも死んじゃうだろうよ」

苦し紛れの負け犬の遠吠えにしか聞こえないセリフに、王者は余裕の大笑いをするのだった。

海中で息を潜めるように艦隊の護衛をしているロサンゼルス級潜水艦は、その性能の高さから、攻撃型潜水艦としてはもつとも多量産された傑作艦である。そのロサンゼルス級潜水艦USS<コロンビア>のソナー室で、ゲームの攻略法を教えてやった見返りにコック長に作らせた、パティ六枚重ねの特大ハンバーガーを頬張っていたソナー担当が、不意に、聞き慣れぬ音を耳にした。数ある潜水艦のソナー担当官のなかでも、車のドアを閉める音だけでも車種と年式を言い当てるほどの耳をもち、百年に一人の逸材と誉れ高いこの男の耳朵をうったのは、聴覚だけでなく、体全体で感じるような音だった。むろん、彼でなければ気づきもしない、千歩離れたところで腹の虫が鳴くような、ごくごく小さな音波である。その音は、潜水艦のスクリー音のような持続的な音ではなく、パルス状の信号に近かった。どこかで聞いたことがある……耳聞れないと思うのは、各国の海軍が保有する潜水艦のエンジン音、スクリー音を聴き分ける方向に慢性的に思考が傾いているからで、先入観を取り除けば、直感的に思い当たる音が記憶にあざやかによみがえった。心臓の鼓動音だ。妊娠した愛する妻のお腹に耳を当てたさい、鋭い聴覚が、母子合わせて三つの心音を捉え、双子だと喜びあった、春うららかだったあの日を思い出した。あるとき聴いた鼓動に、いま感じた音の波長と成分がよく似ていた。だが、あまりにもスケールの大きさが違いすぎる。もし本当に心臓の音なら、おそろしく巨大な

生物だ。人間などとは比較しようもない。クジラか？ いや、そんな生やさしいものではない。

ソナーがヘッドフォンをして、耳を澄ませる。また音がした。艦の真下からだ。さっきより大きくなっている。近づいてきている？ ハンバーガーが手からこぼれ落ちた。グリーンを基調としたモニターを見て、ソナーは艦長に大至急連絡した。

「艦長、こちらソナー室。深度三万フィートで反応を探知。類別不能」

「なんだ？」

「アンノウンの接近を確認。本艦の直下から急速浮上中」

コントロール・ルームで無数の電子機器のディスプレイの茫洋とした明かりに包まれた中で、USS<コロンビア>艦長らが主スクリーンに釘付けになる。

「潜水艦の速度ではない、速すぎる」

即座に指示を出す。

「総員戦闘配置」

副長が復唱する。

「了解、総員戦闘配置」

「取舵一杯、全速三分の二。<ハリー・S・トルーマン>にも伝える。水雷長、魚雷一番から四番まで注水開始」

「了解、取り舵一杯」

「全速三分の二」

「魚雷一番から四番注水開始」

士官のひとりが赤い電話をとる。

「USS<コロンビア>からUSS<ハリー・S・トルーマン>へ。現在本艦へ向け、アンノウン一体が深度三万フィートから急速に接近中」

悲鳴にも近い声。

「こちらソナー、アンノウンさらに接近、距離二万五〇〇〇！すごいキャビテーションだ、鼓膜がやぶれそうです！」

「おまえの耳が頼りだ、目標の針路は」

艦長が訊くと、ソナーが、

「なんてことだ、アンノウン、コース8-2-5に修正。確実に衝突コースです！」

「衝突警報、針路そのまま、突っ切るぞ」

「了解、衝突警報発令」

艦内に警報音が響く。狭い艦内でクルーたちが隔壁を駆け抜け慌ただしく動き回る。

「艦長、アンノウンさらにコース修正、本艦に向けなおも急速浮上中。距離九〇〇フィート！」

「この艦を狙っているのか……」

おおぜいのクルーがひしめきあうコントロール・ルームは、蜂の巣をつついたような騒ぎになっている。みな、自分の仕事を完遂させようと必死であった。

「距離五〇〇！」

<コロンビア>艦長が螺旋のコードで結ばれたマイクを握りしめる。

「左舷にぶつかるぞ。総員衝撃に備えろ」

「距離三〇〇！」

ソナーが叫ぶように伝えてくる正体不明物体との距離が、クルーたちにはそのまま死へのカウントダウンに聞こえた。

「距離一〇〇！」

「繰り返し、<コロンビア>から<ハリ・S・トルーマン>へ、所属不明の反応が本艦へ接近中、打撃群全艦および大西洋軍司令部に……」

「距離三〇〇！」

「来るぞ、なにかに掴まれ」

「距離一〇〇フィートを切りました！」

その直後、艦内の天地が、一瞬で逆さまになった。乗員は人形のように吹き飛ばされ、艦内に、白い海水の飛沫が瀑布のように弾け

た。

「USS<コロンビア>からの通信途絶」

「呼び続ける」

空母<ハリー・S・トルーマン>の艦橋で、レーダースクリーンを前にした士官たちは、原潜から突然入った緊急の無線に対応すべく、努めて冷静に状況を把握しようとしていた。

<ハリー・S・トルーマン>を中核とする艦隊全体の指揮を掌握するストロエスネル少将は、<コロンビア>から所属不明物体接近の報を受け取った瞬間には、打撃群の艦隊と、同じブリッジにいる直属指揮下のふたりの大佐に戦闘配置の命令を出していた。少将から命令を受けた航空母艦USS<ハリー・S・トルーマン>そのものの艦長を務めるほうの大佐が、乗員にスピーディーに令達していく。空母上の航空団の指揮をとる、通称CAG

(Commander, Air Groupの略)と呼ばれるもうひとりの大佐が、<ハリー・S・トルーマン>に艦載された第3空母航空団にただちにスクランブルをかけた。飛行士たちと整備兵が協力して神速で発進準備をすすめ、いまでも早期警戒機E-2Cホークアイがレーダー管制のためいち早く飛び立ち、要撃機も、もうすぐ、最初の一機めが発艦できる段階にあった。

少将の命令を入電した巡洋艦が、麾下の駆逐艦にそれを伝達。駆逐艦に艦載の対潜ヘリコプターを発艦させる。

巡洋艦の指揮を受け、同行している二隻のアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦からそれぞれ飛び立った、三機の対潜ヘリコプターが、空母の右舷を航過していった。

「いったいどの潜水艦だ。われらが無敵の空母打撃群に奇襲をかけてくるのは」

レーダースクリーン上の、通信の途絶えた<コロンビア>の最後に確認できた位置を指で示しながら、艦長は副長に言った。副長はすぐに、

「潜水艦……でしょうか」

と返した。

「<コロンビア>は、アンノウンは深度三万フィートから接近と言っていました。そんな大深度を潜航できる潜水艦があるとは思えません。それに、<コロンビア>のソナー、アウグスト曹長は、海軍きつての地獄耳です。相手が潜水艦なら、とつくに艦名まで特定できています」

「新型という可能性もある。海中から接近してきたつつつてんだから潜水艦に決まってるだろ」

「しかし……」

その時だった。

「艦長、あれを！」

士官のひとりが、後方の海を指して叫んだ。

艦隊の数カイリうしろで、白い水柱が音もなく上がった。ここからだとな差し指の長さほどの高さだが、距離を考えてスケールを補正すると、見上げるほどの巨大なものであることは明白であった。

『白鯨』のような超巨大な鯨が潮を吹いたなら、その潮はあれくらいにはなるうか。みな、手の動きをとめ、食い入るようにその光景を見つめている。

白く吹き上がる水塊の中に、黒く輝く船殻が覗いた。艦橋の中で、だれかが叫んだ。

「<コロンビア>！」

水柱とともに海面から空高く持ち上げられた原子力潜水艦USS<コロンビア>、その全長一〇九メートルの巨体が、頂点まで飛んだのち、緩慢に落下を始め、再び海中へと還っていった。距離ぶんの時間差で炸裂音が遅れて聞こえてきて、それは<コロンビア>乗員一三三名の断末魔の悲鳴にも聞こえた。航空母艦の艦体を海ごと震動させるほどの衝撃音が、全員に事態の深刻さと喫緊性を強制的に理解させた。

「対潜戦闘！ 艦隊の駆逐艦、巡洋艦にMk54魚雷発射準備！」

オーシャンホークが目標の座標を特定ししだい攻撃を開始する！

急げ急げ！」

「了解！」

「少将、オーシャンホーク・ワン、ツー、スリー、指定座標に到着。これよりディップング・ソナーによる探索を開始します」

対潜哨戒ヘリコプター、SH60-Fオーシャンホークからの通信を受け取った通信士が報告する。オーシャンホークが持つディップング・ソナーは、海中ヘソナーの装置を吊り下げて、エコー音を測定し、さらにみずから発した探信音で水中移動物体を探索、追跡するのにきわめて有効な高性能器材だ。三機の対潜ヘリで搜索をおこなえば、正確な探查が実現できる。

各々の場所にホバリングしたオーシャンホーク三機が、海面を風圧でえぐりとりながらディップング・ソナーを吊り下ろす。そのあいだに、<ハリー・S・トルーマン>のストロエスネル少将のもとには、巡洋艦の艦長から、自分の艦および二隻の駆逐艦の魚雷発射準備がととのった旨の報告が入る。艦隊に所属している二隻の駆逐艦は、どちらもアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦で、対潜兵器としてはMk32短魚雷発射装置三連装を二基ずつ装備している。さらに船体をつぶさに観察すれば、甲板のように開けた場所に、正方形のマスが、蜂の巣よろしく幾何学的に何十も並べられているのに気づくだろう。これこそ最新鋭のイージス艦が誇るミサイル発射装置、垂直発射システム（VLS）だ。この一セルに原則一発のミサイルが埋め込まれるように格納されており、蓋を開放してそのまま発射できる。発射されたミサイルは一度真上に飛翔し、その後ホーミングを開始する。従来のランチャーとちがい、いちいち目標のいる方向に向けなければならなかったのに対し、VLSは緊急の事態にも即応し敵の方向いかにかわらずすぐさま発射できる。格納できるミサイルの種類はスタンダード対空ミサイル、発展型シースパローといった対空兵器、遠方の地上・水上目標を破壊するトマホーク巡航ミサイルなど多岐にわたる。そのVLSのセルが、アーレ

イ・バーク級駆逐艦では九〇セルもある。VLSのほとんどのセルは対空ミサイルに割かれているが、対潜水艦兵装ももちろんある。アスロック対潜ミサイルだ。それらの駆逐艦を指揮する一隻の巡洋艦、タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦も同様の兵装を有しており、しかもこちらはVLSのセルは六十一セルを二セット、つまり一二セルも搭載している。その気になれば、同時に数十本の魚雷がいつせいに敵に殺到することになる。

その瞬間的な火力の前には、炸薬量の少ない短魚雷とはいえ、いかなる潜水艦も原形さえ残らず海の藻屑となるだろう。

対潜ヘリコプターから通信が来た。さきほどの炸裂の余波がまだ残っているらしく、ソナー員は苦労しているようだった。

「エコー確認……<コロンビア>爆発付近に巨大な物体。深度四〇〇フィート。方位2・5・0に微速移動中……」

次に、ソナーがパルス状の探信音を発信、“巨大な物体”の詳細をしらべる。これにより物体の特徴を詳細に分析すれば、データと照らし合わせ、どの国のどの潜水艦か、たちどころに判明するはずだ。

「データ照合……」

そこで一瞬、不自然な間が入った。航空母艦の艦橋も、不穏な空気に包まれる。

「なんだこれは……」

対潜ヘリコプターのソナー員のあいだで、緊迫したやりとりがあった。

「オーシャンホーク・ツー、こちらには該当するデータがない。なにかの間違いかもしれない、そちらはどうだ」

「こちらオーシャンホーク・ツー、オーシャンホーク・ワン、こちらにも一致するものがない！」

「オーシャンホーク・スリーも同様だ。こんなもの、見たことない……」

オーシャンホーク・ワンのソナー員が息を呑んだ。

「これは……なんだこの大きさは……」

とうとう我慢しきれなくなった空母艦長が、通信士からマイクを奪い取った。

「オーシャンホーク、なんの話だ、目標はいつたいなんなんだ！」

オーシャンホークのソナー員はまるで、おそろしい悪霊でも目の当たりにしたかのような震える声で言った。

「艦長、これは……」

「いいから採取したデータをこっちに転送しろ！」

<ハリー・S・トルーマン>のコントロール・ルームのモニターに、オーシャンホークから転送されてきたデータが表示される。それを見た士官のひとりが驚愕する。

「大きい……！」

CAGも見いる。

「全長八〇〇フィート

(二五〇メートル)以上ですよ、少将……」

艦長は目を見開いたまま愕然とし、少将は苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。

スピーカーからオーシャンホーク・ワンの声が響いた。

「艦長、これは、これは潜水艦なんかじゃありません！ こいつは

……」

唐突に、無線がノイズまみれになった。ノイズのむこうに、オーシャンホークの搭乗員の叫び声が混じる。

「どうしたオーシャンホーク・ワン！ 応答せよ、オーシャンホーク・ワン、応答せよ！」

オーシャンホーク・ワンに繋いでいる無線からは、無限の地獄に投げ落とされたようなすさまじい悲鳴が続いた。

「<ハリー・S・トルーマン>、こちらオーシャンホーク・ツー！  
ワンが、オーシャンホーク・ワンが！」

悲痛な声が割り込んできた。そこではじめて、艦橋の人々は前方の光景を見た。

ホバリングしてディッピング・ソナーを海中へ吊り下げているオーシャンホーク・ワンが、正気を失ったように暴走していた。いや……ちがう……引つ張られているのだ。ディッピング・ソナーを海中でなにものかにつかまれ、おそるべき力で引きずりこまれそうになっているのだ。ソナーとワイヤで繋がれたヘリコプターは前後左右に大きく振り回され、姿勢制御が利かなくなっている。無線から絞り出される悲鳴に、通信士が両耳を塞いだ。

「もうだめだっ！……」

ノイズに埋もれそうな通信状況のなかで、その声はひとときわはつきりと聴き取れた……。

オーシャンホーク・ワンは、ソナーを異常な力で引つ張るなにものかに懸命にあらがい、そして、コントロールを完全に失って、大きく弧を描くようにまっ逆さまに海面へ叩きつけられた。高速回転するローターが一瞬にして破片と化し、機体は群青を溶かしたような大西洋の海へと没した。同時に、通信も途絶した。

「アンノウン急速移動！方向は……ああっ！」

オーシャンホーク・スリーからの無線だ。

「オーシャンホーク・スリー、どうした！」

「アンノウンがこちらに急速接近。回避……間に合わない！」

直後、スリーからの無線は怒号と悲鳴で満たされた。「ローター出力あげろ、墜ちるぞ！」「なにかが……なにかがソナーを引つ張っている」「くそっ、ディッピング・ソナーを切り離せ！」

ストロエスネル少将の手が閃き、オーシャンホーク・ツーに無線を繋いだ。

「オーシャンホーク・ツー、ただちにソナーを引き揚げ撤退せよ。繰り返す、ソナーを引き揚げ、そこから離脱せよ」

艦隊指揮官の即断に、ツーが「ア、アイ・サー」と応答した。

そのときだった。

「少将！ オーシャンホーク・スリーが！」

空母副長の叫びに、少将と艦長とCAGが前方を見た。

制御を喪失し狂ったように飛んでいたオーシャンホーク三番機が、突如、ひとつの方向をさだめて飛行しだした。オーシャンホーク・スリーが意図してそんな挙動をしているわけではない。スリーの機体は、飛んでいる方向とは逆に傾いていたからだ。海中のディップリング・ソナーを掴み、引っ張っているなにかが、そのまま高速で走り、対潜哨戒ヘリを強引に引き回しているのだ。それはまるで巨大にすぎる獲物に振り回される軟弱な釣り人のようだった。

抵抗もものともせず引っ張られるオーシャンホーク・スリーが無線で絶叫をあげる。

「まずい、オーシャンホーク・ツー。ぶつかる、よけろっ！」

悪意が結晶化したような事態だ。オーシャンホーク三番機は、いまでもソナーを巻き上げて離脱しようとしている二番機に吸い寄せられていた。

「オーシャンホーク・ツー、早く高度をとれ」

少将が怒鳴るが、三番機は狙いすましたように二番機へ突っ込んでいく。

そして、勢い烈しいまま、オーシャンホーク・スリーは、オーシャンホーク・ツーの右舷に激突した。二機は接触した瞬間に爆発し、火だるまになつてきりもみ回転、黒煙を噴きながら海中へ墜落した。二機の哨戒ヘリが海へ吸い込まれた直後、そこから轟音とともに水柱が立ち上がった。ヘリの燃料に引火して爆発したのか。いやそれにしても規模が大きすぎる……。蒼空をその手につかまんと聳立するその水柱は、怒濤のごとく持ち上がって、闇に根を張るバオバブの巨樹のように空高くから艦隊を見下ろした。

水柱が重力によって瓦解するように戻っていく。  
直後のことだった。

「ウオッ！」

レーダーによる監視のため最初に空母から発艦して警戒網を敷いていたE-2Cホークアイと繋がっている無線から、同機のレーダー観測官の声が漏れた。E-2Cホークアイは、背中に大型の円盤

状の長距離搜索レーダーを背負った航空機で、いわば空飛ぶレーダー施設である。その高性能レーダーは、機体が標準的な巡航高度たる三万フィートで五六〇キロ先まで見通し、二〇〇〇もの目標を同時に追尾できる。イージス艦のレーダーの死角を補うべく、高高度から『鷹の目』の名そのままに広く鋭く監視する、艦隊の守り神である。

そのホークアイのレーダー観測官が、有事のさいには最大四〇機の友軍機を指揮し管制する能力も持つプロフェッショナルたちが、動揺していた。

「グリゴリ１からUSS<ハリー・S・トルーマン>へ、レーダーに感アリ。東北東より接近する機影を確認。数は……なんて数だ、所属不明機、五〇〇オーバー！」

「グリゴリ１、どうした、詳細を報告せよ」

「機影、急速に当機に接近中！ まもなく接触する」

無線の向こうで、操縦士と副操縦士、三人のレーダー観測官、計五人が半ばパニックになりながらやりとりしている。

「なぜこんなに近づかれるまで気づかなかったんだ！」

「わかりません、ですが、まるで、まるで、急に現れたみたいに……」

空母側のレーダースクリーン上にも、ホークアイと無数の機影が映っている。両者の距離は数キロもない。もうすぐ、ホークアイを表す光点が、蛍の群れのごとき大群に吞まれようとしている。

「こちらグリゴリ１、所属不明機を視認確認」

ホークアイの無数の声が、畏怖と恐怖へと変わっていった。

「これは……」

きみの悪い絶句。たまらずCAGが声をかける。

「グリゴリ１、どうした、応答せよ。未確認機の正体はなんだ」

ひと呼吸の静寂ののち、ホークアイの操縦士が応えた。

「亡霊が……」

意味がわからず、CAGが聞き直そうとしたとき、ひときわ鋭い

ノイズが無線から飛び出し、E-2Cホークアイ早期警戒飛行隊ウオッチャーズ一番機、グリゴリーとの通信が途絶えた。レーダー上のグリゴリーの機影も消失した。

「呼び戻せ」

CAGが副官に命じた。だがこのとき、CAGも含め、戦闘指揮所にいた全員がもはやグリゴリーは失われたのだということをいやでも理解していた。

「艦長！ アンノウン、接近！」

空の次は海だ。オーシャンホークが海に没したところから水柱が炸裂し、連鎖反応的に次々にそり立った。断続的な水柱の炸裂は、航空母艦<ハリー・S・トルーマン>の方向へと向かっていた。

その瞬間、少なくとも<ハリー・S・トルーマン>の艦橋にいた乗組員たちは、ほぼ直感的にその事態を覚った。この水柱は、航跡だ。正体不明の巨大移動物体が、海面直下を高速で走っている。その物体のスケールの大きさゆえ、押しのけられた海水で、航跡が、まるで水中爆発でも起きたかのような高々とした水柱となっているのだ。

そして、原子力潜水艦<コロンビア>を一瞬で破壊し、SH60-Fオーシャンホーク対潜哨戒ヘリコプター三機を海の底に引きずり込んだその巨大物体は、今度は原子力航空母艦ニミッツ級第8番艦<ハリー・S・トルーマン>に狙いをさだめ、引き絞られた矢のような速力で突進してきている。迷うことなく、一直線にである。

「回避行動、機関全速、面舵一杯。駆逐戦隊に魚雷発射命令、各個別に撃て」

ブリッジは騒然となり、艦をアンノウンの針路上から外そうとみな懸命に試みた。水柱は急激に迫ってきている。巡洋艦と駆逐艦から水柱へ向かってMK54魚雷が射出、海中へ投下され、猛進を開始する。

轟進する目標の未来位置を予測して発射された魚雷だが、物体の速度があまりに速すぎた。青白い雷跡は、その大半が、立ち上る水

柱の後ろを掠めて迷走した。

それでも何本かは目標の横っ腹に直撃、炸薬をお見舞する。だが、蚊に刺された程度だともいうのか、巨大物体の進撃速度に微塵の変化もなかった。

「VLAだ！ アスロツクを発射しろ！」

三隻の護衛艦の艦長が異口同音に叫び、VLSが開放される。

次の瞬間、爆発噴火したかのような爆焰と煙が船体から吹き上がった。紅炎のなかから爆音と煙幕を露払いのようにして昇っていく漆黒の魔獣。垂直発射式アスロツク、略称VLAが牢獄のごとき闇の褥から目を醒まし、解き放たれた獵犬のように猛加速して大空を飛翔していく。

巡洋艦と駆逐艦から発射されたアスロツクたちは、群れをつくって水柱の行く手に矢となつて飛んでいき、そこで弾頭を切り離す。切り離された弾頭はパラシュートを開き、減速しつつ海面に着水。潜水した弾頭は、そこで魚雷へと化け、自らアクティヴ・ソナーを発信しながら目標を探し、海中を全速力で疾走する。

魚雷発射から目標到達までの航走過程を、ロケットで空中飛翔させて一部省略するこのアスロツク対潜ミサイルは、発射してから命中までが通常の魚雷よりはるかに早い。しかも潜水艦側からすれば、空中を飛ぶ物体は探知しにくく、いきなり目の前に魚雷が現れるようなものだから回避は非常に難しい。このVLAの雷撃を受けて無事でいられる潜水艦などいない。

水柱へとまっしぐらに直進するアスロツク。目標と真正面から激突する。

爆発、水中衝撃波。しかしその爆発がもたらした水飛沫は、アンノウンの炸裂させる水柱に吞まれて消えた。

アンノウンは二〇本を超えるアスロツクの直撃を受けてもなお、速度を緩めず空母へ突撃する。「速い……速力一〇〇ノット以上！」信じられないといったような声。

「艦長、だめです、間に合いません。衝突します！」

艦長が叫んだ。

「総員、対シヨック姿勢をとれ、衝撃にそなえろ」

水柱は見る間に大きくなってくる。その圧力が乗員から冷静さを根こそぎ奪っていく。

少将が決断を下す。

「退艦……だ！」

即座に艦長が副長に伝える。

「機関停止、原子炉を止める。総員に退艦命令だ」

「了解、原子炉緊急停止！ 総員退艦せよ！」

その直後だった。急速接近した逆さの瀑布は、<ハリー・S・トルーマン>の船尾部分から直撃コースで突入した。

瞬間、空母の乗組員は、見えない巨人の手に上から押さえつけられたかのように床に叩きつけられた。急激な重力の変化。それは、直下に潜りこんだ巨大物体の背に艦体がり上げ、持ち上げられたことによるものだった。総重量一〇万トンをゆうに越す膨大な質量が浮かび上がったのだ。刹那ののち、航空母艦の巨軀は下方へ落ち、荒波のごとく豪快な水しぶきを周囲三六〇度に撒き散らした。

衝撃音が乗組員の体を貫いた。すぐ近くで落雷があつたかのような、すさまじい音である。音は床の下から艦を揺さぶった。まるで巨獣が艦底を食い破っているかのよう。少将や艦長やCAGがそれぞれの下に命令を叫ぶが、自分の声さえ聞こえぬほどの轟音に音波ごとかき消されてしまう。音圧に押し潰され、だれの耳にも届くことはなかったが、無線のスピーカーから、ほとんど叫び声のような言葉が振り絞られていた。無線は、こう言っていた。

「艦長、こちら機関室！ 艦底から、手が、巨大な手が突き破ってきて、原子炉を……」

損傷と激しい浸水によって回線がダウンしたのか、無線がそこでぶつりと切れた。

そして、艦橋にいた者、飛行甲板にいた者を問わず、空母<ハリー・S・トルーマン>に乗り合わせていた人間全員が、突然、まば

ゆい閃光に包まれた。純白の輝き、影さえ真白く塗りつぶすほどの強烈な爆光。それが、彼らが最後に見た光景だった。

魚雷の第二波発射準備に追われていた巡洋艦、駆逐艦と、対潜にかんしては非武装であるがゆえに距離をとっていた高速戦闘支援艦の乗組員は、<ハリー・S・トルーマン>から突如としてもものすごい閃光が走ったのに驚いた。快晴の太陽を何倍も上回るその明るさにみな一様に呻き声をあげ、ある者は顔を背け、ある者は目を両腕で覆った。それでも瞼の裏は真つ白に灼け、光と同じくらい強力な熱に、髪や皮膚や制服が炙られた。

そのわずかに青みがかった猛烈な光は、航空母艦の甲板中央を貫き、直線の奔流となつて、天をも突かんばかりに噴き上がっていた。蒼天を貫き、雲を渦巻き状にかき回した閃光の噴出は、ひとしきり続いたのち、栓をひねつたようにぴたりとやんだ。

甲板に、船底まで貫通する大穴が穿たれ、そこから火山が噴火したかのように大爆発が起きた。真紅の爆炎が球状に現出し、その直径は<ハリー・S・トルーマン>の全長近くに匹敵した。衝撃波で甲板上のF/A-18スーパーホーネットを始めとする艦載機が何機かプラモデルのように吹っ飛び、ほかの艦載機の上に落下した。艦橋やマストをまとめたアイランドが半ばから崩れ、倒れ込む。黒煙が入道雲のようにもくもくと昇り、青空に染みをつくっていく。爆発の衝撃は艦隊の全艦におよび、ブリッジの強化ガラスが粉々に碎かれ、艦橋の人々を蜂の巣にした。

大爆発によつて、航空母艦の勇壮な巨体がいともたやすく真つ二つに折れ、引きちぎられるように分かれた。激しい浸水。波頭が白く砕け、艦に押し寄せる。断面に内部構造を露出させながら、真つ二つになった空母の艦首がわが左舷に大きく傾斜した。傾いた<ハリー・S・トルーマン>の甲板上を大きな波しぶきが洗い、艦載

されていた戦闘機、電子戦機、早期警戒機や対潜ヘリコプターが転がりながら海へと引きずりこまれていく。

艦尾が大きく持ち上がり、青空に高く高く突き立つ。自衛用の対空ミサイルなどを積み込んでいる弾薬庫に誘爆したのか、艦尾の右端と左端で爆発が起き、炎と黒煙が、艦体が空高く上がる二条の軌跡を描いた。数十機もの艦載機が雪崩をうって転がり落ち、ほぼ垂直ちかくなつた飛行甲板に主翼や機首をぶつけながら、海へと飛び込んでいった。雲霞のようにこぼれ落ちているのは、整備兵や飛行士、乗組員たち、何百、何千人もの人間だ。彼らは高層ビルから無防備に投げ落とされるような心持ちで大海へ放り出され、水洗便所に落ちた虫のように波にもまれ、沈んでいった。

航空母艦<ハリー・S・トルーマン>もまた、黒い煙を噴きながら急速に海中にその身を沈めていった。濃い黒煙が途切れたとき、そこにはすでに原子力空母の巨体はなくなっていた。

海は穏やかさを取り戻していた。まるで、原子力潜水艦や空母、それに乗っていた数千という人間を一度に喰らい尽くし、満ち足りて、眠りについたかのようなだった。

## 二 世界の王

「番組の途中ですが、ここで臨時ニュースをお送りします。さきほど入ってきた情報によりますと、東海岸を航行中のアメリカ海軍空母USS<ハリー・S・トルーマン>が沈没したとのことです。空母の乗員、航空隊員あわせて五六〇〇人あまりの安否は現在確認中。生存は絶望的と見られています。同艦隊のほかの護衛艦などにも被害が出ているとの情報もありますが、まだ詳しいことはわかっていません。この沈没がただの事故なのか、それとも敵からの攻撃で撃沈されたのかも、現時点では不明です。また放射能漏れによる海洋汚染も懸念され、政府からの正式な発表が待たれます。繰り返しお伝えします。アメリカ海軍空母USS<ハリー・S・トルーマン>が東海岸を航行中、沈没しました」

そのニュースは全世界を電撃のように駆け巡り、衝撃をもって伝えられた。電波の届く地域にすむ者であれば、どの国のどの民族も、ほぼ例外なく米空母沈没の一報に耳目を奪われた。

日本においては、まず字幕で概要が伝えられた。国营放送は予定の番組を急遽キャンセルし、緊急の特別ニュース番組を放送した。が、民放では、トップニュース扱いにこそなったものの、いつもの時間のニュース番組内のみで報道されるにとどまり、特番が組まれることはなかった。ある地方の家庭では、

「空母沈没やって」

「へー」

「もったいないなあ。あれ何千億円てするんやろ？」

「戦闘機もようけ載せとるしな」

「ほうかあ。損失すごいことになるなあ」

アイスクリームを頬張り、頭痛が走ったのかうめき声をもらしながら頭を抱えた。

「なんで沈んだんやろ。やっぱ攻撃くろて撃沈されたんやろか」

「そりゃあれほどのもんやもん、アメリカの空母ゆうたら。勝手に沈むわけないやん。撃沈されたんやって、ぜったい」

「むかし松山港にもキティホークかなんかが来たことあるけどなあ、でつかかったなあ。おれ最初船や思わなかったもん。港に出たときな、松山港のターミナルかなんかの施設か思ったもん。で、アメリカさんの空母はどこやるかて探して、それがほうじゃあいうんがわかって、これはでかいなあてたまげたもん。これはかなわんて思った。原子力空母であれよりでかいんやろ。そんなんが海に浮いとれるほうがおかしいと思うけどなあ」

「どこが攻撃したんやろ。北朝鮮やろか。ほれともロシア？」

「いやいや、北なんかがアメリカの空母にちよっかいなんか出したら、おまえ、それこそ半島ごと海に沈められるで。それに北朝鮮の軍事力やったら、空母に近づくこともできんやろ。撃沈できるいうたら、やっぱロシアか、中国か」

「あ、もしかしたらバミューダトライアングルに飲み込まれたとか」「バミューダでどこらへんやったつけ？ いやもしかしたらサルガッソーやったりして」

「次のニュースです。とべ動物園の人気者、ホッキョクグマのピースくんや、アシカたちなど、本来は寒い地域に棲息する動物たちに、連日の暑さをなんとかしのいでもらおうと、中にリングを閉じ込めた大きな氷がプレゼントされました。氷を見たピースくんは大喜びで、プールの中でかじったりして遊んでいました」

「おお、ピースくんえらいでつかあったな」

「やっぱ氷好きなんやな」

「……あれ？ さっきなんの話しよったつけ？」

「なんやったつけ。あ、アイスまだある？」

というような塩梅であった。日本国民の大半は、およそ、今回の空母沈没の一件を対岸の火事としてしか見ておらず、よもやこれが自分たちの人生を反転させる端緒となるうとは、この時点ではだれひとり、予想していなかった。

アメリカ合衆国、アンドルーズ空軍基地の長大な滑走路の傍らで、寸分の乱れもなく軍服を着用した数百人の軍人たちがヘリコプターを背に整列していた。歓迎のセレモニーは用意されていない。事態が急を要するということもあるが、かれらの最高指揮官が冗長かつ非合理的な儀礼をきらう傾向があるからだ。権威を示すことは求心力の維持と向上のためでもあり、それを見る国民に、自身の国の繁栄常世ならんことを実感させるという心理的な目的もあるので、けっして無駄なものではないのだけれども、かれいわく「そんな示威行為よりも、正道の政策と結果で国民に支持を受けたい」とのことである。こうして有能な軍人たちをただ整列させ待機させていることにさえ、不満をいだくかもしれない。それが自分の身を護るための策であつたとしてもだ。

その制服の群れの真正面に立っている、ひととき威風堂々とした風格をもっているのが、ホレイシオ・B・チトー將軍だ。將軍はすでに六〇を越える齡だが、生来から恵まれた体格はいまなおたゆむことなく鍛えられており、老醜の翳りなど微塵もない。ただそこにいるだけで、部隊の背筋が伸ばされる、独特のオーラがある。

將軍と、かれを先頭にした軍人の列は、みな一様に青空を見上げていた。正確には、滑走路の端の空だ。その視線の集中する蒼穹のむこうに、光がひとつ浮いている。予定になかったとはいえ、かれらのあるじが帰ってきたのだ。光を見つけたチトー將軍は、吹き出る汗をハンカチで拭った。

管制に誘導され、大質量の機体がアンドルーズ空軍基地の滑走路に近づくように着陸する。ランディングギアから路面との摩擦で煙がわずかにあがる。おくれて、ボーイングVC-25Aの四発のジェットエンジンの音と、逆噴射をかける音とがあわさった轟音が、飛行場全体の大地を震動させた。大統領専用機の帰還だ。

二機の専用機はエンジンの出力を落としながら滑走路を進み、停

止した。チトー將軍が入股で滑走路を横切り、機へ近づいていく。沈黙していたヘリコプターがエンジンをスタートさせ、回転翼がゆっくりと動きだした。それを合図に、軍人たちが隊列を変え、両側一列に並列して、人でできた通路を形成する。

タラップが架設され、エアフォース・ワンの扉が開く。フライトクルーが先に出てきて、乗降口の脇で立ち、敬礼する。

そして、機内から現れた人物こそ、アメリカ合衆国大統領、ジョージ・ヒトリアだ。四十八歳という若さのヒトリアは、長引く不況と財政不安、右肩上がりの失業率と、暗いニュースに支配されたアメリカに燦然たる輝きをもって現れた人物だった。それは決して、聞き心地のよい美辞麗句を並べ立てて国民にまやかしの希望を与え、砂糖の衣で苦い真実を隠し、甘さの内に国家を墮落させるような暗愚な政治屋ではなかった。むしろヒトリアは、仕事がないことを国のせいにするな、いまわれわれひとりひとりが祖国にないができるかを、国民全員が考えなければならない歴史的ターニングポイントに来ている、この国と子供たちの未来のためにわれわれは進んで犠牲になる覚悟が必要だ、と高らかに主張した。口先ばかり都合のよい公約を掲げて追従笑いを浮かべる候補たちのなかにおいて、国民に媚びを売らないこの硬派な姿勢がかえって支持を集め、多くの政治評論家の「政治的センスのまったくない、自殺行為にひとしい愚鈍な姿勢」という評判を押し退け、“ヒトリア旋風”は徐々に勢力を増し、大統領選挙のころには方々の州で並みいるライバルたちを大差で引き離し、ついにアメリカの最高責任者としての榮譽に浴するまでになったのだった。ヒトリアを当初批判していたある政治評論家は、世界が暗黒に閉ざされるとき、甘言と見せかけの奇跡を以て民衆をたぶらかす偽救世主<sup>アンチ・キリスト</sup>が現れるという聖書の一節を引用し、国民は無意識下にそういう政治家が出現するのを警戒しており、そこへまったく正反対のヒトリアという候補が現れたことで、ある意味で予想を裏切られ、そのぶん期待値が増大したのだらうとコメントした。国民はみな無知蒙昧の輩だと公言している

も同然だ。

ヒットリアは大統領就任後もかわらず結果を求め、パフォーマンスをきらった。いまのところ支持率も下がってはおらず、夏の議会も大統領に有利な状況で進められることが予想された。

ヒットリア大統領は足早にタラップを降り、敬礼した軍人たちが並列してできた通路の中央を、チトー將軍をともなつて歩き、ヘリへと直行した。ヒットリアとチトーが乗り込むころには、ヘリのローターはいつでも飛び立てる回転数に達していた。

ふたりのVIPと、影のように付き添うシークレットサービスたちを乗せ、スライドのドアが閉められると、回転翼はさらに回転速度をあげた。鋼鉄の機体がゆっくりと持ち上がり、ヘリコプターが宙に浮かんでいく。アンドルーズを飛び立ったヘリコプターは、一路、ワシントンにある合衆国政府中枢、ホワイトハウスへと機首を向けた。

ヘリコプターの機内は、真上で高速回転しているローターとそのエンジン音で轟音が支配している。チトーはインターカムのついたヘッドセットを大統領に渡し、みずからも着用した。密閉型のヘッドセットなら、ヘリの轟音に邪魔されることなく会話ができる。傍受に注意し、通信相手を限定すれば、余人に聞かれる心配もない。理想的な環境をえたヒットリアはようやく口を開いた。

「將軍、状況を教えてくれ」

むろん、ヒットリアとてまったくにも聴かされないままここへ来たわけではない。でなければ、訪問先のボストンの母校で、次代を担う後輩たちとの、真の正義とはなにかを問う濃密なディスカッションの最中に、それをいきなり切り上げて首都ワシントンに蜻蛉返しなどするわけがない。大統領が急遽予定を変更することは、ひとり大統領の問題ではない。シークレットサービスをはじめとした警護の人間や、大統領の通過する道程に配置する警察官、軍関係者、エアフォースワンの機体整備のスタッフ、発着する両空港のフライトスケジュールの調整など、民族大移動に匹敵する労力と費用が割

かれる。しかし、いくつもの人間と機関を経由して秘書官とヒットリアに伝えられた情報は錯綜し混乱しており、霧のなかにうごめく幽霊船のように判然とせず、どう判断を下せばいいのかまったく見当さえつけられないでいた。いま何が起こっているのか、ヒットリアのその単純明快な問いにも正確に答えられる者が皆無という状況だった。そんななかで、憶測で大統領の権力をふるって、それが間違いだったら、取り返しのつかぬ甚大な損害が発生しかねないならば大統領がむりやり帰還するリスクを冒してでも、全幅の信頼をおくチトー將軍の口から直接聞くのがベストかつ最優先だと決断したのだ。チトーもその大統領の意を汲んで、現段階で判明している事実のみを伝えた。

「四時間半前のことです。ペルシャ湾での任務を終了し帰航していたわが軍の原子力空母＜ハリー・S・トルーマン＞が沈没しました。より正確には、空母打撃群の護衛を務めていたロサンゼルス級原子力潜水艦＜コロンビア＞と空母が沈没、駆逐艦と巡洋艦も損害を受け、うち二隻の駆逐艦は沈没こそまぬかれたものの、自力での航行が不能です」

「原因は」

「不明です。また、沈没と前後して、所属不明の未確認飛行物体を多数、レーダーに感知し、ホークアイが一機、消息を絶っています。現在、周辺の海域を封鎖し、沈没の詳細な原因の調査、航行不能となった駆逐艦の曳航、生存者の有無の確認および救出活動のため、海上部隊を派遣しております」

「＜ハリー・S・トルーマン＞空母打撃群の指揮は、たしかストロエスネル少将だったな」

「は……」

「実直で勤勉、冷静さと並々ならぬ愛国心を併せ持つ素晴らしい人物だった。まさにアメリカ海軍軍人の鑑ともいべき男だった……」  
大統領はどこかを見やるようにいった。

「そんな彼が、なにもしないまま、ただ座して艦が沈むにまかせて

いたとは、思えん」

「同感です。打撃群と大西洋司令部との通信記録、およびリーダー記録も併せて解析中です。沈没当時のよりくわしい状況を総力で洗っています。ホワイトハウスに到着するころには、なんらかの結果をご報告できるものと考えております」

チトーの言葉に、ヒットリアはわずかに頷いた。そして、首を傾げ、顎を撫でた。

「巨大な物体、か……」

ヘリの眼下には白亜の合衆国大統領の城、ホワイトハウスがかれらを待っていた。そして、ヒットリアの指示を仰ぐ補佐官や報道官らスタッフたち、アメリカ国内だけでなく世界中の報道機関から派遣された報道陣も首を長くして待っているにちがいがなかった。

ヘリがホワイトハウス前の広場にゆっくりと降り立つ。ペンシルヴェニア・アヴェニューに面した正面ゲートには、はたして報道陣が群がり、黒山の人だかりができていた。陸路ならかれらをかきわけて進まなければならないが、ヘリならそんな手間を取らされずホワイトハウスに直行できる。ヘリから降りたヒットリア大統領とチトー將軍、シークレットサービスたちは、怒鳴り声にちかい記者たちからの質問とストロボの嵐を背中に浴びせられながら、ホワイトハウスへと入っていった。

会場には、すでに副大統領などの閣僚や、アメリカ大統領をサポートするおもだったスタッフが集っていた。統合作戦本部議長であるチトー將軍が自身の席に座り、みなに目配せする。サラザール大統領主席補佐官が続いて椅子に腰をおろし、マヘンドラ国防長官がそれにならった。この三人は大統領のブレーン、側近中の側近であり、ヒットリアはかれらに絶大な信用を与えていた。

「被害状況をおしえてくれ」

大統領が口火をきった。サラザール首席補佐官が答える。

「現地時間午後一時三十分、大西洋艦隊第10空母打撃群所属ロサンゼルス級原子力潜水艦USS<コロンビア>が深度三万フィート

から急速浮上する物体を探知。回避行動をとるも通信途絶、同艦隊乗組員の目視によりUSS<コロンビア>の爆発と沈没を確認しました。午後一時三七分、ソナーにて海中探査をおこなっていた同艦隊所属の対潜哨戒ヘリ、オーシャンホーク三機が墜落。一機は海中へ、二機は空中でお互いが接触して没しています。内、二機は、海中へ投入したソナー装置がなにもかにつままれて、海中へ引きずりこまれるとの旨の通信を残しています。これが、USS<ハリ・S・トルーマン>との無線通信の一部です」

サラザールが部下に頷いて合図を送ると、その士官がスイッチを押した。スピーカーからオーシャンホークの乗組員の悲痛な声が流される。

「なにかが、なにかがソナーを引っ張っている」  
サラザールがさらに続ける。

「このときのソナー探査で、USS<コロンビア>沈没と同座標に巨大な物体が存在しているのを確認しています。そのデータによれば、アンノウンの全長は、およそ八〇〇フィート以上」

スタッフら室にいたほとんど全員が、隣の者と顔を見合わせ、驚愕にざわめいた。沈黙を守っていたのはヒットリアとチトー、サラザールとその直属の部下、それにマヘンドラ国防長官の数名だけだった。

おどろくのもむりはなかった。八〇〇フィート以上ということは、つまり二五〇メートルをゆうに超えるということだ。現代で最大の原潜といわれるオハイオ級原潜でも、その全長は一七〇メートルあまりである。こんど現れたアンノウンは、それよりさらに一〇〇メートルほども大きいのだ。常軌を逸した巨大さといわざるをえなかった。

ざわめきの小波がひく頃合いを待つて、サラザールが報告を再開する。

「直後、艦隊所属のE-2Cホークアイが当該海域、高度三万フィート付近を飛行する所属不明機を約五〇〇、発見。ホークアイは通

信途絶。海上にて同機体の主翼部分が発見されました。おそらく墜落したものと思われます」

しんかんとした空気が室に降り積もった。

「午後一時四十二分、類別不能の巨大な物体は、一〇〇ノットという驚異的な速度でUSS<ハリー・S・トルーマン>に接近。一〇〇ノットとは、およそ時速一八〇キロメートルです。最速といわれた旧ソ連のパパ型原潜でさえ、最高速度は四十五ノットといわれていますから、その速力の異常さがわかりただけだと思います。

同刻、艦隊の巡洋艦と駆逐艦による雷撃開始。魚雷命中なるもアンノウンに対し効果は認められず、同四五分、アンノウンとUSS<ハリー・S・トルーマン>接触。この接触で同艦は中破レベルの損害を受け、ストロエスネル少将により退艦命令ならびに原子炉緊急停止命令、発令。約三〇秒後、同艦、爆発。午後二時七分、USS<ハリー・S・トルーマン>沈没を確認。第3空母航空団全滅。また爆発の余波で、同艦隊のアーレイ・バーク級駆逐艦USS<マクファール>と、同型艦のUSS<ウィンストン・S・チャーチル>が自力航行不能となるほどの損傷、乗員に多数の負傷者。タイコンデロガ級巡洋艦USS<サン・ジャシント>も損傷を受け負傷者を出しましたが、自力での航行は可能。無傷なのは高速戦闘支援艦ただ一隻。第10空母打撃群はほぼ全滅です。そして目標をロスト」

大統領はその深刻な事実を受け止めなければならなかった。受け止めて背負うには、あまりに重い現実だった。

だが、原子力空母が沈没したとなれば、その問題は物理的損害だけにとどまらない。原子力潜水艦も原子力空母も、核燃料を動力としているのだ。

「放射性物質による汚染はどうだ。沈没時、原子炉は停止できていたのか？」

サラザールの顔に暗い翳りが宿った。

「結論からいえば、大統領、あまりに緊急の事態であったため、原子炉停止命令こそ出されましたが、USS<コロンビア>、USS

<ハリー・S・トルーマン>ともに沈没までに原子炉を停止させるにはいたりませんでした。周辺海域で放射性物質検査を実施したところ、国際環境基準値をはるかに超える放射性ヨウ素、および放射性セシウムが検出されました。船体とともに原子炉も損傷し、一次冷却水が漏洩したか、あるいは核燃料そのものが露出したものと思われる。事実、救出、調査活動をおこなっているこの数時間で、すでに高温の核燃料に触れた海水が急沸したことによるものと考えられる海中水蒸気爆発を観測しています」

重なる悪い報せに、ヒットリアの眉間に深い皺が刻まれる。

「さらに」サラザールは立ち上がりながら報告を続けた。「海には海流があります」

サラザールに命じられた部下が、壁に埋め込むように備えつけられている大型液晶モニターをつける。モニターには、右側に西ユーラシアとアフリカ大陸、左には北米と南米大陸を配した地図が表示された。画面の中央は、両大陸に挟まれた大西洋がブルーで描かれている。サラザールが指でその中央を押さえる。

「ここが、原潜と原子力空母の沈没場所です」

そこはアフリカ大陸の西、南米大陸から北東で、距離的には両大陸のちょうど真ん中に近いあたりの位置だった。

「この海域の海流図を表示します」

サラザールが言い、部下がクリックすると、破線状の矢印で示された海流が地図上を這う。

「沈没した海域には、北側をながれる北赤道海流と、南側を流れるベンゲル海流のふたつの海流があります。このふたつの海流は両方とも寄り沿うようにアフリカ大陸からアメリカ大陸へむけ西に流れますが、暖流と寒流のため混じりあうことはほとんどありません」

主席補佐官は説明しながら海流の矢印をなぞった。

「まず、沈没現場の北側を流れるのは、北赤道海流です。北赤道海流は、北大西洋を時計回りに周回している暖流です。アフリカ大陸から西に流れてきて、中米の東がわをなめて北上し、メキシコ湾か

らのメキシコ湾流と合流。北米大陸の東を沿って流れ、イギリスとアイルランドの西の海で二手に分かれ、ひとつはアイスランドやグリーンランドを沿って北極圏へ、もうひとつはヨーロッパ西端のフランス、スペイン、ポルトガルに流れ、一部はジブラルタル海峡を潜って地中海に注ぎます。大半はアフリカ大陸の西を通って、セネガル（アフリカ大陸内の北西に位置す）あたりで西に進路を変え、再び中米へ戻ります」

つぎに南側の海流を指でなぞる。

「ベンゲラ海流は、南大西洋を周回する寒流です。アフリカ大陸から西に進み、ブラジルの東で南北ふたつに分岐。南にいくほうは赤道で暖められて暖流となります。このうち、北にいくほうの海流と北赤道海流との境で沈没したのです」

大統領以下閣僚の全員が液晶モニターとサラザールの説明に見いる。

「北にいくほうは南米大陸の北を沿ってカリブ海に流れこみ、キューバやホンジュラス、そしてメキシコをなめて、メキシコ湾に流れこみます。メキシコ湾に流れこんだ海流はメキシコ湾流となって、前述の北上する北赤道海流と合流します」

サラザールはもういちど沈没した場所を指さした。

「このちょうどふたつの海流が接するポイントで沈没したのが問題です。漏出した核物質はふたつの海流に乗り、より広範囲に拡散することが予想されます」

原潜と原子力空母の核燃料がもし、北赤道海流とベンゲラ海流によって流されれば、その海流に関係するすべての国が汚染されることになる。モニターの海流をあらわした地図を一瞥しただけでも、その被害がありありと目に浮かぶようだった。

グリーンランドへ北上するメキシコ湾流の途上にはデンマークのフェロー諸島があり、世界でも有数のサーモンの養殖高をもつ。

地中海はいわずもがなの海産物の宝庫。地中海にのぞむ国は、ポルトガルやスペインにフランス、モナコ、イタリアなど南欧のほと

んどと、ギリシャ、トルコやイスラエルなどの東欧と中東、エジプトやリビア、アルジェリア、チュニジア、モロッコなどのアフリカ大陸北部とかなり多い。

カリブの赤い真珠として人気の観光地であるキューバ。その自慢はいうまでもなくカリブの美しい海である。同じくカリブ海を観光資源とする中米の観光国は甚大な損害をうける。

そしてなにより、メキシコ湾流はアメリカ東海岸ほぼすべてをカバーしている。フロリダ半島も、ニューヨークもだ。

対抗策は乏しかった。流出したのが原油だったなら、まだ打つ手はあっただろう。原油は海面に浮くから、海上にオイルフェンスを敷設すれば封じ込めができる。だが放射性物質が相手ではそうもいかない。海中のどの深度に分布しているかがわからないし調べようもないからだ。効果のほどは不明だが、とりあえず原油流出用のオイルフェンスを張り、海中の放射性物質の濃度を細かく調査する以外に方策はなかった。

大統領がサラザールに水をむける。

「ホークアイが捕捉した大量の未確認飛行物体というのは？」

「は……」

サラザールが眼鏡を上げる。

「ホークアイ……通称ウォッチャーズ一番機、コールサイン『グリゴリー』が目視確認した瞬間、連絡途絶してしまったため、詳細は不明です。ただ、レーダー記録によると、探索可能範囲の内側に突如として出現しています。じゅうぶんにまえもって発見できる距離をいきなり越えて、唐突に眼前に姿を現したようなものです。しかもそれが五〇〇。巨大物体の出現とほぼ同時という点から見ても、アンノウンとの関係はゼロではないでしょう」

大統領は頷いた。そしてマヘンドラ国防長官を見やる。

「国防長官。われらが艦を沈めたアンノウンはともかく、ホークアイの防空網をかくぐることのできる多数の未確認飛行物体に対し、われわれはイエローアラートを発令し、デフコンを3に上げるべき

だろうか？」

マヘンドラの表情筋は微動だになかった。

「大統領がご命令なさるなら、それはなによりも尊重され優先されるべきです。が、いまの時点では時期尚早ではないかとわたしは愚考します」

マヘンドラは、長身で痩せており、鋼の意思を持った男である。

CIA長官を長年務めあげただけに他国の情勢と機密情報に精通し、いまなお院政力をもつ貴重な人材だ。愛想も素っ気もない人格も相まって一部の閣僚からは奸物といわれているが、人好きするものだけにホワイトハウスが、そしてアメリカが運営していくことができるほど、ヒトリアは夢想家ではない。人好きしない性格なのはヒトリアも同様だからだ。

そして、今後の対策と方針を話し合おうとしている、まさにそのときだった。会議場のドアが激しくノックされた。

「大統領！」

ドアを叩き破らんばかりの勢いで入ってきたのはスタッフのひとりだった。ただならぬ空気にすばやく反応したふたりのシークレックトサービスが懷に手を入れながら大統領の前に立つ。

スタッフは気も留めず、からからに渴いて引っ付いてしまいそんな口と舌をフル回転させて叫んだ。

「生存者です！」

その裏返った声は雷霆のように室に響きわたり、各人を打った。

「搜索隊から連絡です。〈ハリー・S・トルーマン〉の生存者が発見されました！」

政務官たちと軍関係者、搬送先の医療関係者などとの連携があわただしくおこなわれた。生存者の映像を会議場のモニターに回す段取りが進められているのである。

生存者発見の報を持ってきたスタッフがそのあいだ、事の経緯を

大統領に説明した。それによると、沈没した海域の周辺をしらみ潰しに搜索していた何十という救助ヘリコプターの一機が、海面に浮かぶ船体部品の一部にしがみついて震えているひとりの人間を見つけた。飛行装具を身に付けていたことから、空母航空団の飛行士だろうと思われた。彼は沈没の物理的、精神的ショックからかうわごとをしきりに言い、発見して引き揚げ、医療機関へ搬送する途中の機内で、容態を確認しながら官姓名や沈没時の状況を問いかけてもほとんど答えられなかった。愛機に搭乗して、いざ出撃というまさにそのときに沈没した、ということ聞き出すのだけでようようであつたという。そしてヴァージニアにある基幹病院に極秘に緊急搬送されたのである。

「いまのところ発見された生存者はその飛行士だけか」

「は、現時点では、ただひとりの生存者であり、ただひとりの目撃者です」

「外傷は？」

「頭部の裂傷や右大腿骨骨折のほかには打撲がある程度です。しかしそれよりも……」

「映像、繋がりました！」

隊員が搬送された救急医療施設との回線を調整していた政務官の声に、スタッフの説明が遮られた。ヒットリアの関心もそちらへと向かされた。

大型液晶モニターは、集中治療室とおぼしき部屋を、ガラス一枚隔てた室外から映していた。ガラスのむこうには、ベッドに横たえられ、全身に白い包帯を巻かれ、心電図や酸素マスク、生理食塩水、ブドウ糖、鎮痛剤、各種薬液などの点滴といった生命維持装置のチューブを何本も取りつけられ、骨折したという右足をギプスで固定され、がんにからめにされている男の姿だった。治療を受けているというより、白い縛鎖で封印しているというような光景だった。

妙だったのは、彼の周りで機械のように動き回っている医療スタッフの格好だった。通常の白衣や手術着などではなく、エボラ菌や

炭疽菌の研究室で着用する防護服のようなもので、頭先从爪先まで全身をすっぽり包み込んでいた。まるでなにか凶悪な毒物から身をまもっているかのようだ。

「あの格好はなんだ。あれがICUスタッフの標準装備か？」

副大統領がだれにともなく怪訝そうな質問を投げかけた。大統領も同様の感想を抱き、直後、稲妻のようにその答えを覚った。

いまさつき説明を途中で阻まれたスタッフが、大統領の顔色の変化に気づき、ほかの人人にも聞こえるように声量を調節して言った。「外傷こそ深刻ではなかったものの、救出された飛行士は、放射性物質による被爆をしていました。医療施設搬送後、飛行士が下痢や嘔吐の症状を呈し、病理検査の結果から被爆の可能性が疑われ、飛行士の体表の放射線量を計測したところ、一時間あたり一〇〇〇ミリシーベルト以上という異常に高い線量が放出されていました。これほどの線量を浴びるとめまいや水晶体混濁、嘔吐などの急性放射線障害を引き起こし、白血球の減少も起こり、一生涯で甲状腺がんや白血病または白内障などの疾病の発生するリスクがハネ上がります。それを考慮すると、これはとんでもない数値です。急遽、放射線防護服を用意し、医師をはじめとした医療スタッフに着用させました」

「要救助者の除染はしたのか」

大統領の問いに、スタッフが頷く。

「早急にスクリーニング作業がおこなわれました。しかし、それでもなお、当該飛行士からは、三〇〇ミリシーベルト毎時という依然として高い数値の放射線が計測されています」

「どういうことだ」

「つまり」

スタッフはいちど解答を切り、言葉を慎重にえらんでから口を開いた。

「飛行士のからだそのものが、放射性物質と化してしまっているものと、思われます」

チトーが瞠若とし、多くのものはとつさに意味がわからず当惑し、ヒットリアがとかげを呑んだような顔をしていた。その噛み締めた歯の間から、恐ろしい言葉が吐き出される。

「放射化か……！」

スタッフはヒットリアの目を見ながら深く頷いた。「おっしゃるとおりです、大統領」

放射線を浴びると、本来は放射能のない物質が放射線を放出するようになることがある。これを放射化という。かつてヒロシマやナガサキに原爆が投下されたとき、炸裂した瞬間に放出された強力な放射線を浴びた建物の瓦礫やアスファルトが放射化し、降り注ぐ放射性降下物とともに、熱線と爆発の怒濤から辛くも生き残った人や、救助のために市内入りした人たちをことごとく被爆させ、死神の鎌にかけていった。また、長期間にわたり核燃料を扱いつづける原発の原子炉も、運転しているあいだにまるごと放射化する。沸騰水型原発なら核燃料でじかに加熱された水が水蒸気となってタービンを回すのだが、とうぜんその水蒸気は放射性物質を含んでいるので、タービンそのものも放射化してしまう。加圧水型なら一次冷却水を循環させる配管やポンプが放射化する。原発は長い年数稼働するものである。星霜を経るうち、原子炉からの防ぎきれない微量の放射線が累積し、やがては施設じたいが放射化しはじめる。床に落ちた、ただの塵埃までもが、放射性物質と化す。それがなにかの拍子に舞い上がって鼻口から吸入してしまえば、つまりは放射性物質を取り込むのと同義なのだから、体内から被爆することになる。

念入りに除染しても、それじたいが放射性物質となっているのだからどうしようもない。しかし、人体がこれほど顕著に放射化するなど、あつてはならないことだった。

「やはり、漏出した核燃料が原因か？……」

「は、それについてですが……」

スタッフが手元のプリントを次次めくりながら、

「ここまで人体を放射化させるには、彼本人はそれこそケタ外れの

放射線を浴びているはずで。おそらくは一〇〇グレイ・イクイバレント、つまり一〇万ミリシーベルト毎時以上の線量をほぼ一瞬で浴びていてもおかしくないとの見解が、放射線医療科学研究所から出されています」

放射線の量を表す単位に、シーベルトとグレイ・イクイバレントがある。

物体に吸収されたエネルギーを算出したものを吸収線量といい、単位はジュールだが、放射線の場合はグレイを使う。ひとくちに放射線といっても、放射線にはアルファ線、ベータ線、ガンマ線、X線、中性子線などいろいろの種類があり、それぞれ性質もちがえば同じ吸収量でも生物に与える影響はちがう。それに、同じ強度の放射線でも、さらされていた時間、当たりかたなどの諸条件によっても異なってくる。それらの放射線の影響度を考慮したうえで、被爆による生物学的影響をはかるために考え出されたのが線量当量である。線量当量は、吸収線量に、放射線の種類ごとの修正係数をかけて補正算出する。この線量当量の単位はシーベルトであらわされる。たとえば、アルファ線は、ガンマ線よりも人体に与えるダメージは二〇倍強い。だから、アルファ線を一〇グレイ浴びたのと、ガンマ線を同じ一〇グレイ浴びたのでは、吸収線量は同じでも人体への影響はまったくちがってくる。しかし実際に被爆するときには、さまざまな種類の放射線がカクテルされた状態で当たるのだから、人体への影響を吸収線量だけでひとくりにすることはできない。これをわかりやすいように総括して共通の基準をもつけたのが線量<sup>シーベルト</sup>当量である。

つまり、放射線そのものはいくら出ているのかを数値化したのがグレイ・イクイバレント、その放射線を実際に浴びた場合に生体が受ける影響を数値化したのがシーベルトだ。相当に噛み砕いて誤解も恐れず言ってよいならば、グレイ・イクイバレントは地震でいうところのマグニチュードで、シーベルトは震度とでもいうようなものであった。

というわけで生体が受けた被爆総量はシーベルトで示し、「一時間あたり何ミリシーベルト」とか「ミリシーベルト毎時」というのは、一時間その線量を被爆した場合の人体への影響を表している。つまり、二〇ミリシーベルト毎時の放射線を出している場所に二時間いた場合は、「四〇ミリシーベルトの被爆量」ということになる。要するに数値が高ければ高いほど危険ということである。地震による被害がマグニチュードではなく震度によってきまるように、人間にとっては、人体にどれだけの影響があるかが重要なのでシーベルトが多用される。

被爆総量による人体への影響だが、二〇〇〇ミリシーベルトで鼻などの粘膜、毛細血管から勝手に出血し、毛髪が抜け落ちたりする。死亡率は五パーセント。

五〇〇〇ミリシーベルトだと五〇パーセントの人が死ぬ。生き残ったとしても、免疫不全、がんの頻発、子孫への影響に生涯苦しめられることだろう。

一万ミリシーベルトもくらえば、ほぼ百パーセント死ぬ。これを放射線の致死量というなら、救出された隊員はその十倍の線量を被爆したのだ。その場で即死していても、なんらふしぎではない量である。会議場の面々は、通夜のような重苦しい沈黙に支配された。助からない。だれもが思ったが、そう口にするわけにはいかない。

「これほどの膨大な被爆となると、空母ないし原潜の核燃料由来だけでは疑問です」

「ほかに原因が？」

「さあ、そこまでは……」

ヒットリアは片手で頭をかかえた。政務官の声も重い。

「原因はなんであれ、きわめて重度の被爆をしていることはたしかです。いわば、人型の放射性物質といっても過言ではないほどです。救出にあたったレスキュー隊員たちも被爆が確認され、現在は隔離してあります。搬送に用いたヘリも検査の結果、汚染されていました。高濃度放射性廃棄物として処理しなければ……」

大統領はひとしきり悩み、暗い目で政務官を見た。

「音声は通じているか？」

政務官が意図を察し、ぬかりなく繋いでおいた音声回路でドクターを呼んだ。画面の中の防護服のひとつがこちらを振り返った。

「お呼びでしょうか、大統領閣下」

シールドの施されたマスクに隠されて、ドクターの表情は窺い知れなかったが、その声には焦燥のひびきが滲み出ていた。医者の方の焦燥ほど不吉な予感を運ぶものはない。

「すまないドクター、二、三訊きたいことがあるだけだ。手短に終わらせる。要救助者は重度に被爆していると聞いたが、現在の容態はどうだ？」

「芳しくありません」ほとんど即答に近かった。「外傷だけなら通常の医療施設と通常の治療でじゅうぶんクリアできるのですが、この被爆がやっかいです。彼の細胞そのものが放射性物質となり、彼の体を蝕んでいるのです。これは現代の医学ではどうしようもありません」

できることといえば、モルヒネを打って苦痛を緩和して、せめてやすらかにその時を迎えさせてやることくらいだと、ドクターは無力感にうちひしがれた声で言った。

「モルヒネは、もう打ったのか？」

「いいえ、僭越ながら、大統領のご指示があるまでモルヒネの投与は見合わせておりました。お話を訊かれるかと思いましたが」

それは冷酷で、合理的な判断だった。もはや助からないとわかっている命なら、泣こうが喚こうが利用できるところはあますところなく利用する、おそるべき合理主義の一端が垣間見えた。

そしてドクターの判断は、いまのヒトリアにとり必要不可欠なものだった。——ふつうの人間なら、さつさと安楽死させてあげようとか、そうでなくともモルヒネを投与して少しでも苦痛を軽くしてあげようとか考えるところである。だが政治家とは、無用な感情論をいっさい排除し、良心を抹殺して冷徹なまでに利益を追求でき

るいきものである。常人に政治家が務まらず、また政治家にのきなみ常人がいない理由でもある。

「彼と話ができるだろうか？」

「うわごとがひどく、会話が成立しないかもしれませんが、意識はあります。少々お待ちを」

隊員は意識を明瞭に保ったまま、モルヒネを打たれずに待たされていたのだった。通常の鎮痛剤は投与されているようだが、放射線の影響をとくに受けやすい腸の粘膜が剥離し、溶けた内蔵が下痢の血便となつてとめどなく尻から流れていたりしてもおかしくない症状のほずである。悪意に満ちた小さな悪魔が何百匹と腹のなかにはいりこんで、内臓を好き勝手に喰いちぎり、ガラスの破片が全身の血管を走りまわっているような激痛を抑えるまでには到底いたらないと思われた。

ドクターがマイクを用意し、同時に大統領の声が仰臥している飛行士にとどくようにセッティングする。途中で、医療スタッフのひとり、飛行士を乗せたベッドの下、ちょうど尻の直下にあたる床に設置されたバケツを持ち上げ、

「もういっぱいになった。これですでに五リットルの下痢便を垂れ流している。脱水症状のおそれもあるから、生食の点滴量を増やそう」

とほかの医療スタッフと相談しているのが漏れ伝わってきた。ホワイトハウスはあらためて、飛行士の症状の重さに絶句した。

画面の向こうからドクターが声をかけてきた。

「どうぞ」

同時に、飛行士の顔も映し出された。映像の撮影者が被爆するおそれがあるし、衛生面の問題もあるので、集中治療室内にはカメラは入れないが、ドクターが医療用のカメラを飛行士に向け、室内に備え付けのモニターに映し、それをガラスのこちらがわのカメラが映すことで、間接的に飛行士の顔が会議場の人人にも見えるようになった。

重篤な被爆をしているとあって、みながこれからおそろしいものを見る体勢に入ったというような空気に変わった。想像を絶する病状にちがいない、だれもがそう思い、身構えた。

だが、モニターに映された飛行士の顔は、予想されたような衰容ではなかった。過剰なベータ線で火傷のような症状を起こし、全体的に赤くむくんでいるものの、健康な人間とそう大差があるというふうでもなかった。たいていの者たちは、どこか肩透かしをくらった気分になった。

これが放射線障害のおそろしいところだ。放射線は、今ある細胞そのものはあまり破壊しないので、初期のころは外見的には病態がそう重いように見えないのである。

だが、身体の内側ではすでに崩壊が始まっているのだ。着実に、確実に。ゆつくりと、あるいは突然に。

ヒットリアはそんな飛行士の容貌をみて、なんと声をかけていいか迷った。しかし、貴重な時間をむだにはできない。

「わたしは合衆国大統領、ジョージ・ヒットリアだ。あれほどの被害から生存してきたことに敬意を表する。きみに質問したいことがある。答えてくれるか？」

画面のなかの飛行士は、天井を見つめながら、しきりに唇を動かしている。その目は、この世をすら見ていないようだった。

「なにか言っているようだが、聞こえないな。ボリウムをあげてくれ」

ヒットリアが要請すると、すぐさま秘書官が動き、音量を調節した。

とぎれとぎれに、飛行士のことばが聞こえてきた。

「すまない……うう……すまん……みんな……痛い痛い痛い……すまん……痛い……痛い……痛い……すまない……痛い……」

最初に聞こえたのはこんなことばだった。

「すまない、とはどういうことだ？ いったいなにがあったんだ？ たのむ、教えてくれ」

ヒットリアが懇願しても、飛行士の表情は力なく、虚ろだった。そして、うわごとを続けていた。

「すまない……みんな……おれが……おれがあんな役を……おれがロイヤルストレートフラッシュユなんて役を出しちまったばかりに……それでこんなことに……すまない……すまない……」

「なに？ ロイヤルストレートフラッシュ？ なんのことだ？」

思わずチトーのほうに目をむけたが、將軍にだってわかるわけではない。

大統領はふたたびモニターに向き直った。

「こんなことに、とは、今回の沈没のことだな？ 教えてくれ、いたいなになが、きみたちをこんな目に遭わせたんだ。どうして＜ハリ・S・トルーマン＞は沈んだのか。きみはなにを見た？ 聞こえるか？ 聞こえたら返事をしてくれ。わたしは合衆国大統領のヒットリアだ」

「大統領……大統領？」

うわごとばかりだった飛行士が変化を見せた。目に焦点が戻り、わずかで弱々しくはあったが意志の光も宿ったように見えた。

「そうだ。大統領だ」

「大統領……ヒットリア大統領！」

声は喘鳴に近かったが、明確な反応を示してくれたのは喜ぶべきだった。合衆国軍最高司令官の名と声が、軍人である飛行士の正気を取り戻させたのかもしれないかった。

「わたしは……わたしは、生きていますか」

「そうだ。きみは奇跡的に助かった。そしてわれわれはきみたちの身になが起こったのかを知らねばならん。だから教えてくれ。第10空母打撃群になが起こったのかを」

飛行士の口唇は開閉を繰り返したが、ことばが出なかった。なんというてよいのかわからない、という様子であった。

そして、飛行士は顔をゆがめ、眉根をよせ、滂沱と涙を流した。その涙は、透明な塩水ではなく、血液そのものだった。目尻から赤

い線がこめかみへと流れていった。

「あいつは……奴は……」

「奴？」

飛行士は幼児に退行したかのように泣きじゃくった。鼻からも出血が始まった。血の涙は目頭からも溢れだし、眼球の白眼の部分は、染料を注入したように真紅に染まっていた。鼻血と血涙を流しながらも、飛行士はことばを振り絞った。

「乗っていたF-18ごと空母が沈んで……まっ逆さまに海へと落ちて……そして……海の中で……見たんです、奴を……」

「なんなんだ、それは。そこになにがいた？」

飛行士は、顔のパーツがほとんど中央に集まるほどにくしゃくしゃにして、首をふった。

「わかりません。でも……奴は……奴は、おれを見てた……」

「見ていた？」

「ばかでかい口と……牙と……そして……あの、あの目……ああ！  
あのおそろしい、いまましい邪視の目！」

飛行士の耳孔から、脂っぽい血が流れでてきた。脳味噌と脳漿が混じったのが耳から漏れてきているのだ。脳が、液状化を始めているのだった。それでも飛行士は喋り続けた。

「あいつは、おれたちを憎んでる。おれたちを八つ裂きにして焼いて灰にしてもまだ足りぬほどに憎悪している。あいつはおれたちを皆殺しにするまで絶対に許したりはしない。おれたちは、おれたちはみんな殺される。おれたちは、みんなあいつに殺される！」

狂乱した叫びは、もはや飛行士の断末魔の絶叫にも聞こえた。ヒットリアが被せるように問いかける。

「おちつけ、いまここにそいつはいない。きみのいう、奴とはなんなんだ？ 何者なんだ？ 答えてくれ！」

「巨大な……」

飛行士が、目と耳と鼻から血をだらだら流しながら答えた。

「巨大な……怪獣……」

なに？ 怪獣だと？ そう思ったとき、飛行士が握りこぶしほどもある血塊を吐き、その表情が、凍りついたかのように固定され、動かなくなった。茶いろの光彩に浮かぶ瞳孔が収縮し、針で開けた穴のように小さくなった。

一拍ほど遅れて、心電図をモニターしていた機器から、長い長い電子音が弔鐘のように響きわたった。

心電図の波形は、完全な平坦を表示していた。

「ピンポイント・ピュールズだ！ 生命維持装置を最大。電気ショックを持ってこい！」

とたんにあわただしくなったICUのなか、宇宙服のような格好の医師やスタッフが髪をふりみださんばかりに動き回る。

「チャージ！」

「クリア」

「離れろっ」

ジェルを塗った電気パッドを飛行士の胸板にあてがわれ、電圧による衝撃が送られる。からだが跳ねる。だが、生命の鼓動はもどらない。電気ショックを三回くりかえした医師は、悄沈してかぶりをふった。会議場の女性秘書官ら何人かが、モニターから顔をそむけた。

「將軍」

ヒットリアはチトーを呼んで、

「いまの映像を見て、どう思う？」

と訊いた。チトーは逡巡し、重い口を開いた。

「おそらく、大統領と同じです」

## 二 世界の王（後書き）

遅筆ゆえ更新が遅くなりがちですが、最悪でも一週間に一話は掲載する所存です。よろしくお願いいたします。

### 三 夜空が笑い、朝陽に惑う

蛍光灯が冷え冷えと照らす更衣室で普段着のワイシャツを素肌に羽織り、音を立ててロッカーを閉めたアラン・エイブラムスは、肩で風を切るようにして室を飛び出した。すれ違う看護師や医師、用もないのに点滴台といっしょに院内を散歩している患者をよけながら、引っかけたワイシャツのボタンを閉めていき、大股で廊下を抜ける。エレベーターのボタンを押す。無意味とわかっていても、ボタンを二度、三度と叩く。その所作には、隠そうともしない苛立ちがあらわれている。三六時間起きっぱなしで、次から次へと飽きることもなく搬送されてくる怪我人の手術をさせられていれば、こつもなろう。スケボーをしていてクールなところを見せようと手摺にグラインドし、みごとに頭から落ちて額を割るもの、チンピラどうしの抗争で金属バットで殴ってお返しに腹に三八口径をもらうものなど、ニューヨークはとかく負傷して病院にやっかいになる理由にことかかない。昼はイエローキャブにピストバイクのメッセンジャーが轢かれ、夜はチンピラもどきどうしの喧嘩の怪我人というパターンが多い。

いっそのことピータービルトのエイティーン・トレーラーにでも下敷きにされてぺしゃんこになっていれば、一目みて「死亡」と判定して、それで仕事が早々に片付く。だが、銃弾が頭蓋骨と脳のあいだに挟まるようにして止まって、しかも患者は奇跡的に生きているなどというケースのほうがかえってややこしい。任されれば、全力を傾注して、手術を成功させなければならない。失敗に終われば、査定に響くどころか、おまえがへたくそなせいで息子は死んだ、殺人罪で告訴するなど口角に泡を飛ばして抗議しにくる遺族もいる。「あなたは二四時間、連続勤務して、仮眠すらとる間もなく手術して、書類をこなして、より効率的かつ経済的な医療のため、学会で発表された新しい治療法や医療技術の論文を勉強して、さらにその

あとに精密機械より複雑で精巧な人体を手術して、それで百パーセント成功などさせられるとおもいますか」

そう言えれば、アランもすこしは楽になれるだろう。だが遺族は十中八九、そんなのはこっちの知ったことじゃない、それはおまえらの病院の問題だと正論をもって反論されるのが目に見えている。

だが、増加の一途をたどる人口に対し、医師や看護師の数が圧倒的にたりない。すでに勤務時間が超過して、帰宅しようとしても、患者は休むことなく担ぎ込まれる。ほかの医師たちも手がいっぱい、その手が空くまで治療はおるか診察もされないままベッドに寝かされ放置される。救うことができるのはアランしかない……。

アランは外科的手術において広範な知識をもち、なまじ腕が立つた。そのぶん、医師として要求される責任も増大するようだった。そしてその患者を手術して、帰ろうとすると、また新たな患者が来る。

いつも、この繰り返しだ。きょうだってそうだったのだ。いらいらするのは責められることではなかった。

だが、きょうはそれにくわえて、重要な用事があった。正確にはきょうではない。ゆうべの七時だ。アランは携帯電話を見た。ディスプレイの時計は、あと五分で夜明けの四時になることをアランに教えた。アランはジーンズのポケットに携帯をねじこんだ。

ことしも、行ってやれなかった……。

きのうは、アランと妻のジェシカの、六回めの結婚記念日だった。こんな仕事をしているから、ジェシカとどこかのんびりとバカンスに行くということはできない。院長からたえオフの日でもニューヨークを離れるなど厳命されているからだ。事実、ふたりで旅行などしたことがない。結婚式の日だって、ハネムーンには行かず、挙式のあとすぐに職場に直行だったくらいだ。だからせめて彼女の誕生日と結婚記念日くらいはと時間を取ろうとするのだが、この六年間、いずれも成功したためしがない。結婚する前からこの仕事をしているのだし、彼女もそれは知っているから了承してくれているは

ずなのだが、すまないと思う気持ちがないわけがない。

なんとか埋め合わせはしなくては。そう思つて、アランはことしの結婚記念日のために、予約をとるのに一ヶ月はかかる、ニューヨークでも指折りの高級レストランでのディナーを約束したのだ。アランのほうからジェシカを誘うのははじめてだった。ジェシカも最初は、「ほんとうに？」と半信半疑だったが、アランが「すでに予約はとつた。いやだといつてももう引き返せんぞ」とにやりと笑いながら言うと、ジェシカはオリーヴグリーンの瞳に涙をためてアランの首に抱きついた。ジェシカのぬくもりを腕に感じながら、アランは、ふたりが出逢つたあのころのようだ、と思つた。ふたりは世界に祝福され、邪魔するものなどにひとつない、いたとしてもふたりならきつと乗り越えていける。根拠もなくそう信じていられたあのころは、幸せだった。と、アランは感慨を覚えながらも、苦笑したい気持ちが自分にあることも発見していた。以前は毎日が幸せに満ちていたが、その幸福感が、ずいぶんひさしぶりなものに感じたのだ。うすうす気づいていながら、意識して気づかぬふりをしていたが、やはりふたりのあいだは、いつのまにか距離が離れ、ぎくしゃくしはじめていたのだらうなど、アランはしみじみ感じた。そのディナーの約束の時間は、むなしくもはるかむかしに過ぎてしまつていたのだった。

こうなることはわかつていた。すくなくとも予想されてしかるべきだった。結婚記念日だから患者の数が少なくなつて、いつもより早く帰れるなんてことがあるわけがなかった。けつきよく、いつものように次次運び込まれる患者の嵐に翻弄されるまま翻弄され、ふたりで迎えるはずだった夜明けを職場で迎えてしまった。

泣きたかった。おもいきり泣いて、ジャック・ダニエルズのびんを一気にあおりでもしないと、ストレスに身も心も虫食い穴だらけにされてしまいそうだった。でも、いまいちばん泣きたいのは、ジェシカのほうに決まつてる……アランは自分にそう言い聞かせて、しんぼう強くエレベーターを待ち続けた。こんなときにかぎって、

エレベーターはなかなか来なかった。一階に下りて、アランの待つ五階に上がってきたと思ったら、そのまま素通りして最上階まで行ってしまった。そこから、各階に停止しながらのそのそ下りてきている。アランはため息をついた。

自分は、医者として、もてる力を尽くして、多くの患者を助けてきた。そのことには自信があるし、実績については病院がわに信用も置かれている。だが……見ず知らずの他人ばかりを救ってきたそのいっぽうで、たったひとりの愛する妻を幸せにすることはできなかったろうか？ 手前味噌ながら金のことにかんしては不自由させたことはないが、金の問題ではないということは重重、理解していた。

アランは両手で顔をおさえ、天井を仰いだ。

「エイブラムス先生。いまお帰りですか？」

朗らかななかにもしつとりとした落ち着いた声をかけられて、アランは首を回して振り向いた。空いろの手術着をまとった、若い魅力的な女性が微笑んでいた。

「やあ、グレース。やっと解放されてね」

アランは心身の疲労を隠して笑顔を返した。同じ職場で働く可憐な女性に、弱っているみじめな自分を見せたくないという自尊心のかけらがそうさせた。

「おつかれさま。はい、これ」

グレースは両手にもっていたスターバックスのボトルのひとつをアランに差し出した。

「いいのかい？」

「先生にあげようと買ってきたんですから。これからすぐお休みになられるなら、カフェインはNGでしたか？」

「とんでもない。いただきよ。ありがとう」

アランは飲みごろの温度に温められた乳褐色の靈薬をあおった。心地よく口内に広がる苦味のなかに、ほんのりと香ばしい、優しい甘味を見つけることができた。

「キャラメルラテか。ぼくがいちばん好きなメニューがよくわかつ

たね」

グレースは、みずみずしい唇から真珠いろの齒を覗かせながら笑顔を送った。

「たまたまですよ。でも、喜んでいただけのなら嬉しいです」

アランは、ふと自身を戒める緊張が解けて、せき止めていた涙がこぼれおちそうになった。必死で覆い隠そうとしたが、表情に陰しさがあらわれた。

「なにかあったんですか」

グレースが大きな瞳に不安のいろを浮かべて、アランの顔を覗き込んでいた。金糸を編んだような豊かなブロンドが輝き、ドレスデンの陶器のような白い肌がアランの眼底に焼きついた。

「いいや」アランはキャラメルラテを乱暴に喉に流し込んだ。カフエインと糖分が肉体の疲れを癒し、グレースの心遣いが精神の疲弊を解きほぐしてくれるようだった。「疲れてるだけだよ」

「……先生、ただでさえむりをなさってるんですから、自分をいたわってください。わたしでよければ、力になりますから」

そう言われて、アランは、真正面からグレースの顔を見ることができなかった。いま彼女の美貌を見たら、おれは……。

「ありがとう」

それだけ口にするのでせいっぱいだった。

やがてエレベーターが扉を開き、アランを招いた。ひとり乗り込んだアランは、こちらを見送るグレースにボトルを軽く掲げて別れの挨拶とした。

閉じゆく扉のむこうで、長い睫毛をしばたたかせて、どこか悲しそうな影を秘めた笑顔をしたグレースが、小さく手を振っているのが見えた。

ひとりになり、下降しはじめたエレベーターのなかで、アランは扉に額を打ちつけた。

エレベーターを出て、広い待合室を抜けるとき、テレビの音声が聞こえた。チャンネルは深夜から早朝までニュースを流しつづけて

いる番組に合わさっていた。黒人のニュースキャスターが、耳に入りやすい低音の声で、いるかなきかもわからない視聴者に語りかけていた。

「原子力空母と原子力潜水艦沈没にかんするニュースです。昨夜十時に開かれた会見で、ワインバーガー報道官は、沈没地点の海域周辺から、国際的に定められた環境基準値を大きく上回る放射性物質が検出されたと発表しました。沈没した原子力空母か原子力潜水艦のどちらか、あるいは両方の原子炉が破損し、核燃料が海に漏れ出した可能性が高いとみられ、現在対策を検討中とのことです。これをつけて、IAEA、国際原子力機関が近く、調査団を派遣する意向を示し、……」

正面玄関を出ると、空は深い瑠璃いろに染まり始めていた。すこし歩いてからイエローキャブを捕まえ、アランは運転手に自宅の番地を伝えた。ジェシカの待っているはずの自宅へ、タクシーは走りだした。

車に揺られているあいだ、早く帰ってジェシカに謝りたいという気持ちと、このまま永久に目的地に着かずに乗っていたいという気持ちがないまぜになって、アランの胸中は複雑だった。

アランのアパートメントは、タワーのような高層ビルの五一階にある。明けきらない濃紺に輝く空を背景にした高層アパートは、眼精疲労のアランには、尖塔が絶望いろに塗りつぶされているように見える。

エレベーターに乗っているあいだも、アランはとうにからになったボトルを弄びながら、ジェシカに対する謝罪と言い訳ばかりを考えていた。

ドアが開き、玄関まで歩く。そこで、グレースにもらったボトルを持ったままなのはまずい気がして、どこか目立たないところにとりあえず置いておこうと、非常階段の入り口で待たせた。後でこっそり回収してちゃんと廃棄すれば問題ないだろう。

鍵を開けて入る。この時間だから、ジェシカはきつと寝ているだ

ろう。起こしてしまわないように、足を忍ばせる。家のなかには、死んだようにしんとしている。

こっそりと、ふたりの寝室を覗く。

ベッドには、ジェシカの姿がなかった。

リビングで寝てしまったのか？ リビングへ足をむけると、そこにあつたのは液晶テレビやカウチにガラスのテーブルといった家具類だけ。人の体温はなかった。

アランは家じゅうを探し回った。だが、ふたりの住居に、ジェシカの影はなかった。

同刻。サマータイム期間中のニューヨークと日本の時差は一三時間である。とすれば、ここ、日本の現在時刻は午後五時を回ったか、回らないかのあたりだろう。

赤みを差しはじめた大空を舞台に、天使たちが戯れている。天使たちは、無限に広がるかに思える青と赤光のまじった天空を、縦横無尽に飛びまわり、眼下に雲海を臨んで壮麗な舞踏を刻む。

高度二万フィートを超える高空で、音速に迫る速度で雄飛するその天使たちは、鋼鉄のからだをもっていた。

「エピカ1、左ロール」

「エピカ2、高度修正、二万三〇〇〇」

天を駆ける天使が交信しあう。後方に爆音を残しながら、大空を自在に飛翔する。あかるいグレイの鉄の翼に真紅の円、日の丸が聖火のごとく燃えている。

さこそ、日本の航空自衛隊が保有する主力要撃戦闘機、F-15 Jイーグルだ。世界でも最強クラスの性能をほこるF-15を、日本仕様に近代化改修し、オリジナルよりも高い品質のものとなった、対領空侵犯措置をになう日本の空の守護者である。

四機編成で同高度、等速でF-15 Jイーグルが飛行している。ついで、リーダー機<エピカ1>の「ナウ」のひとことで、四機が

同時に右へ機体を倒し、見えない系で繋がれているかのように揃って旋回行動をとる。速力はおよそ時速六〇〇キロ。一瞬、気をゆるめただけで、二〇〇メートル、三〇〇メートルと過ぎさつていく高速の世界で、一系乱れぬ編隊行動を遂行するには、容易ならざる技術、体力、そして精神力が求められる。ましてかれら、第7航空団第307飛行隊、通称エピカ隊の四機がいま戦っているのは最強の敵である。

「エピカ2、チェックシックス（後方確認）をおこたるな」  
「了解」

「エピカ3、4。速力四三〇（単位はノット。時速約八〇〇キロ）まで増速。よーそろー（よろしく候、の略。そのまま直進の意）。おれたちがさらにケツをとる」

「エピカ3、了解」

「エピカ4、了解」

「エピカ2、ケツとりにいくぞ」

エピカ1に指示されたエピカ2が勢い込んで「了解」と返す。エピカ隊一番機と二番機が事前に申し合わせていたように反転し、編隊を追い回している『敵』へ反撃にむかう。

赤と橙と堇が青のなかにまじりはじめた空のうえで、エピカ隊の後方四〇キロメートルあたりについてきている機影があった。こちらも四機編成で、機体は花田いろにちかいブルーグレイと薄いスカイブルー、アッシュグレイに彩られている。雪原迷彩仕様に塗装されたその戦闘機は、二枚ある垂直尾翼にコブラのエンブレムをペイントしている。一瞥しただけだと、ロシアの高性能主力戦闘機、Su-27フランカー系の機体に見える。すわロシアの戦闘機が領空侵犯をして、あまつさえ空自のイーグルに戦いを挑んでいるのだろうか。しかし仔細に観察すれば、塗装こそフランカーに似ているが、機種そのものはエピカ隊とおなじ、F-15Jイーグルだということが見てとれるだろう。

青いF-15J四機が、執拗にエピカ隊のF-15J四機を追い

立てる。エピカ隊が反転攻勢に打ってでる。

原子雲のように途方もなくわきたつ入道雲を遠望し、エピカ1とエピカ2が飛行機雲を曳いて急旋回。腹にオレンジいろの陽光をまぶしく反射させ、機体を左に転回させる。

キャノピー越しに、敵機の位置を確認する。二機がこちらの航路をそのままなぞるようにいつてきている。そうすればつねに後方に占位できるからだ。まるで空中の見えざる道を可視化しているかのような正確な操縦だ。それだけでも、青いF-15J部隊の実力が常凡のものにあらずということがわかった。

さらに鋭く旋回する。だが青いイーグルは、いったん急上昇し、反転して速度を落としてふたたび後方についてきた。上昇反転でわざと減速し、こちらを追い越してしまうことを防ぎながら、なおも後方占位を続けられる。ハイスピード・ヨーヨーとよばれるテクニクだ。

理論どおりの動きを実際に空の上でやってのける。やはり、ひとすじ縄ではいかない。だが、エピカのリーダーもいたずらに尻を拝ませていたわけではない。

「エピカ3、エピカ4、ナウ！」

エピカ1の指示で、エピカ三番機と四番機がなだれこんできて、リーダーを追う青いイーグルの後方についた。別行動をとったのは、陽動に見せかけたさらなる陽動だった。だが、そのエピカ3とエピカ4の後方にも、雪原迷彩のF-15J部隊の残り二機がぴったりにいつてきている。

そして、そのさらにうしろに、エピカ2が現れた。ほんとうに、いちど消えて敵機後方に再出現したというような占位のしかただった。

八機の空の支配者たちは、からみあうように舞い踊り、ダンスを競いあった。やがて、

「予定時刻。本日はこれまで。管制の指示にしたがい、各機着陸態勢をとれ」

と、エピカ隊のだれでもない声が無線から響いた。

上空からは、百里基地の特徴的な「くの字」型の誘導路の全容がよく見える。八機はその珍妙な形状の誘導路を眺めながら待機し、一機ずつ、巣に帰る鳥のように着陸していった。

青いF-15J部隊四機と、エピカ隊のF-15J四機が降り立ち、開放されたキャノピーから、整備士たちの手を借りながら、パイロットが下りる。顔いろに疲労は色濃いが、みな、それを上回る充実さと精悍さがある。

最後に着陸した機体から下りたのは、第307飛行隊フライト・リーダー、エピカ隊一番機パイロット。浅間一成一等空尉である。高い上背を飛行服に包み、軍靴がエプロンに重厚な蛭音を響かせる。その端正な顔には、生死を超越した剽悍な戦士の表情がでている。「相棒、きょうは一矢報いてやったな」

浅間が整備士に機の状態などを報告して基地へ帰ろうとすると、同隊の二番機、エピカ2のパイロットの金本謙省二等空尉に声をかけられた。剃刀のように細く鋭い目をした偉丈夫である。

僚機パイロットの姿を認めた浅間は、熾火のような静かな闘志に燃えていた表情をいっぺんに崩して、快活に笑って返した。

「おれが誘って、うまいことおまえに尻かみつかせたまではよかったんだがな。しかし最後は見事にケツをとられたからな。やっぱり飛行教導隊はちがうな」

そしていたずらっぽく肘で相棒をつつき、

「相手が美少女だったら死んでも尻から離れなかっただろう、おまえ」

「そりやもう、むしゃぶりついてうしろから追突することも辞さないよ。おれのM61バルカン砲をくらえっ！ てな感じで」

「早すぎるだろ」

ふたりが吹き出し笑いをし、整備士たちが不審そうに振り返って、ちらりちらりと見る。空自パイロットのなかでも、世界屈指の主力

戦闘機F-15Jを駆るパイロットは、イーグル・ドライヴァーと尊敬の念をもつてよばれている。ふたりのその名誉ある称号らしからぬ奇矯なふるまいは、きのうきょうにはじまったことではない。整備士たちも含み笑いしながら仕事にとりかかった。

「でもなあ、あんなおっさんの尻を眺めながら大空を飛んでもな。こっちはおまえ、おっさんらのジェット噴射浴びながら追っかけてたんだぜ」

「じゃあもうこれしかねーな」

浅間が両手を合わせて人差し指だけを立てて、何度も突くしぐさをした。金本は身をのけ反らせて大笑した。

ふたりして笑っているところへ、突然、雷が落ちたようなどなり声が響きわたった。不可視の圧力がかったかのように首をすくめたふたりは、おそろおそろそちらへむいた。

飛行服をまとい、浅間と金本より一回りは年齢を重ねたパイロットが四人、傾きはじめて太陽を背に立っていた。体格はふたりとそう変わらないが、内面からにじみ出る迫力のようなものがある。その気迫で、ふたりよりもだいぶ背が高く筋肉の総量も多いようにさえ思える。

浅間と金本は、すぐさま姿勢を正し、踵を合わせ、敬礼した。

男たちが、威風をなびかせながら近づいてくる。

かれらこそ、さきほど浅間らエビカ隊を追いかんだった、ブルー系迷彩のF-15J部隊のパイロットたち、宮崎の新田原基地を本拠地とする飛行教導隊である。

飛行教導隊は、演習時に仮想敵になりきり、実戦さながらに戦うことで部隊の練度上昇をはかる専門の飛行隊である。この部隊は、飛行パターンや戦法などにいたるまで、敵をそのまま演じる。むしろ、塗装も敵機に見えるように変えられている。

アグレッサーと通称される敵機役を演ずるかれらは、教えるがわなのだから、その技量は空自パイロットのなかでも群を抜いて高い。そのうえ、自国機のみならず仮想敵国機の編成や空戦方法などを熟

知し、訓練でそれを見せて、練習させてやらなければならない。問答無用のエキスパート集団で、挑んでくる“雛鳥”たちをことごとく撃墜する。まさに日本のトップガンである。

そのエリート中のエリート、最強の戦闘機乗りに睨みつけられて、わかいふたりは萎縮した。アグレッサー部隊のひとり、長良二等空佐が大喝した。

「まだ訓練は終わっていない。ブリーフィングルームに戻れ」

ふたりはいきおいよく、「了解」と叫ぶように返事をして、踵を返して駆け足した。だがすぐに浅間が「家に帰るまでが遠足だつてよ」と小声でいい、金本は「おまえさつき了解つて言ったとき声うわずってなかったか」とささやいて、お互いの笑いを誘った。

ふたりの背を見送りながら、アグレッサー部隊の面々は溜め息をついた。

「態度さえ改まれば、空自きつてのイーグル・ドライヴアーなんですがね」

長良三等空佐の嘆息に、飛行教導隊フライト・リーダーも渋い顔をしてうなずいた。

百里基地は、百里空港と併設した自衛隊基地で、離島をのぞけば、関東地方で戦闘機を運用している唯一の基地である。首都圏の防空の要といえ、ここを任地とする戦闘機パイロットは、その責任たるや重大である。百里基地にて空を護る飛行群は、<蒼穹の亡者>と名高いF-4EJ改ファントムで編成された第303飛行隊と、浅間や金本が所属するF-15Jと複座型のF-15DJ部隊の第307飛行隊、そして練習機のT-4部隊を擁する、第7航空団。それと、ファントムを偵察機に改造した、RF-4Eを有する偵察航空隊だ。百里の偵察航空隊は、航空自衛隊唯一の偵察飛行部隊でもある。

かれら航空自衛隊の戦闘機パイロットは日夜、敵戦闘機との実戦

を想定した、きびしい飛行訓練をかさねている。それに加え、任務や演習に参加するためなどの資格取得の勉強もしなければならぬ。さらにそのうえ、仮想敵国の航空部隊が得意とする編隊や戦術の特徴などを念頭にいれ、それに対しもつとも有効で、かつ隙を生まない飛行を研究する……というのは、いささかむりがある。そこで、それらの空戦研究をアグレッサーが一手に引き受け、全国を転々としながら、各基地の飛行隊に身をもって教え込んでいるのである。空から戻ったあとは、訓練に参加したもの全員で、訓練結果の報告、課題点の発見と、より効果的なフォーメーションを模索するためのデブリーフィング（帰還報告）がある。デブリーフィングは、時に深夜の十一時におよぶときもある。

「なにやってんですか。もう始まりますよ」

浅間と金本がブリーフィングルームにむかう道すがら、途中でふたりの同僚パイロットが待っていてくれた。

文句を垂れたのは、エピカ隊三番機、エピカ3のパイロット、早蕨二等空尉だ。あどけなさの抜けない幼い顔立ちをしていて、ほとんど少年のような外見である。だが、現実にはイーグル・ドライヴァーとして配属されている以上、その実力と使命感は本物だ。

「どうせ、またふたりで遊んで怒られてたんでしょ」

そういつて壁にもたれかけて腕を組んでいるのは、第7航空団の紅一点、エピカ隊四番機パイロットの占守秦夢二等空尉だ。大きな目を華やかに飾る長い睫毛と凜々しい柳眉、完熟した桜桃さくらもものような口唇。その愛らしい容姿とは裏腹に、航空団内の腕相撲では一、二を争う猛者である。

この四人が、第307飛行隊の一翼をになうエピカ隊を構成するF-15Jパイロットだ。

第307飛行隊には、ほかにも四人編成の小隊（厳密には空自には中隊や小隊というのではないが、便宜上こう呼ぶ）が三つあり、この一六人を、飛行隊を率いる飛行隊長と飛行班長が統括している。計一八人の精鋭たちである。

アグレッサ―部隊のイーグル・ドライヴアーも含めて、訓練後のデブリーフィングにのぞむ。

早蕨と占守はともかく、浅間と金本も、真剣そのものの表情で、きょうの訓練過程を、模型を使って再現し、なぜその機動をしたか、そのときどうすれば最善だったかを模索しあっている。そこには、先刻、飛行教導隊に大目玉をくらっていたような稚気などは微塵も感じられない。ふたりとも、ともすると機上にいるかのように集中した顔になっており、別人のようになっていいる。浅間は見えない敵に對ししずかに、だが赤々と熱を発する炭火のような目をし、金本は一重の細い目をさらに細めて、自機の模型を操る。浅間と金本がイーグル・ドライヴアーになれたのは、天性の勘と適性があつた、いわゆる天才だったからということも無視できないが、なによりも戦闘機に乗ることに対する飽くなき情熱と向上心が、ほかのだれよりも強靱であつたからにほかなるまい。いかに天賦の才をもつていても、情熱の肥料がなければ花開くことはない。傑出した能力をもつと自他ともに認めるアグレッサ―のメンバーも、かれらのきわめて高い集中力と探究心、空戦技術に対する真摯さに、表情には出さないまでも、見上げたものを感じているようだった。

「エピカ隊の四機編成時の鋭い連携には、おどろいた。われわれも本気を出さざるをえなかった」

デブリーフィングの最後、アグレッサ―のリーダーがそういった。「きょう学んだことを忘れることなく、今後も技能向上に邁進していつてほしい。以上」

「気をつけ。敬礼！」

最敬礼するエピカ隊を残し、飛行教導隊がブリーフィングルームを辞していった。

ドアが閉められた直後、金本がこらえきれずに吹き出しながら、「おまえいいかげんにしろよ」

と浅間を軽く蹴った。浅間は、すでに顔を取り替えたかのように、にやにやとしている。

「どうしたんですか」

占守が呆れながら訊く。金本が笑いの発作でもりながら浅間を指差し、

「こいつ、教官たちが訓示いつてるときに、横でぶつぶつ『おれのもみ上げ見てくれ。垂直だろう？』とか言いやがるんだよ。で、おれも小声で『垂直つてどこと？』て訊いたんだよ。そしたらこいつ、『え？ 床と』って言って」

そこでことばが途切れた。わらいすぎて、金本の細い目からは涙がでている。占守のうしろで早蕨がもらい笑いを伝染して発症しはじめている。発作をおさえた金本が説明を再開する。

「で、最後、最敬礼したろ？ そんなときにこいつ『あ、いま平行になった』って」

金本がこめかみに青筋をたてるほど笑い、もういちど浅間を蹴る。飛行教導隊が話をしているあいだ、浅間はずっとそうやって金本を笑わせようとしていたらしい。早蕨が笑うのを、占守がうしろも見ずに肘鉄を鳩尾に突き刺して黙らせ、逆の手で頭をかかえた。上の連中がもてあますのも、よくわかる。実力はぬきんでているが、このふたりはかなりのお調子者なのだ。しかも大のいたずら好きときている。素行が空の上にいるときと同じくらいまじめなら、人間とすることはしないのだが……

デブリーフィングが終わり、浅間・金本のペアが入浴に向かっている、ちょうど上がってきた男たちとすれ違った。お互いに、「お疲れさまです」と会釈する。

かれらは、F-2Aを駆る第7飛行隊の隊員たちだ。F-2Aは、浅間たちが乗るF-15Jより小型で、エンジンも一発だが、優秀な機体制御システムによる軽快な運動性をもち、一説にはF-15より機動力が高いとさえいわれている。日米共同で開発され、日本の技術が つぎ込まれた新型支援戦闘機だ。

F-2Aを運用する飛行隊は全国でも青森の三沢と宮城の松島、

そして第7飛行隊の三つしかなく、しかもかれら第7飛行隊の所属は福岡の築城基地である。かれらは制空戦闘機F-15Jと支援戦闘機F-2Aとの合同演習のため、はるばる九州からこの百里基地に戦闘機ごと出張してきているのだった。つまり、いまこの百里には、基地所属の第7航空団と、空自最強をほこる飛行教導隊、そして希少なF-2A部隊たる第7飛行隊が集結しているというわけなのだった。

「聞きました？」

F-2乗りのひとりが話しかけてくる。

「なにを？」

「空母の話ですよ、ニユースでやってた」

そう言われても、浅間にも金本にもさっぱりわからない。なにしろきようはずっと訓練で、一回二、三時間のフライトを四回こなしたのだ。のんびりニユースを見ている暇なんてない。顔を見合わせていると、べつのF-2乗りが首を突っ込んだ。

「いやね、アメリカの空母が沈んだらしいですよ。USS<ハリー・S・トルーマン>が。撃沈された可能性もあるってテレビじゃいつてましたけど」

金本の剃刀の目が鋭く光り、浅間も表情を硬くした。あの不沈艦隊の旗艦が沈んだ？ そんなばかな。

「だから、テレビ見てもつまらんですよ。それ関連のニユースばかりで」

いって、第7飛行隊の湯上がり部隊はめいめいの部屋へ帰っていた。

一回の訓練で、パイロットは一リットル以上の汗をかくという。飛行訓練の過酷さを物語る現象である。疲れを湯に溶かすようにして癒し、浅間は自室へ帰った。携帯電話の待ち受け画面にしている写真を、無言で眺める。写真には、目鼻立ちの整った、浅間と同じくらいの歳の女と、小学生年中くらいのかわいらしい少女が、こちらにむかって笑顔の花を咲かせている。画面をはみだしてあかるい

光がこぼれているような、かがやかしい一枚だ。

「まだ起きてたのか」

金本が部屋に入ってきていた。この男は、ノックをするのとはほとんど同時にドアを開けるといって、人智をこえたメンタリティをもっている。だが浅間は、とくに抗議しなかった。浅間もノックしながらドアを開ける男だからだ。

浅間が軽く手を上げて返答とした。金本が携帯電話を覗きこむ。

「奥さんと、娘さんか」

浅間がうなずく。

「こつちが家内の璋子。怒るとおつ『かない』です」

ふたりしてしずかに笑う。浅間が少女のほうを指でしめす。

「で、こつちが娘の香寿奈。ことして五年生になった」

「そろそろ、パパのパンツとわたしの洗濯物をいっしょに洗濯しないでよ！　っていいだす時期だな」

「こないだ赤飯炊いたらしいけどな」

金本は間をおき、語りかける。

「連れてくればよかったのに」

浅間は首をふる。

「こんな根なし草みたいな生活に付き合わすことできねーよ。全国津々浦々を転勤転勤、また転勤。落ち着きだしたところにまた荷造りするハメになるからな。おれも段ボールの扱いがプロ級になった」

浅間は溜め息をついてから、続けた。

「それに、璋子は母の面倒を見てくれてるんだ」

「おまえの？」

浅間はうなずいた。

「アルツハイマーでな。いいかげんもうろくして、あだあだ言い出し始めた。しかも笑えるのがだな、息子のおれの顔をきれいさっぱり忘れてやがるくせに、嫁の璋子のことは覚えてるんだよ。ある日いつものようにおれが帰ったら、家内のうしろに隠れて『璋子さん、このひとだれ』って。あんたの息子だよ！　って叫びたかったけど

な。ま、アルツハイマーなんてそんなもんだよ」

浅間は自嘲ぎみに笑ったが、金本は笑わなかった。

「最初らへんは、トイレで用を足してもどうやって水を流すかわからないとか、そんなんだったんだが、いまじゃ飯ひとつ食うのにも手がいる状態だな。そんな母の世話を、璋子は、義母さんのことは心配しなくていいからつつつて、引き受けてくれてな。だから、家族で転勤はともじゃないが、できない」

浅間が携帯のディスプレイに目を落とす。

「まあ、もしかしたら、おれは、空自の任務だからーなんていつてもうろくした母親の介護を家内に押しつけて、仕事に逃げてるだけかもしれないけどな。だからこそ、この仕事だけは、まっとうしたい」

浅間は金本に顔をむけた。

「おまえは独身だったっけな」

「独身どころか親兄弟、親戚のひとりもない。——うらやましいか?」「んなわけねーよ」

喉の奥で笑って、長く息を吐く。

「こんな仕事だからいつ不慮の事故で死ぬかわかんねーけど、さっきのこと聞いて、なんか不安になってな」

「空母沈没のことか」

「ああ」

浅間は携帯電話を閉じた。

「死ぬ覚悟はとうにできてるし、その場合、弔意金やらなにやらは全部璋子につて遺言書も書いてるから、その点の心配はないんだが」  
浅間はどこか遠いところを見た。海のむこうに沈んだ太陽は、いまごろ地球の反対側を照らしているだろう。

「今回の件が、日本に悪影響を及ぼさなきゃあいいんだが」

ホワイトハウスの大統領執務室にしつらえられた大窓から、夜が

顔を洗って暗闇を流して落としたような白々明けの空がのぞく。ヒットリアとその側近の面々は、夜通しで今後の方針と国防の対策について論議をかさねていた。ファーロング外相が部下から受け取ったファックスの内容を読んだ。

「イギリスから支援の申し出です。今回のことをうけ、イギリスはあらゆる援助を惜しまないとの声明を出しています。インヴィンシブル級軽空母をはじめとした海上部隊の派遣や、洋上搜索、ならびに対潜哨戒任務の支援として、ニムロッドの出動も用意しているということです」

「ありがたいな」

大統領は椅子の背もたれを深く沈めながら言った。「東海岸から大西洋にかけてわが軍の空母打撃群で警戒を強化すれば、ほかの海域が、手薄になる、とまではいかにしろ、少なからず戦力に影響がでる。支援はいくらあってもこまらん」

チトーがうなづく。

「大西洋にはすでに、USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>を旗艦とした第8空母打撃群が向かっており、アイク（アイゼンハワーの愛称）のいた海域にはかわりにUSS<セオドア・ローズヴェルト>の空母打撃群が赴いています。いかんせん、手が足りません。インヴィンシブルやニムロッドは、われわれにとり、貴重な戦力になります」

「日本はどうだ」ヒットリアが半分笑いながら訊いた。聞かなくても答えはわかっているという顔だ。

「いまだこちらに打診もありません」ファーロングは用紙をめくりながら答えた。「海外に部隊を派遣することは、集団的自衛権の行使にあたるとかで国会でもめているようで」

「やはりな」

「まあ、せいぜいP-3Cの出動に留まるでしょう。日本からはむしろ、資金援助のほうが望みがあるのでは」

「国際社会の枠組みのなかで日本も主要先進国としての責任を果た

すべき、とでも圧力をかけたうえで、戦力の支援ができないならせめて資金を、と逃げ道を作ってやれば容易に折れるだろうな」

「失礼します」

ドアがノックされ、ワインバーガー報道官が執務室に入ってきた。「マスコミはなにか言ってきたか」

ヒットリアはワインバーガーにソファーに掛けるように手で指示した。ワインバーガーは腰をおろしながら、

「沈没の原因は、としつこく聞いてきました。発表がなければ、敵国の核攻撃によるものという報道をします。また、放射性物質の汚染被害についても詳細が知りたいとも言っていました」

「ばかなやつらだ」チトーがため息をつきながら首をふった。「マスコミは際限もなく情報をよこせとタカつてくる。くわしい汚染範囲はともかく、沈没の原因などこちらが知りたいくらいだ」

すると、いままで黙っていたマヘンドラ国防長官が、室内の者のようすをうかがいながら口を開いた。

「原因なら、もうすでにわかっていないか、チトー將軍。空母は巨大生物によってしずめられたんだ」

一同はおもしろしなかったことばに肝を抜かれ、マヘンドラに視線を集中させた。当のマヘンドラは、わかりきったことを言っただけというふうで、どこを風がふくといった顔をしている。ややあつてチトー將軍が訊き返した。

「正気か？ わが軍の空母打撃群が、怪獣の強襲により潰滅したと、そう発表するのか？ なにも証拠を発見できていないのに？ 物笑いのタネにされるのがオチだぞ」

呆れながらのチトーの反論にも、マヘンドラはあくまで真剣だった。

「証拠ならある。あの航空要員の証言だ」

大統領もマヘンドラの意見に興味をおぼえ、神妙な顔つきで耳を傾けた。

「もし、敵の攻撃により空母が撃沈されたと、そう発表でもしよう

ものなら、わが合衆国軍の信用はどうなります。現代の無敵艦隊といわれ、歴代のアメリカ大統領の名をつけられた原子力空母は、もはやひとつの兵器ではありません。七つの海を支配し、世界の平和を守る重大な責任を負い、またそれを果たしてきた、そしてこれからもそうでありつづけるためのアメリカの象徴そのものです。空母打撃群一個で中堅国家一国の海軍力と互角以上に戦えると喧伝され、仮想敵国の戦意を戦う前から挫くその勇姿に、アメリカ国民は自国の圧倒的強さを実感し、ひとりひとりが自信をつけ、アメリカ国民らしく堂々としていられるのです。だからこそ、アメリカ国民は、ユニットコストだけで六〇億ドルをゆうに超える、天文学的予算のかかる原子力空母の建造と運用をゆるしているのです。国民がこの莫大な国防費のために納税をしているのも、ひとえに世界最強の軍隊に守られているからだという安心感のためなのです。またこんなにちのアメリカの、国際社会のなかでの名誉ある立場は、原子力空母がその礎を築いたといっても過言ではありません。現代においても、外交の基本は砲艦外交です。相手と同等か、それ以上の軍事力をもっているのはじめて、相手を交渉のテーブルにつかせることが可能になります。相手からすれば、力で攻めて勝てるのなら、こちらの言い分など聞かず、力で押し切ってしまう方がいいからです。ゆえに自国につねに優位に外交を進めるには、世界最強の軍事力が必要不可欠です。アメリカがつねに有利な外交をおこない、アメリカを安全保障理事国のリーダーたらしめているのも、原子力空母をはじめとした、他国の追隨をゆるさない磐石の軍事力があってこそといえるのです」

ヒットリアも、なんとなくマヘンドラの言いたいことがわかってきた。マヘンドラは続けた。

「しかし、その最強のはずの原子力空母が、よその国によって撃沈されたなどと言ってごらんない。沈まぬはずのアメリカの象徴がもろくも沈んだ、となれば、合衆国海軍の原子力空母も無敵ではない、ひいては、アメリカはじつは最強ではないのでは、敵が本土に

攻めてきたとき、守ってくれるはずの空母は突破され、アメリカ本土はなすすべなく蹂躪されてしまうのでは、と国民は疑念を感じます。疑念は不安をよび、不安は疑心暗鬼を育てます。祖国と国民を守るために、巨額の税金を投入した兵器が、ほんらい防いでしかるべきはずの敵の攻撃で撃破されたとなれば、カネのかかる原子力空母と、それを中核とする空母打撃群という概念の存在意義さえ問われます。いちど目を覚ました幻想は、いわば金融バブル崩壊のときのごとく、不安の増長はとどまることを知りません。老朽化したニミッツ級にかわる最新鋭空母<ジェラルド・R・フォード>級の建造、取得計画に待ったがかかるおそれがあり、一足飛びに軍の不要論にまで飛躍するかもしれません。それは国家の安全保障をゆるがす一大事です」

チトーやワインバーガー、フアーロングたち、ほかの者たちも、マヘンドラの主張の論旨が見えてきた。それを見計らい、マヘンドラがいつそう力説する。

「ところが、今回の沈没が、敵攻撃による撃沈ではなく、いち生物に起因する沈没事故、ということにすれば、このような懸念はいっさいしなくてもかまいますまい。なにしろ事故は事故であり、想定外の事態は防ぎようがないのですから」

「それでマスコミと国民が納得すると思うか」

チトーから発せられた問いを受けたマヘンドラは、チトーのほうを向き、

「納得するもしないもない。このさい真実などどうでもいい。敵にミサイルや魚雷で攻撃された形跡はないし、なによりあの飛行士の証言がある。巨大生物に空母が沈められたと発表しても、ホワイトハウスは目撃者の証言という事実をいつているだけであって、嘘をついているということにはならない。むしろ情報開示の理念に則ったものだ」

そして大統領に向き直り、

「生物がらみの事故など、空母は想定して設計などされていません。

おなじ沈んだという結果でも、敵の攻撃で撃沈されたなら大問題です。敵勢力からアメリカ力を守り、敵を殲滅することをこそ本業として設計、建造されているのに、兵器としての本分がまっとうできなかったということなのですから。そうなれば責任が発生し、海軍だけでなく軍を総指揮するホワイトハウスにまで累がおよび、さらなる国防費縮小を余儀なくされれば、今後の世界戦略も見直す必要がでできます。が……未知との生物との遭遇なら、それは不幸な事故です。艦の設計も、部隊の訓練も、対生物戦などという事態は考えられておりません。地球上のだれも予想しえなかった事故なのだから、だれにも責任は発生しません。むしろ、大統領にも」

ヒットリアは不敵に笑い、試すような質問をした。

「総排水量一〇万トンをこえる超巨大艦船をたやすく沈められる、そんな生物がこの世にいると思うかね」

「たった一羽の鳥が大型旅客機を墜落させることだってあります。それに、海は広く、深い。われわれはかつて、月へ人間を送り込むことに成功しましたが、いまだ深海の海底には到達していません。人類にとって海は未開拓地であり、広さは事実上、無限です。これまで人類がしらなかった生物がいたとしてもふしぎではありませんし、探しようもありませんから不在の証明もできません」

副大統領がうなる。

「しかし、事故、となれば、遺族年金も、事故死扱いのものだろう。いささかむごくはないか」

軍属が殉職すれば、遺族は遺族年金がもらえる。当該兵士の死亡の態様により、戦死と事故死のものがあり、とうぜん、戦死扱いのほうが受給額が高い。残された家族が、事故死扱いの遺族年金だけで生きていくのは厳しいだろう。家庭におさない子供がいたりすれば、なおさらだ。

だがマヘンドラの鉄の表情は動かない。

「沈没は事故と公表しておいて、乗組員、航空要員計六〇〇〇名の遺族たちには戦死扱いの年金を払うとなると、情報を隠しきれも

のではない。残念だが、事故死扱いとするしかないでしょうな」

冷酷、といってもよい論理であった。と同時に、ヒットリアにとっては、魅力的な提案でもあった。空母沈没という未曾有の事態に直面して、その責任追及をまぬかれることができる。しかもその素案は、ヒットリアの口から出たのではない。マヘンドラが発案したのだ。国民からみれば、閣僚や大統領をひっくるめて「ホワイトハウスが」巨大生物などという面妖な発表をしたと思うだろう。だが閣内での、冷酷だという評価は、マヘンドラにいくわけであって、ヒットリアはあくまでも、やむにやまれず、その提案を受け入れ、不承不承、発表した、との立場をとれる。そこまで計算して、マヘンドラが汚れ役を引き受けて、ひそかにヒットリアに恩を売ったのであれば、さすがに情報畑の出といえた。

とまれヒットリアは、沈黙し、たつぷりと時間をかけ、熟慮に熟慮をかさねたすえの、苦渋の判断といったふうに、サラザール主席補佐官を指さして、

「記者会見の用意だ。国民が知りたいことを話す。予想される汚染の範囲を包み隠さず公表する」

「汚染の範囲すべて……ですか」

「公表せずあとでそれらの国の海で放射性物質が確認されたら、かえってダメージが大きい。政府が情報を隠蔽しているとの印象を国民に与えたら、国民は政府に不信をいだくだろう。国民に政府との<sup>けいてい</sup>逕庭を感じさせてはならん」

「はっ」

「それと」

大統領は決然たるようすで主席補佐官に指示した。

「原子力空母と原潜の沈没は、未知の巨大生物との接触によるものとの公式見解をだす。わたしがじかに会見しよう。わたしのことをばをまっている国民も大勢いるはずだ。午前七時までに草稿を用意できるか？」

「十分でお届けします」

来るべき記者会見にむけ、閣僚やスタッフが自身の職務を遂行するべくあわただしく動きだす。喧騒のただなか、ヒットリアは悄然とバルコニーに出た。曙光に染まりゆく空のもとで、ヒットリアはバルコニーの手すりに両手をつき、うなだれた。チトーがその横に、一日の始まりを告げる空を眺めながら、しずかに立った。

「わたしは道化だな」

ヒットリアが述懐した。チトーはだまって聞いた。

「事故か撃沈か……国民からみれば、どう発表するかで懊悩しているわたしは、さぞ滑稽に見えるだろうな」

チトーは、ヒットリアが自身のことを反芻する時間を与えてから、フォローした。

「大統領のくだす決断には、選択肢がたとえどちらか二種類しかなくとも、どちらも正解ではないという場合も珍しくありません。わたしは、ジョージ・ヒットリア大統領の決定を尊重します」

ヒットリアは、朝日に消されようとしている星星が、はかない最後の光を放つ空に目を移した。執務室の騒々しさは、遠くの国のように遮音されていた。チトーは続けた。

「マヘンドラ国防長官のいうことも、一理はあるのです。確たる証拠もないまま、撃沈されたと発表し、国内外に無用の混乱と緊張をまねくほうが、よほど罪悪といえるでしょう」

ふたりは凝然と空を眺望していたが、やがてヒットリアがぼつりとつぶやいた。

「もし、犯人がほんとうに怪獣だったら……」

そのあと、みるみるうちにヒットリアの目に熱と輝きが戻り、手すりから手を離して、チトーのほうを見た。

「將軍、もし、かりにわが空母打撃群を撃滅したのが巨大生物だったとして、わが軍はそれに対抗する手段を有するか？」

チトーは一瞬、なにをいわれたかわからないといったふうに呆然としたが、すぐに姿勢を正し、答えた。

「目標となる生物の形態など、詳細が不明ですので、憶測にしか

りませんが……」

高速で思考をひらめかせて、解答を導く。

「十中八九、苦戦を強いられるでしょう」

「なぜだ」

「数少ないデータから判明しているだけで、目標は深度三万フィートの大深度から、瞬く間に海上付近まで浮上し、海中を一〇〇ノットの速力で駛走<sup>しそう</sup>する機動力を持ち合わせています。これはわが国のみならず、世界中どの海軍の潜水艦でも足元にもおよばない異次元レベルの潜航・航行能力です。ほとんど、レシプロ機でF-22に挑むようなものです」

さらに、とチトーは自分の、統合参謀本部議長としての考えを述べていく。

「兵装についてですが、初めての相手ですので、どんな武器をどのように運用した戦術が有効か、まったく見当が付きません。目標の体表温度が周囲の環境よりはるかに高温であれば、赤外線誘導ミサイルが使えるかもしれませんが、それにしたところで、赤外線誘導兵器は敵の戦闘機や戦車のエンジンからの排気熱を捉えるもので、そんな燃えるような、きわめて高温の体温をもつ生物など考えられません。この時点で、わが軍は主力の赤外線誘導兵器を封印されたことになります」

ヒットリアが頷き、続きを促す。

「レーダーホーミングなどは、目標の体表に電波発信機などを打ち込まないかぎり、命中させることはむずかしいでしょう。あとは、レーザーによる捕捉か、目視による直接照準しかありません。しかし、これらにしても、カタログスペックどおりの性能を発揮することとは保証できません。現代の兵器はいかなる形であれ、生物に照準を合わせるようには設計されていないのです」

「強敵ということだな」

「は」

「もしもまた奴が出現したさいに備えての部隊の編成と作戦行動、

本土に上陸した場合の国民の避難誘導、陸上部隊、航空部隊の展開などをシミュレートしておいてくれ」

チトーの目に感情の波紋が走る。

「海洋生物が、陸に上がると？」

「現時点での情報を鑑みるかぎり、やつにはわれわれの常識など通しない。空さえ飛ぶかもしれんぞ」

チトーは、イエッサーと答え、いまおおせつかった任務を果たすため、自分のオフィスに戻ろうとした。

そこで、ふと空を見て、それから逆の空を見た。小さく息が漏れた。

「どうした」

チトーの表情が不審なのを見つけ、ヒットリアが訊いた。チトーは、西と東の空をそれぞれさしめしながら、

「いえ、なかなか珍しい現象とおもいまして……」

ヒットリアも、チトーの指がさした方角の空を見やった。淡い紫とピンク、セルリアン・ブルーのいりまじった、柔らかな色彩の東の天門を押し開き、明るい橙いろの被衣かすきをまとった朝日が、山の端はを照らしながら歩いてくる。

ついで西の空を見て、ヒットリアは目を疑った。そちらからも、朝日が揺らめきながら昇っていたのである。西の朝日のほうが、光輝はいささか弱いようである。

「サンドッグ（幻日）でしょうな。天球の逆端にこれほどはつきり現れるとは……」

ほんらいは陽の沈む方角から昇ってきた太陽が、ホワイトハウスを睨む。偽の太陽が出てきて、地上の民を欺こうとしているかのとき光景は、これまで世界を支えて維持してきた法則が、音を立てて崩壊してしまったかのような、なにかつねならぬものを感じさせた。

「不吉の前触れでなければよいのですが……」

チトーのことばが、ヒットリアの頭の中で、なんともなんとも回

つ  
て  
い  
た。

#### 四 大怪獣、現る

大西洋、ニューヨークより東南東はるか二四〇〇キロ沖……。  
渺茫たる青き海は、原子力空母USS<ハリー・S・トルーマン>沈没を受け、いまや海上封鎖にもひとしい厳戒態勢がとられていた。軍艦がひしめき、吹き渡る潮風にすら硬度を感じるほど緊張感に満ちている。

船団の中央にあつてもつとも巨大な威容をほこるはこれまさしくニミッツ級原子力航空母艦2番艦、USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>なり。先に沈没、いや、政府の発表によれば巨大生物によって沈められたという、ニミッツ級航空母艦8番艦USS<ハリー・S・トルーマン>の、いわば兄にあたる。

USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>、アイクと愛称されるこの空母が旗艦を務めるのは、東大西洋を管轄下におく第8空母打撃群だ。本打撃群は、第28駆逐戦隊をふくむ。

アイクを囲み、守るように航行している十隻の艦船がそれである。アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦USS<ベインブリッジ>は、ミサイルの格納庫と発射装置を兼務するVLSを、九六セル保有する。その蜂の巣のなかでは、アスロク対潜ミサイルやトマホークといった対艦、対潜兵器のほか、対空ミサイルのシースパロー、短SAM、最大十五コの目標をいちにち捕捉可能なスタンダード艦隊防空ミサイルが眠りについている。

同行するUSS<バリー>、USS<ラブーン>、USS<ミッチャー>、USS<オカーン>、USS<ポーター>も、おなじくアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦だが、これらのVLSセル数は九〇セルである。そのかわり、ハーブーン艦対艦ミサイル四連装発射筒をふたつずつ構えている。

駆逐艦を束ねるタイコンデロガ級巡洋艦USS<レイテ・ガルフ>は、VLSを一二二セルも持ち、さらにハーブーン艦対艦ミサイ

ル四連装発射筒ふたつもあわせもつ。むろん、これら巡洋艦と駆逐艦がすべてイージスシステムを搭載していることは、もはや言を要さないだろう。

さらに艦隊の護衛と哨戒をになうのが、二隻のオリバー・ハザード・ペリー級ミサイルフリゲート、USS<ハウズ>とUSS<カウフマン>だ。両方とも、ハーブーンを装填した単装ミサイル発射装置をひとつ、防空用の速射砲やCIWSをもっているが、イージス艦をはじめとする米海軍海上戦闘艦隊に比べると、やはりその火力は見劣りすることはいなめない。だが、そのぶんコストも安く、いろいろな意味で小回りがきくので、現在でも相当数が現役で海を守っている。USS<ハウズ>もUSS<カウフマン>もそのクチだ。

これらの駆逐戦隊に守られながら、食糧や燃料を積載した高速戦闘支援艦もついでにきている。

艦隊とはべつに、海中ではロサンゼルス級原子力潜水艦USS<グリーンヴィル>が、不用意に接近する艦船、もしくは巨大生物を見つけてくれようと睨みをきかしている。まさに鉄壁の布陣である。東部標準時間でちょうど正午になったころだ。艦隊の目となるべく哨戒飛行をしていたE-2Cホークアイから入電があった。

「エクスシア3からUSS<ドワイト・D・アイゼンハワー>へ。」

東の方向より低空で接近する小型の航空機の機影を確認」

「エクスシア2、確認」

「エクスシア1、同じく機影を確認」

「データをリンクさせる」

航空部隊を指揮するCAGが指示し、USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>のレーダースクリーンにも光点が表示される。数はひとつだ。空母のレーダー官が解析する。

「距離、本艦より約五四海里。現在三〇〇ノットの速さで本艦隊へ向け接近中」

五四海里は約百キロメートル、三〇〇ノットはだいたい時速五五

五キロメートルだ。このまま接近してくれば、おおそ十分少々でランデブーする計算になる。

しかもレーダーによればかなりの低空で飛んでいる。イージス艦のレーダー捕捉可能下限高度のさらに下だ。＜ドワイト・D・アイゼンハワー＞艦載の第124早期警戒飛行隊、通称エクスシアイが哨戒していなければ、水平線から出てくる距離、つまり三十キロまで接近されて肉眼で発見するまで気づかなかったかもしれない。

少将が尋ねる。「フライトスケジュールに該当機は？」

即座に担当の航空局に問い合わせた士官が首を振った。「ありません、少将」

着々と光点がレーダースクリーンの中心へと進んでくる。少将がインカムを装着した。航空無線で警告するのだ。

「未確認機に告ぐ。貴機は現在、アメリカ合衆国海軍の制限空域に侵入している。確認信号を発信し、ただちに針路を東に変更し退去せよ」

数秒、待った。レーダー官が言った。「アンノウンの針路、速度、ともに変化なし」

少将が艦載航空団の指揮をとるCAGに命令する。

「ライノを出撃させろ」

ライノとは、F/A-18E・Fスーパーホーネットの海軍内での愛称である。

「了解。ナイトウィッツシーズ一番機、二番機、緊急発進。接近中の未確認機をインターセプトせよ」

待っていたかのようにスーパーホーネット戦闘攻撃機が二機、矢継ぎ早に空母のカタパルトから射出されるように発艦していった。「見えたぞ」

F/A-18E二機の姿がアクアブルーの空に吸い込まれて見えなくなつてすぐ、パイロットが言った。

「未確認機は、単発プロペラ機。三座。超低空飛行でなおも艦隊へ向かっている」

「機種はなんだ」

CAGが訊くと、

「これより降下して視認確認する」

そのあいだに少将がレーダー官に問う。「現在距離は？」

レーダー官は即答した。「三十海里です」

「こちらウィッシュ1。機種の確認を試みたが、かなり古い機体のようです。思い当たる航空機がありません」

F/A-18Eのパイロットから報告が入った。CAGが薬指にリングの輝く左手で頭をかかえた。少将が身を乗り出す。

「機体の外見的特徴は？」

パイロットが返答する。

「ボディは細長く、ほとんどエンジンカウリングの直径をそのまま後ろへ流したような直線的形状。全体的にモスグリーンの塗装、両主翼ならびに胴体後部の両側面に、赤い円が大きくペイントされています」

「日の丸か？……」

少将は重ねた。

「機体番号は確認できるか」

「垂直尾翼にそれらしきものが」

パイロットが読み上げる。

「C6N1」

少将の眉間に縦皺が足された。

「航空機のシリアルナンバーの形式ではないな。念のため問い合わせる」

「了解」

「C6N1……」

CAGが呟いた。

「心当たりでも？」

「いえ……どこかで見聞きしたような気が……」

直後、

「いえ、待つてください少将、垂直尾翼の反対側には違うナンバーがあります」

パイロットが慌てたように言ってきた。

「反対側？」

「C6N1は左側です。右側には別の番号が」

「なんだ？」

「読みます。――302 17」

少将が士官を見やり、それも照合するようにと命ずる。

「ナイトウィッツシーズ、パイロットとコンタクトはとれるか」

「やってみます」

並行に飛行して、キャノピー越しに、手信号などで直接、相手のパイロットに指示を出そうというのだ。しかし、

「だめです、高度が低すぎる。アンノウンの高度、十フィート以下、十フィート、つまり高度三メートルという、海面すれすれを飛んでいる相手に、並行して近づいて飛ぶなど、まともな神経をしていたらできるわけがない。

「こうなったら……」

ナイトウィッツシーズの一番機が闘志を覗かせる。

「おいカレッジ、なにする気だ？」

ナイトウィッツシーズ二番機がTACネームで呼びかける。なにもわからない空母のクルーの問いをCAGが代弁する。

「ウィツシュ1、どうした。ウィツシュ2、ウィツシュ1はなにをやってる」

やや沈黙あつて、

「こちらウィツシュ2。ウィツシュ1が背面飛行でアンノウンの直上に占位している……」

みな度肝を抜かれた。ひっくり返って真上から相手飛行機のキャノピーを覗こうというのだ。当の本人は恬淡と言った。

「こちらウィツシュ1。現在、所属不明機の直上に占位。キャノピーがノックできればいいんだが」

相手に聞こえるわけもないのだが、カレッジの「おーい、聞こえるかー」という南部訛りの陽気な声が無線を通じてコントロール・ルームじゅうに響き渡った。

「しかしこいつら、ずいぶん年代物の飛行装具を着用しているな」  
冗談めかして言うウィツシュ1をよそに、少将がインカムのマイク部分をつまみ、再び所属不明機へ呼びかける。

「これが最後通告である。ただちに当海域から離脱せよ。命令に従わない場合は、こちらで非常手段に出る」

五秒か六秒、あった。

「こちらウィツシュ2。所属不明機、針路、速度、ともに変化を認められず。なおも艦隊へ接近中」

「了解した。カレッジ、もういいぞ、いいかげん離れろ」

「了解……」

ウィツシュ1パイロット、TACネーム<カレッジ>が気の抜けたような返答をよこした。

「どうした」

カレッジは息を吐いてからCAGに答える。

「やつら、真上に戦闘機がまっ逆さまになって覆い被さってきても、こつちを見ようともしない……本当に人間か……まるで亡霊のようだ……」

無線のスピーカーから流れるその声は、たしかに震えていた。

やがて、機体番号を照合した士官が、得心がいかにめというような不快そうな表情を見せた。首をひねり、報告していいものかどうか判然としないようなふうなまま、言にくそくに少将に伝える。

「照合きました。とはいっても、正確な記録ではないのですが……」

「どういうことだ」

「航空局や軍の資料がデータベース化される以前のものなんです」

「なに？」

そして、士官が重い口を開く。

「機体番号302 17は、一九四五年三月一九日、マツヤマ上空

でわが航空部隊と交戦。撃墜されたという記録が残っています」

少将、艦長、CAG、そのほかその場にいたすべての士官が顔を見合せた。ぽかんと口を開けている者も二、三人どころではない。妙な空気と沈黙が積もった。少将がかろうじて言葉を紡いだ。

「一九四五年、三月、三月だと……？　一九四五年の？　一九四五？　一九四五年……三月？　大戦終結目前じゃないか。六〇年以上も前だぞ。それにその日は、たしかに日本軍との大規模な空中戦があつたと記憶しているが……」

「C6N1！」

CAGが天啓を受けたかのようにさげんだ。「C6N1は、それですよ！」

少将にも、艦長にも、だれにもわからない。CAGが説明した。

「C6N1は、旧日本海軍が運用していた艦上偵察機『彩雲』、当時のわれわれ連合国でのコードネームMYRTのメーカー呼称番号（正確には略符号という。彼の覚え違いか？）です。高々度での高速性能に特化し、当時のいかなるアメリカ軍戦闘機でも彩雲には追いつけなかったといわれています。まちがいありません」

少将がCAGを凝視した。本気で言ってるのか？

少将の当然の疑念を察し、CAGが補足する。

「ナイトウィッツシーズのパイロットの証言した外見とも合致します。彩雲は、空気抵抗を極力減らすため、胴体の直径がエンジンカウリングとほぼひとしく、きわめて細長くコンパクトに仕上げられています。おまけに三人乗り。まちがいなく彩雲です」

「なるほど」

少将はあまり取り合わずに思考した。すると、新たな懸念が生じた。

嘘か誠か、半世紀以上前に退役したはずのレシプロ戦闘機が飛来しているらしい。アメリカ国内でも、戦史だけでなく航空史に巨歩をとどめる傑作戦闘機ゼロ・ファイターを筆頭とした、第二次世界大戦時の日本軍戦闘機の熱狂的なファンは数えきれないほど存在す

る。それらの大半は精巧なミニチュアスケールの模型を製作し、ディスプレイして在りし日の勇姿に思いを馳せる程度のものである。ところが、それが資産家だったりした場合は、縮小模型ではおさまらない。ありあまる力ネにものをいわせ、実物大の模型を作ったり、時には本物のエンジンなども搭載させて、あとは燃料とパイロットが用意できれば実際に空が飛べるという、模型というよりほぼ完璧なコピーを作らせてしまうケースさえある。そして、その飛行機で気ままに、ほんとうに遊覧飛行して楽しむのである。今現在、艦隊に不用意に近づいてきている所属不明機も、そういったたぐいの道楽飛行ではないだろうか。

ありえなくはなかった。使っても使いきれぬ余剰資産に溺れるほどに漬けられた人間は、乗り物にしろなんにしろ、やがて流行の最先端や表面上の便利さよりも、むしろ時代おくれのものをあえて選んで、余興の風情というやつを楽しみだす。そしてそういう人間に共通しているのは、じぶんは法を超越した存在だと思いつ込んでいることだ。札幌らでこの世のすべてがじぶんの思い通りになると錯覚しはじめる。だから、航空局に機体も登録せず、飛行計画書も提出しないでフライトし、あまつさえこのような情勢下で合衆国海軍の誇る現代の無敵艦隊に近寄るなどという愚行が犯せるのだ。わざわざ撃墜された機体のナンバーまで描いて、少なくとも亡霊がさまよいてきているというよりは現実味のある話だ。

撃ち墜としてやろうか？ ふとそんな思いが頭をよぎる。が、すぐに振り払われる。

高名な資産家のなかには、選挙活動において重要な役割を担っているものが少なくない。莫大な費用がかかる選挙において懇意の候補者をサポートし、その人脈と金脈は集票にも大きく影響する。この所属不明機がセレブの道楽飛行であるならば、搭乗しているのはそういう資産家である可能性もある。そして、その資産家が、現大統領ないし有力者のたいせつな個人献金主である可能性もまたゼロではない。そんな後援者を失えば、政府にとって、多大な損害にな

りかねない。それに加えて、もしそんな人物を撃墜したということが世間に知られれば、身勝手なマスコミの格好の攻撃材料にされるのは目に見えている。つい先日、イラクに派兵されたアメリカ軍がヘリから民間人を多数射殺した映像がネット上で流出、政府と軍が非難の矢面に立たされるといふ事態になったばかりだ。安全保障のため、非常のさいには、独断で強硬手段をとることもできる裁量と権限が少将に一任されているものの、時期が時期だけに、撃墜して大統領の立場が悪くなることはさけない。

とはいえ、このまま放置して好きにさせておくわけには当然いがない。不審な機体を艦隊へ近づけていい理由がない。それに、もしこの所属不明機が艦隊近辺をうろついているところへ、USS<ハリ・S・トルーマン>を沈没させた巨大物体が出現したら、艦隊行動の支障になることはまちがいない。えてしてバッドタイミングというのは重なるものだ。神よ、どうしろと？

「武装を確認させる」

少将がCAGに命じ、CAGがF/A-18Eパイロットに伝える。

「ナイトウィッツ1、所属不明機は機体に武装しているか」

「こちらウィッツ2。キャノピーの後部座席より、大口径機関砲の砲身らしきものが斜め上方に向け伸びている。どうぞ」

「弾倉は確認できるか」

「弾倉、確認できます。しかし、実際に発砲可能であるかは不明」  
その時だった。

「なっ、くそ、マジかよ！」

次の瞬間、ウィッツ1が絶叫するように悪態をついた。悲鳴のようなその声には、動揺と驚愕があった。

「どうしたウィッツ1、応答せよ。なにがあった」

ウィッツ1パイロットはもう一度、「糞野郎！」と叫んでから、CAGに応答した。

「こちらウィッツ1。所属不明機から攻撃を受けた！あの機関

砲は本物だ！」

「こちらウィツシュ2。所属不明機はなおもこちらへ向け発砲中！ 攻撃を受けている。攻撃許可を！」

「ブレイク、ブレイク！ 奴の前方に出る。後ろを狙う機関砲なら前方には撃てん！」

ウィツシュ1とウィツシュ2の間で緊迫したやりとりが交わされる。ウィツシュ1が激昂する。

「畜生！ 第一撃で左水平尾翼と左垂直尾翼がまとめて吹っ飛んだ。かすただけなのになんて威力だ。こちらウィツシュ1、早く攻撃許可をくれ！」

「少将」

CAGが振り返り、少将に命令を求めた。決断を求められた少将は、しかし、むしろ迷いを振り切った表情を見せた。

「こちらに攻撃してきたのなら答えは明白だ。目標を『所属不明機』から変更！ 『敵』だ！」

「はっ！」

「責任はわたしがとる。敵機を撃墜せよ！」

「了解！ ウィツシュ1、ウィツシュ2、攻撃許可が下りた。敵機を撃墜せよ！」

戦闘攻撃機二機のパイロットが「了解！」と返した。

「あの世に招待してやる。テンパランス、おれがループで敵機のケツにつく。援護をたのむ！」

「まかせろ。気をつけるよカレッジ」

士官のひとりが「少将」と声をかけた。

「所属不明機、ならびにナイトウィツシーズ二機を視認」

とうとう水平線から出てきたのだ。戦闘指揮所のモニターのひとつに、所属不明機がむかつてくる方角の海が映される。そして、最大望遠であなたの青藍に目を凝らす。

オリンポスのように高く聳え立つ入道雲を背景にした蒼穹と、コバルトを溶かしたような海洋のはざまに、暗い緑色の鳥がとんでい

る。主翼は大きくはなく、機首でプロペラが高速回転している。

「どうだ？」

少将の問いにCAGのフランコ大佐がモニターを凝視し、頷いた。  
「大径プロペラに、あの面積を低く抑えた層流翼の主翼。やはり、彩雲に間違いありません」

ウィツシュ1のどなり声が無線に響いた。

「アイクまで距離がない。速攻で片付けるぞ」

ウィツシュ1の機体が機首を跳ね上げ、ジェットコースターのループのように縦に大きく輪を描き、距離を稼いで所属不明機・彩雲のハキロ後方に占位する。これくらい離れば、機関砲もあたらない。

「ようし。こちらウィツシュ1。サイドワインダー、照準ロック完了した」

CAGが断ずる。

「攻撃せよ」

「了解。ウィツシュ1、FOX2！」

レーダースクリーンに少将以下、士官たちが注目する。ウィツシュ1を示す光点からサイドワインダー……赤外線追尾方式の短距離空対空ミサイルが放たれ、彩雲へ猛スピードで食らいつく。

ミサイルの光点と彩雲の光点が重なり、両者ともレーダースクリーン上から消滅した。

「こちらウィツシュ1。ミサイル命中、目標を撃墜した。繰り返す、目標を撃墜した！」

パイロットからの無線に、航海艦橋、戦闘艦橋の両方で歓喜の雄叫びが沸き上がった。少将も安堵に顔を綻ばせた。

「よくやったナイトウィツシーズ。帰投せよ」

ひとしきり狂喜の渦が巻いた直後のことだった。

「USS<グリーンヴィル>より緊急入電。深度二万フィートから急速に浮上する反応を感知！ 類別不能！」

艦内に電撃が走った。乗組員全員がおのが身体にアドレナリンの

分泌されるのを自覚し、艦橋の室内温度がにわかに上昇したかのよう  
に感じられた。

「距離は？」

ロサンゼルス級原子力潜水艦USS<グリーンヴィル>との現在  
位置から割り出す。

「十二時の方向、一三〇海里！」

「大統領と大西洋司令部に連絡しろ」

「了解」

「全艦につなげ」

「はっ」

艦隊司令官たる少将が無線機を握る。

「全艦に令達する。本艦隊、東一三〇海里地点に未確認物体を探知、  
深度二万から急速に浮上中。おそらく奴だ」

少将の言葉に、空母の乗組員や航空要員はもとより、何隻もの巡  
洋艦、駆逐艦、潜水艦、支援艦、総勢一万にちかいすべてのクルー  
が身を引き締める。

「われわれはなんとしても奴を撃破し、<コロンビア>や<ハリー・  
S・トルーマン>に乗っていた仲間たちの無念を晴らさねばならぬ。  
鎮魂の燈明はわれわれの手で灯さねばならぬ。そして、アメリカ合  
衆国の自由と未来を脅かす敵を正しい力をもって打ち砕き、必ず勝  
利しなければならぬ。この戦いはただ海軍の一部隊の作戦なのでは  
なく、アメリカ合衆国の正義と威信がかかっている。試練の時だ。  
その試練に打ち勝たねばならぬという使命が、諸君の双肩にかかっ  
ている。全力で迎え撃つ。吉報を持って帰るぞ」

正体不明の敵の出現という、たとえ軍人でもとすればパニック  
に陥りかねない状況で、部下たちの士気を鼓舞しながらも過度の緊  
張を払拭し冷静にさせる少将の語りかけに、一万の部隊の精神がひ  
とつにまとまる。

「目標、現在深度一〇〇。まもなく海上に出ます！」

艦隊から真東に一三〇海里、つまり約二四〇キロの洋上。至宝ラ

ピスラズリのごとき清純な輝きを宿す紺碧の海面に、白い濁りがにわか混じる。濁りは広範囲に拡大した。海底から立ち昇ってきた無数の気泡が太陽光を乱反射させながら弾けているのだ。まるで地獄の底で罪人を沈めて茹でる硫黄の釜のように。

そして、気泡の乱舞するさなか、その中心に黒点が浮かぶ。黒点は徐々に巨大になっていく。影。海の中から島のように巨大ななにかが浮上してくる影だ。影はどんどん大きくなっていく。影の直径が二〇〇メートルにも達したとき、海面が歪むように持ち上がる。

海面から大質量が顔を一部だけ覗かせる。大量の海水が巨体を包みこむようにその姿を隠し、外見上は、直径二〇〇メートル、高さ三〇メートルほどのドーム状の水塊としか見えない。だがその水のすぐ下には暗黒に塗り潰された圧倒的巨軀が蠢動しているのが透けて見えるようだった。

ドーム状に海水をまとったそれは、まるで見えているかのようにまっすぐ西へ、艦隊の方向へ動き始めた。

「目標、海上に現出。移動を開始。針路2-3-8、速力約一〇〇ノット！」

「こちらへ来るか……。ともあれ海上に出てくれるのは助かるな」  
少将がにやりと笑いを浮かべた。

艦隊指揮下の潜水艦は当然魚雷が射てるし、ミサイル駆逐艦も対潜兵器は搭載している。しかし、短魚雷の射程はせいぜい八キロ、VLSから発射されるアスロック対潜ミサイルでも二十二キロ程度しかない。

だが海上の相手なら長射程を誇る対艦ミサイルが使える。二四〇キロならトマホークはもちろんのこと、ハーブーンも完全射程内に収まっている。さらに、艦載機に対艦ミサイルを搭載させれば手の数が飛躍的に増加する。攻撃の手段と選択肢が増えるのに悪いことはない。

少将の指揮が閃く。

「パーフェクト・ストーム作戦開始。全艦、対艦戦闘用意。駆逐戦

隊は転送した座標にてそれぞれ待機、E-2Cホークアイからのデータをもとに目標をロックせよ。艦隊と航空部隊で一斉攻撃を敢行する。USS<グリーンヴィル>は警戒行動を続行。ペロン大佐「はっ」

空母艦長が少将の命を受け、艦の乗組員に命令を伝達する。

「総員戦闘配置。取り舵いっぱい、九十度。速力維持。海上警戒を厳にせよ」

「フランコ大佐」

次に艦載航空団指揮官（CAG）に命じる。

「サー、イエス・サー」

「ライノによる対艦攻撃を実行する。戦闘攻撃飛行隊二個部隊に、対艦ミサイルを搭載、ただちに出撃させよ」

「了解。第102戦闘攻撃飛行隊リーヴズアイズ、および第142戦闘攻撃飛行隊ウィズインテンションズに発進命令。接近中の水上の目標に対し対艦攻撃を決行する。ハーブーン空対艦ミサイルを搭載し、ただちに発進せよ。各機、発艦後はホークアイの誘導にしたがい所定のルートを航過、命令までポイントにて待機せよ」

少将が空母艦内のスピーカーに通じるマイクを手にとる。

「われらが空の戦士、死の天使たちよ！」

少将のとどろくような声に、ハンガーで航空機の整備や発進準備をしている航空要員たちが、いつせいに高い天井ちかくのスピーカーを見上げる。

「悪魔の手にかかった第3空母航空団、総勢二四八〇名の無念を晴らすのは何者ぞ。エアフォースか、ジャーヘッドか？」

「否！ 断じて否！ あいつを殺るのはおれたちだ。第7空母航空団、総勢二四八〇名のおれたちだ！ おれたちひとりが仲間ひとりの無念を請け負い、命の対価を仲間になわって奴に請求する！ きよう、おれたちは天翔ける死の天使となり、数多のミサイルと那由多のバルカンをもって、死せる第3空母航空団の鎮魂歌を歌う！」  
かれらが恐れるものなどない。死なぬ、負けぬと確信して

いるのだから恐れる必要などありえない。

原子力搭載航空母艦USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>の周囲を数海里ほどの間隔をあけて固めていた護衛艦隊、駆逐戦隊が最大戦速で進み始め、戦力を展開する。

空母は戦略的に強い。強いが、その強さは艦載している大量の戦闘攻撃機に依存しているものであり、空母単体での戦闘力は最低限の自衛用火器しかなく脆弱である。しかも図体がでかいので、いたずらに最前線にでしゃばると被弾のリスクだけが高くなって非常に邪魔なのである。

したがって今回の作戦では、護衛の巡洋艦、駆逐艦をも前面に押し出して戦力を集中投入し、空母は後方で航空機のプラットホームとしての機能に専念させることにした。防空の要たるイージス艦までも攻勢に回した、超攻撃型陣形である。

駆逐艦が東へ進んでいく後方で、<ドワイト・D・アイゼンハワー>の飛行甲板では、発進命令の下ったライノことF/A-18Eスーパーホーネット戦闘攻撃機の周囲で整備兵たちが軼掌を極めていた。発艦のための機体チェックと同時に進行で兵装を整える。翼下のハードポイントにハーブーン空対艦ミサイルを、計四本装填し、念のためサイドワインダーも二発取りつける。最終チェックが完了した機体から随時発艦させる。発進位置についたスーパーホーネットのすぐうしろの路面からブラストデフレクター（防風盾）が起き上がり、フルスロットルで排気するジェットエンジンの噴流を受け止める。スチームカタパルトにより、艦載戦闘機はわずか九〇メートルの発艦用滑走路の上で瞬時に時速二五〇キロにまで加速する。そのさいパイロットには約一トンの荷重がかかり、身体全体がシートに押しつけられる。

離艦したF/A-18Eは一度右方向へ旋回しながら高度を上げていく。

雲浮かぶ蒼空のむこうから、彩雲を撃墜したナイトウィッシーズの二機が帰還してきた。背景の白雲が、虹のように七色に輝いてい

た。見ているあいだに夕映えの赤、雨上がりの雲からもれる朝日の光条のようなオレンジ、透き通るレモンイエロー、宝石みたいなエメラルドグリーン、神います至高のセレスト・ブルー、朝露に濡れるオーキッドの花を透かした董いろ、といった光が、色の境界なしにうつろい、まじりあう。彩雲とよばれる気象現象だ。それは瑞兆か、はたまた撃墜された艦上偵察機の怨念か。

とまれ二機は空母の後方に旋回、着艦態勢にはいる。まずウィツシュ2が進入コースに乗る。ニミッツ級空母の飛行甲板は、着艦エリアが船の中心線に対し左斜め向きの角度に設けられている。こういうのをアングルドデッキという。こうして着艦エリアと発艦エリアとをわけること、着艦作業と発艦作業を同時におこなえるのである。

ウィツシュ2が失速ぎりぎりの時速二〇〇キロ程度まで減速し、機体を完璧に安定させるべく微妙なバランスをとりながら甲板を目指す。ふつう、航空機が飛行場に着陸するとき、機首を上げて、先に関後側側のタイヤを地面につけるものだが、空母でそんなソフトランディングはできない。＜ドワイト・D・アイゼンハワー＞の全長は約三三メートルであり、これは東京タワーをそのまま横倒しにしたのとほぼひとしい巨大さをほこる。事実、移動可能な兵器としては人類史上最大級である。しかし、着艦しようとしている航空機から見れば、その大きさは木の葉のように小さく頼りない。波に揺られる空母の狭く短い甲板上に着艦するとなると、針の穴を通す技術が要求される。着艦後は数十メートルで機体を停止させなければならぬので、機首を下げぎみで、主脚から接地させる。このとき、主脚には約八〇トン、パイロットには一・五トンの衝撃が加わる。ほとんど「落ちる」ようなものである。みごと甲板上に「落ちる」ことができたなら、甲板に張ってあるアレステイングワイヤー（制動索）に機体下面の着艦フックをひっかけてむりやり停止させる。ワイヤーをとらえそこねたら？　すぐにエンジン出力を最大にし、ふたたび発艦してやりなおさなければならぬ。すこしでも加速が

遅れると、気速が足りずに海へ墜落してしまう。

ウィツシュ2は問題なく着艦した。つぎはウィツシュ1だ。

ただでさえ恐ろしく難度の高い、空母への着艦。しかもウィツシュ1は、彩雲の攻撃により、左水平尾翼と左垂直尾翼を失っている。ただ飛ぶのだけでも危ういの、その不安定な機体で着艦しないとイケないのだ。みな、それぞれの仕事に追われながらそれを見守った。

波に揉まれる狭い甲板の限られたエリアに正確に機体をコントロールし、「落とす」。機体はいつも以上にゆらゆらと揺れる。

気まぐれな海風がいたずらに横槍を入れ、一瞬、機体が右に大きく傾いた。甲板後端に主翼があたる——だれもがそう思ったとき、すんでのところでウィツシュ1が体勢を立て直し、主脚を甲板にどしんと着けた。荒々しく脚を甲板に叩きつけ、ワイヤーをフックがつかむ。着艦成功だ。何十人も整備兵、乗組員、仲間の航空要員が拳を突き上げて歓声をあげた。キャノピーが開き、ウィツシュ1パイロットが闘った男の表情で降りてくる。駆け寄った整備兵たちに、親指を立てた。

CAGも安堵に胸を撫で下ろしたが、まだ戦いは終わっていない。無線のマイクに口を近づける。

「ウィツシュ1、ウィツシュ2、ごころう。ナイトウィツシーズは発進にそなえ、命令まで待機せよ」

無事の着艦の興奮も醒めやらぬまま、作戦機がカタパルトで次々発艦されていく。

ライノがスリングショットの弾丸のように射出されていくそばで、整備兵たちはつぎの機体の発艦準備に取りかかる。その動きは台本が仕込まれているかのように無駄がなく、タイムロスを極限まで削っている。

そして、第102戦闘攻撃飛行隊リーヴズアイズ所属のF/A-18E十五機と、第142戦闘攻撃飛行隊ウィズインテンプテーションズ所属の同じくF/A-18E十五機、あわせて三十機が発艦

完了し、大空へ飛び立っていった。CAGが腕時計を確認する。

「四十分五十五秒……上出来だ」

少将が威厳ある声で乗組員に命令する。

「目標の現在位置、戦闘攻撃飛行隊および各艦の位置と攻撃準備態勢の確認」

士官たちがそれぞれに無線連絡をとり、情報を受け取り拾い上げる。E-2Cホークアイに繋がっている無線を担当していた士官が少将を振り返り、

「目標、依然として浮上航行中。針路、速度、変化なし。現在、本艦との距離六五海里」

約一二〇キロといったところだ。巨大物体は一〇〇ノット、すなわち時速一八〇キロメートルという恐るべき速力で航走している。抵抗の大きい水中でこれほどの速度を出せるなど、驚天動地としかいいようがない。大統領はテレビでUSS<ハリー・S・トルーマン>沈没の原因は巨大生物によるものといったが、はたしてこんな生物がいるだろうか。だが戦士たちは疑問などいだかない。相手がUMAだろうが新兵器だろうが、叩いて潰して沈めるだけだ。「リーヴズアイズ、ウィズインテンプレーションズ、ポイントに到達」

「巡洋艦USS<レイテ・ガルフ>より報告。駆逐艦USS<オカイン>、USS<ポーター>、USS<ベインブリッジ>、USS<バリー>、USS<ラブーン>、USS<ミッチャー>、ならびにミサイルフリゲートUSS<ハウズ>、USS<カウフマン>、配置完了。対艦ミサイル照準よし。攻撃準備完了」

巨大物体は、わき目もふらずまっすぐ艦隊へ向かってくる。攻撃方法としてはまず、水上艦船部隊は、直進してくる目標の真正面に布陣、その鼻っ面に対艦ミサイルを叩き込む。

いっぽう、艦隊からみて左側、目標にとっては右側の上空に戦闘攻撃飛行隊を配置。艦隊と同時に対艦ミサイルを斉射し、敵の横腹にぶち込む。いわば対艦ミサイルの十字斉射だ。そのミサイルの嵐

をまともに受けたなら、敵の正体がなんであれ、抗うひまもあらばこそ、粉微塵になつてしまふに相違ない。

そして、鬨気に上体を膨らませた少将が厳命する。

「攻撃、開始！」

「了解、リーヴズアイズ、ウィズインテンプテーションズ、攻撃開始。対艦ミサイル投下」

「全艦、攻撃開始！」

火蓋は切つて落とされた。イージス巡洋艦USS<レイテ・ガルフ>のVLS四セルが開放され、火山噴火のごとき焰をあげて四発のトマホーク巡航ミサイルが発射。真上に上がったトマホークはすぐに頭を沈め、海面ぎりぎりまで高度を下げ、主翼を展開して突進を始める。イージス駆逐艦USS<ベインブリッジ>もVLSを開き、徹甲弾頭をそなえたタクティカル・トマホークを四発射ち上げる。駆逐艦USS<オカーン>やUSS<ポーター>、USS<バリ>にUSS<ラブーン>、USS<ミッチャー>の五隻は、VLSから四発のトマホークを発射すると同時に、一隻につきふたつ搭載されているハーブーン四連装発射筒もフル稼働させ、ハーブーン艦対艦ミサイルを射ち出す。二隻のミサイルフリゲート艦も単装ミサイル発射装置に装填されたハーブーンに点火。一発ずつの剣呑な銛が、白煙の尾を曳いて流星のごとく海上を駆けていく。

艦隊から放たれた都合七〇発のミサイルが、海面すれすれに飛びながら、地球の外周に沿つて目標へ推進していく。

ほぼ同時に三〇機のスーパーパーホーネットもそれぞれ二発ずつAGM84空中発射型ハーブーンを発射。機体から投下されたハーブーンは、ジェットエンジンに点火して一度海へダイブするように下降した。そのまま海に突っ込むかというところで体勢を水平に戻し、ブルーの水面に触れるか触れないかという超低空飛翔で目標の右舷を狙う。

二八発の巡航ミサイルと四二発の艦対艦ミサイル、そして六〇発の空対艦ミサイルの十字斉射。その十字の交差するところに、急速

駛走する巨大物体がある。

最初に当たったのは、戦闘攻撃飛行隊から発射されたハーブーンで、コンマ一秒後に、艦隊が発射した、速度でトマホークに勝るハーブーン艦対艦ミサイルが着弾。続いて畳み掛けるようにトマホークが突っ込んでいく。そのさまは、幾星霜を閲した長命なシロナガスクジラに無謀にも徒党を組んで挑む貧弱なイワシの群れのようにであつた。轟音が大西洋の海を掻き乱し、白く輝く水飛沫を上げ、爆炎が物体を包んだ。

「リーヴズアイズ、部隊のハーブーン全弾命中を確認」

「ウィズインテンプテーションズ、対艦ミサイル全弾命中」

「巡洋艦USSクレイト・ガルフより報告。USSクレイト・ガルフおよび麾下駆逐艦ならびにミサイルフリゲート、トマホークおよびハーブーン全弾命中を確認」

攻撃管制の報告が次々入ってくる。

「命中！ 全弾命中！」

「BRAAAAVOOOO！」

艦隊の乗組員、航空要員すべてが、狂喜の雄叫びをあげた。

一発でも命中すれば、現代の艦船なら轟沈をまぬかれない対艦ミサイル。それを一三〇発もいちどにくらったのだ。決着など火を見るよりあきらかだ。

勝利を確信し、空母艦橋もなごやかな雰囲気にも包まれていた。仲間の仇を討ったという達成感に、任務を完遂した満足感もある。弛緩した表情のなかで、アメリカ海軍軍人らしい緊張感をたもっていたのは、少将ただひとり。

過剰火力の煙幕が擬似的な入道雲となって海から上がった。唐突に、地獄の門が開かれるように煙が引き裂かれ、ドーム型の水の塊が姿を現す。巨大物体はなおも直進をつづける。

「こちらエクシア1。高速移動体を探知。目標の進行速度、変化なし。目標は健在。繰り返す。目標は健在」

「なん……だと……」

「やつは化け物が……！」

警戒機からの報告に艦隊クルーがざわめく。みな少なからぬ落胆と失望を抱かされた。強力な破壊力をもつ対艦ミサイルと巡航ミサイル、あわせて一三〇発の直撃を受けても、なんの効果もみとめられない……敵はいつたいたいなんなのか……もしかしたら自分たち人類では倒せない類いのものなのでは……。

「第二波攻撃を続行」

少将の声に、再び総員が命令を実行しようとあわただしく動き始める。

イージス艦たちがまだ使用していないVLSのハッチを開ける。ミサイル巡洋艦USS<レイテ・ガルフ>とミサイル駆逐艦USS<ベインブリッジ>のVLSは四セル開き、その他の五隻の駆逐艦は十二セルずつ開けていく。この五隻の駆逐艦は、第一撃でVLSからの巡航ミサイルとハーブーン四連装発射筒を併用した艦だが、キャニスター（発射機）に新しいハーブーンを再装填している暇はないので、次はトマホーク巡航ミサイルのみの攻撃だ。よってVLSを持たないミサイルフリゲートは後方支援を余儀なくされた。

スーパーホーネット三〇機もただちに配置につき、ホークアイの電子的支援のもと、再び目標をロックする。第二波攻撃準備完了だ。「攻撃！」

艦隊のVLSがいつせいに関の声をあげ、トマホークを次々打ち上げる。鋼鉄の猛獣は、プログラムされた目標へ向かい、狙いをさだめて疾走する。

F/A-18Eの編隊も、翼下から残りのハーブーンを二発とも全機発射した。猛然と航走を続ける巨大物体の速度と、自身の飛翔速度から割り出した正確な命中座標をプログラムされた空対艦ミサイルが、青き海洋に白煙の引っ掻き傷をいく筋も描きながら突撃していく。

さきほどより艦隊に近づいているぶん、ずっと短時間で着弾。爆発して炸薬のエネルギーを解放し、目標にぶつけていく。

高性能かつ高威力のミサイルの暴風、十字斉射の中心点に再び閉じ込められた物体は、しかし、いささかも速度を緩めることなくおも猛進してくる。

「トマホークならびにハーブーン、全弾命中するも効果なし」

「ファック、ファック、ファック！」

青空を汚す爆煙と、前方の海水を掻き分け押し分け、物体は進む。と、奇妙な音が響き渡りはじめた――。

凄まじい音量だが、もうミサイルは全部着弾して爆発しおわっている。ミサイルの爆発音ではない。耳元で何本もの音響魚雷がつぎつぎ起爆するかのような轟音の奔流。まるで、無惨に殺戮された罪なき人々が黄泉の国から蘇り、自分たちを虫けら同然に殺した奴らに復讐を果たしに戻ってきたかのごとき、恐ろしい怨嗟の声……狂えるほどの憎悪と憤怒に満ちた叫び声のような音が海を支配した。耳をつんざくその響きは、不可解なことに、大気中だけにとどまらず、艦隊や戦闘攻撃機の無線にまで干渉し、聞いた者の鼓膜から脳髄までを貫いた。少将もCAGも各艦の艦長もパイロットたちも、スピーカーやヘッドセットが音割れするほどの爆音に肝を潰され、音源を搜索する。

通信士のひとりが上半身をねじるようにして少将に振り向き、なにごとかを伝える。大声を張り上げているのだろが、大気を鳴動させる音響にかき消され、まったく聞こえない。

「なに？　なんだ？　なにごとだ？」

叫びながら少将は通信士の口元に耳を近づけた。

「原子力潜水艦USS<グリーンヴィル>より入電。この音は目標から発せられている模様！」

音波が音波を塗りつぶす大音声のさなか、半球状に盛り上がった水塊の背面から、いくつもの小さな物体が飛び出した。その小物体は数を増やし、羽化したかげろつか蚊柱のように群れ、巨大物体の周囲を薄黒い紗幕となって覆った。

ライヴハウスのばかりでかいスピーカーの前に立たされたような音

撃がおさまった。そのとき――

「ウオッ！」

「ファック！」

「マイ……ガッ！」

レーダー管制と飛行隊の指揮をとっていたE-2Cホークアイの部隊、エクスシアイの三機のレーダー観測官が、ほぼ同時に口走った。空母USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>の通信士が血相を変えて少将に振り返り、

「エクスシア1、2、3から入電。目標付近に多数の飛行体を検知」  
「なんだと」

レーダーには、巨大物体を中心にして、ひと目では数えられないほどの光点がいつのまにか出現していた。レーダースクリーン上では、それはキノコが大量の胞子を飛散させているようにもみえる。しかも、その数は、レーダー波を当てるたび増加している。

「なんだこれは、どこから現れた？ なぜここまで接近されるまでだれも気がつかなかった？」

「不明です、まるでまるで幽霊のように現れて……」

「エクスシアイ、機影の数を確認せよ」

「数は現在五〇……一〇〇……くそつ、まだ増えやがる！ 未確認機、一五〇を突破、なおも増えつづけている。なに？ 移動？ 機影は目標と同じ針路をとって移動を開始。速力、二七〇ノットから三七〇ノット！」

「リーヴズアイズならびにウィズインテンプテーションズ、反航して未確認機を邀撃せよ！ すぐに増援を送る、それまでもつてくれ」

CAGの指示で、対艦ミサイルを射ちつくして空母へ帰投していたF/A-18E三機が急遽、バンクして百八十度針路を変更し、突如現れた機影群へと向かう。

「ホークアイ、未確認機まで誘導を願う」

「了解した。未確認機は高度一万フィート（約三〇〇〇メートル）から一万五〇〇〇フィート（約四五〇〇メートル）の間に散開、最

も速力の高いものは三七〇ノットで艦隊へ接近中。脅威度の高いものから優先して個別に攻撃の指示を出す」

巨大物体を監視する空母のリーダー担当が報告する。「目標との距離、現在、五三海里！」

一〇〇キロメートルをついに切った。歩いていくぶんには遠い距離だが、現代戦場では一〇〇キロメートルなど目と鼻の先だ。

しかも謎の航空勢力まで相手にしなければならぬらしい。すべてが秒単位の戦いを強いられる。

「巡洋艦ならびに駆逐艦隊に打電。水上目標に引き続き巡航ミサイル攻撃を加えつつ、並行して対空戦闘用意！」

「ナイトウィッツシーズ、アンベリアンドーンズ、緊急発進。空対空戦闘、コードを認証せよ。発艦後はエクスシアイの指示にしたがえ。なお機体損傷のためウィツシュ1は待機」

ナイトウィッツシーズのF/A-18E十四機と、アンベリアンドーンズのF/A-18F十五機が発進態勢に入る。最速で発艦させても、何機空に飛び立たせてやれるか……そんな不安を糊塗するように、整備兵たちは機体のチェックと武装の搭載、発進準備に没頭した。

空ではウィズインテンプレーションズとリーヴズアイズが所属不明機との会敵を果たそうとしていた。先の対艦ミサイルの大盤振る舞いで洋上に煙が霧のように立ち込め、視度はきわめて悪いが、ホークアイによるリーダー誘導のおかげで、たとえ敵が見えなくとも照準ロックできる。パイロットのヘルメットと連動したHUDには、ヘッド・アップ・ディスプレイFLIR（前方監視赤外線装置）を通した無彩色の敵の姿が映し出されている。

「なんて数だ。……」

隊のパイロットのだれかが呟いた。彼らのHUD越しの視界には、灰色の空を背景に、恒星のごとく光を放つ点が、それこそ天の川のように大軍を形成し、跳梁しているのが映っている。その空を埋めつくす光点こそが、赤外線を放出している飛行物体、つまり所属不

明機だ。

ウィズインテンプレーションズのリーダー機が、自身の率いる飛行隊のパイロットに呼び掛けた。

「全機サイドワインダー発射用意。各自、レーダーをチェックし、ホークアイに指示された目標をロックせよ。ぜったいに艦隊に近づけるわけにはいかない、射程ぎりぎりの八キロに入ると同時に発射しろ」

F/A-18E各機はホークアイからの指示により、一機につきふたつずつ、それぞれがちがう目標に照準を定めていた。高高度から電子の目で広域を見つめるE-2Cホークアイが戦況を把握し、どの機体がどの目標を狙えばいいかの確にリーダー管制しているの、同じ敵を狙ってしまったら、「おれはあっちの敵をやるから、おまえはあそこのあいつを——」「え？ どれ？」などとまごつく必要はない。ホークアイがいるからこそ、このような未知の敵と遭遇する非常事態になっても、みな安心して航行と攻撃に専念できる。操縦桿のボタンを押して兵装を変更する。これでF/A-18スーパーホーネットは短距離空対空ミサイル、サイドワインダーを発射可能になった。持っているサイドワインダーは各機二発。六〇の敵を同時に攻撃する。

戦闘機は通常は、おおそ時速六〇〇キロで巡航している。一秒飛ぶだけでも二、三〇〇メートルもあつという間に過ぎ去っていつてしまうのだ。さらに臨戦態勢に入って突入して速度を上げると、八キロという距離など、まばたきするひますら与えられない。そのうえ相手もこちらに向かって飛んでくる。すれ違う時の相対速度は時速一五〇〇キロにまで達するだろう。一瞬の状況判断が生死を分ける。できればもっと離れた距離から狙えるミサイルがあればよかったが、発艦するときは水上目標を攻撃する任務を帯びて対艦ミサイルを装備していたので、いまもっている空対空ミサイルはサイドワインダーしかないのだ。

「リーヴズアイズ、突撃！」

「ウィズインテンプテーションズ、突撃！」

それぞれのリーダーの号令とともに、三〇機のジェット戦闘機はスロットルを開け、目標群へ爆走を開始した。HUD表示の敵との距離の数字が急激に小さくなっていく。そして、サイドワインダーの射程内に入ったことを知らせる電子音が鳴った。

「FOX2！」

二個飛行隊のスーパーホーネット三〇機から、細い槍のようなサイドワインダーが二発ずつ切り離され、ブースターに点火、蒼天を疾走する。

F/A-18Eたちは発射後すぐに急上昇に転じ、高度を高くとる。未確認飛行物体の数は現在二〇〇弱。一機二発ずつで六〇発のサイドワインダーが全弾命中して撃墜できたとしても半数にも届かない。リーヴズアイズとウィズインテンプテーションズの火急の任務は、速力が高く真つ先に艦隊に接近しそうな奴を叩いて阻止し、時間を稼ぎ、可能なら敵飛行物体の正体を突き止めることにこそある。

エンジンをふかして上昇しつつ、レーダーを覗きこんでサイドワインダーの行方を見守る。サイドワインダーは固体ロケット燃料の薄い航跡を曳き、わずかに尻を振って蛇行しながらロックした目標へ飛翔していく。

煙幕のとばりの向こうで橙いろの花火が点々と小さく散った。

「こちらエクシア2、サイドワインダー全弾命中、未確認飛行物体六〇の撃墜を確認。リーヴズアイズならびにウィズインテンプテーションズ、残存する未確認機を掃討せよ」

高度五五〇〇メートルあたりに達したライノたちの機体が陽光を反射し鋭く光る。リーヴズアイズのリーダーが言った。

「こちらリーヴズアイ1、まもなく未確認飛行物体群とコンタクト。目視による確認をおこなう」

目で見える距離まで近づけば、反撃を受けるリスクも高くなる。その危険を冒してでも、敵の正体をこの目で確かめておかねばなら

なかった。

それは海風だったのか、あるいは目には見えないなにものかげ息を吹きかけたのか。突風が視程を著しく奪っていた煙をことごとく晴らした。F/A-18E飛行隊と未確認飛行物体の群れが、澄明な視度のもと、おたがい見合う形となった。

「リーヴズアイ1、未確認機を視認確認」リーダー機パイロットが目を凝らした。全身の血管が膨れ、血液が逆方向へ走り出すのを感じた。「これは……」おもわず声を漏らした。その眩きには、畏怖が滲んでいた。

未確認機は、プロペラ機だった。機首にひとつプロペラがついた単発機で、全体の塗装はダークグリーン、両翼に赤い単色の円が燃えるように輝いていた。胴体の形状は紡錘形でずんぐりむっくりとしており、えらく後方にコクピットがあるような印象を受ける。そのプロペラ機が、一五〇を越す編隊を組み、スーパーホーネット部隊の下五〇メートルを艦隊向けて飛行していた。

リーダーは、その機体形状をみて、パニック状態に陥りそうになった。彼はその航空機を知っていた。

「雷電だ！」叫ぶように、言った。「未確認機を目視にて確認。雷電と判明！」

彼の祖父は、大戦当時パイロットをやっていて、真珠湾にて日本軍機に襲撃を受けながらも命からがら助かり、その後は太平洋の上空でF6Fヘルキャットを駆り日本軍機と死闘を演じた猛者だった。祖父は子と孫に折々、そのときの武勇伝を語って聞かせた。けさ食べたものさえ覚えられないほど耄碌しても、日本軍機の特徴と空戦のようすだけは事細かいところまで記憶していた。その影響で彼は日本軍の戦闘機に知らず知らず精通し、やがては祖父とおなじ戦闘機パイロットを志すきっかけにもなったのだった。かれがパイロットになったのは、祖父と日本軍機の闘いがあったからこそといえた。その骨の髄まで染み込んだ記憶と知識を信じるなら、眼下をすれ違う航空機は、旧日本軍が主力戦闘機のひとつとして運用し、当時

の連合軍にジャックのコードネームで呼ばれた雷電に相違なかった。  
「ライデンだと」少将が反駁した。「たしかか」

「間違いありません」上ずった声で返答した。「外見の特徴は完全に合致しています」

「ライデンは」少将がCAGに訊いた。「サイウンのお仲間か？」  
CAGが頷いた。「彩雲も雷電も、第二次大戦中の日本海軍の戦闘機です」

「どういうことだ」少将はわずかに逡巡した。しかしいまやるべきことがあった。「残存機の掃討が先決だ。イージス艦はどうなっている」

「USSクレイテ・ガルフ」、対空勢力をレーダーに捕捉。ESSM発射開始を確認。イルミネーター起動、誘導開始」

タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦USSクレイテ・ガルフのVLSの一行が波打つように開かれた。巡航ミサイルや対艦ミサイルは、VLS一セルに一発格納されているが、直径の小さい対空ミサイルなら、ひとつのセルをさらに小分けにして複数のミサイルを装填しておくことができる。対空勢力を強力なレーダーに捉え、脅威度を判定し、それが高いものから自動的に攻撃を加えて防空をはたすイージスシステムが覚醒する。開放されたVLSは一セルが四つに区切られ、そこにはESSM（艦対空ミサイル発展型シースパロ）が破壊の出番を待っていた。

炎と煙と爆音を行進曲に、一セルから四発ずつESSMが順次発射されていた。

レーダー波を目標に照射して、反射してきたデータをミサイルに送信して誘導するイルミネーターに正確にコントロールされ、対空ミサイルが戦空を駆けていった。

リーヴズアイズとウィズインテンプレーションズは、クレイテ・ガルフがロックしていない雷電に挑んだ。「全機、機関砲をスタンバイ」管制機のホークアイが飛行隊に令達した。さきほどのサイドワインダー発射のときと同様に個別に目標をあてがった。

「敵編隊後上方より接近し、射程に入りしだい二秒だけ機関砲を発射。攻撃後はそのまま離脱せよ」

ウィズインテンプテーションズのリーダーがいった。「むかしながらの空戦の時間だ。おれたちがただハイテクに頼りきるだけの力マ野郎じゃねえってことを証明するぞ。やってやろうぜ」

F/A-18スーパーホーネットが搭載しているM61バルカン砲は、二〇ミリ砲弾を毎分四〇〇〇発、秒間にして、一秒で六六発も撃つという驚異の発射速度をもつ。あたりどころにもよるが、たいていの航空機なら五発も命中すれば翼をもがれたカラス同然となる威力を誇っている。二秒も撃てばじゅうぶん以上だった。

リーヴズアイズ・リーダーが機体をバンクさせ、味方をひっぱるようにUターンして敵機の後上方につける。

レーダーをみた。雷電の編隊は寸毫も乱れず艦隊方面へ直行していた。ミサイル攻撃を受け味方が何十機も墜とされたというのに、まるで知らん顔で直進を続けている。

「不気味だな。なに考えてやがる」

飛行隊のだれかがつぶやいた。

「ESSM接近。着弾まで五秒」

四……三……二……一……。蒼穹の彼方から超音速で飛来した発展型シースパローが、航行する雷電に真っ向から直撃する。命中した瞬間、機体は橙いろの炎をあげて火の玉になり、数十もの部品に分解され、煙の尾を長く長く曳きながら海へと墜ちていった。

月と狩猟の女神アルテミスが放った矢のごとく、正確無比な照準で狙い撃たれた対空ミサイルが、雷電部隊に次々突き刺さり、空の藻屑に変えていく。

猛撃をつけ、雷電の群れが、左右に裂けるようにいつせいに散開しはじめた。

ある雷電は、左に大きく傾き、高度を下げて重力による加速を得ながら左に旋回した。だがESSMは、突然のその雷電の動きにも瞬時に反応し、舵を切ってコースを修正、たがわず土手っ腹に命中

させた。炎に包まれた雷電は、きりもみに回転しながらまっ逆さまに海面に没した。

ほかの雷電も、降下して速力を稼ぎつつ急激に旋回してミサイルから逃れようとするも、防空をこそ本領とするイージスの目からは取りこぼされず、最大五〇Gの急旋回も可能とするESSMの好餌となった。逃げ回る雷電は、猛追撃する発展型シースパローの速度と旋回力の前には止まっている蛾も同然だった。

イージス艦からのミサイルの嵐が収束した。巨大物体相手の攻撃もしなければならぬ。さしものイージス艦隊も全機撃ち墜とすには手が足りない。

「敵機、残り三〇！」

「オーケー、今度はこっちの番だ」リーヴズアイズのリーダーがいった。「いくぞリーヴズアイズ、いくぞウイズインテンプテーションズ。狂った戦争の亡霊どもを、麗しの故郷の地獄の底へ送り返してやれ！」

豪とメンバーが関の声で返答し、エンジンの出力を上げる。

遷音速域までいっきに加速して、三〇機のスーパーホーネットが三〇機の雷電へと突進。HUDに投影された照準内に目標の雷電をおさめる。そして、射程に捉えた瞬間、操縦桿のトリガーを引き絞る。六連装砲身が回転し、M61バルカン砲が火を噴く。秒間六六発の、鉄の驟雨。逃げ惑う雷電はつぎつぎと二〇ミリ機関砲の餌食となっていく。ほとんど発砲したのと同時に機体がバラバラに碎け、火炎の尾を曳いて陰惨な雪となって大西洋に降り注いだ。

「ははっ、こいつはいいぜ。ターキー（七面鳥）みたいにノロマなやつばっかだ！」

「逃げられるもんなら逃げてみやがれ。絶好のスコア稼ぎだ！」  
闘争の興奮にみちた無線のやりとりが交わされる。

三〇機のスーパーホーネットがいつせいにトリガーを引いたのち、空に飛行している雷電の姿はどこにもなかった。すべてが空の藻屑と消えた。

「エクシア3からリーヴズアイズならびにウィズインテンプテーションズへ。敵航空機撃墜を確認。引き続き進路を維持し、残りも掃討せよ」

「テンプテーション1了解。数は？」

「五〇だ。平均速力二七〇ノット（時速五〇〇キロ）で艦隊へむけ接近中。貴隊とは三〇秒後に接触する」

「こちらリーヴズアイ1。敵性航空機を視認した。たしかにさっきのとはちがうな……」

豆粒ほどにしか見えぬ未確認飛行物体の編隊を、HUDのズームアップ機能をもちいて拡大。リーダーなどの航法機器にも気を配りつつ注視する。ライノのパイロットたちは、雷電につづく正体不明機の姿をひと目、肉眼で確認しようと、ヘッド・アップ・ディスプレイ越しの青空に目をむけた。

真正面からむかつてくる、五〇の戦闘機群。やはり単発のプロペラ機で、雷電よりはスマートなプロポーションである。尾輪が出ており、プロペラの直径は、やや小さめのようである。

「リーダー、あの機体は？」

リーヴズアイズのパイロットが無線で問う。リーダーが答えを導く。

「あれは、おそらく『隼』だ。気をつける。雷電より劣速だが運動性と加速力はあなどれん。射撃精度も高く、当時は『天空の狙撃者』ともいわれたそうだ」

「当時は、でしょう。ライノの前ではあんなの、いにしえのポンコツマシンですよ」

二九機のライノのパイロットが豪快に笑った。リーヴズアイズのリーダーだけが笑わなかった。

無線を空母の戦闘艦橋で聴いていたCAGがつぶやく。

「一式戦闘機・隼？ まさか……」

少将が不審そうな顔をした。

「ハヤブサとやらがなんだ？」

「は。一式戦闘機、通称隼は、旧日本陸軍の軽戦闘機です。さきほどの彩雲と雷電は海軍……編成がかなりチャンポンです」

「つまり？」

そう訊かれたCAGも、解答を見つけたせないようだった。

「ようし野郎ども。こんども機関砲で木っ端微塵にしてやるぞ。ホークアイ、目標の誘導を頼む」

ウィズインテンプテーションズのリーダーが威勢よく通信した。さっきの雷電総滅劇で、気分が高揚しているようだ。

「了解。個別に目標をロックする。送信した情報を確認せよ。まもなく射程にはいる」

戦闘飛行隊が了解の返答をし、HUDの照準を指定された目標に合わせながら飛翔する。互いにむかいあって接敵するその光景は、まさに空中の闘牛のようだった。

F/A-18スーパーホーネットの、ライノという愛称は、そのシルエットがサイに似ていることに由来する。さればこれは闘牛ならぬ闘犀か。

サイは凶暴な猛獣だ。目について動くものとあらばかまわず突進する。その勇ましき攻撃性は、とりもなおさず荒々しきF/A-18スーパーホーネット乘りにこそふさわしい。

敵を見つけた勇猛なるサイの軍勢が、限界まで引かれた矢弓となつて、身のほど知らずのよそ者に裁きの鉄槌を下さんと疾駆する。

HUDに表示される自機と目標との距離が縮まっていく。「よし、おとなしくしてろよおれのターキーちゃん。季節はずれのクリスマスとしやれこもうじゃねえか」無線が全機と空母に開かれていることを自覚しているのかいないのか、だれかがそんなことをつぶやいた。

そしてついに両者の距離が八〇〇メートルをきった。

「発射！」

火の神バルカンの名を冠する航空機関砲がうなり、直径二〇ミリの機関砲弾を、秒速一〇六〇メートルの速さで放ち、回転する六つ

の砲身から秒間六六発で連射する。

破壊の火線が、一直線に隼へと殺到する。

雷電のときと同じく、なんら抵抗できずに機関砲弾に喰われると、だれもが信じて疑わなかった。

だが、最初の一発めが隼のエンジンに食らいつこうとした、その時だった。隼が機体をほとんど九〇度に横倒しにして急旋回してライノの機関砲を回避した。火線は隼の腹をかすめて、空のブルーのなかへ吸い込まれていった。何機かは回避が間に合わず、機体に風穴を開けられ、炎を血飛沫のように噴かせながら空中分解したが、それもほんの数機にとどまった。隼の大部分が、F/A-18Eのバルカン砲をひらりとかわしてみせた。それはまさしく、荒ぶる闘牛を紙一重でいなすマタドールのようにであった。

「よけやがった！……」

「どういう機動性だ。あれを回避するか」

隼の群れとすれ違いながら、スーパードーネットのパイロットたちに、少なからぬ動揺が波紋のように広がった。後方を確認。一時散らばった隼たちは、意思統一されているようにふたたび編隊を組んでなに食わぬ顔で飛行している。

「ターンして後上方からもういちどガンをしかける。いいか、落ち着け。おれたちはなんぞや」

「われら第102戦闘攻撃飛行隊リーヴズアイズなり。誇りあるアメリカ合衆国海軍のF/A-18スーパードーネットにまたがり、空に巢食う敵をファックするものなり！」

「やるぞウィズインテンプテーションズ。敵の尻つぺたから目を離すな」

「とうぜんだ。こんどは当てる。おれたちはなんだ。撃って当てなきや家の外に出る資格もねえただの近親相姦野郎だ！」

「当てなきやおれたちマザーファッカー！ もひとつ外してアンクルファッカー！ ユダ公のケツでも舐めてろファックユー、ビッチ！」

機上の戦士たちがおのおのを鼓舞し、戦意燃ゆる炎の坩堝に燃料を再充填する。それは高速増殖炉のように臨界点をやすやす突破せしめる瞋恚の炎。

三〇機の戦闘攻撃機が上昇して高度をとり、みな同時に反転。逆さになった天地を戻して、渡り鳥のように雁行する隼の編隊を追いかける。

敵編隊の後方、四〇〇メートルほど上につける。

隼を見下ろす。隼たちのむこうには、太陽の恵みをあますところなく受けて輝く海。その海面を、白い筋で切り裂きながら進む鉄のほうき星が見えた。

隼とライノの進行方向のまったく逆へ曳かれる何十条もの白煙。艦隊から巨大生物へ放たれた巡航ミサイルが、眼下を航過し、天と海の接する水平線のむこうへ勇翔していく。それを目で追ったひとりのパイロットは、巡航ミサイルの収束して着弾、爆裂するのが思ったより早いので肝を潰した。もうかなり艦隊に近づいてきている。「オーケー、野郎ども、突撃するぞ。目を見開いてついてこい!」「ラージャ、ラージャ!」

ウィズインテンプレーションズがリーダーの号令下、雪崩のように隼編隊へ突っ込む。

「リーヴズアイズ、こんどは距離五〇〇まで接敵。確実に仕留める」「了解」

リーヴズアイズもウィズインテンプレーションズにつづく。

音速の一手手前まで加速、なだらかにダイブ降下しつつ隼の背後に迫る。

時速五〇〇キロメートルにも満たない低速で巡航している四十数機の隼は、暢気に遊覧飛行しているようにも見える。遷音速で接近するライノの機影になど気がついていないという感じだ。

HUDを睨むパイロットの目には、急激に大きくなってくる隼の後姿が映っている。

照準におさめたまま距離を詰める。斜め下方にダイブしながらの

突撃なので、発射から命中までのわずかなタイムラグを計算し、ターゲットのやや前方の空間をねらう。

有効射程の八〇〇メートルよりさらに接敵。じゅうぶんにひきつける。

と、隼たち全機が、右、左とランダムに機体をバンクさせ、鋭く旋回し回避行動をとった。

「逃がすか！」

ウィズインテンションズのF/A-18Eが機関砲のトリガーを絞る。橙いろの半徹甲焼夷榴弾の連なりは、空気を切る急角度でブレイクする隼を捉えきれず、口惜しそうに重力にひかれ、落ちていった。

「くそがつ」

オレンジのバルカン砲弾が蒼天を入り乱れる。

「無駄弾を撃つな、残弾数を考えろ」

リーヴズアイズのリーダーの警告も奏効しない。プロペラ機ごとに攻撃を当てられないことで頭に血がのぼり、冷静な判断も何もなくなっているのだ。

あるパイロットが機体を正確に操縦しながらしっかりと照準に敵機を入れ、トリガーに指をかけようとした瞬間、ターゲットの隼が左下方にひねりこむように死線からはずれ、視界から消え失せたのを見て、「動くんじゃねえこのアングルファッカー！」と叫ぶ。またあるパイロットは、急旋回する隼の尻を追いかけてたが、旋回半径の小ささで負け、ふりほどかれてしまった。

敵の隼の速度は、直進のときよりさらに劣速となり、時速四〇〇キロメートル台にまで落ちている。速度こそ遅いが、小型軽量であるがゆえの運動性能と小さい旋回半径で、ライノは予想外に翻弄された。

「くそ。こいつらターキーなんかじゃねえ。ケワタガモ（北極海に住まうという水鳥。けはいに敏感で、狩猟は困難を極めると聞こゆ）だ！」

隼の軽快さに、リーヴズアイズの十二番機がいった。

「リーヴズアイ12、後方に注意」

どのような声が無線を通じてホークアイから届けられた。

リーヴズアイ12は首をひねって真後ろを見た。

いつのまにか隼が一機、ほんの六、七メートルの後方に占位していた。敵陣のど真ん中に突っ込んで格闘戦などしていたからだ。

あ、と声を上げたのと同時に、隼の機首から発砲焰がまたいた。機首に装備された二門の十二・七ミリ機関砲が、真っ正面で無防備な姿をさらしているF/A-18Eスーパーホーネットを捉えた。炸裂弾、徹甲曳光弾、焼夷弾の順番で高速発射される隼の十二・七ミリ機関砲は、口径が小さいため単純な運動エネルギーこそ小さく有効射程も短い、当たりさえすれば、その威力は二〇ミリ機関砲弾にも匹敵する。

リーヴズアイ12がとつさにブレイクするまでに、数十発が機体を襲った。機体が穴だらけにされるいやな音をからだで感じながら、リーヴズアイズ十二番機はスロットルレバーをたたくように入れて急加速し、回避をはかった。急激な機動もまじえながらだったが、射程の外へ逃れるまで、隼の射撃はやまなかった。徹甲曳光弾がキヤノピーの右を、髪一本ぶんあるかないかの空間をかすめていくのを見て、リーヴズアイ12は総毛立った。

すぐ上方でも、ウィズインテンションズのF/A-18Eが同じように後ろをとられ、十二・七ミリを撃ちまくられていた。弾道は安定しており、プロペラ同調装置により、機関砲弾が前方で回転するプロペラにあたることはない。正確なねらいで、弾をライノに撃ち込んでいく。

「天空の……狙撃者……」

われしらず、声に出していた。

「リーヴズアイ12、損傷を確認せよ」

ホークアイからの無線に、パイロットは青い顔をしながら、  
「右翼損傷、フラップ作動不能。油圧系統がやられた。機内に火災

を確認。自動消化装置作動。燃料タンクに損傷なし。ああ、くそつ。  
右エンジンに被弾。推力低下」

「了解。リーヴズアイ１２、USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>へ帰艦せよ」

なにつ、と噛みついた。

「半世紀以上むかしの骨董品相手に負けられるか。おれはまだ飛べる！」

「USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>からリーヴズアイ１２へ。帰艦を命ずる」

航空団指揮官であるCAGも下命した。さらに、

「リーヴズアイ１２、リーダーからも命令する。帰艦しろ。着艦もできないほど損傷してからでは遅い」

リーヴズアイズ十二番機は悔しさに声を震わせて、「了解」と返答した。

鳥類の隼は、自然界の動物のなかでもっとも速い飛行速度をほこる。その獲物は、小さい鳥である。隼は、超高速で急降下し、飛んでいる獲物の鳥に一撃を喰わせ、捕獲する。

その名のごとく、一機の隼が、被弾して帰投していたリーヴズアイズ十二番機の真上からまっ逆さまに降下してきて、通りすぎるときに十二・七ミリを叩き込んでいった。ライノのキャノピーの強化ガラスが白く濁った。

ひびで白濁した強化ガラスの内側が、目に刺さるような鮮紅色に染まった。機体は空中でバランスを崩し、横転を繰り返しながら高度を下げていった。海面に没するまで、ベイルアウト（緊急脱出）が作動することはなかった。

「リーヴズアイ１２がやられた！ 畜生！」

空母USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>のCDC（戦闘指揮所）もどよめいた。数こそ劣るものの、それを上回る圧倒的性能差をもつ合衆国海軍の戦闘機が墜とされた。その信じがたい事実は一瞬にクルーたちに動揺をもたらし、疫病のように広がっていった。

「ばかな。おれたちは、おれたちはこんな旧式のおもちゃ相手にな  
にやってるんだ。ガキの使いじゃねえんだぞ！」

仲間を惨殺された憤怒が、パイロットたちを支配した。少将やC  
AGがまずいと思ったとき、リーヴズアイズのリーダーがいった。

「聞け！ このままドッグファイトしても埒があかん。いったん  
離脱して、距離をとるぞ。もういちど、一撃離脱戦法でいく」

リーダーの冷静な指示に、リーヴズアイズだけでなく、ウィズイ  
ンテンプレーションズのメンバーまで了解と返事した。そのなかの  
ひとり、ウィズインテンプレーションズのリーダーだった。

リーヴズアイズの隊長機を先頭に数マイルレベルで隼の編隊から  
離れる。旋回性能が高くとも、しょせんはプロペラ機。もし追っ  
きても純粋な速度でならジェット戦闘機の敵ではない。

みなそう考えて加速し、じゅうぶんに距離を空けてから後方を確  
認する。おおかたの予想に反して、送り狼は来ていなかった。隼は  
再び編隊を組み直し、艦隊の方向へ針路をむけ、巡航しはじめてい  
た。

F/A-18E二八機がひとつの生き物のように統率された動き  
でUターンし、一式戦闘機・隼の群れの後上方に占位する。

「いくぞ。反撃の時間だ」

## 五 復讐者

金本が自室へと引き上げ、ひとりになった浅間は、妻の璋子にメールを送信した。内容はたあいもない。近況をたずね、母親の面倒を見てくれていることへの感謝のことばをつづった、いつもの文面だ。すると、璋子から、メールではなく、電話がかかってきた。

「いま、大丈夫ですか？」

時刻は夜半の一時をまわったところだ。浅間が電話ではなくメールを送ったのは時間のせいもある。

「おう。いまあがったとこ。あとは寝るだけだよ。どうしたんだ」  
いつもならメールの返信ですますのに、と氣にかけながら浅間はベッドに腰をおろした。

「たまにはお声を聞きたいと思ひまして」匂いたつ色香のなかにも凜とした張りのある璋子の声が、浅間の耳朵に心地よい響きをもたらしした。「でもいつもお電話していいかわかりませんし、あなたもお疲れでしょうし」

「そうか」

電話越しの璋子の声には、どこかしら疲労の音韻があつた。原因は考えるまでもない。

「母さんのぐあいはどうだ？」

璋子はうん、と間をおいてから、

「このあいだ、お義母さんがね……」

浅間の母親のもうろくは、さらに悪化の一途をたどっているようだった。三日まえには、真夜中に大声で叫びながら家のなかを走りまわり、璋子がおさえようとしても、信じられないほどの力で撥ねのけ、リビングの椅子から椅子へ、椅子からテーブルへと猿より身軽に跳びまくった。あげく、ガラス戸に体当たりしてガラスを破り、全身血まみれの状態で町内を徘徊したそうである。そのときの母親は、足腰の萎えた還暦すぎの老婆とは思えぬ身軽さだったという。

浅間もにわかには信じがたかった。浅間が最後に母親を見たとき、母親は、ほとんどかたつむりくらいのスピードでしか歩けないくらい足が衰え、からだを動かすたびに痛い痛いとうめくありさまだったからだ。

「あれだな、大むかしに狐憑きとかいわれてたのは、あんがいこういうのが真相だったりしてな」

「じぶんのお母さんをそんなに悪しざまにいうものではありません」  
たしなめられて、浅間は素直に謝った。それから、

「すまないな。おまえには面倒ばかりかける」

これは本心からだった。璋子の声も柔らかくなった気がした。

「面倒なんかじゃありません。お義母さんはわたしにとってもお母さんですから……」

そのことばが浅間を気に病まさぬためのものであることくらいはわかる。わかるからこそ、よけいに胸が痛む。だが浅間はそんな胸中はおくびにも出さなかった。氣遣ってくれていることに気づけば、その氣遣いを無碍にすることになる。

「せめておれもいつしよにいてやればいいんだが」

「そんなこと言わないでください」

璋子は即答した。

「あなたには、たいせつなお仕事があるでしょう。わたしだって馬鹿じゃありません、自衛官と結婚することがどういうことかくらいはわかってるつもりです。あなたがそんな弱気になってどうします」

「あ、うん、はい」

「お仕事なんですから、しかたないでしょう」

「ちよつとまで、どつかで聞いたことがあるぞ。女が仕事だからしようがないよねって言うときは、すでにふたりのあいだに末期がきているとかなんとか」

「そうですよ」

「えっ！」

「放っておいてもいつまでもまっついていてくれるなんて考えてたら、わたし、どっか行ってしまいますよ」

だから、と璋子は鳴禽が歌うようにいった。

「ちゃんと、しっかり捕まえておいてくださいね」

いたずらっぽく笑う璋子に、浅間は苦笑するほかなかった。男とは、女に一生かなわぬ生き物であるらしい。

「香寿奈はどうだ。いまは……もう寝てるか」

「ええ。あの子もがんばってるんですよ。わたしがどうしても家を空けないといけないときには、かわりにあの子がお義母さんの介護をしてくれてるんです。ほんとう、あの子のおかげ」

「へー。そりゃ、あいつにもなにかご褒美がいるな」

「そういえば、あなたの飛んでいるところを見てみたいなんて言うてましたけど」

「かわったやつだな。さすがおれの娘」

浅間はちよつと考えてから、

「百里はむりかもしれんが、ことしの富士の総合火力演習の特等席をとってやるくらいならできるかもしれんな。ツテがないでもないし」

「それって、職権濫用じゃありません？」

「人聞きが悪いな。役得だよ。それに未成年者をひとりで来させるわけにはいかないから、自動的におまえもご招待ってことになるよ。母さんは、まあデイスービスかなんかに預けたり」

「香寿奈に話して、あの子が行きたいっていったら、考えますけど」璋子はことばを切り、おだやかに続けた。「あの子、あなたがいないなら行きたくないって言いますよ、きつと」

「困ったちゃんだな」

それから、心臓が四、五拍するくらいの沈黙の間があつた。気まぐれはなく、互いが互いをいたわろうとしているなごやかな沈黙だった。

「——待ってます」

ふと、璋子がしとやかにいった。

「香寿奈と、お義母さんといっしょに。だから……」

「……………」

「きっと、無事に帰ってきてください」

「縁起でもねーこというんじゃない」

「ごめんなさい」

ふたりは声をおさえて笑った。

「あなたのお元氣そうな声が聞けてよかったです。安心しました」

「ああ、おれもだよ。香寿奈にもよろしくな」

「ええ。こんな夜遅くにお電話してしまって、ごめんなさいね。じ

やあ…… おやすみなさい」

「ほーい、おやすみ」

浅間は、璋子が電話を切ったのを確認してから通話を終了した。

そのために、二十秒ほどの時間を要した。

浅間は、家族がたいへんなときに帰ることができないわが身を呪いながら、気分を落ち着かすために、施設内の自販機でペットボトルのお茶を買い、テレビのある休憩室へ行った。休憩室にはだれもいなかったが、かえって気が楽ではあった。

テレビをつけたが、ろくな番組がなかった。しかたがないので、

ニュースにチャンネルを合わせた。

「ことしの終戦記念日を前に、牟田口首相は、靖国神社への参拝をおこなわないことをあらためて表明しました。きょう午後、終戦記念日に靖国神社へ参拝に行くかどうかを尋ねられた牟田口首相は、取材陣に対し、『就任当初から申し上げているように、私や内閣は八月十五日に靖国神社へ参拝はいたしません』と答えました」

そこで画面が牟田口へのぶら下がり取材の映像に切り替わった。報道陣に繞困された牟田口は、脂肪のたつぷりついた浅黒い顔に権柄づくな表情を浮かべ、取材に応じていた。取材陣のひとりが質問する。

「靖国参拝をおこなわない理由はなんですか」

牟田口は顔いろひとつ変えずしれつと答えた。

「理由がなかったら参拝しなきゃいけないの？ それに、八月十五日に総理大臣が靖国に行かなきゃいけないなんて、そんな法律でもあるの？」

映像はそのまま、音声だけがニュースキャスターのものに入れ替わる。

「また牟田口首相は、靖国神社に合祀されているのは、アジアの国々に多大な被害と苦痛を与えた戦犯であり、そこへ日本の総理大臣が参拝に訪れることは、軍国主義の礼讃と戦争の美化につながるとコメントし、靖国神社への参拝を、あらためて否定しました」

映像がかわり、平和研究者というあやしげな肩書きをもった頭髪の薄い男へのインタビューが挿入される。

「靖国神社には、特攻などで死んでいった、あー戦死者、戦争の犠牲者、などといったしょにですね、東條英機をはじめとしたA級戦犯も合祀されているんですね。これがよくない。中国、韓国の人たちの感情をわざと逆撫でしているようにしか思えない。これはすぐに分祀するべきですね。靖国に合祀するということにこだわって、ほかのアジアの国々に対する配慮がない。アジアのなかで孤立するとは国益にも影響を及ぼしますし、それに、祀られている戦死した人だって、A級戦犯と同じところで眠らされるなんて、うれしいとは思わないんじゃないですかね」

ふたたびニュースキャスターの音声が入る。

「牟田口首相が靖国参拝をおこなわないことを表明したことについて、中国の尚報道官は、『正しい歴史認識にもとづいた常識的判断であり、評価に値する』との声明を発表しました」

「ばかなことを……」

浅間は緑茶で口を濡らしながら、だれもない休憩室でひとりつぶやいた。

当時の資料をすこしでもひもとけば、もうすでにA級戦犯などという呼称も東京裁判も、歴史的、国際的に意味をもたないというこ

とくらいすぐわかる。そもそも、かようにいわゆるA級戦犯を口をきわめて罵っている政治家、知識人、中韓国の反日家たちは、東條英機元首相のほかのA級戦犯とやらが何人いるのか、かれらはどのような基準で、だれにA級戦犯に指定されたのか、いったいなんの罪を犯したというのか……そのいずれにも満足に答えられないだろう。法的根拠もなく、検証もしないで戦犯だ有罪だというのは、もはや中世暗黒時代の魔女裁判となんらかわりがない。いわゆるA級戦犯というのは、冤罪であると断言してもよい。

が、そのように主張しようとすると、右翼とかきちがいじみた国粹主義者とかいうレッテルを貼られる。自衛官ならなおさら世間は袋叩きにするだろう。美德をおこなうにも悪徳のゆるしを願わねばならない世の中になった……ハムレットの歎きは五百年たつたいまもかわらない。

「アメリカのヒットリア大統領は、日本時間の午後八時ごろ会見を開き、原子力空母＜ハリー・S・トルーマン＞沈没の原因は、巨大な生き物との接触によるものとの公式見解を発表しました」

嘆息しているところへ荒唐無稽なニュースが耳に飛び込んできて、浅間は緑茶を気管のほうへ流しそうになってはげしくむせた。ひとしきり咳き込んで画面に目を投じると、野生動物研究の大家としてしられる大学教授のインタビュー映像が流れていた。インタビューが、

「空母を沈めることができるほどに大きい生物って、どういったものがかんがえられますかね」

と質問すると、大学教授は首をひねり、

「ちよつと考えにくいですけどねえ。空母って何百メートルもあるんでしょう？ それを沈めるってなるとねえ……。現在発見されている動物のなかで、脊椎動物でもっとも大きいのがシロナガスクジラ、これがだいたい三〇メートルくらいでして、無脊椎動物だとキタウレイクラゲってのがいて、これがおおよそ五〇メートルくらいといわれていますが、どちらも空母を沈めるっていうのは難しい

と思います。ほんとうに生物なら、まだわれわれが遭遇していない未知のものではないかと思います」

必要だったのかどうかもわからないインタビューだ。米海軍の空母打撃群が演習している資料映像にかわって、キャスターがニュースを読む。

「ヒットリア大統領は、巨大生物への警戒のため、現場となった北大西洋にあらたに部隊を派遣することを決定したほか、NATO、北大西洋条約機構をはじめとした各国に支援を呼びかけています。また大統領の発表をうけ、国際自然保護団体グリーンピースが、生物の保護を求めてデモ活動をするなど、波紋が広がっています」

「本気にしてるのかよ……信じらんね」

気分転換のつもりがむしろ逆効果だった。尿意を感じたので、テレビとペットボトルをそのままにしておいて、浅間はトイレに立った。

夜でも煌々と灯る基地の照明に、昼と勘違いしたアブラゼミが鳴いているのがきこえた。

用を足して休憩室に戻る途中、浅間は、廊下に孤影が落ちているのを見つけた。

廊下のむこうに、ひとりの老人が佇立していた。暗い緑いろの鉄かぶとをかぶり、はみでた白い髪はねじくれて鳥の巣のようになっている、緑がかった黄土いろの粗末な服には、野戦用の水筒をたすき掛けにし、足にはゲートルを巻きつけていた。

不審に思い、浅間は老人に近づいた。老人は浅間のほうを見たまま、微動だにしない。

ちかくでみると、衣服のそこここが破れているのがわかった。顔には、刻み込まれたように深いしわが縦横に走っており、老人の平坦ならぬ人生を物語っているようだった。年寄っていることはわかるが、六十代なのか七十代なのか八十代なのか……まったく見当がつかない。

浮浪者かなんかかしらとかんがえた浅間は、老人にやさしく語り

かけた。

「おとうさん、ここは関係者以外、立ち入り禁止なんですよ。出入口までご案内します」

老人は、浅間の目をまっすぐに見つめているだけで、動くけはいを見せない。浅間がもういちど話しかけようとすると、老人は洞穴のような口を開いた。

「復讐のときはきた」

「は？」

「罪なき人びとを焼き殺し、許されざる汚れた火をつくったものどもへ復讐をするために、あれは海の深きところよりやってきたのだ」  
浅間は、さては狂人かと考え、なだめようとした。

「復習ったって、予習復習は学生の華ですよ。ささ、おとうさん、基地内に許可なく入ってきてもらっちゃ困りますんでね。迷われたんなら、出口まで一緒にしますから」

「あの怪獣は、憎しみと怒りの怨念から生まれたのだ。生物ではない。あれは、人殺しの武器では殺せん。そして、やつらにおのれのことの報いを与えるだろう」

「へー、どんなですか？」

「死と破壊、そして、呪い」

老人の冷徹な、だが狂えるほどの激情をすさまじい自制心で抑えているような物言いに、浅間はややたじろいだ。いつのまにか、うるさいアブラゼミの鳴き声がやんでいる。老人は齢を感じさせぬ眼力で浅間を見据え、

「空母を襲ったのは、ほんの手始めにすぎん。あれは遠からずアメリカに上陸し、すべてを灰にするだろう。その歩みをとめることなどではせん。かれらの怨みは、それほど強い」

浅間は、老人の空気に吞まれ、そのことばを忖度し、頭をめぐらした。

「その怪獣ってのは……」

浅間は真剣に訊いた。

「アメリカの原子力空母を沈めたっていう、巨大生物ってやつ……？」

老人はゆっくりと深く頷いた。

「いまもアメリカの船と戦っている。憎しみの業火は大海の水をもつてしても消えることをしらん。アメリカは菊水のときの日本のごとく轟沈するだろう。もう残された時は少ない。やるべきことをせよ」

「やるべきこと……？」

浅間の脳は混乱した。まず尋ねねばならないことがあった。

「その怪獣は……いったいなんなんですか。なぜアメリカを？」

「あれは」老人の小さなからだがわななく。「さきの大東亞戦争で散華した、数えきれぬ英霊たちの残留思念の結晶だ。故国から遠く離れた南の海で、はるかなる空で、アメリカに無惨に殺された怨念が具象化しているのだ」

老眼がうるむ。

「そして、あのとてつもない火に一瞬で命を奪われ、また苦しみぬいて死んでいった多くの人びとの魂までとりこんでいる。もはや人類のもつ武器ではあれを倒すことはできん」

「英霊の……魂が……？」

老人の顔がより厳しくなる。

「アメリカを滅ぼしたのちは、あれは日本にも来るだろう。そして、すべてを焼き尽くし、死の荒野にするだろう」

「まっってください。その怪獣ってのが、日本のために戦争で命を散らした英霊の、集合体っていうか、そういうのなら、なんで日本を攻めるんですか？」

浅間がいうと、老人は声を荒げた。

「人びとが忘却のかなたに追いやってしまったからだ」

「は？」

「皇御国のために、平和のために命を懸けた英霊の魂を貶め、はづかしめているからだ」

そのとき、大地と空気を鳴動させる爆音が鳴り響き、意表をつかれた浅間はおもわずうしろを振り返った。施設内から見えるはずもないが、F-15Jイーグルがスクランブルしたらしい。よくあることだ。

もついちど首を戻すと、そこに老人はいなかった。廊下を見渡してもその姿はない。走って逃げたというよりも、煙のように消え失せたという感じであった。

また、アブラゼミが夜の合唱をしはじめた。

判然としないまま休憩室に引き返すと、つけっぱなしにしていたテレビから、かん高いメロディがながれた。ニュース速報だった。画面上に表示されたテロップを読んで、浅間は愕然とした。

「米政府は日本時間午前1時31分、北大西洋にて巨大生物と交戦状態に突入したと発表」

いまもアメリカの船と戦っている……老人のことばが幻聴となつて浅間の耳にこだました。

濃い青空と燦々たる陽光の下、F/A-18Eスーパーホーネット二十八機が、雁行する隼の一群を高位から捉える。第102戦闘攻撃飛行隊リーヴズアイズのリーダーが発破をかける。

「一機でも減らす。艦隊の仕事を増やすなよ！」

リーヴズアイズの戦士たちが威勢よく了解の返事をする。第142戦闘攻撃飛行隊ウィズインテンプテーションズのリーダーも負けてはいない。

「空に生き、空に散ったリーヴズアイ12、テンプテーション7の歎きを晴らすぞ。しまつていけ！」

ウィズインテンプテーションズのメンバーのみならず、リーヴズアイズのパイロットたちもが応と返す。

「ちよ、隊長。おれはまだ死んでないですよ！」

隼に砲火をくらってダメージを負ったウィズインテンプテーション

ンズ七番機が、よたよたと空母に帰艦しながら言った。ライノのパイロット二十八名がいつせいに「アーメン」と唱えて無事天国へ送られるよう祈った。「死んでませんって！」

そして、リーヴズアイズのリーダーの「ゴー！」のかけ声で、ふたたびスーパーホーネットが雪崩をうって隼の後上方よりダイブする。

まばたきする間にも距離が縮まり、ついに彼我を隔てる空間が四〇メートルをきる。

照準をさだめ、トリガーを引く、のをこらえて、スロットルを絞り、減速。目が血走るほどにおのが敵を凝視する。

後方よりの接近を見すましたように、隼が右、ある機は左にロールし、急旋回で回避を開始した。予測していた挙動に、F/A-18Eパイロットたちは距離を維持しながらそれぞれの目標の行方を見る。

飛行機は、急な旋回をすると速度が落ちる。軽快機敏な機動をしてみせる隼とて例外ではない。もともと速度に優れてはいない隼の気速はさらに落ち、ライノのパイロットから見れば、その機体がHUDからはみ出さんばかりに肉薄せしめていた。これでは外しようがない。

「ファック・ミー！」

旋回中に射撃して敵に当たるまでの時間差を計算に入れ、こんどこそ機関砲のトリガーに指をかける。

M61バルカンが二十ミリをぶつ放し、それはオレンジの光を空の青と海の青のなかに存在感を主張しながら隼の機体へ吸い込まれる。

正確なねらいをつけられた猛射撃の嵐に、一式戦闘機はなすすべもなく穴をうがたれ、黒煙と火をふかせて海へと墜落していった。

同じことがほかの隼を襲った。二十八機のライノがたがわず二十八機の隼を機関砲で叩き墜とした。爆発して木っ端微塵になるもの、機体の長さの三倍以上の炎をひきずりながら高度をおとし、海に突

つ込むもの。火も煙も出さずにきりもみに回転しながら、それでも旋回をつづけ、螺旋に回りながら海面に叩きつけられるもの、さまざまいたが、とにかく敵機を半数以上片付けたのだ。両飛行隊はみな意気軒昂となった。

喜びもつかの間だ。数で勝っていたがゆえに撃墜をまぬかれた残機が、仲間が犠牲になった隙について、ライノ部隊の後方をとりはじめていた。

「やらすか！」

スーパーホーネットは二発のターボファン・ジェットエンジンを大きく開口し、機体を急加速させた。轟音を置き土産に一式戦闘機の群れから距離をとる。

だいぶ数の少なくなってきた隼たちは、F/A-18Eが離れていくと、からまった麻の紐を器用にほどくように編隊を再度ととのえ、進路をもとにもどした。

「あくまでも本命はアイクってわけかよ。しゃらくせえ」

三たび、ライノ部隊は隼編隊の後上方に占位した。さっきとおなじようにやれば、この部隊を全滅にできる。

ミサイルがあれば。そう思ったパイロットはひとりやふたりではないはずだ。ミサイルさえあれば、こんな面倒な空戦をしける必要もなく、反撃のうけるおそれもない遠くから一方的に撃墜できたろうに。

リーヴズアイズのリーダー機が音頭をとり、突撃。正確に敵機の尻につけ、回避行動をうながし、速度が落ちたところを屠る。隼の翼がちぎれ、胴体がふつとび、機体がひしゃげ、爆発した。

「当空域の敵性航空機の全滅を確認。全機撃墜だ！」

ホークアイの無線に、リーヴズアイズ、ウィズインテンプテーションズは沸いた。

「どんなもんだ！」

「日本語で、なんていうんだっけな、こういうの。そうだ、カタキウチってやつだ」

かれらは艦隊へむかう隼のうしろから忍びよったので、機首が艦隊のほうにむいている。迫り来る巨大生物を受けとめるように横をむいて展開しているグレイの巡洋艦、駆逐艦の艦影が海のきらめきのなかにおぼろげながらも確認できた。それらイージス艦から、ひっきりなしに白煙と火炎を曳いてミサイルが打ち上げられている。ミサイル群は逆Uの字を描いて海面すれすれまで高度を落とし、そろって海の上を這うような超低空飛行を開始する。

トマホークを筆頭とした巡航ミサイル、対艦ミサイルが途切れることなく発射される。いまや海の上は膨大なミサイルスモークで霧がたちこめているようになり、上空からみれば艦隊と巨大生物をつなぐ雲でできた橋が架けられているようでもあった。

海面のすぐ下を巨大生物が航走する。真っ正面から断続的にミサイルが直撃し、爆発をおこすが、意にも介さず艦隊へ猛進してくる。そのとき、またもやアンノウンから天雷の轟きをとまなう大音響が発せられた。大気を割り砕き、聞くものの鼓膜を貫通し脳を揺さぶる慟哭に、パイロット、艦隊クルーたちは顔をゆがめた。

「くそ、またかよ。なんなんだよこの声は！」

自身の悪態さえ自分で聞こえない鳴響に、おもわずかたく目を閉じたものも少なくなかった。

瞬間……聴覚の過負荷にたえきれず目をつぶったものは、ふしぎな感覚に陥った。リーヴズアイズのリーダーもそのひとりだった。暗闇に包まれた瞼の裏で、写真撮影のストロボのようにほんの一瞬だけ、ほとんどサブリミナルにちかいかいわずかなイメージの断片が閃いた。それは、いまのじぶんとおなじように戦闘機のコクピットに搭乗しているが、計器やキャノピーが相当な旧式のものだった。キャノピーは手で開閉できるようなただの風防で、半世紀以上むかしの機体のように思われた。右手はしっかり操縦桿を握っている。そして、レトロというか、アナログなOPL（電光照準器）の十字形の視界に広がるのは、戦艦の巨大な偉容。その船体がどんどん大きくなっていく。機体のすぐ上下左右の空間では戦艦からの熾烈な対

空砲火が炸裂している。それでもかまわず機体は戦艦へ突撃し、そして……。搭乗機は艦へ激突し、視界は暗転した。

つぎの瞬間には、灰いろに閉ざされた空に、天を覆うほどに大きなキノコ雲が映された。世界の終末のような画像だった。

はっと目を開けると、そこはさっきまで仲間とともに飛んでいた北大西洋の海上だった。列機もいる。蒼茫たる海にはミサイルを射ちまくる艦隊もいる。そして、ミサイルの直撃を連続で喰らいつつも駛走をやめない、あの巨大物体も。

「なんだ、いまのはなんだったんだ。幻覚か？」

リーダーに僚機からの動揺しきった声が届いた。

「どうした」

「わかりません。わかりませんが、なんか変な映像がフラッシュバックして……。ちくしょう、LSDをキメすぎたか」

白昼夢か、幻影か。そのようなものを見たのは、リーダーだけではなく、むしろ何人もいた。複数人が見たとなると、戦闘により交感神経が興奮して集団ヒステリーにでも陥ったか、それとも……。

軽いパニックになっているなか、高高度より戦域を見守っていたE-2Cホークアイから緊急入電があった。

「エクスシア1より全部隊へ。艦隊の東の方向、約三十三海里の空に未確認航空機の機影を確認。数……三〇！ いえ、なおも増加中。現在機影の数、五〇オーバー！」

「なにっ」

だれもがそう聞き返した。ホークアイとリンクしているF/A-18スーパーホーネットのリーダーには、いつのまにか敵機をあらわす光点が何十個も出現していた。

ロシア大統領との直通回線での会談を、ヒトリアは途中でなんの益もないとさとしてうやむやに切り上げた。ため息とともに革ばりの椅子に腰を深くしずめる。

「クレムリンはいつたいなにかしたいのでしょうか」

サラザール首席補佐官も呆れた顔をしていた。

「さあな。ひとつ言えるのは、受話器から馥郁たるウォッカの芳香が漂ってきたということくらいだ」

大統領執務室は、軍の諸将、秘書官、各分野の顧問のスタッフたちなどであふれんばかりだった。ひっきりなしに人が出入りし、運びこまれたテーブルの上にはラップトップをはじめとしたコンピュータがところ狭しと置かれ、ケーブルが大蛇のように絨毯を這いまわっている。大西洋軍、NATOの代表や代行、イギリス、フランス、中国の在米大使も執務室内に集まっている。およそ国内にいるほとんどの要人が一堂に会するこの場合は、状況さえちがえば高級スーツのカクテル・パーティーといった様相となっていた。大統領自身は、イギリス女王がデヴィ・ローズヴェルトに贈ったという巨大なデスクについている。

約一時間前、ペンタゴンからの連絡で、第8空母打撃群が例の巨大物体と交戦状態に入ったという情報を受けたヒットリアは、すぐさまこの執務室を総司令部とさだめた。弔い合戦の機会がはやくもめぐってきたと、多くの者がいきりたっていた。

何十台もの電話が同時に鳴るなか、ある電話が受信を確認した。

国防総省からの直通回線だ。チトー将軍がとつた。

「そうか」

チトー将軍は顔いろひとつ変えずに報告を聞いた。電話を置き、

大統領のデスクの前に立つ。

「たつたいま入ってきた情報です。邀撃したF/A-18スーパーホーネットが一機、撃墜されたとのことです」

ヒットリアの洪面にさらなる深刻さがあらわれた。

「どうやって墜とされたんだ。ヘリならともかく、戦闘機はそう簡単にはつかまえられんぞ」

「それが、墜としたのは、くだんの巨大生物ではなく」チトーはあえて揺るがぬ冷静さを強調した。「ハヤブサ、という第二次大戦時

の旧日本軍戦闘機だそうです」

ヒットリアは快晴の天頂のごとき青い目を所在なげに泳がした。顎をなで、どうリアクションすればよいかを黙考する。

むりやりのように口を開く。

「戦況は？」

「芳しくありません」さすがのチトーも声が重い。

「その敵航空機とアンノウンとの関連性は？」

「現時点では不明です。ですが、敵性航空機は、ハヤブサ、ライデンなど、すべて戦時中の旧日本軍機で構成されているそうです」

ヒットリアは眉間に深くしわを刻み、懊悩に苦しみ、デスクに肘の杖をついた右手で頭をかかえた。

そして、室内のだれにも、目の前のチトーにさえ聞きとれなかった囁きを残した。

「そうか。日本が……」

ライノのパイロットたちは、錯綜する情報に翻弄され、赫怒の炎に身を焦がされていた。

ホークアイが報告してきた三十三海里という距離は、約五〇キロメートルあまりだ。強力なレーダーによる電子の監視網をしくE-2Cホークアイが、そんな距離まで接近されるのにいまのいままで気がつかなかった、などということがあはるはずがなかった。

「おいエクスサイ。なんでそんなに敵機に近づかれてんだ。まったりポルノでも見てシコシコしてたのか」

リーヴズアイズの飛行士の口調は燃えるような怒気をはらんでいた。

ホークアイが敵機接近の探知に遅れてしまったがために、リーヴズアイズとウィズインテンプテーションズは兵装も不十分なままで空戦を余儀なくされ、結果、リーヴズアイズは仲間をひとりうしなつたのだ。さらにそのうえ、五〇キロという、ミサイルの射程にすら

入るほどちかい距離に侵入されるまで敵機が存在に気づかなかつたとなると、戦闘攻撃飛行隊のホークアイへの怒りもむりはなかつた。「ちがうんだ、リーヴズアイ9。われわれは全方位のレーダーからかたときも目を離してはいない。ほんとうにこいつらは、突然レーダー上に現れて……」

「たわけたことを！ さっきの雷電だか隼だかいうやつはステルスのスの字もねえ旧式機だった。そんなやつらがわんさかやってきてぎりぎりまで近づかれるまでレーダーに反応しないなんて、そんなばかなことがあるかい」

「しかし、現に……」

「なんだよ。じゃあやつこさんは幽霊かなんかだつて言うのか？」

「よせ」

みかねたリーヴズアイズの一番機、レーダーが止めた。

「エクスシア1、未確認航空機の予想進路は？」

早期警戒飛行隊エクスシアイの一番機、エクスシア1のレーダー官が職業軍人の声にもどつて回答する。

「進行方向は正確に西。艦隊のほうへ一直線にむかっている」

「訊くまでもなかつたか」リーヴズアイズのリダーは、仲間に平常心と合衆国海軍パイロットとしての余裕を思い出させるため、わざと笑いながらいった。

「もついちど闘牛と面と向かつてガンを叩きこむぞ。同高度正反航攻撃、用意」

ライノたちはすぐさま旋回して、新たに出現した敵航空機へ足をむけた。

レーダーをチェックする。敵性航空機を表す輝点は爆発的に出現してきている。なるほど、たしかに敵機は、レーダーの探索範囲の外から侵入してきているのではなく、レーダースクリーンに唐突に現れているようだ。その出現している座標は、あの巨大物体と寸分たがわず同じだ。艦隊まであと五〇キロにまで接近した、あのアンノウンと。みながみな、混乱した。

陽光にきら、きら、と輝く点が青空に浮かんでいる。パイロットたちのHUDには、ホークアイが指定した目標の敵機がひと目でわかるようにロックされている。

機影に目をこらす。敵編隊は、さきほど激戦を演じた雷電と隼の混合部隊であるようだった。

プロペラ戦闘機部隊と真つ向から向かいあい、ただの点だったのが急速にそのシルエットを明確にしていく。

「いまだ！……」

トリガーを引き、二〇ミリ機関砲を一心に撃ち込む。射弾が目標の敵機を貫き、爆発四散させていく。

なお航過して、背面からの攻撃にとりかかる。みな、もう無我夢中である。敵の雷電と隼しか眼中と念頭にない状況である。

そんななか、あるパイロットが、後上方から雷電の一機をロックして、射程に入ると同時にトリガーを引き絞った。

だが、M61バルカン砲は、一秒の四分の一にもみたくない刹那で砲撃をやめた。息をのみ、HUDに表示されているいろいろな情報に目をやる。

ガンの残弾数がゼロをしめていた。

「リーヴズアイ9、残弾ゼロ！」

それを皮切りに、

「リーヴズアイ5、残弾ゼロ！」

「テンプテーション13もだ、残弾ゼロ！」

何機もが機関砲の弾を撃ち尽くしていた。

「……リーヴズアイ1、残弾ゼロ」

隼の背後から機関砲を撃ったリーヴズアイズのリーダーが、なんとかその敵機だけは撃墜せしめたものの、ホゾを噛む思いで報告した。

ライノに搭載されている機関砲の装弾数は、四〇〇発。一秒に十六連射するM61バルカン航空機関砲では六秒ちよっとしか連続発射できない。

しかし、じつさいの空対空戦闘においては一秒か二秒しか射撃のチャンスはない。空戦は、勝つも負けるも一瞬できまる……フライトアカデミーでは耳にタコができるほど教官に聞かされた話だ。だから、六秒も連続発射できればそれでじゅうぶんなのだ。六秒も撃てるチャンスがあつて敵を墜とせないなら、そのころにはこちらが墜とされているということなのだから。

それがF/A-18スーパーホーネットの運用思想だった。ほかの現代戦闘機もさしてかわらない。

ミサイルもなしにたった三〇機で、半世紀以上むかしの機種とはいえ百を超す敵機とやりあうなど、そんな構想で設計などされていない。

ホークアイが苦鳴をもらす。

「エクスシア1から全部隊へ。さらなる敵機の増援を確認」

「ファック！」何人もが叫んだ。「数は？」

「二〇〇……三〇〇、まだ増える。敵機の数は一五〇〇を超えている！場所は……アンノウンと同座標！」

リーヴズアイ・リーダーは顔を上げた。澄みわたった青空をしみのように覆いつくす暗雲が、いつのまにか飛行隊に迫ってきていた。暗雲のように見えたのは、突如として湧いて出た敵戦闘機の群れ。その大群が薄黒い霞となって押し寄せてきたのだ。見渡すかぎりの敵、敵、敵……。

いかに最新鋭のジェット戦闘機でも、弾がないのでは戦いようがない。みるみる何百機という敵機が近づいてくる。

ここでおしまいか……だれもがそう思ったとき。

西の方角から、音速の四倍で飛来した槍衾が、敵機に命中。破砕して爆炎に包み、機体を粉々にして空に散らした。

「AMRAAMだ！」  
ラムラーム

ミサイルが殺到してきた方角……艦隊のほうから、待ちに待った援軍が来た。ナイトウィッツシリーズ所属のF/A-18Eスーパーホーネット十四機だ。

「待たせたなリーヴズアイズ、すまなかったなウィズインテンプテーションズ。泣いてると聞いて飛んできたぞ」

臨時にリーダーをつとめるナイトウィッツシリーズ二番機の無線に、安堵のため息がそこかしこからもれた。

「遅いんだよ。もったいつけやがって」

ウィズインテンプテーションズのだれかの強がりに、ナイトウィッツシリーズのひとりが笑う。

「ばかいえ。それでも血を吐くほど急いできたんだぜ」

リーヴズアイズ・リーダーが時計をみた。すると驚いたことに、いちばん初めの雷電を掃討したときから、まだ十四、五分くらいしか経っていなかった。体感ではもう何十分、ともすれば一時間以上も戦っていたような気がするが、じっさいにはそれくらいしか経過していなかったのである。いかに空戦が時間の密度が高いものかを、いまさらながらに思い知らされた気分だった。

ナイトウィッツシリーズのF/A-18E編隊のさらにうしろに、三機か四機のF/A-18Fも向かってきているのがみえた。

「アンベリアンドーンズ、参上だ。残りも随時、発艦してきている」  
アンベリアンドーンズ所属のF/A-18Fは、ほかの飛行隊が駆るF/A-18Eとちがい、複座型なので、一目みただけでそれとすぐわかる。

「ここはおれたちが引き受ける。おまえたちはベッドに帰りな!」

ナイトウィッツシリーズが宣言し、戦意を新たにする。

「了解だ。リーヴズアイズ、帰艦する」

「感謝するぜナイトウィッツシリーズ、アンベリアンドーンズ。ウィズインテンプテーションズ、おうちに帰るぞ」

ミサイルロックの邪魔にならないように迂回しながら、両飛行隊はアイクへの帰路へついた。

眼下では、あいかわらず巡航ミサイルが絶え間なく撃たれ、飛翔している。

ナイトウィッツシリーズとアンベリアンドーンズ、あわせて十八機は

ふたたび敵機の大群に照準をさだめた。搭載してきたAMRAAMは計二発。さつき一発ずつ撃つたので、あと十八発。

AMRAAMは、発展型中距離空対空ミサイルで、その射程は七十五キロメートルもある。このミサイルなら、敵の射程圏外から安全に狙い撃ちすることができる。

すでに敵機は射程内にはいつている。ホークアイからの電子的な指示で個別ロックを完了し、すぐさま発射する。

「ウィツシュ2、FOX3！」

「ドーン1、FOX3！」

翼下のハードポイントから切り離された槍が、ジェットエンジンで加速し、白煙を残しながら飛んでいく。

ナイトウィツシーズ十四機と、アンベリアンドーンズ四機から放たれた十八発のAMRAAMが、雲霞のような敵の群れに迷いもなく突っ込む。

とうぜんのように命中し、雷電も隼も翼がもぎとられ、胴体を分断され、炎と黒い煙を吐いて海へと墜ちていった。

「つぎはサイドワインダーだ。各機、サイドワインダーを用意。射程の八キロに入ると同時に発射するぞ。突撃！」

装備してきた短距離赤外線追尾ミサイル、サイドワインダーは四発。都合、七十二発のサイドワインダーをもっていることになる。

一機が四機ずつ敵機をロックし、スロットルを開いて突進する。

敵のプロペラ機の群れは黒いカーテンというか、ほとんど巨大な壁のように海上の空にそびえたっている。時速八〇〇キロ超でその壁に突っ込むのはそうとうな勇気がいった。

漆黒の壁が迫りくる。すさまじい圧迫感に息がつまり、呼吸を忘れそうになる。

だれもが、壁にぶつかる、と思ったところで、射程距離に入ったことを知らせる電子音になり、F/A-18EとFから四発ずつのサイドワインダーが発射された。空中に解き放たれたサイドワインダーは、その名のとおり（サイドワインダーの名の由来はヨコバイ

ガラガラヘビの英名から）わずかに蛇行しながら命じられた目標へ食らいつく。

何百という戦闘機が群がってひとつの巨大な魔獣のようになった敵編隊に、赤とオレンジの炎が点々と灯った。全弾命中だ。七十五の敵機を墜としたのだ。

だが飛蝗（ひこう。バッタが大量発生する現象）のように軍勢をなす雷電と隼はまったくその数を減らしていないように見える。むしろさつきより増えているのではないか。そんな錯覚さえパイロットたちはおぼえた。はたしてそれは錯覚ではなかった。

「こちらエクシア2。敵機はさらに増加中。現在七〇〇を超えている！……」

ナイトウィッツシーズとアンベリアンドーンズのパイロットは齒噛みした。そしてこの敵プロペラ機と戦っていた前任者たちと同じ苛立ち、同じ恐怖感を胸に宿した。いったいこのプロペラ機どもはなんなのだ？ どこから湧いてでてきているのだ？……

とまれもうかれらにミサイルはない。後方からアンベリアンドーンズの残りの機が一機ずつ飛び立ってきてはいるが、焼け石に水だろう。

「くそ。おれたちやけつきよく、ただのミサイルのトランスポーターかよ」

ナイトウィッツシーズの飛行士が吐き捨てたが、ウィツシュ2は、やむをえない、と無線を開いた。

「ウィツシュ2よりUSSクレイテ・ガルフへ。敵性航空機に対する攻撃支援を要請する」

「巨大アンノウンに手一杯のわれわれに対空支援要請するか」

USSクレイテ・ガルフへの艦長が食ってかかる。

「こういつとぎのためのイーグス艦だろ」

「よかるう。鉄壁の盾イーグス、その真髄を見せてくれる」

USSクレイテ・ガルフへの艦長が副長に命令する。

「対空戦闘だ。全艦、データをリンクし、敵航空勢力を最大効率で

撃破せよ。中距離以上の目標にはESSM（発展型シースパロー艦対空ミサイル）、スタンダード艦隊防空ミサイル。近づかれたら速射砲で撃ち墜とせ。CIWSも起動用意だ。むろん、アンノウンへの対艦攻撃も同時並行だ！」

「了解。全艦データリンク。対空戦闘用意。アンノウンに引き続き攻撃を加えつつ、ESSM、スタンダード発射準備。五インチ砲、二十五ミリ機関砲、十二・七ミリ機関砲ならびにフラנקスの起動を認証せよ」

イージス巡洋艦USS<レイテ・ガルフ>艦長が吠える。

「右をねえ。左をねえ。わがアメリカに仇なす患者を根絶やしにせよ！ イージスシステム解放。攻撃開始！」

イージスシステムは敵航空勢力やこちらに向かってくる対艦ミサイルなどを強力なレーダーで感知し、種別や彼我の距離によって最適な兵装を選択、そしてじつさいに火力を行使する。これらの過程はすべてコンピュータにより自動化されている。

六隻のイージス駆逐艦と一隻のイージス巡洋艦が、巡航ミサイル発射と並行して、対空ミサイルを格納してあるVLSを開放。一セルに四発ずつ仕込まれている各種対空ミサイルを順次発射していく。「わが艦、USS<レイテ・ガルフ>、ESSM発射を確認。イルミネーター起動、誘導を開始。スタンダードSAM発射。駆逐艦USS<オカーン>、USS<ポーター>、USS<バリー>、USS<ラブーン>、USS<ミッチャー>、USS<ベインブリッジ>もESSMならびにスタンダードの発射を確認」

七隻のイージス艦からさきほどよりもまして大量のミサイルがづぎづぎ撃ち上げられていく。何十条もの鋼鉄の投槍が白煙の軌跡をのこして天空へ勇翔していくさまは、さながら神々のいくさのようでもあり、ある意味で壮麗とさえいつてよかった。

手持ちぶさたでぶらぶら遊弋していた二隻のミサイルフリゲート、USS<ハウズ>とUSS<カウフマン>が、防空網の一端をになうべく、三インチ六十二口径単装速射砲とCIWSの起動準備をし

つつ艦隊の前線に陣取った。

飛翔していった対空ミサイルの群れは、ロックした敵戦闘機に正確に命中し、鉄クズに変えていった。ミサイルに撃墜されて爆発し、無惨な破片だけが燃えながら海へと落下していく。最新兵器で血祭りにあげられる旧式機の残骸と黒煙で、空は惨憺たるありさまだ。まるで沖縄海戦の再現のようだった。

ただちがうのは、あのときは戦闘機の数にケタがちがいに多いということだ。

「各艦のESSM、スタンダード、命中と目標の撃墜を確認」

いちどに何十発もの対空ミサイルが敵編隊を迎え撃つが、雷電と隼の混合部隊は何百という数で押し寄せてきている。ESSMは発射したイージス艦がイルミネーターで最後まで誘導してやらなければならないし、スタンダードも同時に捕捉できる目標は十五コが限界だ。ミサイルによる処理能力の限界を超えている。

それゆえ対空ミサイルの網の目をくぐり抜けた戦闘機もいた。

「敵機の群れ、三機に一機は対空ミサイル防衛圏を突破。対空機関砲、五インチ艦砲、CIWS、起動を確認」

対空ミサイルに捕捉されずにさらなる接近をはたしたプロペラ機たちを個別にロックし、巡洋艦と駆逐艦の船首付近に備え付けられた主砲が砲身をめぐらせる。高性能レーダーに裏付けされたイージスシステムにより、自動的かつ高度に射撃管制された単装砲が対空目標を無言でねらう。

爆発音とともに発射された砲弾は、初速八〇メートル毎秒という高速で空を駆けめぐり、イージスシステム搭載艦に不用意に近づいた報いを与える。

タイコンデロガ級巡洋艦とアーレイ・バーク級駆逐艦に搭載されている主砲は、ともにMk45という五インチ砲だ。五インチとは砲の内径、つまり砲弾の直径であり、五インチは一二七ミリである。そんな大砲がマッハ二以上の速さで発射されれば、その運動エネルギーは膨大なものとなる。

艦隊まで二〇キロメートルあたりまできた隼に、イージス艦から撃たれた五インチ砲が直撃。砲弾は貫通し、隼の機体は紙でできていたように真つ二つに裂け、しばらくしてから、やっと自分が撃墜されたことに気づいたかのように爆発をおこした。

五インチ砲の発射間隔は、だいたい三秒に一発。爆発音と硝煙を盛大にあげて砲弾を発射し、次弾を自動装填しながら次の目標に砲身をむけ、火砲を放つ。

ESSMとスタンダードのミサイル防空網をすり抜けてきた隼、雷電が、艦隊より二〇キロ先で正確無比に狙撃され、叩き墜とされていく。

「こちらエクシア3。レーダー反応は減っていくスピード以上に後続が増えている。現在、敵航空機の数は一〇〇オーバー！」

対空ミサイルによる防衛のキャパシティを大幅に超越する数の来襲。より多くの敵機がミサイル防空網を突破してくる。各艦の五インチ砲がいそがしく撃ちまくり、ミサイルフリゲートも三インチ六十二口径単装速射砲をもって防空に加わるが、次弾装填して次の標的に照準をさだめているあいだにほかの敵機が殺到してくる。圧迫感と恐怖とで発狂してしまう乗組員が出ないのがふしぎくらいだ。日頃の訓練によって高められた練度がかねらの冷静さをまもる錠前であり、鍵は艦隊指揮官である少将に預けられていた。

各艦の五インチ砲による艦砲射撃が敵機を次々撃ち抜いていく。敵機の群れの大半がミサイルにより接近を阻まれているとはいえ、少なくとも数が五インチ砲の射程である二十五キロ圏内に侵入してきている。

数機が砲弾の雨をかくぐり、さらに艦隊に肉薄する。巡洋艦や駆逐艦の艦橋から肉眼ではつきり視認できる距離だ。もう三キロもない。

もつとも敵機に近かった駆逐艦USS<ミツチャー>の艦体に二基艦載されたCIWSが目醒ます。

円筒状のレーダードームが射程内に敵航空勢力を探知。レーダー

ドームの下から伸びる六連装バルカン砲が、レーダーの探知した敵機を見さだめる。

砲身が回転をはじめ、毎秒七十発にせまる超高速連射を空に見舞う。

二十ミリ砲弾の一連射を浴びた雷電は、樽のような太い胴体を左右に引きちぎられ、白熱した炎をあげて爆発した。

近接防御火器システム（CIWS）は、敵を探知するレーダードームと、探知した敵を攻撃するバルカン砲から構成される。対空ミサイルと艦砲の二重の防空網は強力だが、万一撃ち漏らしたら艦艇は命取りとなりかねない。CIWSはそういった敵機や対艦ミサイルの迎撃を請け負う、まさに最後の砦である。

さらに、巡洋艦、駆逐艦それぞれ一隻につき二基装備されている二十五ミリ機関砲、四基ずつ搭載している十二・七ミリ機関砲もCIWSに追従して火を吹く。裸電球のように光る弾が一連の紐となつて艦からいく筋も伸びる。それはまさしく弾幕の防壁。

空母への帰途についていたリーヴズアイズ・リーダーは、艦隊を守るバリアのようなものが幻視できる気がした。遠距離ではESSMとスタンダードの対空ミサイルで、中距離では五インチ砲で、そして近距離ではCIWSをはじめとする弾幕で。その複合多層バリアが敵機の襲来を押し留めているのが見えた。

イージス、あらゆる災厄を祓う不可侵の盾。その名に恥じない鉄壁の絶対防御の加護が、厳然として雷電と隼の前に立ちはだかつているのだ。

その加護に、翳りが見えはじめた。

USS<ポーター>の中距離防空になう五インチ砲の射撃がとまった。それを皮切りに、ほかのイージス艦の主砲が発砲しなくなった。

五インチ砲は二十発をワンセットにして装填されている。それを使いきってしまったのだ。銃でいえば、弾倉のなかの弾丸をすべて撃ちつくしてしまった状態である。甲板下で弾切れにそなえて待機

していたオペレーターたちが大急ぎで砲弾の供給にとりかかる。それとまったく同じことが、CIWSにも起こった。

ほんの一時的とはいえ、防空網に穴が開いた。そこを敵機編隊が最大速度で一気呵成に押しかける。ちょうど、城を守る城壁の一部が破られて、そこから敵兵がなだれ込んできている感じた。

その戦闘機の群れには、雷電や隼とシルエットを異にする機体があった。

その戦闘機は、両翼に一発ずつプロペラエンジンを搭載した双発機で、機体表面はスプレー・ガンで塗装されたような濃緑色と若草いろのまだら迷彩をほどこされている。しかも、隼はもとより、雷電よりも優速で、列機を置き去りにして編隊前方に突出している。

空母から発艦したアンベリアンドーンズのパイロットがその双発機をロックする。

スーパードホーネットが短距離赤外線追尾式空対空ミサイル、サイドワインダーを発射したのとはほぼ同時に、双発機が胴体にかかっていた、六角柱のコンテナを切り離し、投下した。

双発機は回避もできずミサイルの餌食となつて爆散した。だがそれが投下したコンテナは、母機の飛行の惰性で、徐々に高度を落としながらも空中で前進をつづける。

その先にあるのは……双発機を墜としたライノのパイロットは狼狽した。

「USS<バリー>！ CIWSでも対空機関砲でもなんでもいいからさつさと再起動しろ。爆弾らしきものが貴艦に接近している」「こちらでもレーダーではとらえている。だが弾薬の供給が……」

慣性の力で自由落下していたコンテナは、アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦USS<バリー>の三時方向、高度五十メートル、水平距離七十メートルほどのところで空中分解した。六角柱のコンテナが、なかにつまっていた小さな丸薬みたいなのを百個ちかくばら撒いた。「フランクス、発射準備完了！」

だがばら撒かれた芥子粒は一個一個が小さすぎて、イージス艦搭

載のCIWSのレーダーでは捕捉できない。

黒い芥子粒が雨となってUSS<バリー>にふりそそいだ。

駆逐艦の船体表面にふれた芥子粒ひとつひとつが炸薬を爆発させ、無数の線香花火のようなオレンジの火花を散らした。その火花が、USS<バリー>の全身を舐めまわした。

「なんだあれは！　デイスペンサー兵器か？」

USS<バリー>艦内はわやになっていた。

「損害を報告せよ」

「右舷に被弾。右側方、前方、後方のフェイズド・アレイ・レーダー、ダウン。Mk32短魚雷発射管、損壊」

「イルミネーター1、2ともに損壊。ESSMの誘導が不可能です！」

「ばかな。四つあるうちのフェイズド・アレイ・レーダーを三つもやられたのか！　丸裸同然じゃないか！」

双発機がコンテナを投下し、ジス駆逐艦を攻撃するさまを、遠目に見ていたリーヴズアイズ・リーダーは、奥歯を噛み砕かんほどに歯ざしりしていた。

「夕弾……ドラゴンスレイヤーか！」

空母USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>の戦闘指揮所で、CAGも同じことをいった。

「なんだそれは。なんだあれは」

少将の問いに、CAGが興奮に舌をもつれさせながらこたえた。

「あの双発機は、旧日本陸軍の二式複座戦闘機、またの名を屠龍という戦闘機です。運動性こそ単発機に劣り鈍重ですが、それをおぎなう高速性と武装搭載量をもち、機首に十二・七ミリ機関砲二門、胴体下面に三十七ミリ戦車砲を搭載しています。しかし最大の特徴は、夕弾という空対空爆弾を使うことです。これは大戦中、日本本土空爆をおこなっていたわが国の爆撃機を邀撃するために考案されたもので、敵編隊上空で投下し、小爆弾を散布してダメージをあたえるという代物です」

「クラスター爆弾か」

「イエス・サー。事実、B-29を撃墜するなどの戦果もあげたようです。ですが……」

CAGはスクリーンに映されたUSS<バリー>をみて眉間にしわをよせた。最新技術の粋をあつめたイージス駆逐艦が、薄く黒煙をあげ、ところどころから火災も起きている。

「まさかイージス艦あいてにつかうとは……」

イージス艦は、レーダーやアンテナなどの電子精密機械がすべてむきだしの状態になっている。いわばコンピューターのかたまりだ。ひとむかし前の戦艦なら問題なかったような被弾でも、イージス搭載艦には致命弾になりかねない。屠龍の放つタ弾は、現代のイージス艦にはきわめて有効な兵器といえた。

運よく被弾をまぬかれたUSS<バリー>のCIWSが、接近してきた後続の雷電や隼、屠龍をバルカン砲で撃ち墜とす。機体が粉碎され、燃える破片となって艦艇にふりそそぐ。

CIWSは近接防御火器システムというだけあって、射程は二キロほどと短い。これほど近づかれれば、首尾よく敵機を撃墜できても、飛行の惰性で飛んできた破片で被弾してしまうということも当然ある。ある程度のダメージはもうしかたがない。そのまま接近を許すよりかはましだという、最後の手段である。

CIWSに撃たれ、燃えながらプロペラだけが回転をつづける敵機のエンジンが、USS<バリー>の甲板に隕石のように落下した。まるで切断した首だけが飛んできたような光景だった。エンジンが落下した付近にあった五インチ砲が巻き込まれ、根元から折られた砲塔が風車のように回転しながら海へ放り出された。

悪夢は終わらない。

「艦長！ 麾下駆逐艦USS<ポーター>より入電。『われ、対空ミサイルおよび巡航ミサイル、弾数のこりわずか』」

「USS<ベインブリッジ>からもです。『わが艦、巡航ミサイル残弾ゼロ。対空ミサイルのこりわずか。近接防空網が押しきられる。』」

なおも敵機の大量襲来を受く。化物、化物だ畜生!」

六隻の駆逐艦を指揮する巡洋艦USS<レイテ・ガルフ>に、各艦からの悲痛な叫びが届く。

いままで盛大に連続発射していた、VLSからの対空ミサイルやトマホーク巡航ミサイルが、艦によっては打ち上げられなくなった。それは駆逐艦よりも多くのVLSをもつ巡洋艦USS<レイテ・ガルフ>とて例外ではなかった。

「わが艦の火力を報告せよ」

巡洋艦艦長が命じ、乗組員がデータをあつめる。

「ESSM、のこり八発」

「スタンダード、残弾二十」

「トマホーク巡航ミサイル、のこり二発……いま発射したのがカンバンです!」

無線が悲鳴をつたえる。

「USS<ラブーン>からUSS<レイテ・ガルフ>へ、わが艦の対空ミサイル、巡航ミサイル、ともに残弾ゼロ! 撤退命令を出してくれ!」

「こちらUSS<オカーン>。もうミサイルも砲煩兵器もない。これじゃただの鉄の棺桶だ。敵機が続々きている。目の前に敵機が、まるでゴグ、マゴグのように……」

USS<オカーン>との通信が途絶した。屠龍が投下したタ弾が艦橋を襲い、アンテナもレーダーも使い物にならなくさせたのだ。

旗艦を護衛する防空網が、その手足を一本、また一本ともぎとられていく。

「少将。これを」

空母USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>の戦闘指揮所で、艦隊と航空部隊の情報を部下とともに整理していた少将に、レーダー解析をしていた士官が建白した。

少将がそのレーダースクリーンを覗きこむと、士官はコンソールを操作し、

「これがさきほどナイトウィッシーズ一番機が撃墜した彩雲とやらの航路です。そして、これがアンノウン……巨大生物の現在たどっている航路と、予想される進路です」

彩雲の航路をしめす線は、東の方向からまっすぐ艦隊へ伸びていた。そして、その線と寸分たがわず、いま艦隊に猛スピードで迫ってきている巨大生物の航路と延長線がピタリと重なった。

「どういうことだ」

「揣摩憶測は混乱のもとですので、あまり口にはしたくないのですが……」

少将が促すと、士官は顔いろをうかがう様子でいった。

「あの彩雲は、アンノウンの斥候かなにかだったのではないだろうか、と……」

艦橋に飛び交う無線通信のなかに、リーヴズアイズのリーダーの声が響く。

「ホークアイ、敵機の増援の出現位置は？」

「いままでとおなじだ。巨大アンノウンと同座標からいきなり現れている。まだ増えつつづけているぞ」

「了解」

一拍、間があった。

「こちらリーヴズアイズ・リーダー。これより反航してアンノウンに接近。“手品”のタネを目視確認する」

艦載の航空団を指揮する通称CAGをつとめるフランコ大佐が雷光の速度で無線機をとる。

「リーヴズアイ1、そんな命令は出していない。貴機は残弾がゼロである。進路を維持し、帰艦せよ」

「リーダー上だけでは詳細がわからない。だれかが肉眼で見に行かなきゃならない。なら、たいていの旧日本軍機なら網羅しているおれが行くべきだ。ちがいますか」

アメリカ人の消防官やレスキュー隊の現場での殉職率は世界でもトップクラスである。アメリカ人の男性は英雄願望がことさら強く、

ときに命をもちえりみない無謀な突撃をかけてまでヒーローになる  
うとし、そして悲惨な末路をたどってしまうのだと統計は語る。軍  
人、それも海軍パイロットというエリート中のエリートならばその  
傾向はなおさら強い。

少将もCAGも、そんなふうにはヒーローになろうとして死地に飛  
びこんだ部下が二度と帰ってこないというにがい経験をもっている  
から、リースアイズ・リーダーを制止しようとするのはとうぜんだ  
った。だが、リーブズアイズ・リーダーは聞く耳をもたなかった。  
男ならつねに納得のいくおこないをせよ、納得いかぬときは命を懸  
けてでも戦えと、尊敬する祖父にそう薫陶されてきた。

「危険を冒すものが勝利する。これよりアンノウンにむかう」

決然といい放ったリーブズアイズ・リーダーは、機体をバンクさ  
せ、垂直左旋回でターンし、進路を百八十度転回した。

海拔三〇メートル程度の低空飛行をしながら、リーブズアイズ・  
リーダーはいっさんにアンノウン目指し、巡航速度よりも早めの亜  
音速で飛んだ。すぐに、海面直下を鷲進する巨大物体を発見した。  
アクアマリンの海面が、ドーム状に盛り上がり、それがどんどん進  
んでいく。まるでカーペットの下にもぐり込んだ猫かなんかがその  
まま潜行を続けているような感じだ。しかし、飛翔してきたトマホ  
ーク巡航ミサイルや、徹甲弾頭を装着したタクティカル・トマホー  
ークが激突、爆発して白い水しぶきの珠を散らしているのを見て、そ  
の生やさしい印象はすぐに払拭された。

なおも進撃をやめぬドーム状の水塊の上部から、小さな水柱がい  
く本もはじけるように立つのが見えた。水柱の大きさは、それこそ  
水しぶきにまぎれるほどに小さきものだが、それはアンノウンのあ  
まりの大きさに感覚が狂わされているからで、じっさいには水柱の  
高さは十メートルかそこらはあると思われた。海水に身を包んだ半  
球状の物体から数十本も白い水柱が生えるようすは、その一瞬だけ  
を写真にすれば、海に浮遊する巨大なウニのようでもあった。

水柱が立つのと同時に、なにか黒い点がそこから空へ向けて飛び

立っているようだ。それが水塊から飛び出すときに、周囲の海水をおしのけ、水柱となって飛散させているらしかった。

いったいなにが出てきているかとHUDをズームアップして映像を拡大し、思わずリーヴズアイズ・リーダーは、あっと声を上げた。「どうした。なにかわかったかリーヴズアイ1」

リーダーは無言だった。CAGの無線があつたことにしばらく気づけないほど啞然としていた。

「サピエンチア、応答せよ」

語気つよく、TACネームで呼ばれて、ようやくリーヴズアイズ・リーダーは正気を取り戻した。そして、いま目にしたことを歪曲なく報告する。

「リーヴズアイ1からUSS<ドワイト・D・アイゼンハワー>へ。元凶はあいつだ。現在交戦中の敵航空機は、アンノウンから放出されている！」

無線を聴いていたイクのクルー、多数のイージス艦、ミサイルフリゲートの乗組員たちは、みな一様に驚愕に身を貫かれ、呼吸が途絶した。リーヴズアイ・リーダーの無線を理解しはじめると、こんどは心臓を氷の指で握られるような恐怖感が襲ってきた。

リーヴズアイ・リーダーは目を離せずにいた。あの猛進をつづける半球状の水塊の背中から、雷電、屠龍、もしくは隼が水柱とともに飛び出し、姿勢と高度とエンジン出力を瞬時に安定させて、列機とともに雁行をはじめるさまを。原理不明な発進方法だった。むしろワームホールかなにかの高次元通路を介して召喚されているといわれたほうが得心がいきそうな、異常な光景であつた。

「ということは」

少将が血の気のうせた顔いろでだれにともなくつぶやいた。

「最初に接近してきたサイウンも、われらのリーヴズアイ12を撃ち墜としたハヤブサも、いや、いちばんはじめのUSS<ハリー・S・トルーマン>のときにホークアイを墜としたのも、すべてやつ

の差し金か！」

巨大物体の前部から、弾丸のようになにかが射出される。いくつもだ。空母から艦載機がカタパルトで発艦するのと似たようなようすだ。

それもやはりプロペラ航空機だった。射出されたいきおいそのままにきりもみに回転しながら飛び、ある程度進んだところで、胴体にそってピツタリ折り畳まれていた主翼を、鷹のようにばつと開く。姿勢を安定させ、自力飛行を開始したレシプロ機は、胴体下に長さが機体の全長ちかくもある円筒形の凶器を抱えていた。

リーヴズアイズ一番機パイロットは、その機影に、これまで以上に瞠目させられた。

「特殊攻撃機、晴嵐……そんなものまで出してくるか！」

隠密性を自慢とする潜水艦に航空機を搭載して偵察などにつかうという構想はわりと古くからあった。だが第二次大戦中、日本は海底空母なる潜水艦をつくり、世界で唯一、ほんとうにその構想を現実のものにしてしまった。ドイツのUボートの技術を導入されて誕生した、伊号潜水艦である。

そしてその伊号シリーズの極北こそ、当時世界最大をほこった伊号第四〇〇潜水艦であり、専用の搭載機、晴嵐せいらんであった。

その特殊攻撃機が、半世紀以上の時をこえ、大西洋の海でアメリカに牙をむいた。時速五五〇キロの速さで低空を飛びながら、艦隊へ針路をさだめる。みれば晴嵐が何機も何機も射ち出されている。ざつと数えてみても二、三〇機はいそうだ。

「なんなんだ、こいつは……いつたいていどうなっているんだ」

リーヴズアイズ・リーダーは戦慄した。

イージスの役割をはたす巡洋艦と駆逐艦からの対空ミサイルはのこりすくなく、発射がまばらになってきている。そのわずかなミサイルでさえ高空を飛行する雷電、隼、屠龍にかまいきりで、海面の上を迂るように巡航する晴嵐の編隊には目もくれない。晴嵐は艦隊にそりそりと確実に接近をはたしている。

リーヴズアイズ・リーダーは、懸命に晴嵐の緒元を思い出してい

た。晴嵐の武装は、たしか八〇〇キロ爆弾ひとつ、もしくは航空魚雷一本だったはずだ。

魚雷。リーダーは晴嵐が腹にかかえている細長い筒状のものを見張った。あれは魚雷にちがいない。

「リーヴズアイズ・リーダーからUSS<ドワイト・D・アイゼンハワー>へ。雷装した敵機が低空飛行で接近中。攻撃機の数約三十」

一機でも撃ち墜としたい！ もどかしさばかりがつのるが、こればかりはどうしようもない。ミサイルもバルカンもまったく使いきってしまったのだ。

と、航行していた晴嵐が、胴体下面に懸吊していた航空魚雷を切り離れた。それはブルーの海に着水し、海中にその身を沈めた。

そして、それは海のなかでまっすぐ一直線に航走しはじめたのである。

リーヴズアイズ・リーダーは夢中になって旗艦に伝えた。

「敵機の航空魚雷投下を目視にて確認。艦隊は至急、回避行動されし」

魚雷接近の報は、各艦のソナーからももたらされた。

「ソナーに感あり。側面1-2-5より三〇。速力四〇ノット」

巡洋艦、駆逐艦、ミサイルフリゲートの艦内に警報がけたたましく鳴り響いた。

「転舵！ 面舵一杯、九〇度。全速三分の二。敵魚雷に対し艦を並行にせよ」

晴嵐の部隊は、ただか正直に艦隊へねらって魚雷を投下したのではなかった。三十機は、等間隔に角度をつけ、三十本の魚雷を扇状に放ったのだ。一本をよけようと走れば、前方に放たれた魚雷にあたる。被弾する面積をすこしでもへらすために船首を魚雷のくる方向にむける。魚雷の弾幕をすり抜けるべく、艦隊の必死の操艦がはじまった。

整然としていた艦隊が隊列を千々に乱れさせた。突然の雷撃をど

うにかよけなければならぬし、味方の艦船と衝突してもいけないしで、リーヴズアイズ・リーダーが空から見ていてはらはらするほどだった。

「こちらソナー、魚雷接近！ 距離二・七哩！」

五キロメートルまで迫った一本の魚雷に、駆逐艦USS<バリー>のソナーは悲鳴をあげた。

「機関全速！ 短魚雷発射、敵魚雷をねえ！」

「だめです、魚雷発射システムはさっきのディスプレイ兵器で損壊しています！」

クルーが絶望に押し潰されそうになったそのとき、USS<バリー>の目の前、二・五キロの海面で爆発がおきた。衝撃と爆圧が艦を襲ったが、直撃にくらべれば百倍ましだ。

「敵魚雷の反応消滅！」

なにがおこったのか、一瞬判然としかねたが、無線から救い主が声をかけてきてようやくわかった。

「あぶなかったな。われわれを忘れてもらっては困る」

USS<バリー>の艦橋で、副長が感極まったようすでいった。

「<グリーンヴィル>！」

海中で警戒行動をつづけていた原子力潜水艦USS<グリーンヴィル>が発射した魚雷が、USS<バリー>をねらっていた航空魚雷を正確に撃破したのだ。

「海の上はお祭り騒ぎだ。だれもかれもが好き勝手に逃げまどっている。敵の魚雷から味方を守るぞ。水雷長、発射準備は？」

「一番は再装填中。二番から四番まで注水完了。いつでもオーケーです」

「ようし。ソナー、上のようすはどうだ」

「お話にならんほどの激しさです。どれがどの艦かわからないほどですよ」

「船の音ならみんな味方だ。敵魚雷をみのがすな」

「アイ・サー！」

直後のことだった。直進してきていた巨大物体が海面から消えた。極太の航跡だけがぶきみに残っている。

「潜った！」リーヴズアイズ・リーダーはそれをあまさず見ていた。「やつが潜航したぞ！」

USS<グリーンヴィル>のソナーも異変に気づいた。

「艦長、こちらソナー。アンノウンが針路を変更。左舷上方。進路予測……わが艦に向かってきます！」

「取り舵一杯。アプトリム十度、深度一〇〇！」

「アンノウン急速接近。距離〇・五浬！」

もう九〇〇メートルもない。ソナーはヘッドセットから恐ろしい音を聞いた。

「巨大な……心臓の音が！」

USS<グリーンヴィル>を強い衝撃が襲った。なにかとてつもなく巨大で、力強いものに激突された感じた。重力が変化し、隔壁が床になり、天井が床になった。原子力潜水艦の船体は、巨人にシイクされるフラスコのように激しく揺さぶられた。次の瞬間、USS<グリーンヴィル>の乗組員は、狭い艦内のなかで、宇宙遊泳するようにからだが浮遊する感覚をあげわった。

ミサイルフリゲートUSS<カウフマン>が、ジグザグ航行で魚雷をよけようとするUSS<ミッチャー>の後方五〇〇メートルを通って、艦隊の最前線へ出張った。ミサイルフリゲートも短魚雷発射管を装備している。

「敵の雷撃を魚雷で防御する。対空砲火そのまま、Mk46軽魚雷発射準備」

と、前方の海で、逆さの竜巻のごとき怒濤が逆巻いた。海面を突き破って、漆黒の船体が空へと躍り出る。

「<グリーンヴィル>……！」

ロサンゼルス級原子力潜水艦USS<グリーンヴィル>が、巨鯨のディスプレイのように宙を舞い、一〇〇メートルをこす巨体が完全に海中からその全身を現す。

やがて原潜は重力の見えざる手にひかれ、放物線を描いて落下をはじめ。その終着点に、ミサイルフリゲートUSS<カウフマン>の艦影があった。

「機関全速！ エンジンが焼ききれてもソナーがめくらになってもかまわん。このままツツ走れ！」

高性能ガスタービンエンジン二基をあわせた四万ー〇〇〇馬力が全力をふりしぼるが、抵抗のつよい海水はそう簡単に増速を許さなかった。

USS<カウフマン>の船体に、十の字を形作るように、USS<グリーンヴィル>がのしかかる。落下のエネルギーと大質量の威力をくわえた原潜の頑強な船殻が、ミサイルフリゲートの艦橋を押し潰し、船体中央をへし折られ、反作用で<カウフマン>の船首と船尾が持ち上がる。

わずかな間において、USS<カウフマン>が大爆発をおこした。黄いろとオレンジの炎が荒れ狂い、空と海を焦がした。のしかかっていた<グリーンヴィル>が爆風で船体を前後に分断され、誘爆をおこしながら海へもどっていった。

爆発で吹き飛ばされたミサイルフリゲートと原潜の破片が全方位に鉄と炎の散弾を降らせた。

駆逐艦USS<ミッチャー>に破片が燃えながら襲いかかる。

「被弾、被弾！ 後方レーダー沈黙。ミサイル発射筒、魚雷発射管損壊。艦載のヘリコプター全壊。飛行甲板にも損傷多数！」

ソナーからも逼迫した事態が伝えられる。

「艦長、右舷より魚雷接近！ あとサンマルでわが艦に命中します！」

「直進だ。直進して回避せよ」

<ミッチャー>艦長が下命するが、艦橋から艦の進行方向をみた副長が蒼惶とした。

「艦長……！」

艦長が顔をむけると、自艦の前方、左舷側から、同型艦がいく手

をさえぎるようにぬつと顔をあらわした。

「USS<ベインブリッジ>！」

艦長は究極の選択を迫られた。このまま直進すれば僚艦に激突する。だが止まったり変針しようとするれば魚雷に喰われる。つまり、完全な手詰まり。

「魚雷命中まで、あとフタマル！」

「退艦だ。総員に退艦命令！」

「了解。総員、退艦。すみやかに退艦せよ」

のこり二十秒ではどうあがいても逃げきれるものではない。万事休すか……。

上空で敵情偵察していたリーヴズアイズ・リーダーは、全身に蟻が這いまわるような怖気を感じ、悪寒のしたほうを振り向いた。振り向かされた。

晴嵐の投下する魚雷は、純粹酸素をつかう酸素魚雷だ。酸素を燃やしてスクリュウを回す酸素魚雷は、二酸化炭素を排気するのだが、二酸化炭素は水に比較的よく溶解する性質をもつ。排気ガスが海に吸収されるため海面に気泡としてあらわれることがなく、ゆえに雷跡をのこさない。いわば、見えない魚雷である。

リーヴズアイズ・リーダーの目にも、酸素魚雷の雷跡は映らず、ただの気のせいかと思った。だが、瑠璃いろの海のなかで、たしかになにかが光った気がして、そこを穴が開くほど注視した。

また光った。ちょうど、海面ちかくを泳ぐイルカの背に陽光が反射して銀いろに光るような感じた。

リーヴズアイズ・リーダー、TACネーム<サピエンチア>は、ほとんど心眼で、その光るものの正体を魚雷だと見破った。その魚雷の進む延長線上に、駆逐艦USS<ミツチャー>が土手っ腹をさらしていた。しかもその前を、みずからも敵魚雷から逃げ回っていたUSS<ベインブリッジ>が、T字のごとく横切っていっており、<ミツチャー>が逃げ道を塞がれている状態にあった。

サピエンチアは状況を理解すると、頭で考える前に行動に移して

いた。スロットル・レバーを叩くように前へ押し、機体を急加速させた。

CAGや少将ほどの人間になると、レーダー上で動きを見ているだけで、そのパイロットがなにを考えているのかだいたいわかる。CAGは烈火のように怒り、顔を真っ赤にして無線機をとった。

「リーヴズアイ、妙な考えはよせ。いまずぐに帰艦せよ、いますぐにだ」

リーヴズアイズ・リーダーは、冷静に、おそろしいほど落ち着いた声で応答した。

「USS<ミツチャー>には、士官、兵員あわせて三八〇人の同胞が乗っている。それがたった一本のくそ魚雷で、墓穴から這い出てきた戦争の亡霊が放った、たった一本の魚雷でみんな殺される。それをだまって見すごすなど、おれにはできません」

サピエンチアは、機首を魚雷の進みゆく方向へむけた。フットレバーで方向舵を微調整しながら、ピッチをダウンさせ、ダイブ飛行する。

航走する魚雷の直上にまで到達したリーヴズアイズ・リーダーは、機体を反転させ、ピッチアップした。背面飛行状態で機首をあげると、とうぜん真下にむかって急降下することになる。

サピエンチアは、キャノピーごしにかぎりなく青い海が急激に近づいてくるのをみていた。サピエンチアはその海を、美しい、と思った。

リーヴズアイズ・リーダーの駆るF/A-18スーパーホーネットは、ターコイズブルーに染められた海に吸いこまれるように突っ込んだ。直後、ダイブした機体に酸素魚雷が命中、爆発のなかに沈んだ。

奔騰する白浪は、USS<ミツチャー>から、ほんの二〇〇メートルあまりのところで猛り狂った。まさに、すんでのところであった。

身を挺して魚雷から同胞を守ったリーヴズアイズ・リーダー。命

を救われたUSS<ミッチャー>の艦長以下、乗組員と、空母から見ていた少将、CAGは、その壮烈な海軍魂に、熱い涙を禁じえなかった。

そして、次に沸いてきたのは、強烈な憎悪と憤怒、敵愾心であった。

駆逐艦USS<ポーター>のVLSから、ミサイルが完全に発射されなくなった。

「ESSM、スタンダード、トマホーク、すべてのミサイル残弾ゼロ！」

「弾幕はどうなっている」

「ファランクス一番、二番ともに残弾僅少、Mk38二十五ミリ機関砲一番残弾ゼロ、二番残弾僅少、M2十二・七ミリ機関砲四番以外、残弾ゼロ！」

「もう丸腰みたいなものだな」

「艦長、こちらソナー。本艦の左舷下方より接近する反応あり」

「魚雷か」

「いえ、魚雷の音じゃありません。とてつもなくでかい……距離二〇〇フィート！ まもなく浮上します！」

艦外で双眼鏡による洋上監視に従事していた兵員は、目の前の海面がいきなり盛り上がり、水平線と空を隠してしまったのに驚いて目を離し、顔をあげた。波濤が艦に押し寄せてきて、白く碎ける。

小高い山のように持ち上がった海面は、USS<ポーター>ごと兵員を押し潰さんばかりの圧迫感を放っていた。圧倒的な質量に、兵員は死を覚悟した。だが、怪物の正体を隠匿した水塊は、かれの乗る艦を一顧だにせずに、西へ、旗艦たる空母のいるほうへ進み始めた。

兵員は、思わず安堵に胸を撫で下ろした。われしらずとめていた息を吐き出し、怪物の気まぐれと神に感謝した。

刹那、眼前の海を割って、長大な尾が天高く振り上げられた。海水が時ならぬ雨となって駆逐艦と兵員に降りそそいだ。

太陽が尾に隠され、濃い影が兵員を覆った。

縦に幅広いその尾は、満身の力をこめて、垂直の破城槌となって降り下ろされた。兵員は叩きつぶされ、そのまま船底まで到達。ケブラー装甲に鎧われたUSS<ポーター>の船体を真つ二つに破断せしめた。

空母USS<ドワイト・D・アイゼンハワー>では、三千人以上の乗組員たちが泡をくい、あわてふためいていた。護衛の潜水艦が撃沈、ミサイルフリゲートや駆逐艦にも被害がでている。いわば、城壁を押し崩され、濠を埋められつつある状態だった。

「司令、敵航空機の一部が駆逐戦隊の防空網を突破。わが艦にきます！」

「シースパロー、RAM用意」

ニミッツ級航空母艦は前線で戦うことなどかんがえられていないので、たいした火器はない。シースパロー個艦防空ミサイル発射装置二基に、RAM（近接防空ミサイル）発射装置二基しかもっていない。艦を守る駆逐戦隊はすべて前面に投入してしまっており、航空隊は弾切れになっているのが着艦しようとしている最中だ。

「敵機、来ます！ 東の方向より五十機以上。速力、もつとも速いもので三七〇、遅いもので二七〇ノット。距離十六マイル！」

「射程に入ったやつからロックし、ミサイル発射せよ」

スクリーン群の淡いブルーの光に茫洋と照らされる戦闘指揮所から、周囲三六〇度の海を見渡せる艦橋のほうへ移動した少将が令達した。

スモークを曳いてシースパローが空を駆けていく。いちばん速い、三七〇ノットで飛行してきた雷電や屠龍といった戦闘機が火花となつて散る。ロックの目からこぼれ、さらに接近した敵機には、RAMが食らいつく。RAMは射程が十キロほどしかないが、近接防空という役目にはじゅうぶんだ。

そのはずだった。

シースパロー発射装置は二基、RAMの発射装置も二基だ。いち

どに対処できる敵の数はたかがしれている。

二七〇ノットという、ほかの戦闘機より低速であったがゆえに後塵を拝していた戦闘機隊が、仲間の散った黒煙をよそにUSS<ドワイット・D・アイゼンハワー>との距離を縮める。

その戦闘機は、単発プロペラ機で、暗緑色の塗装に主翼と胴体後部の両側に真紅の日の丸が描かれているところはほかの機体とかわらない。じっさい、少将や、航海艦橋にいる空母艦長らは、それも雷電とかいう戦闘機なのだろうとしかおもっていなかった。

だが、CAGはちがった。その広い主翼、寸詰まりな印象を見るものに与える胴体、彩雲とおなじく三座であるがゆえに前後にながいキャノピー、出たままの尾輪。CAGは、ジーザス、と畏怖の声を漏らしてからつぶやいた。

「天山……！」

天山は、返答のかわりに、胴体下面にかかえていたプレゼントをアイクに放り投げた。

それは黒光りする悪魔の使者、彼岸への水先案内人。

天山は、艦艇攻撃をおもな任務とした艦上雷撃機だ。その十八番は、八〇〇キロ爆弾である。

涙滴型の八〇〇キロ爆弾が空母のアングルドデッキ中央に落下した。飛行甲板のアスファルトに弾頭が激突し、低い鐘のような音が響いた。その瞬間、甲板上でスーパージョーネットの着艦準備をしていた兵員たちは、爆弾の弾殻内に詰められていた大量の火薬が力を解放させ、火炎と爆風の姿をとってこの世に現れいでるのをみた。音よりはやい爆轟波が整備兵たちをかるがる吹き飛ばし、炎の柱は、空母の右舷に高層ビルのように建てられたアイランド（艦橋などをまとめた構造物）の高さになんなんとした。

「被害状況は」

強化ガラスに稲妻のようなひびが走り、艦橋にも衝撃が地響きのようにはり込んできた。理不尽な反応だが、少将は反射的に片腕を掲げて防御姿勢をとった。

「飛行甲板に直撃弾！ 滑走路損傷、カタパルト射出システムに障害発生、固定翼機の発艦が不可能です！」

「司令、着艦エリアにも被弾しました。アレステイングギア使用不能。路面も穴だらけで、航空機の着艦ができません！」

「第三格納庫で火災発生。居住区にも被害が出ています。死傷者多数！」

少将は、しばし呆然となった。ひび割れたガラスのむこうで、飛行甲板に穿孔された穴から炎の舌がチロチロと覗いており、もっもっ朦朧たる黒煙が火の粉とともに天をつかむようにその手を伸ばしている。そして、旋回する天山を見ながら、うわごとのようにいった。

「このアイクが……アメリカ合衆国の威信をかけた原子力空母が、たった一機の旧式機の、たった一発の爆弾で、ただの役立たずに……」

旋回して戻ってきた天山が、飛行甲板横に駐機してある航空機をねらい撃ちしはじめた。左主翼内に搭載した七・七ミリ機銃が弾丸を放ち、EA-6プラウラー電子戦機や、C-2グレイハウンド輸送機、対潜哨戒ヘリコプターなどを蜂の巣にした。七・七ミリの小口径弾では機体の破壊とまではいかないものの、キャノピーのアクリルガラスが砕かれ、輸送機のプロペラやヘリの回転翼がちぎれるなどの被害がでた。

第7空母航空団の戦闘攻撃飛行隊は、まだリーヴズアイズ所属のF/A-18Eスーパーホーネットが五機ほど着艦していただけで、のこの十機とウィズインテンプテーションの全機、ナイトウィッツシーズの十四機、発艦をすませていたアンベリアンドーンズのF/A-18F数機が、帰る場所を失って空中で右往左往した。機体の燃料だけではどうがんばっても最寄りの基地に着陸することもできない。

少将はそれでも艦隊司令官のつとめを果たさねばならない。

「ソナー、やつの居場所はわかるか」

懸命に冷静さをたもとうとしている声が返ってきた。

「音紋を探知。二時の方向、速力一〇〇、距離十哩。わが艦に接近中！」

少将や副官たちは、二時の方向の海を見た。直径二〇〇メートルをこえる半球の水をまとったそれが、目の前の海水をかき分けおしのけ、一目散にこちらにむかつてきている。

そしてついに、アンノウンがUSS<ドワイト・D・アイゼンハワー>の艦首の右舷側に衝突した。壮絶な衝撃に甲板上の艦載機が横滑りし、乗員や航空要員、少将らも進行方向へ引つ張られるように吹き飛ばされ、壁や機器にからだを叩きつけられた。

空母の艦体が、左に傾斜しはじめた。十万吨にせまる巨体がひっくり返されようとしているのだ。

もはや退避勧告も意味をなさなかった。いまやアイクは、真横に九十度に傾いていた。全長三三三メートルがうなり声のような軋み音をあげて海に側臥した。艦橋にいた少将らは、床となったガラス窓にひれ伏し、つぎに本能的に上へと登ろうとした。テーブルに手を伸ばし、つかもととするが、本来の床がほぼ垂直になった現状ではむりな相談だ。

アイクの艦幅は約七十七メートルほどある。真横に倒れたいまは、半分近くが喫水線の下にあり、アイランドから海面まではおよそ四十メートルの距離があった。少将や部下たちが踏ん張るガラス窓の下に、落下した艦載機や整備兵たちを呑んで獰猛にいきりたつ海が広がる。いわば、ビル十二、三階の高さでガラスの床に立たされているようなものだ。

そして、少将の革靴が踏みしめるガラスは、さきの爆撃でひびがはいっていた。そのひびが、木が根を地中に張り巡らせるようすを早送りで見ているかのごとく、成長し、枝分かれをくりかえしながら伸びていく。

ひびが窓ぜんたいにいきわたったとき、ガラスはのしかかる人びとの重量に耐えきれなくなり、白旗をあげた。ガラスが割れ、少将たちは紺碧の海のなかへといざなわれた。

落ちていく時間は、永遠のようにも、一瞬のようにも思えた。

コンクリートの大地に落下したような衝撃が全身を襲い、水深数メートルまで一気に沈んだ。少将は塩水にしみるのをこらえて目を開き、周囲を見回した。足下があかるい。ならばそちらが海面だ。

姿勢をととのえて、海と空のはざまに顔を出す。おもいきり息を吸おうとして、少将は耳をつんざく轟音のほうにふりむいた。死の円刃が金切り声をあげて狂乱していた。直径が、それこそそのらのビルの高さと同じくらいある巨大なスクリューが空中に露出して、少将たち海に投げ出されたものの目の前で回転していたのだ。原子炉の膨大なエネルギーを動力として、空母という人類史上最大のデカブツを時速六十キロのものの速さで走らせる力をもつスクリューが、目にもとまらぬ速度で回転をつづける。スクリューの真つ正面は、水が押されているのでスクリューから遠ざかるが、少し横にずれると、逆にスクリューに吸い込まれるような水流に吞まれることになる。少将と同じく海面に落とされ漂っていた黄色いジャンパーを着た整備兵が、その死の道に魅いられ、高速回転するスクリューに吸い寄せられる。スクリューに触れた瞬間、整備兵のからだはプロペラに切断されて挽き肉となり、血霧となって撒き散らされた。悲鳴をあげるひまもなかった。そうして多くの乗員がスクリューに巻き込まれ、細断された肉片を飛散させた。

生温かい赤い霧が舞うなか、少将は必死にクロールで円刃から離れた。すぐ左横を泳いでいた士官のひとりの姿が突然暗くなっただかと思うと、その頭上に、大人が膝をかかえたくらいもある巨岩が落ちてきた。彼は水飛沫のなかに消えた。見上げると、壁のようにそり立って青空を覆う空母の飛行甲板から、剥離したアスファルト片がこぼれ落ちていた。

艦内に積載されていた数百万ガロンのジェット燃料が引火し、ハ○○キ口爆弾で開けられた穴から閃光と爆炎が海面の乗員や航空要員を炙った。艦がさらに傾き、完全に転覆しようとしている。アングルドデッキが地獄の釜の蓋となって少将たちの上に覆い被さっ

てきた。そして天地を逆さにされた空母は、飛行甲板で海を叩き、大波を引き起こした。なすすべなくただよう人間たちは、その波に揉まれ、海に食われた。

波がくる前に胸廓いっぱい息を吸いこんでいた少将は、空気で満たされた肺が浮きがわりになって、ふたたび海上にでた。転覆した空母が、艦首から沈みいくところだった。人間でいえば、頭から海に潜って、足がでているような状態だった。艦隊司令官を拝命し、長年生活してきた艦だった。艦というより、むしろ陸地の基地と同じ感覚だった。いくら叩いても崩れも揺るぎもしないと信じて疑わなかった原子力空母が、いま、大西洋の海に踊り食いされているかのように沈んでいつていた。艦尾まで呑みこまれ、なおも推進をやめようとしないスクリューが海面にふれ、派手な噴水のように海水をたかだかと巻き上げた。噴水もだんだん勢いを弱め、あとには気泡が湧きつづけるのみだった。

と、沈んだ空母のかわりに、それに匹敵する巨大なものが海中から姿を現し、聳え立った。少将が周辺の海ごと影に吞まれ、その顔が恐怖と畏怖にゆがんだ。

「デーモン……！」

すさまじい咆哮に少将の声が圧殺され、怒れる怒濤が襲いかかった。

空を埋めつくしていたプロペラ機の群れも、いつのまにか消え失せていた。煙のように消えたのだった。

あとに残るのは、傷つき、弾つき、目を潰されたイージス艦たち。そして、燃料を空費して空に所在なげに旋回飛行するスーパーパーネットたちだけだった。

## 六 齒車はまわる

「なんとしたことだ」

ヒットリアは執務室のデスクを拳でたたいた。グラスが倒れ、水が血のようにひろがった。

「一度ならず二度までも空母打撃群が全滅とは」

室内にひしめく大勢の人人は、予想だにしえぬ結果に茫然自失としているものと、各省庁やじぶんの機関へいそがしく電話をかけ、どなり声をあげているものの二種類にわかれた。

騒然とした空気で執務室が擾乱されるなか、マヘンドラ国防長官とジユガシヴィリ在米ロシア大使が無言で視線を交わしたのに気づいたものはいない。

チトー将軍が副官に訊く。

「周辺海域にわが軍の空母は」

インカムつきのヘッドセットを装着した副官が、統合軍のコンピュータと接続されているラップトップをすばやく操作し、首をふる。「もつとも近いものでも、アフリカ大陸南のUSS<ジョージ・H・W・ブッシュ>です。とても第7空母航空団のF/A-18E・Fスーパーホーネットの回収には間に合いません。イングランドから現場海域にインヴェインシブル級が急行していますが……」

どのみち、USS<ジョージ・H・W・ブッシュ>もじぶんの航空団を艦載しているので、それにくわえてリーヴズアイズやウイズインテンプレーションズたちを着艦させることは不可能だ。英海軍のインヴェインシブル級は、ハリアーのような垂直離着陸機の運用を目的とした軽空母なので、固定翼機であるスーパーホーネットや、E-2Cホークアイの救援には使えない。

「せいぜい、海面に漂流している乗員、飛行士らを救出することしかできぬか」

「は……」

「生存した第7空母航空団に、ノーフォーク海軍基地の方向へむかって燃料のつづくかぎり飛べとつたえろ。燃料の残量がなくなったら機体を捨ててベイルアウト。海上にて救出を待つんだ」

「了解」

「ノーフォークからはイージス艦、ミサイルフリゲート、揚陸艦、あらゆる艦艇を出動。全力で救出活動にあたらせろ」

みなが各各の仕事に追われるなか、マヘンドラ国防長官がゆつくりと立ち上がり、傲然と言い放った。

「諸君。今回の作戦失敗は、わが国がいま、重大な安全保障上の危機に直面しているということと同時に、わが軍の戦力の多大なる損失への早急なる対処が求められる緊急事態が発生したことを意味するものである」長軀から発せられる鉄の声に、全員が耳を奪われる。「同一と思われる敵に、空母打撃群を二個も撃破され、われわれの海軍力、航空戦力は現在、著しく弱体化している状態にある。国内配備の戦力のみで部隊を再編成しようとするとなれば、圧倒的に戦力が不足することは明白」

国防長官のひとことひとことに、幕僚、統合軍司令官、諸将が固唾をのむ。

「また、そのようなことをすれば、わが国土の対領海、領空侵犯措置能力も激減し、われわれが巨大生物対策に身を削っているあいだに他国の侵犯をゆるす結果にもつながるだろう」

敵は怪獣だけではない。マヘンドラはそうつけ加えた。

たしかに大西洋にまたあらたに艦船部隊を派遣すれば、アメリカ本土のほかの地域、海域の防衛に穴が開くことになる。ただでさえ最初に撃沈されたUSS<ハリー・S・トルーマン>を旗艦とする打撃群のかわりにアイクを大西洋に配備し、本来アイクが担当していた海域をUSS<セオドア・ローズヴェルト>が、USS<セオドア・ローズヴェルト>がもともといたところにはまたべつの空母打撃群が……と埋め合わせに埋め合わせをかさねてやりくりしている状況である。これ以上に大西洋に軍事力を割くとなると、もはや

通常の国土防衛力の低下は無視できない。南米諸国からは麻薬を積みこんだセスナが大挙してくるだろう。防備が手薄になっているところへロシアや中国、イランから、いまがチャンスとばかりに核ミサイルが本土を襲うかもしれない。そうなればアメリカは怪獣襲撃よりも前に息絶える。

二隻もの空母の沈没。その経済的、軍事的、政治的損失に、大統領をはじめ、政府閣僚、官僚ら、ホワイトハウスをソフト面で支える者たちは、あらためてその被害の甚大さを噛みしめていた。

大多数の人人の思考がそこまで到達したのを読んで、マヘンドラはふたたび口を開く。

「そこで、わたしは大統領に進言します」

それは、世界の天秤をひっくり返す狂気の提案。

「世界中に点在する在外アメリカ軍基地。そこから兵力を一時撤収させ、損失した戦力の充当および、敵巨大生物の本土襲来にそなえるのです」

時間が停止した。室にいただれもが、マヘンドラがなにをいったのか、とつさに理解できず、なんども国防長官のことばを脳内で再生し呻吟し、裏面にかくされた真意をはかろうとした。

だがマヘンドラがしごく真顔であり、その表情に皮肉諧謔のたぐいの成分が毫厘こりんもないことに気づき、執務室は一転、ごうごうたる抗議と悪罵が入り乱れることとなった。なにを愚昧なる心得違いをいうぞ、さこそ銃もつ暴漢のまえで裸になるにひとしき愚行なり、在外基地をもつて敵勢力への抑止力となっているにもかかわらず兵力を撤収するとは、これすなわち鍵も窓も鎧戸もすべて開け放ち、あまつさえ留守にするとひろく公言して家を空けるも同じなりやと、みなほかのものが声を張り上げて主張しているのかまわず叫ぶようにいので、憤激と非難と怒号の目にみえぬ激湍が押し寄せてくるようだった。マヘンドラはしかし濁流にいささかも動じず、むしろおのれを指さし口角に泡飛ばして反論するかれらを、動物園の檻のなかで暴れ散らかす猛獣をみるようなひややかなる面持ちで

黙然として観察していた。しかるにマヘンドラの興味はそちらになかった。表向きは、紛糾たる反論をいかにも殊勝に受けとめているふうであった。だが、視界のはじで、ほとんど白眼の部分でみるようにして、マヘンドラはヒットリア大統領のようすをうかがっているのであった。

大統領は、テーブルにかけたまま、なにごとか沈思黙考しており、葛藤していた。ゼニス・ブルーの瞳は氷河の底のような冷徹な青さへと変じ、大統領としては年若い顔貌は、憂国の老将のような荘厳なものとなっていた。

ヒットリアの背から、現実には燃えていぬ炎がふきあがるような錯覚をマヘンドラはみた。もしヒットリアを視界の中心にすえていたら、かえってその炎は見えなんだであろう。目に入るか入らぬかの境界であったからこそ、視覚以外の感受性が働いたのかもしれないかった。

だから、立ち上がった大統領のほうにはつきり顔をむけたときには、そのような光輝はどこにも見受けられなかった。

静かに。ヒットリアが吐息を漏らすささやきのように小さくいうと、聞こえるはずもないのに、あれだけ侃々諤々に騒々しかった室が、栓をひねったように、ぴたり、といっぺんにしずまった。ペンをカーペットに落とす音さえシンバルを叩き鳴らすのに匹敵するほどのしじまが、執務室を支配した。大声でどなるよりもちいさな声のほうに心に届くとはいうが、ヒットリアがそれを意図したかどうかはさだかではなかった。

大統領は、一語一語を明瞭に発音していった。

「マヘンドラ国防長官の案は、たしかに突飛で、常識にかけ、通常時ならば聞くにたえぬ妄言でしかない」

室の人間たちはおたがいの顔を見合いながらなんともうなづいた。その顔が、目を見開いてヒットリアにもどる。

「だがいまは、通常時ではない」

室内の空気がおそるべき速度で変化しはじめた。空気のいろの移

りかわるのを視認できそうなほどだった。

「わたしには、アメリカ合衆国大統領として、まずなによりも、アメリカ合衆国の国民を守る義務がある。そのために生きている。そのために生まれてきた」

みながヒットリアに釘付けになっていたので、部屋の一角でマヘンドラが勝利を確信したように口唇の右端を上げたのをみつけたものは皆無だった。

「通常時なら通常の方法でのぞんでよかろう。しかしいまは緊急時だ。それも人類史上もつとも異常な脅威にわれわれは直面している。異常な状況に対しては、こちらも異常といえるほどのおもいきった方法で対処するくらいでなければとうてい、この困難を乗りきることとはできないのではないか」

分銅を慎重に乗せてきた天秤が、倒される。

「在外アメリカ軍基地から、すべての部隊、すべての兵力を撤収させる。およそアメリカ軍に属するヒト、モノはすべて、アメリカ本土に結集。総力をもって、われらの祖先が血を流して切り開いたこの国土を防衛し、やつを迎え撃つ」

ヒットリアがアメリカ合衆国軍統合軍のひとつ、アメリカ欧州軍の統合軍司令官の海軍大将に命じる。

「オランダ、ノルウェー、デンマーク、イタリア、スペイン、トルコ、ドイツ、ベルギーからわが軍を帰還させる。可及的すみやかに、早急にだ」

「ほんきですか、ミスター・プレジデント！ わが国はNATO諸国の多くに部隊を駐留させているのですぞ。いまおっしゃられた国々がまさにそれです」

アメリカ欧州軍の司令官は、NATO軍のヨーロッパ連合軍最高司令官でもある。

「多少ならばともかく、いきなり完全撤退など、大混乱を招来せしめます」

「わが国は未知の敵に尋常ならざる痛撃をつけた。情勢はすでに混

乱しているのだ。これ以上の混乱を防がねばならぬのだ」

海軍大將は雷に打たれたように表情を緊張させた。

「では……アメリカ欧州軍の即時かつ完全な撤退を？」

ヒットリアがうなづく。

「アメリカ合衆国大統領として命令する。撤収だ」

濃紺の軍服を着こんだ海軍大將は背筋をのばし、命令を受領した。

「ドイツも撤収でかまいませんか？ ドイツには相互防衛援助条約のもとに軍を駐留させておりますが」

「ドイツこそ優先して撤収させなければならぬ。駐留兵力は欧州最多の七万人だ。これはわれわれにとり貴重な増援となる。相互防衛援助条約とは、すなわち、条約を締結した二か国間のどちらかが軍事的脅威にさらされたとき、もういっぽうの国が、自身に攻撃を受けたも同然ととらえ、協力して集団的自衛権を行使することを約束するというものだ。わが国はいま、まさしくその軍事的脅威に国家と国土と国民がさらされている。であるならば、ドイツからわが軍の兵力を撤収させて本土防衛にあてるのは、わが国のとうぜんの自衛権であり、撤収に難色など示さず、その間の自衛を自国でまかなうなどの間接的協力を率先しておこなうことが、相互防衛援助条約におけるいまのドイツの役割である」

したがって条約違反には該当しない。ヒットリアは断言した。

自国に米軍基地があるならば、防衛戦略も自然とそれありきで構築されるものである。米軍だのみといってもよい。それをいきなり撤収させといて、抜けたぶんはじぶんたちで随意にせよ、それこそが条約における相互防衛援助というものである。大統領はそういうのである。

海軍大將は敬礼して受諾を確認し、さっそく命令をはたすべく執務室を辞していった。

つぎに、アメリカ北方軍司令官の空軍大將に令達する。

「カナダから撤収だ。駐留部隊をアメリカに帰すのだ」

「カナダの防空任務は、実質、われわれがすべておこなっているの

が現状ですが、よろしいのですか」

「かまわん。カナダはあれでもNATO加盟国のはしくれだ。自分の身くらい自分で守れよう。万一われわれの撤収中に領空侵犯、侵略攻撃をつけようと、そのときはNATO諸国が団結して解決してやればよいのであって、わが国に負うべき責任はない」

「わが国はNATO加盟国なれども、いまは緊急事態であるため、隣国といえども協同防衛に戦力を割けない。ゆえにそのさいに、まちがってもアメリカに参戦を求めないことがNATOの義務である……と？」

空軍大将の問いに、大統領は壮重に首肯した。アメリカ北方軍司令官は踵をあわせて敬礼した。

「了解。カナダから駐留部隊をすみやかに撤退させます」

中南米を管轄下におくアメリカ南方軍の統合軍司令官を務める陸軍大将を指さす。

「キューバのグアンタナモ基地を撤収。ただし、中南米からの麻薬取引引きの取り締まりに必要な人員、兵力はひきつづき駐留、監視のこと」

「は、了解」

「バラゲール！ バラゲール海兵隊大将！」

「御前に」  
おんまえ 中東の米軍部隊を指揮下におくアメリカ中央軍司令官の海兵隊大将につたえる。

「クウェート、カタールのアメリカ軍を全面撤収させよ。きょうにでもだ」

「了解」

「アフガニスタン、イラクからもだ」

一同はどよめいた。

「正気ですか！ イラクでは、暫定政府が発足はしたものの、いまだにテロがあいつぎ、実質的には無政府状態がつづいています。いまアメリカが撤退したら、イラク国内はますます混沌に陥ります」

「アフガンと同様です。段階的に撤収作業は進めています、き

よう、あす、アメリカがいなくなれば、原理主義者どもがよろこんで勢力を増し、かろうじてたもたれていた秩序が砂の城のように崩れさります。警察がある日突然、姿を消すようなものです」

サラザール首席補佐官やファーストロング外相の抗議に、大統領は冷然とこたえた。

「諸君は、よその国の人間と、わが国の国民と、どちらが大事なのかね」

惨烈なひとことに、だれひとり反対の声をあげられない。

バラゲール中央軍司令官が「大統領」と質問する。

「おそれながら、キルギスからですか」

キルギスはかわった国で、国内にアメリカとロシア、それぞれの基地を擁し、土地を提供している。キルギスは周囲をカザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、アフガニスタン、中国、ロシアと、なにかと問題のたえない物騒な国ばかりに三六〇度を取り囲まれている。この複雑な渦中でキルギスのような小国が生き残るには、巧智でしたたかな外交戦略が必須になる。

ロシアという国は、周辺の国がすべてじぶんの友好国でないと気がでない性分をもつ。かつてソ連の構成国だった国に対しては言わずもがなで、キルギスにもとうぜん、ロシアの基地を置くことで親露をせまった。キルギスがロシアに逆らうていいことはひとつもない。キルギスはロシアの基地を両腕を広げて歓迎した。

いっぽうアメリカとしては、せっかくソ連が崩壊したのに、そうしてロシアの版図が広がって影響力を強めていくのは都合が悪い。そんなアメリカの胸中を察してか、キルギスは巧妙な交渉をアメリカにもちかけた。キルギス国内にアメリカ軍基地を誘致したのだ。アメリカとしては望外の申し出だった。ロシアを牽制するためにロシアのちかくに米軍基地を置きたくても、ばか正直に「ロシアへの抑止力のため」といってアメリカが基地を建設すれば角が立つ。だがこれなら、あくまでもキルギス側の誘致に応じたという形をとれるし、アメリカの意図によるものではないという体裁が整う。それ

に、キルギスはソ連の一員だったのでとうぜんロシアに近いが、カザフスタンを挟んでいるため近すぎるということもなく、絶好の地理にあったのだ。ロシアとてもそれはおもしろくはないだろうが、だからといってキルギスを力任せに圧殺しようとすればそれこそアメリカに大義名分をあたえることになり、アメリカの思う壺だ。戦力的にも正面きってアメリカと戦火をまじえるわけにはいかない。こうしてキルギスはロシアとアメリカ、ふたつの大国を味方につけることで、弱肉強食の国際社会のなかでうまく世渡りしてきたのだ。一歩まちがえればアメリカとロシア両方に占領され分割統治という名の植民地にでもされていたか、自国をロシアとアメリカの決戦場にしていたかもしれない、危険な賭けだったともいえよう。ちなみに、基地を置かせているのだから、キルギスにはアメリカとロシアから賃借料が支払われている。この賃借料は、キルギスの欠くべからざる財源となっている。

ここから米軍を引き揚げさせれば、ロシアがよろこぶだけだろう。しかし大統領の指示は揺るがなかった。

「命令はかわらない。完全撤退、完全撤退だ。全速力でアメリカ本土に戻らせる。全速力で、全速力でだ」

「はっ」

「いまはロシアとにらみ合いしている場合ではない。われらには火急の任務があるのだ」

つづいてアフリカ大陸を支配下においているアメリカアフリカ軍の司令官を務める陸軍大将を呼ぶ。

「アフリカからも撤収だ。精強なアフリカ米陸軍の力がほしい」

「了解です。ジブチはどうしますか大統領」

「撤収してかまわないだろう。かの国にはドイツとフランスも駐留している」

そして、太平洋、アジア、オセアニアと、地球のほぼ半分を管轄するアメリカ太平洋軍司令官の海軍大将に厳命する。

「オーストラリア、ニュージーランド、アジア、すべての駐留国が

らわが軍を撤退させよ。東海岸に回して手薄となった西海岸の防壁を再構築しなければならん」

「オーストラリアとニュージーランドとは、太平洋安全保障条約が結ばれていますか」

「わが国の国益の足枷になりかねん条約など、アメリカは必要とはしていない。いざとなれば破棄だ。怪獣を撃破してからまた締結でもなんでもすればよい」

「韓国との米韓相互防衛条約もですか閣下」

「むろんだ。朝鮮半島がどうなるうとアメリカのしったことではない。アメリカがもっとも大事なのはアメリカの安全保障なのだ」

「パラオに、ミクロネシアも？」

「そのとおりだ」

「このふたつは、米国とのあいだでそれぞれ締結されている自由連合盟約により、安全保障の権限を米国が保持しています。つまり自前の軍隊がなく、国防をすべてアメリカに委任しているということです。それでもですか」

「それでもだ。成熟した国家なら、国民をあずかる国家なら、自国の防衛は自力でおこなうのが常識だ。それを盟約だからといっておこたってきたほうがどうかしているのだ。アメリカに罪があるはずもない」

「では、日本も？」

ヒットリアは、そのとおりだ、とこたえた。

「三沢、横田、横須賀、厚木、岩国、佐世保、すべての基地からアメリカ兵を発たせよ」

太平洋軍司令官以外の、武官や高官も口々に尋ねる。

「沖縄も……ですか」

「撤収だ。普天間、嘉手納、ホワイト・ビーチも撤収させろ」

「キャンプ・シュワブはいかがでしょうかよう大統領」

「引き揚げる。第3海兵師団戦闘強襲大隊、歩兵大隊はただちに帰還させる。キャンプ・フォスター（キャンプ瑞慶覧のこと）の基地

司令部も撤収、辺野古弾薬庫などの補給施設、天願棧橋などの港湾施設、訓練場から爆撃場にいたるまでの演習場もすべてだ」

「大統領。キャンプ・ハンセンは？」

「撤収しろ。あたりまえだ。第12海兵連隊、第5海兵航空管制中隊、第3衛生大隊もふくめた基地の総員を合衆国に呼び戻せ」

「キャンプ・コートニーの第3海兵遠征軍と第3海兵師団も撤収ですか」

「とうぜんだ。キャンプ・コートニーは第3海兵師団司令部ごと合衆国に帰還させよ」

ヒットリアがみなに腕を伸ばして託宣する。

「いいか、すべてだ。世界中に散らばるわれらがアメリカ軍の戦力をすべてここに集結させるのだ。他国の基地にアメリカ兵士をひとりたりとも残すな。総力をもってやつを撃退するのだ。この史上最大の難局を乗り越えられねば世界戦略など意味はない。急場しのぎはとかくネガティブに受けとめられるが、あすがなければ十年後もないのだ。他国に部隊を駐留させておいて、本国が減びては本末転倒もはなはだしい。すべて、すべての兵力を投入し、国民のすまうこの本土の防衛をなす。本土をおろそかにして自国の国民を守れぬ政府に存在意義などない」

サラザールに指示する。

「イスラエルに、相互防衛援助協定にもとづく軍事支援を要請しろ。また中華民国には、台湾関係法を持ち出して、武器、人員の拠出を取りつける。あまつて困ることはない」

「わかりました」

それからチトー將軍を呼ぶ。

「太平洋を試験航行中のズムウォルト級を至急、東海岸にまわしてくれ。EMLをも使わなければならないかもしれん」

チトーの顔に緊張が走る。

「あの新鋭ステルスイージス駆逐艦をですか。まだEMLユニットは実用段階までは到達しておりませんが」

ＥＭＬとは、エレクトロ・マグネティック・ランチャー、すなわちレールガンのことである。

「今回の参戦がちょうどよい実験となろう。目標を撃破できなければ、前政権から途中でひきついだ膨大な予算のかかるＥＭＬの開発が中止となる、それだけのことさ」

大統領命令をうけたチトーが敬礼した。

「了解しました。ズムウォルト級ミサイル駆逐艦USS<ユエルン・シティ>をただちに東海岸に移動させます」

チトーは、ふとあることを思い出した。

「大統領、僭越ながら、ラングレー空軍基地のアンサン隊の配備はそのままで……？」

ヒットリアの表情に、逡巡のいろがかすめる。第1戦闘航空団第98飛行隊、通称アンサン隊は、ヴァージニア州のラングレー基地に配属されている。F-15Eストライクイーグル十二機編成のアンサン隊は、敵巨大生物にたいし、爆撃機と戦闘機をかねた機体を駆る貴重な戦力となることが予想された。

だがヒットリアの回答は重々しい。

「あいつは未熟だ。対怪獣ではなく、防空の哨戒にでもまわすのが賢明だろう」

釈然としないヒットリアのことばに、しかしチトーは納得したようにうなづいてみせた。大統領も人の子であり、また人の親である以上、情というものは捨てきれぬ。人の情をもっているからこそ、チトーはヒットリアに忠誠を盡くせるのである。

大統領のかつてない大規模な命令をこなすため、執務室は、ホワイトハウスは、そして全世界が奔走をはじめ。

## 七 破局のシンピオシス

世界中でいつせいに、兵器、人員、およそアメリカ軍に属するすべての物質が、それまで住処としていた国の基地、港湾から母国めざして出発をはじめた。EU諸国は基地用地だけ残して飛び立つ米航空軍を恠怩たる思いで見つづけ、アフガニスタンやイラクの民は快哉をさげんだ。

ことの是非はともあれ、いったん大統領から命令がくだったならそれをすみやかに実行に移すのが忠義のあかしとばかり、現場の部隊の行動の早さには目をみはるものがあつた。地球のすみずみに展開していた在外米軍の兵卒ひとりひとりにいたるまでもが、神速といつてもよい速さでわれがちに帰還の準備をととのえ、完了しだいその地を發つた。一陣の嵐が軍基地をさらつていったがごとく、ほとんど造次顛沛そつじてんぱいに撤収していったのだった。

その嵐はいつさいの例外をみとめず、わが国にも到来した。

神奈川県のカンパ座間には在日米陸軍の司令部があり、二千の兵力をおいていたが、これはすべて、空を飛ぶのがふしぎなくらいな超巨大輸送機C-5ギャラクシーに積みこまれ、同地を去つていった。

横須賀海軍施設に司令部をおく在日米海軍も、さきを争うように撤退をすすめていた。横須賀は米海軍最大規模をほこる第7艦隊の母港である。同艦隊の旗艦と司令部をかねる揚陸指揮艦USS<ブルリッジ>を筆頭に、ニミッツ級原子力空母USS<ジョージ・ワシントン>を中核とする第5空母打撃群が錨をあげる。厚木海軍飛行場に駐屯していた二十八機のF/A-18Eスーパーホーネットや六機のEA-6ブラウラー電子戦機、試験的に配備されていた十二機のX-47ペガサス艦上ステルス無人戦闘機など、百機ちかい艦載機からなる第5空母航空団が文字通り飛んできて、帰港準備にはいったUSS<ジョージ・ワシントン>に着艦した。第7艦隊

水上戦部隊の二隻のタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦と、七隻のアーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦も、航空機を満載した<ジョージ・ワシントン>にもなった。佐世保からも、原子力空母にせまる巨体をもつ強襲揚陸艦USS<エセックス>をはじめ、何隻ものドック型揚陸艦や掃海艇などありとあらゆる艦艇が一隻のこさず出港。

一刻もはやく母国へ帰参をはたすべく、海を埋めつくすほどの蜿蜿長蛇の列をつくり、水天髣髴のかなたへとむかった。横須賀と佐世保、あわせて七十隻の軍艦、第7艦隊だけで二万という途方もない兵力の出立。撤収する艦船部隊の規模、それを動かす人間の数からいって、いわば洋上都市がまるごと移動していくかのような迫力にみなぎっていた。これだけの艦艇がいちどに出帆せしめるのは、それこそ街がそっくりひとつかたつ離去するのにひとしいものがあったのだ。地元の住民らにあつては、米海軍の性急なのと、日本に対する頓着のようなもののなさというか、米軍はぜつたいに出ていかないだろう、しかたなく付き合っていくしかないと清濁あわせ呑むような気でこれまで思っていたのに、やけにあっさり引き揚げていくのに、ただただ目を白黒させるほかになかった。

しかし撤収のはやさでは在日米空軍もおさおさ劣らなかった。在日米空軍の司令部がある横田飛行場の航空団はもちろん、「北の槍」の異称をとる三沢基地所属の数十機超のF-16部隊もつぎつぎ離陸していった。そのほか、全国の基地の地上スタッフ、通信施設や貯油施設、補給補助施設などに勤務する米軍籍の人間たちも、早急に輸送機などで帰国の途についた。

日本でもっとも多くの在日米軍基地をかかえる沖縄こそ、米軍撤退の光景がもつとも顕著であつた。沖縄の嘉手納飛行場は在日米空軍最大の基地で、あの小さい沖縄本島にあつて四千メートルちかい滑走路が二本あり、その総面積たるや、日本最大の空港たる羽田の二倍もある。ここに配備されていた、アメリカ空軍最大の戦闘航空団、第18航空団所属のF-15CとF-15Dあわせて二十四機“空飛ぶタンカー”KC-135空中給油機、背中に搭載した円盤

型レーダードームが特徴的なE-3早期警戒管制機(AWACS)が轟音を別れの挨拶として空へ旅立っていった。スクランブル発進にも匹敵するはやさの離陸だった。

沖縄の代表的な在日米軍基地のひとつ、普天間には、第1海兵航空団司令部飛行隊がいて、おもにヘリコプターを運用していたのだが、これらも撤収とあいなった。タンDEMローター式(機体の前後に回転翼を搭載しているタイプ)の大型輸送ヘリ、V-107シー・ナイトや、貨物や人員の輸送もできる中型の汎用ヘリコプターのUH-1Nツインヒューイ、攻撃ヘリであるAH-1Wスーパースーパーコブラといった各種ヘリコプターが普天間飛行場をあとにした。同隊と所属をおなじくする垂直離着陸機AV-8ハリアーやF/A-18レガシーホーネットも随行した。

とうぜんその光景はニュースで全国放送された。

「ごらんください！ ヒットリア大統領の撤収命令をうけて、ここ、普天間基地のヘリコプターが、つぎつぎ離陸していきます。こちらの空、カメラさん上空を撮せますか」

カメラがパンし、天空にレンズをむける。雲ひとつない日本晴れの青空を、黒く埋めつくさんばかりに大軍団を編成したヘリコプターが航過していつている。機数は何十機いるのだろうか、数えることを拒絶されているかのようなのだ。それだけの数のローターを回転させるターボシャフト・エンジンの爆音があたりに鳴り響き、リポーターの声も埋没してしまいそうだった。おそらく彼は自分の声さえ聞こえてはいないだろう。

擬似的につんぼになりながらも、リポーターは空を覆う鉄の群れに手を伸ばして指し示しながら大声を張り上げる。

「すごい数のヘリコプターがわたしの頭上を飛んでいます！ 数が多すぎて、渡り鳥の群れのような感じです。あつ、いま、戦闘機も何機か飛んでいきましたね。いまの、この空だけで、航空機の博覧会が開けそうな、そんな状況となっています。ヒットリア大統領は、この沖縄とおなじように、全世界のアメリカ軍を全面撤収する方針

をあきらかにしており、日本においては、四十八時間以内に、すべての在日米軍を撤収させると通告しています。が、ここまでの規模のものは、沖縄ならではといったところではないでしょうか。普天間からは以上です」

また、アメリカ国外遠征専門の軍である海兵隊も、撤収対象からはずれなかった。在日海兵隊は、実戦部隊の第3海兵遠征軍と、基地の運用を主任務とする在日米海兵隊基地部隊のふたつが存在するが、両方ともが即日、日本から根こそぎ出国した。

こうして、一三〇をこえる在日米軍基地から、日本に母港をもつ第7艦隊もふくめて五万人いた在日米軍兵力すべてが撤退。基地の国内外移転で何十年ももめていたのがうそのように、在日アメリカ軍はその姿を消したのである。

ある全国ネットのテレビ局が、沖縄の年老いた男性にインタビューをとった。男性は、自宅の二階で取材をうけていた。遠く潮騒のきこえるバルコニーからは、緑の深い林が間近に鬱蒼と繁っているのを望める。

「そこからむこうがもう基地の用地ですよ。勝手に入ったら、撃たれることもあります」日に焼けた老人は安楽椅子に深く腰かけながら、青々と繁茂する林を構成する木々と、男性宅の庭とが面するあたりを指さした。錆びついた立ち入り禁止の標識はあるが、フェンスのたぐいなどは見受けられない。

「わかりやすい境界線があったほうがまだかえって安全。そういうのがないと、草刈りなんかして知らないうちに基地内に侵入しちやって、銃をむけられることがある」男性はどこか諦観のただよう笑みを浮かべながらいった。

男性の日常生活を映しながらナレーションがながれる。

「この男性は、戦後まもなく、当時の日本を占領していたアメリカ軍によって、強引に所有地を接収され、基地用地とされてしまった。太平洋戦争が終結した昭和二十年の夏、命からがら生き残った沖縄県民を、アメリカ軍は県内各地に建てた強制収容所に収容した。男

性も、そんな収容所にいれられたひとりだった。収容された県民は、その年の末からおよそ二年間かけ、すこしずつ収容所から解放された。しかし、故郷にもどった県民たちが見たものは、信じがたい光景だった。じぶんたちの家や田畑は一掃され、米軍基地へと変貌しており、有刺鉄線と高い鉄条網がかねらの立ち入りを拒んでいたという」

老体へのインタビューに移行する。

「やっと戦争が終わってね、戦犯みたいなあつかいをうけて、やっと帰してもらったとおもったら、それですよ。みんな啞然としてましたよ。ぼくもふくめてね。でも基地になっちゃったものはしょうがないって、みんなじぶんでじぶんがいい聞かせてね、別の土地に移ったんですよ」

ふたたびナレーションが挿入される。

「当時、付近には旧日本軍の飛行場があったが、アメリカ軍はこれを接收しただけでなく、飛行場のおよそ四十倍もの土地をまるまる取りあげ、現在の嘉手納基地を建設した。住むところを奪われた県民たちは、山あいなどの劣悪な場所に移り住むことを余儀なくされた。こうした、土地を奪われた地主、立ち退きを強要された住民は、あわせて五万二〇〇〇戸以上にのぼったという。それに対する県民への補償はいっさいなされなかった。ハーグ陸戦法規などの国際法によれば、たとえ戦争中であっても私有財産を没収することはかたく禁じられており、やむをえず収用するばあいは補償などの代価を支払うことが義務づけられている。終戦後も県民を収容所にとじこめ、そのあいだに土地を奪ってなんら補償しないというアメリカ軍の行為は、まぎれもない国際法違反だった」

男性へのインタビューにもどる。

「もういちどゼロからがんばろうってね、空襲や艦砲なんかでぼろぼろに荒れた土地を、みんなで協力して耕して、畑にしとったんですよ。いまは日本がアメリカに占領されてるから基地になってるけれども、いつかじぶんらのものとして、もどってくるって信じてね」

そこへいきなりアメリカの兵隊が来てね、ここはアメリカの土地になったから出ていけって言われてね。いえここはわたしらが開墾した土地で、ここに住んでるんですっていつても、ぜんぜんだめ。決まったことだの一点張り。小銃なんかをちらつかせてね、そういうんですよ。あいては兵隊ですからね、逆らったりしたら殺されるんじゃないかとおもいましてね。いつ出ていかんといかんのですか？ てきいたら、あしただって。あしたの何時までに荷物をまとめて出ていって……」

ナレーションがいきさつを補完する。

「戦後復興がすすむ一九五一年、日本は連合国とのあいだにサンフランシスコ平和条約をむすぶ。沖縄県民はこれによってじぶんたちの土地が返還されると喜びに沸いたが、まっていたのはつらい現実だった。サンフランシスコ平和条約は、むしろアメリカの沖縄統治継続を裏打ちするもので、これにより、沖縄は以前よりさらに土地が占領されることとなった。土地の接収はとどまることをしらず、ときには実力行使にでることもあったという」

「わたしらは住む家をとられて、泣く泣くほかの土地に移って、戦争で荒廃した、ほんとうの不毛の大地を耕してね。血のにじむような努力をして、なんとかやっていけるところまで直した。そこへ（そういつて男性はライフルを構えるしぐさをした）来たんですからもうほんとう、軍隊みたいなのがぐりとわたしらの集落を囲んでね。脅すんですよ、時間までに出ていけと。それで一晩中かんがえましてね。いくらアメリカ軍でも寸鉄もたない一般市民をむりに排除して土地を奪うなんてことはしないだろうと。だからつぎの日、みんな家の玄関のまえに正座してね、兵隊を待ち受けたわけですよ。そしたらね、ブルドーザーやショベルカーで来た兵隊がね、うちに来て、わたしがいるのもかまわず家を押し潰してね、ぜんぶめちゃくちやにしてひっくり返して。もうすこしで巻き添えになるところでしたよ。ほかの家もそうでした。乳飲み子がいても病人がいてもおかまいなし。アメリカ兵が、まだ首のすわってないような小さい

赤ちゃんの首根っこを掴んで、トラックに放り込んで、さつさと家を取り壊したりしてましたよ。いまでもあの赤ちゃんの泣き声と、母親の叫び声は忘れられません」

沖縄の強烈な太陽を浴びて燃えるようにきらめくハイビスカスの花をなめて、純白によこたわる砂浜と、かぎりない生命をはぐくむ青い海が画面に映される。

「やがて戦争終結から二十七年のときがたった、一九七二年。沖縄が、ついに日本に返還される。アメリカ領ではなく、日本の領土として正式に返還されたとあって、こんどこそアメリカから土地をとりもどせる。基地を追い出せると、沖縄県民のあいだに希望の光が射し込んだ。しかし沖縄には、いまだに広大な在日米軍基地が居座りつづけ、さらに増設までされているのが現状だ。男性は、日本政府に裏切られたというきもちでいっぱいだと話す」

「沖縄にばかり負担をおしつけてね、それでじぶんらはアメリカに恩を売ってるんですよ。条約の有効期限がきれるたんびに新しい条約とか法律をつくってね。沖縄が日本に返還されたあとも、かわらずアメリカが沖縄を基地として使っていていいですよっていうね。戦争が終わってずいぶんたちますけど、沖縄は、いまだに占領されているんじゃないかっていうのが、正直なところですよ」

「なぜアメリカは、これほどまでに沖縄に基地をおくことにこだわっているのか。日米安全保障条約にもとづく日本の防衛のために、沖縄の在日米軍基地が必要だからだろうか。軍事評論家の友鶴謙介氏によれば、アメリカの世界戦略が大きく関わっているという」

画面がかわり、額の頭髮前線が決死の撤退戦を繰り広げている中年のインタビュ어가インサートされる。

「沖縄には大規模な米軍が駐留していますが、そのなかのメインは海兵隊なんですね。海兵隊っていうのがどういう軍隊かっていうと、他国、よその国に出掛けていって攻めいる、よその国に戦力をすみやかに展開する、これに特化しているというものなんです。つまり防衛じゃなくて相手国を攻撃するための軍、なわけですね。これで

沖縄の米軍が日本の防衛を目的としてはいないということがわかります。また一九八二年に、当時のアメリカの国防長官が、『沖縄の海兵隊の作戦担当区域は西太平洋およびインド洋であり、日本の防衛任務は管轄外』と、はっきり明言しているんですね。ロシア、中国、朝鮮半島、東南アジアへの牽制と、有事のさいに部隊を送り込むのに、場所的に沖縄は最適のところにある。太平洋での覇権掌握のために沖縄はアメリカにとって不可欠なわけです。だから、沖縄に米軍基地が必要なんじゃない。米軍にとって沖縄が必要ということなんです」

資料映像として、ヘリコプターの発着訓練をおこなう普天間基地の風景に場面転換する。

「大国の思惑に翻弄されつづけてきた沖縄。基地や駐留している兵士による問題もあとを絶たない。その最たるものが、騒音だ」

以前に撮影された、C-130ハーキュリーズという勇壮な名に恥じない体躯をもつ輸送機が民家の屋根すれすれの低空を飛び、大きな腹を見せながらカメラの頭上の空を覆い隠し、滑走路に着陸にむかう映像が流される。重厚な巨体を宙に浮かすための四発のターボプロップ・エンジンが発する轟音は、地響きをもたらし、とっせい濤聲となつて集音マイクに降り注いだ。

「基地周辺では、訓練飛行のため、ほとんど一日中、軍用機が離着陸をくりかえしている。その騒音のすさまじさは、民間の空港の比ではない。防音工事などによりある程度は緩和されているが、沖縄の米軍基地は都市部の中心にあり、滑走路からわずか数百メートルしかないところに民家があるという状況では焼け石に水だ。やや古いデータになるが、医師などを中心にした、軍用機の騒音が健康に与える影響を四年に渡って調べてきたある委員会が一九九九年に発表した報告書によると、基地周辺の騒音が幼児の心身の成長に悪影響を与えていること、騒音と早産や流産に因果関係があること、騒音で聴力が低下した人がいることなどが医学的に立証された」

画面がかわり、沖縄地検の庁舎をおおぐ。

「在日米兵による犯罪も深刻だ。九五年にはアメリカ兵三人が、当時小学生だった女の子を拉致し、性的暴行をくわえる事件がおきた。県警が容疑者のアメリカ兵の身柄を引き渡すよう要求したところ、アメリカ側は日米地位協定によりこれを拒否。このとき県民は不満と怒りを爆発させ、翌年には十万人規模の県民大会が開かれ、日米地位協定の改定を訴えた。厳然と立ちはだかる日米地位協定の壁。日米地位協定第十七条には、駐留している米兵が日本国内で犯罪をおこなった場合、公務中であればアメリカ側に、公務外の事件は日本側に第一次裁判権を有する、と規定されている。ここで問題となるのは、どこまでが公務と認められるのかということだ。これは米軍側が公務中であるとの証明書が出されるか出されないかにより判断され、証明書さえ発行されれば、たとえ公務外だったとしても公務中となってしまう。事実、アメリカ兵が交通事故を起こしたとき、公務中でなくとも米軍がすぐさま証明書を発給し身柄を引き取っていくなどの無法も横行している。さらに、第一次裁判権は、有している側が自主的に放棄すれば、裁判権は第二次裁判権をもつ側に移行する、となっている。日本が第一次裁判権をもつ事件であっても、アメリカに配慮し、とくに国民の関心をあつめるような重大な事件でないかぎり、裁判権を放棄することが常態化してしまっているという。一九七〇年十二月から翌七一年十一月までのあいだでは、第一次裁判権のある犯罪件数に対し、裁判権を放棄した件数の割合は、おなじくアメリカと同盟をむすんでいるイギリスでは九・一パーセント。日本ではなんと七十五・二パーセントにもぼる。こうした不平等さにくわえ、アメリカ兵による凶悪事件そのものの多さが、住民の不安に拍車をかけている」

嘉手納飛行場とおぼしき広大な基地が映る。

「米軍基地は沖縄の中心部にあるため、地域振興が阻害されているという声もある。基地さえなければ、跡地に公共施設や大型商業施設、住宅をつくり、より発展をとげられるが、それができないため、やむなく膨大な費用のかかる埋め立て工事などで土地を確保しなけ

ればならない。沖縄県民は戦後半世紀、ずっとこの苦痛に耐えてきたのだ」

映像が、ヒットリア米大統領の会見のものになる。

「そこへ大きな転機が訪れた。アメリカのヒットリア大統領が、日本をふくめた、世界中の米軍基地の一斉撤収を決定したのだ」

演説するヒットリア。その画面下に字幕が表示される。

「アメリカは正義の力をもって、われわれの生命を脅かす悪魔を倒すために、いまこそ一致団結しなければならない」

「U・S・A！ U・S・A！ U・S・A！」

人人の歓声がフィールドアウトし、音声が一瞬も消えなくなる。

「沖縄からも、この四十八時間で、ほとんどすべての米軍が撤収を完了した。土地をアメリカに奪われた男性は、この日が来ることを待ち望んでいたという」

老年の男性のインタビューへと帰結する。

「やっと……やっと願いが叶ったっていうのかな。長かったですよでも率直に言って嬉しいです。怪獣に感謝したいくらい。先祖代々まもってきた土地をね、わたしたちの世代でとられて、申しわけたたないと思っていただけだね。思いが通じたのかなと」

男性は遠くを、はるか遠くを見るような目をした。

「わたしの戦後つちゅうのが、いまやっと終わったという感じがす。そのあいだにわたしの仲間は今もみんな死んでしまいました。一目でいいから、米軍のいなくなった基地を見せてあげたかったです」

そして、男性のしわだらけの顔が心持ち、けわしくなった。

「けっきょく、ヤマトンチューは戦中も戦後もウチナンチューを利用するだけ利用して、捨て石にした。アメリカが引き揚げたのも天の配剤で、政府がなにかしてくれただけじゃない。だからこのことについて、わたしたち沖縄県民は政府に感謝なんてできません」

映像がスタジオに返り、司会者やコメンテーターが真面目そうな顔をして議論を始めた。

というのを、百里基地の休憩室で浅間、金本、早蕨の三人が眺めていた。三人とも飛行服に着替え終わっている。

「どーなるんすかね、これから」

早蕨が心配そうな表情でつぶやく。椅子ではなくテーブルに腰かけていた浅間が笑う。

「お、早蕨くんがガラにもなく識者みたいな顔してらっしゃいますよ金本くん」

「背伸びしたい年ごろなのだよ浅間くん。察してあげたまえ」

茶化すふたりに早蕨がふくれっ面になる。「まじめに言ってるのに」

「じゃー教えてやろう。まずわかりきってることは」浅間が首だけ早蕨に向けながら説明する。「アメリカの後ろ楯がなくなった以上日本の軍力はガタ落ち。少なくともまわりの国はみんなそう思うだろう。これまで以上にロシアや中国の領空、領海侵犯が激増する。ロシアが北方領土どころか北海道にまでちょっかい出してきて、日本近海は中国の潜水艦と巡視船と工作船がウヨウヨ。ある日尖閣諸島に漁船に偽装した中国船が難破を装って上陸し、それを救助する目的で中国の軍艦がくる。“救助”したあとに駐留をつづけ、いつのまにか軍事施設をおったてて、ここはわれわれの領土だと既成事実をつくる。かくして日本は蹂躪されるのであった。とっぺんぱりのふう」

「ぜんぜんよくないじゃないですか!」

「まあ落ちつけ。いますぐにつてなわけじゃない。冷戦期なんか年間のスクランブル回数が千回近かった時代もあったんだ。第二次冷戦で考えればいいさ」

現代の空自のスクランブル発進回数は、全国の基地をあわせて年間三〇〇回くらいである。一日一回はどこかの基地から自衛隊機がスクランブルしているという計算であり、それだけ領空侵犯しそうなあやしい不明機がいるということだ。また、年間三〇〇回のうち、八割は中露のどちらかである。

「あと、あれじゃないか？ 沖縄が死ぬ」

金本がいい、浅間が相づちを打つ。

「それはいえる。あそこは米軍基地があるからどーにかこーにかや  
ってられるようなもんだ」

早蕨が疑問をいなく。

「どうしてですか？ 米軍撤退は沖縄県民の悲願というか、総意だ  
ったんでしょ？ さっきのおじいさんだってそう言ってたし……」

「まあ、いかなるものも善い面、悪い面の両方があるってことだよ。  
沖縄の在日米軍基地だってな、そう簡単には二元論で語れねーんだ  
よ」

そういつて浅間は沖縄の在日米軍基地の是非について語りはじめ  
た。

「まず、基地反対派に、基地があるから経済がうるおう。基地で働  
く人だっているし、そのおかげで消費と税収があるっていうと、  
まずまちがいなくこう反論してくる。『沖縄経済は軍基地で成り立  
っているってよくいわれるけど、そんなことない。沖縄県の軍関係  
の収入は、県全体の五パーセントしかない』」

数字はうそをつかない。うそをつくのは数字をつかう人間のほう  
である。とくに百分率は分母の条件がかわればまったくちがう数字  
に変貌をとげる。

この五パーセントという数字には、軍用地の使用料、軍関係の雇  
用の給与、軍関係の消費、がふくまれている。こうみると、たしか  
に基地関係のすべてのカネが五パーセントのなかに入っているよう  
にみえる。

この五パーセントのなかには基地による騒音対策などの公共工事  
や国からの補助金が入り込まれていない。また在日米軍人のすむ住宅  
の建設、維持費も考慮されていない。家というのは建てればすむと  
いうものでもない。キッチンにトイレ、冷蔵庫やエアコンもいるし、  
洗濯機やテレビ、洗濯機、アメリカ人だから食器洗浄機もいるだろ  
う。これらの家具家電は一世帯ごとに必要だから、まとめるとかな

りな金額にのぼるのは容易に想像できる。これらのユーザーは米兵だが、メーカーに発注するのは住宅販売会社の日本人であり、受注するメーカーもまた日本人である。つまり日本人から日本人への売り買いにあたるため、五パーセントのなかの軍関係消費にははいらない。軍関係収入に区分されるのは、たとえばコンビニで商品を買うとか、飲食代であるとか、米兵が直接支払うぶんしかない。そりゃ数字が小さくてとうぜんである。

家を建てるときはたいていローンを組む。そのカネを融資するのは地元の銀行である。貸す相手がいなければ銀行はやっていかれない。しかも相手は米国軍人という、信用のうえでは最上級の顧客である。それに住宅のデベロッパとか、工務店とか、メンテナン業者とか、電気、ガス、水道とか、家があるというのはそれだけで多くの支出と収入があり、資本を生み、ひいては雇用も維持できるのである。

基地用地の使用料もばかにできない。たしかに接收の事実はあるたようだが、現在では基地内に私有地をふくむ場合はそれに応じた使用料がアメリカから支払われている。最大の米軍基地である嘉手納基地は、その土地のじつに九割が私有地であり、年間二五〇億ちかい賃借料が払われている。嘉手納だけでそれである。沖縄全体の基地使用料は、年間八五〇億ともいわれている。ちなみに沖縄に存在する企業の所得上位一〇〇位を合計しても八三〇億程度である。沖縄の上位の会社が一〇〇社あつまっても、基地使用料にさえ届かない。沖縄の経済が基地に依存しているのがわかる。

「でも、その使用料の原資は、日本の思いやり予算なんでしょう？　じゃあけっきょく、米軍は関係ないんじゃないあ……」

「基地がなくなったら思いやり予算も出なくなるだろう。カネ出すための建前がなくなるんだから」

浅間は高機能携帯電話のフラッシュメモリーのひとつを早蕨にみせた。「無駄口の牟田口がまた言ってたぜ」

そこにはこうあった。「会見にて牟田口首相、『基地がなくなっ

たんだから沖縄にはもう補助金出さなくていいよね』」

浅間は苦笑していた。

「この補助金てのは……」

公共事業には国からの補助金がつきものだが、沖縄は他県にくらべ、工費にしめる補助金の割合が高く設定されている。道路では他県はだいたい七十パーセントが相場だが沖縄では九十五パーセントである。漁港整備なんかでも、他県は六十五パーセント前後、沖縄は九十パーセント。学校建設整備なら他県の五十パーセントに対して沖縄は八十五パーセント、など……。この高率補助金はおよそ全産業の分野に渡っている。

この高率補助金制度は沖縄振興措置法にもとづくものであり、はい話が「基地があるからさ、補助金を弾むよ。それで勘弁して」というものである。

高率補助金があるからこそ、それを受けられる前提で沖縄の公共事業は成立している。ほかの県からすればこの制度はどう考えても不公平なのだが、基地がたくさんあるから許しているのである。基地がなくなれば、高率にする理由が消滅し、財政緊縮が叫ばれるのご時世、まちがいなく不公平だと全国から剔抉てつけつされるだろう。

ただでさえ失業者の多い沖縄で補助金が削減されれば、公共事業は減り、さらに失業者がふえるのは必定。

「でも、基地をなくせば跡地に商業施設をつくれるし、より経済発展できるのに、基地がそれを邪魔してるって話もありますよね。商業施設がつくられれば、基地依存の経済から脱却できるんじゃない……」

「基地がなくなるということは米兵もいなくなるってことだ。補助金もなにもなくなって財布を軽くされたなかで商業施設だけ建てて、経済をまわしていけるだけの力ネが米兵ぬきの沖縄県民にあるのかどうか」

いっぽうで、在日米軍基地は県民にとってなくてはならない就職先である。基地が県民からほんとうに忌み嫌われているのなら「連中の軍門に下ってたまるか」的な感情もあるはずだが、現実には職

場としての沖縄の米軍基地の募集倍率は平均で二十倍をこえ、基地に就職するための専門の学校さえあったりする。単なる仕事先としても魅力があるし、それに、基地に勤めればおのずとアメリカ兵と触れあう機会も多くなる。ネイティヴの英語を身につける絶好のチャンスでもあり、国際交流の好機でもあるといえよう。米軍基地が多いだけにこうした部分で他県を出し抜ける可能性があり、国際化が重要視されるなか、うまく使えば沖縄の前途は洋洋たるものとなるだろう。基地がなくなれば、軍基地に雇用されている一万人ちがい沖縄人の仕事とともに、その夢ははかなく潰える。

そして、現実には、米軍基地はなくなってしまった……。

「米兵による犯罪や、日米地位協定なんかの問題はどうなんですか？」

「たしかに基地周辺でアメリカ兵が犯罪をやらかすことはある」これには金本が応じた。「じゃあ訊くけどな。日本人は犯罪しないのか？」

早蕨の呼吸が途絶し、返答に窮する。

「沖縄にすむ沖縄人はいつさい、罪を犯さないのか？ たしかにアメリカ兵がレイプ事件を起こした事実はあるし、それは許されないことだ。だが、日本人はまったくレイプをしないのか？ 外国人による犯罪が問題だってんなら、中国人や韓国人、ブラジル人やイラン人、ペルー人、日本で犯罪を起こす外国人はアメリカ兵だけじゃない。全体の犯罪件数に対する外国人犯罪の割合は東京や大阪のほうが多いんじゃないか？ まあ人口比もあるから一概には言えないが」

金本は一重の目で早蕨を見据えつつ、ことばを継ぐ。

「なにも米兵の犯罪はぜんぶ許せていつてるわけじゃあない。だけど逆に米兵の犯罪をことさらに槍玉にあげるつてもものフェアじゃないよねって話だ」

「フェアじゃないっていうなら」早蕨が紅顔の少年そのもののようにいった。「地位協定なんて、アメリカ側が有利じゃないですか。」

日本国内で罪を犯した兵士を日本の法律で裁けないなんて」

「じゃあ日本の法律で裁判ができるように改定するべきって？」

うなづく早蕨を、金本はできの悪い生徒をみる教師のような優しい笑顔で迎える。

「日本側は不平等だっていうけど、案外そうでもない。たとえば、自衛隊がイラクに派遣されたときな。イラクみたいな中東の国々はイスラム国家だから法律も基本的にイスラム法なんだ。イスラムは厳しいぞ。レイプはやったほうもやられたほうも死刑。同性愛も死刑。でだ、もしかりに、イラクに派遣された自衛隊員がその地で犯罪をやらした場合、イラクのイスラム法ではなく日本国内の法律を適用して裁判しますよと、日本がイラクに約束させてるわけだ。

イラク側も、それでもいいですよと了承して、それでやっとこさ派遣となったんだ。じゃないと、まあ、たとえばホモの自衛隊員がいる場合、最悪入国した瞬間に死刑になりかねないからな。これは極端としても、習慣、文化の相違による誤解から、こつちではなんでもないことが向こうでは犯罪にあたることは珍しくない。受け入れ国の法律に任せれば日本の自衛隊員が無用のトラブルに巻き込まれかねない。だから裁判権の所有を日本側にあるように認めさせた。

ついでにいうと、二〇〇四年のイラク派遣のときには、もし自衛隊が誤射ツたり流れ弾が現地の民間人にあたって殺傷しちまっても罪には問われないようになってた。あらびつくり、日米地位協定において日本が不平等だといっている裁判権の帰属と同じか、いやそれ以上に日本に優遇たることを求めてやしないか？」

浅間がひきとる。

「補足すると、日米地位協定ってのは、日米安保のなかに組み込まれている協定だ。もともと日米安保ってのは、ざくばらんに要約すると『アメリカは日本を防衛する義務があるが、アメリカが攻撃されたとき、日本がアメリカを防衛する義務はない』っていうもんだ。だって日本が助けに行ったら集団的自衛権の発動になっちゃうからな。それでもいいよってのが日米安保。地位協定はこれを前提

に策定されているからな、ちつとくらいいい目を見させてくれたっていいじゃんかよーっていう訴えだな。アメリカの議会でも日米安保はアメリカ側に不平等だっていう声もある」

「えっ？」

「アメリカは日本を守らなきゃならないが、日本はアメリカを守らなくてもいいってところさ。なんでよその国のために血を流さにやいかんのじゃーってな。ちなみにNATO加盟国は、同盟国が攻撃を受けた場合は協力して集団的自衛権を行使する義務を負ってる。こちらは困ったときはお互い様的な条約だが、日米安保はそこだけみれば日本有利につくられてるからな」

テーブルの上でだらしなく後ろに回した腕に体重を預け、脚を組んで総括する。

「裁判権について不公平なのを是正しろっていうことはつまり、おれたちが中東に派遣されたときはイスラムの法律に裁かれにやらんってことにもなる。日本にいるアメリカ兵には日本の法律を適用する、よその国に派遣した自衛隊員にも日本の法律を適用させるつーのは、二枚舌にもほどがある。そのときこそ日本の世界的信用は地に墜ちるだろうな。在日米軍に日本が与えているいわゆる特権のを、日本も派遣先の国々に求めているんだから」

すっかり自信をなくしたようすの早蕨を見下ろし、吹き出してみせる。

「まあ世の中、白と黒だけじゃーわけらんねってことよ。空戦にも絶対の正解はないだろ」

慰めになっっているかどうかは疑問の余地がある。大いに。

そのとき金本が室の入り口に細い目をやり、おかえり、と笑った。浅間と早蕨もそちらを向くと、エピカ隊のもうひとりのメンバーの占守が、ばつの悪そうに頭をかきながら入ってくるところだった。不機嫌に伏せられた長いまつ毛が、白磁の頬に影を落としていた。

「やっぱだめだったか」

浅間の笑いながらの問いに、占守が美貌を曇らせる。

「きょうの飛行訓練は中止だそうです。各自日報は通常どおり提出するようにと」

「飛ばねーんじゃ書くことねーよな、なーんにも」

浅間と金本が意地悪げに笑いあう。

予定ならすでおのおの戦闘機に搭乗し、いまごろは空の上にいるはずの四人が地上で雑談などしているのは、つまりこういうことだった。事件はきょうの早朝に起こったのである。

百里基地には、その敷地内に飛び地のように基地反対派の所有地があり、用地買収もできないままにいたっている。反対派の土地が邪魔しているがゆえに、百里基地の誘導路はそこを迂回するうちに「く」の字型に折れ曲がっているなどかなり支障をきたしているのだが、飛び地とはいえ私有地でもあるし、所有者である反対派に「売らない」といわれればそれまでなのでどうしようもない。しかも私有地だから自分たちの好きにしても文句はないだろうと、その飛び地に「自衛隊は違憲の軍隊」「自衛隊は人殺しの訓練をしている」「日本の軍国主義がアジアの緊張をまねく」などとこれ見よがしに書かれた巨大看板が立てられていたりする。それだけならまだよかった。看板は動かないからだ。

だがこの日、百里基地に点在する飛び地のすべてに所有者の反対派の人間やかれの仲間が結集し、朝から大量の風船を膨らませては、つぎつぎ空に放って自衛隊機の発進を阻止しているのだった。そのためにヘリウムのボンベまで用意する周到さに基地関係者は啞然としたが、なにしろ色とりどりの風船がさながら空の精霊流しのように舞い上がって視界を妨げているものだから、航空機の離陸は不可能となった。反対派の言い分としては、ただ風船を飛ばしているだけ、ここは自分たちの土地なのだから自分たちがなにしようが自由だ文句をいわれる筋合いはないというものだったが、とどのつまり、空自への妨害が目的であることは自明であった。おそらくは終戦記念日が近づいているところへ在日米軍撤退という歴史的転換劇をつけ、このさい自衛隊もまとめて消滅しろと、直截にこそいわ

ないまでも言外に主張しているようである。

何百という風船が空に旅立っていくのをみた浅間は、「軍国主義反対とかいいながら風船爆弾のまねとかよ。やってる発想の次元がおなじじゃねーか」と笑い、金本は「風船おじさん元気かな」とつぶやいた。

占守はなんの感慨もいかなかったようだが、早蕨はぷりぷり怒った。

「なんでああいうことするんすかね。自衛隊反対ってんなら、いったいだれがこの国を守るっていうんすか」

「誠心誠意の外交やって敵をつくらなかったら軍事力はいらない、軍事力があるから戦争が起こるんだって考えなんだろ」

「なんすかそれ。軍事力があるから戦争が起こるんじゃないで、戦争があるからいっぱしの軍事力を持たなきゃいけないんじゃないですか。んな、警察がいるから犯罪が起こる、警察がいなければ犯罪は犯罪として認知されないから犯罪率はゼロになるっていう理屈とおんなじすよ。胃袋がなければお腹が空かないとか、そういうのと同レベルのお話すよ。ああいう連中にかぎって、いざ鎌倉のときに助けてくれおまえら自衛官なんだからおれら助けて当然だろって言うてくるんすよ。そりやあまそれが仕事なんすけどね。なんなんですかほんとに。それに、誠心誠意の外交ったって、日本ほど誠意のない外交をやってる国なんてないすよ。筋の通ったことをちゃんと主張するべきところを、エヘラエヘラ笑ってごまかすような国をどこが信用してくれるんですか。まったく」

「なに、あんな連中がいるのも、ひとえに日本が平和だからさ。たとえかろうじて、ぎりぎり、見せかけの平和にすぎないのだとしてもな。考えてもみる、イスラエルやパキスタンやアフリカで、自国の軍隊なんかいらねーってデモするやつがあるか？ おれらが蛇蝎のごとく忌み嫌われているってことは、軍事力の必要性を感じないくらい平和だってことよ。おれたちなんて一生出番なしの穀潰しですめばそれにこしたことはないんだよ」

そういつたことがあり、風船がきれるか人間のほうが飽きるかして離陸ができるようになるかもしれないので、占守が率先して基地司令に残って訓練の決行の有無をあおぎ、男三人は休憩室で待機していたのだった。

「飛行教導隊だっていつまでも百里にいるわけじゃねーからいまのうちにやり合いたかったんだがなー。飛べねーとなると暇だよ……」  
浅間、金本が声をあわせる。

「な！」

占守がふたりにつられたのか、かすかな笑みを浮かべた。「そうだろうと思って」占守は左手に下げていたビニール袋から、魅惑的な宝物を取り出した。「司令部の帰りしなにもらってきました。SDFヌードル」

浅間は急いでテーブルから下りた。そして三人は合掌して占守をありがたそうに礼拝した……。

占守がもってきたのはカップヌードルだった。だが、市販されているものと異なり、パッケージには日本列島をバックにSDFと大きく印刷されている。これは自衛隊むけに特別に製造されているカップヌードルで、SDFとはSelf Defense Force、つまり自衛隊のことである。おやつとして隊員のあいだでは絶大な人気をほこる逸品だ。

「しょうゆ味とシーフード、ふたつずつ持ってきましたけど、隊長はどれにします？」

「おまえらで好きなん選べ。おれはあまったのでいい」  
で、けっきよく占守と早蕨がしょうゆ、浅間と金本がシーフードとなった。

熱湯を注いで麺が目覚まし花を開かせるのをまつ。熱湯さえあればいつでもどこでも腹を満たせるという点が、自衛隊にカップヌードルが人気のある理由だ。

黄金いろにひかる麺をすすりながら、テレビを見る。休憩室は飲食禁止なのだが、「あした墜落して死ぬかもしれないねーんだからめし

くらい好きに食わせろ」という浅間の主張により、四人そろって休憩室で食べていたのだった。

「ヌードルもつてきたわたしが悪かったのかな……？」

つぶやく占守に、金本が嘯いた。「いいやおまえはなにも悪くない。いざとなればゼンぶ、あいつのせいにしちゃいい」

「せめて本人に聞こえねーように言えよおまえは」

塩分を効かせたふかい琥珀いろのスープを冷ましながら飲み、早蕨が一と息つく。テレビのニュースはまだ沖縄の基地にかんする話題をつづけていた。

「さっきの話を蒸し返すようつすけど」早蕨が果敢に先輩ふたりにいどむ。「それでも沖縄から基地がなくなるってのは、マイナスの面もあるでしょうけど、プラスの面もきつとあると思うんすよ」

「ほう」

「どんな？」

浅間と金本はふたりでひとりのように早蕨に返事をした。占守はだまって音もたてずにヌードルを食している。

「基地一本だのみの経済を改革して、新しい道を見いだせるはずです。それに、すくなくとも騒音はなくなるんじゃないかと」

「沖縄つて、言っちゃわるいけど観光以外にろくな産業がないよな。それでいて大都市なみの人口密度がある。基地の補助金で食っているとしたか思えんがな」

と答えたのは金本。

「そりやたしかに騒音はなくなるだろうな。でもなあ、沖縄だけでなく、厚木とか三沢とか、基地周辺の家は家賃が安かったり二重窓が標準装備されていたり、騒音で窓が開けられないからってエアコンが何台も設置されていてお値段据え置きだったり、なにかしら利益はあんだよ。で、まあ基地から米軍はいなくなつたが、さて、きのうまでアスファルトとコンクリートでがちがちに固めてた基地をどう再利用するか。ゼンぶぶつ壊して更地にしてなんか建てるか？ そんな途方もない力ネいったいどこにあるんだ？」

跡地の有効な利用法のめどもないまま米軍が消えた。管理しようもない土地はすぐに荒れ、ホームレスやらヤクザやらチャイニーズマフィアやらが住み着き、犯罪の温床になり、基地よりたちの悪い恐ろしい町ができあがるだろう。利用価値もない空き地が増えれば不動産価格は暴落し、担保としての価値もなくなり、不良債権だけがふくれあがる。

「ほら、あれだよ。米軍基地はミトコンドリアみたいなもんなんだよ。ミトコンドリアも最初はただ細胞に寄生するやつかい者だったけれどもな、いまじゃミトコンドリアなしには生物はエネルギーを生産できなくなっちゃった」

金本に連なるように浅間がつづけた。

「基地がなくなって、たしかに騒音はなくなり、静かになった。だがな、それは経済が破綻しモノを売る店もモノを買う客もない、車の往来も子供の黄いろい声も聞こえない、静かでおだやかな死の世界のしじまだろうぜ」

うーんと唸る早蕨を横目で見て、ラーメンを食べ終わった占守があきれる。

「わたしが来るまでなにをしてたかと思えば……またそうやって早蕨くんをいじめてたの？」

「いじめとは失礼な。つーか占守。おれいちおうはおまえより階級うえなんだからちつとは敬意を払え。なんか最近おれのあつかいが妙にぞんざいになってきてんぞ」

「浅間、それを占守にいうのは筋違いだ」

金本が神妙な顔つきで浅間に宣告した。

「占守二尉はおまえを正当に評価しているだけだ」

「な問題だろ。いやまて、金本、おまえも二尉だろ。考えてみればおれずつとおまえに『おまえ』呼ばわりされてるんだけど。いまさら気づいたおれ自身にシヨックだわ」

「じぶんでも無意識下におまえ呼ばわりが分相応って思ってたんだろ。あわれよのう」

「なん……だと……」

浅間も金本も酒がなくとも笑い上戸である。浅間がみずから脱線した話を回帰させる。

「いやなに、期待のルーキー早蕨クンとわれわれふたりが楽しい楽しい政治談義に花を咲かせていたんだよ」

「気をつけなさい早蕨くん。このふたりは隙あらば新人を右のほうへ右のほうへと洗脳したがるから」

「聞けや」

軍隊は徹底した階級社会であり、自衛隊も例外ではない。けれども浅間は、ともに空を飛ぶ隊のメンバーを部下としてではなく仲間として思っていた。だから新人の早蕨はともかく、浅間とつきあいの長い金本と占守がおよそ上官に対するものとは思えない口のききかたをするのは、むしろ浅間がそうするように誘導してきた部分はかなり大きかった。

「浅間の名誉のためじゃないが、どっちかつつと早蕨のほうが右っぽかったよな」

「ああ、こいつは愛国者の素質があるな。チャップリンいわく、愛国心が戦争をおこすらしいが、郷土愛をもつことはたいせつだ」

そこで金本が早蕨にからだをむけ、さとするような口調でいった。

「でもおぼえておけよ、新人。飛行機が両翼あつてはじめて飛べるように、人間だつて右と左、どちらかの翼だけじゃ生きていけないもんさ」

「なにきれいにまとめようとしてんだよ」

ふたりがいうのに、占守は肩をすくめながら、くすりと笑った。精強な男たちのなかにあつて、それは夏菊の花びらが薫風にそよぐようだった。

「そもそもは、あの怪獣とかいうやつですよ」

当の早蕨が話題を切り換えた。

「いったいなんなんすかね。あれが原因で米軍が撤退したようなもんですし」

おそらくはそれが、いま世界中の人間たちの関心をもつともあつめていた事柄であつた。一回目の＜ハリー・S・トルーマン＞沈没は「巨大生物との接触による事故」とのあつかいだつたが、二回目の＜ドワイト・D・アイゼンハワー＞と駆逐戦隊のたどつた悲劇は、米政府ははつきりと「交戦状態にはいつた」のち、「全滅」と発表しているのである。いくら未知の生物だからといって、そんな化物が存在しうるだろうか。一部の有識者のあいだでは、生物ではなく潜水可能な新兵器という憶測もながれ、米軍の在外基地撤収もあわせ、情勢をいちだんと混沌とさせていた。また、海への恐怖感から、外洋をめぐる豪華客船の予約があいついでキャンセルされるなど、すでに経済に打撃が出始めている。

浅間は、あの夜に逢着した奇妙な老人を思い出していた。怨念。残留思念の集合体。武器では殺せぬ。老人と、その預言めいたことばは、とりとめもなく、ただの氣狂いの世迷いごのように思える。浅間はあのあと、すぐに警備詰所に赴き、帳簿を見せてもらったが、つねから出入りしている業者の名以外のサインはなく、また警備員たちにこれこれのような人が通らなかつたかと訊いても、そのような老人を見たおぼえはないとのことだつた。いま考えれば、頭に鉄かぶと、足には脚絆を巻きつけた酔狂な出で立ちは、戦時中ならともかく、いまの世では衆目をあつめないわけがない。そんな怪しい人間が基地内に入つてこれるとはとうてい思えない。冷静に思い返せば、浅間が目を開けたまま夢を見ていたと仮定したほうが合理的な邂逅であつた。

しかし……その存在とそれが発したことは、なにかいいしれぬ不安を与えていた。まるで澄明な水に落とした一滴の血が煙みたく広がりながら沈澱し、上澄みだけを見ればつねとかわりないが石を投げ込めばたちまち舞い上がつて水を汚すように。ヘビに直接襲われた人間は日本にはあまりいないはずだが、それでも人はヘビを恐れる。論理的理由はないがとにかくおそろしい。それに類似した、気味のわるい感覚だつた。

ナメクジウオというきわめて原始的な動物がいる。ナメクジウオはナメクジでも魚でもない。からだには脊椎にた脊索という、中枢神経を束ねたものが通っている。この脊索が進化をして脊椎になったのが、人間をはじめとする脊椎動物のルーツであるといわれている。ナメクジウオは古代の脊椎動物の雛型を現代まで留める生き証人である。

地球上に現れた初期の脊索動物は、ピカイアという、いまのナメクジウオに酷似した特徴をもつ泳ぐナメクジみたいなものだった。このとるにたらない、原始的な背骨をもつナメクジもどきが、人類をふくむ脊椎動物すべての直接の祖先である。このピカイアはその頼りない外見そのままに、肉食動物たちの格好の餌食となった。ピカイアに触れるものはおしなべて捕食者であり、ピカイアに近づくものはことごとく敵であった。その魔の手からのがれるため、ピカイアはふれられると強烈な刺激を脳で感じるようにみずからを改造し、からだが反射的に逃走行為に移行するように対策した。これが、動物の感じる「痛み」の原型だった。また、視界に映る影が一定以上の速度で大きくなるのを認めると、やはり反射的に逃げたいという欲求を感じるようにおのれにプログラムすることで、敵の接近を感知したときすみやかに逃避できるようになった。これが「恐怖」のルーツである。

この祖先が感じていた痛みと恐怖は、いまの現生動物たちにも脈々と受けつがれている。もちろん、人間にも。

痛みは遺伝上の祖先たちの遺産だ。だから個体の受けた刺激による痛みだけではなく、何億年ものあいだ世代交代をくりかえしてきたわれわれの祖先たちが感じていた痛みまでもトレースしてしまうことがある。

事故などで腕や足を失った人が、すでにない足の裏をかゆく感じることがある。入浴したさいに、うしなわれた腕が熱い湯を浴びていると認識することがある。

足がかゆさを感じているのではない。足のあった祖先たちの感覚

を受継しているのだ。腕が熱湯の刺激を受けているのではない。腕があつた祖先たちがかわりに熱いといっているのだ。脊椎の前身たる脊索をもっていたピカイアから連綿とつむがれた生命の記憶が惹起されているのだ。

ヘレン・ケラーは先天の盲人で生まれてこのかた色を見たことがないが、彼女は赤い布に触れたとき「暖かい」といい、青い布を触ったときは「寒々とした」感じがした、と述べている。それは彼女という個体が色を見たのではない。……

浅間にとって、老人の、ともすればただのざれごとと片付けられようような話は、まさにそういった感覚をもつて浅間に迫つた。亡者のように現れ消えた老人が不安をもたらずのではない。脊髄に刻み込まれた、自身の体験に由来しない、実体なきがゆえにのがれることのできない幻痛が、浅間の胸に凝こもっているのだつた。

「核実験でついに神様がブチ切れたのさ。もしくはなんかの動物が放射能で突然変異してばかでかくなつたのかな」

浅間が思惟しているそばで金本がいい、早蕨が手を振る。

「まさかあ、そんなだつたらいまごろチェルノブイリやマーシャル諸島は怪獣王国つすよ」

「わからんぞー、ムルロア環礁からばかでかい蛾が飛んできたり、故郷を核でふっ飛ばされた目つきの悪いいかつい鳥が復讐にきたりしてな」

「もしくはカタツムリのお化けが出たりするんすかね？」笑いをわずかにしぼり、早蕨の声に神妙さが微量にまじる。「それに、巨体生物といつしよに現れた戦闘機の群れつてのも気になるし」

洋上に出現した所属不明機の大軍勢こそ、空母をしずめたアンノウンは新兵器ではという主張をする人間たちの論拠だつた。しかもその不明機が旧日本軍機であつたことから、日本が関係しているのではという嫌疑さえ、世界からかけられているのであつた。その嫌疑をいなく最右翼は巨体生物による被害者であるアメリカだつた。世界中でもっともはやく米軍の引き揚げが優先しておこなわれたこ

とが、アメリカの日本に対する不信の強さを物語っていた。どう考えても日本の、いや人類の兵器などではないことは現実的観点からみてあきらかなのだが、畢竟、被害者というものはありもしない誇大妄想にとらわれるものなのかもしれない。あるいは、イージス艦の機密データ流出、米大統領専用機の来日のさいのフライトプランを管制官がブログに掲載するなどの相次ぐ不祥事でたまりにたまつた日本への不満が爆発したのかもしれない。とまれ米軍の引き揚げはすなわち、日米安保の破棄をも視野にいれていることはだれの目にも明白であつた。

「なあ、占守はどうおもつ？」

「さあ」

占守は悉皆興味がないらしく、生返事だけを早蕨によこした。

「さて、片付けますか」

金本が宣言しながらスーパも飲み干したカップ麺の空き容器をもつて立ち上がり、浅間もわれに返つた。「国を守るならまず分別から！」と書かれたごみ箱に捨て、浅間は隊長として令達した。

「各自、『ふ号作戦』が解決するまで自室待機。以上、解散」

三人はめいめい部屋に帰っていった。浅間がテレビのスイッチを切ろうとリモコンを手取るあいだに、キャスターはこんなニュースを伝えていた。

「きょう未明、広島県江田島付近で国籍不明の漁船が航行しているのが見つかり、海上自衛隊の特別警備隊などによって拿捕されました。漁船は船の名前や国籍をあらわすものがなく、出動した特別警備隊の停船命令にも応じず逃走し、さらに特別警備隊の船に発砲してきたため、強制的に取り押さえられました。乗っていた船員は、もっていた銃器で全員がその場で自殺しました。立ち入り調査の結果、漁船は漁業用の道具類がほとんどなく、エンジンやレーダーが軍隊仕様のものに変えられていることなどから、偽装した工作船であることが疑われています。また船の中から大量の自動小銃やロケット砲などもみつき、これらの武器を国内に運び込む目的があつ

たと見て、慎重に捜査を進めているとのこと。関係者によりますと、こうして実際に武器密輸が発覚するのはほんの氷山の一角で、じっさいには多くの武器が国内に入ってきている可能性があり、引き続き危機感をもって取り締まりにあたっていきたいと話していました」

夜のふけた大西洋の闇の海を、一隻の大きな艦艇が進んでいた。ワスプ級強襲揚陸艦USS<キアサージ>である。揚陸艦は上陸作戦のさいに地上部隊を支援するために、おもにヘリコプターや、戦車を海から陸へ運ぶホバークラフトを運用することを目的に建造された艦で、全通甲板といって艦体の上部がすべて飛行甲板となった艦容が特徴である。このワスプ級もそれで、原子力空母ほどではないにしろ、四万トンの排水量と二五七メートルという威容、艦橋構造物が飛行甲板の右舷に立つシルエットの相似から、ひとまり小さくなった空母というような印象をうける。作戦時にはハリアーなども艦載できるが、いま甲板で休んでいる機体は海難救助用ヘリコプターのみが三十機である。つまりこのUSS<キアサージ>は撃沈されたアイクや第28駆逐戦隊から放り出されて海上を漂流している乗員を捜索、救出する任務に就いている艦のひとつだった。

昼間の現場海域は酸鼻極まる地獄絵図だった。比重の小さい破片が海を埋めつくすように浮き、そのうえ漏出した大量の重油で海は真っ黒に染まり、それが陽光をうけてぎらぎらと虹いろに光っているのだった。破片と重油にまぎれて、腕や脚、ちぎれた腸、ずたずたの死体、焼け焦げているうえに水を吸って唇からなにか膨れ上がり、この世のものとはおもえない容貌に変じた死体などが漂っていた。救助にあたった隊員がもつともこたえたのは、破片にしがみついて息絶えている要救助者の姿だった。もうすこしはやく発見できていれば助けられたのではないかと、黒い重油にまみれた同胞の亡骸をみて自責の念にかられた。そんな無惨な光景が水平線の向こ

うまでつづいているのだ。まさに鬼哭啾啾きくしゅうしゅうといったありさまだった。

日が沈み、救出活動はまたあしたとなり、いまは明朝からの搜索開始ポイントにむかっているところだ。海流に流されていることを考慮して、戦闘のあった海域から西へ、アメリカ大陸寄りへと移動する。夜の闇が海を覆い、波の音だけがさざめいて、星のひしめく満天の空に響いている。気がつけば海はうめき声をあげる死者で溢れ、艦にしがみついて引きずりこむのではないかと悪夢にうなされる乗員も多数いた。それでも寝られるときに寝ておかなければならなかった。任務中は眠れない。

艦橋にて操艦している面おも、沈鬱な泥のようないろの顔をしていた。あしたもまた死者たちを回収しなければならない。だが、まだ生存者がいるかもしれない。生きて、助けを待っているかもしれない。それだけがUSS<キアサージ>の千人をこす乗員のからだを動かす原動力だった。

真夜中をすぎたころだった。静謐な光で海と揚陸艦を照らしていた月が、ふいにどこから流れてきた雲に隠れた。

「おい！ あんなどころに島があったか？」

海上を監視していた見張り番の乗員が相棒にいった。艦の進行方向に、それこそ海水のかわりに重油をみたしたような漆黒の海と、絶望いろに塗り潰された空のなかにあってなお黒い、見上げるほどの大きな山のようなものがそびえ立っていた。

相棒はすぐに艦橋に通信した。

「十二時の方向に障害物を発見。回避行動されたし」

艦橋もにわかに騒騒しくなっていた。監視員が前方をさえぎる島を発見するのとはほぼ同時に、レーダーにその影が現れたからだ。

「副長、状況を報告」

衝突警報のけたたましいサイレンが鳴り響くなか、艦長室から飛んできたガルシア艦長が命令すると、ヘッドフォンを首にかけた副長がからだを向けた。

「わが艦の進行方向に障害物です。距離半海里」

「なぜ事前に発見できなかった」

「監視員からも報告がありました。が、レーダー、目視、そのいずれもが、ついいましたが障害物を探知せしめたばかりです。海図にも」  
副長はマップ・テーブルにいま艦がいる海域の海図を広げた。「この付近に島などは描かれておりません」

艦長はいまやるべきことを考えた。

「転舵！ 取り舵いっぱい、方位2-8-5」

乗員がそのとおりにしようとした瞬間だった。スピーカーから恐怖にかられた声が劫風となって吹き荒れた。

「島が……島じゃない！ 助け……！」

監視員からの通信はそこで途切れた。回線がダウンしたのではなく、音声は音波ごとにかき消されたからだった。

そばでジェット戦闘機が離陸するよりもすさまじい大音量が夜天を支配した。そして、USS<キアサージ>の前でたたずんでいた島が、突如動きだし、のびあがって揚陸艦の全通甲板に覆い被さった。甲板上のへりは叩き潰され、艦橋構造物がへし折られ、揚陸艦としては世界最大のワスプ級の艦体は吞まれるように暗黒の海へと沈んでいった。亡霊たちが仲間ほしさに海の底へ道連れにしようとしたかのようにだった。艦が闇に満たされた海から姿を消した。すべてはあつという間のできごとだった。だが、ひとつだけたしかなくとがいった。

その“島”は、最大の揚陸艦であるワスプ級強襲揚陸艦USS<キアサージ>よりもさらに、さらに大きかったのである。

ペンシルヴェニア通り一六〇〇番地、つまりホワイトハウスの正面ゲート前は、深夜にもかかわらず蛸集した一般市民とそれをおしとどめようとする警官隊とで騒然となっていた。議会の議決もなく全世界の米軍を撤収させる大統領の強硬さに反撥する集団と、巨大生物保護を訴える動物愛護団体が中心となっているようだ。「動物

も地球市民の一員」というプラカードを掲げた白人の男が、わたしはベジタリアンとプリントされたＴシャツをそびやかせて、近衛兵よろしくゲート前を行きつ戻りつしている。ほかにも民衆は口々に主張を叫び、警官隊がいなければそのままホワイトハウスになだれこみそうな勢いだっただけだ。

ホワイトハウスの中では文官、武官、そのほかの閣僚、その手足となって指示をこなすスタッフたちがいまでも寝食をけずって働いていた。

「大統領、すこしおやすみになられては」

チトー将軍が声をかけると、目の下にくまをつくったヒットリアは手を振って拒否した。

「すでにわが軍に一万をこえる死者がでている。かれらと、かれらの遺族の無念をおもえば、わたしひとりが情眠をむさぼるなど許されない」

いちどいいだしたらても動かない。チトーはヒットリアの性をしっていたので、それ以上は口を挟まなかった。

ヒットリアは、閣内のだれの目からみても、精神的に追いつめられていた。なにをまちがえたのか。その慚愧の念が大統領を苦しめていた。どうすればこのような甚大な被害を出さずにおけたのか、そしてこのあと、おなじあやまちを繰り返さぬためにはどのような命令を出せばよいのか……一国の元首の重責が、その双肩にのしかかっていた。

「それで、揚陸艦のゆくえは」

ヒットリアが尋ねると、チトーはあくまでも大統領の部下として答えた。

「不明です。三十分まえにUSS<キアサージ>からの通信がとだえて以降、無線で呼びかけつつありますが、いまだに応答がありません。状況確認のため、ラングレーから空軍機が飛び立ちました」

ヒットリアは、ミイラ取りがミイラになったか、といいかけて、それを喉の奥へ押し込んだ。そんなことをいってほんとうになつて

しまつたらどうするのだ。

「最後に通信のあつた場所は」

「ここです」

チトーが丸めてあつた地図をひろげ、海域を指さした。

「ニューヨークからみれば、東南東に約七五〇マイル（一二〇〇キロメートル）の沖合いです」

ヒットリアは通信途絶地点を押さえるチトーの人差し指をじつと無言で見つめていたが、やがてぼつりとこぼした。

「近づいているな……」 チトーもにわかに倉皇として地図を再確認し、表情を険しくした。

USS<ハリー・S・トルーマン>が沈没した“ファースト・コインタクト”が、アフリカ大陸と南米大陸のあいだ。つぎにアイクが敗れたのが、ニューヨーク沖、東南東に約二四〇〇キロ。そして、今回は、その距離が一二〇〇キロにまで縮んでいる。

三点を結びと、巨大生物は北米大陸を……このアメリカをめざしているようにもみえた。

「しかし……まさか……」

苦鳴にもにたチトーのうなりに、ヒットリアは厳しい眼差しをむける。

「われわれは、つねに最悪の事態を想定せねばならん。チトー將軍、たとえ杞憂に終わつてもいい。陸上部隊の準備、近接航空支援をはじめとした支援態勢を手配してくれ」

つけたまわりました、とチトーがいかけたとき、執務室の外で騒がしい物音がした。女性秘書官の、困ります、という声も聞こえる。執務室に入りきらない機材をほかの部屋にいれ、それらとケーブルで接続するため執務室のドアは開放したままになっている。

臨時の司令部である執務室にむりやり入ってこようとするなど、どこの不屈き者だろう。外でがなりたてている市民たちの一味がひそかに侵入して、大統領に直談判にでもきたのか。

やがてその不屈き者が執務室に入ってきた。濃紺の軍服を完璧に

着用した白皙長身の美青年だった。毅然としながらも矯慢さを感じさせない立ち振舞いからは、ただ軍服をまとっただけの素人にはありえない、本物の軍人、真の戦士だけがもちえるオーラが見えるようだった。

室を大股で突っ切る青年のうしろで、彼を止められなかった秘書官が必死に頭をさげて不始末を 詫びている。ヒットリアは鷹揚に手を掲げて不問に付す旨をつたえた。

シークレット・サービスが制止しようとしたが、ヒットリアの「かまわん」というひとことで後ろに下がった。

デスクにかけるヒットリアの前まできた青年は、大統領の目を見て、振り絞るような声でいった。

「とうさん！」

ヒットリアは洪面のまま、まったく笑みを浮かべず、自身と同じ黄金の髪と晴天の青空をとじこめたような瞳をもつ青年を見上げた。

「ネロ。なんの用だ」

だがおよそ息子のいいそうなことは見当がついていた。ネロの端正な顔に激情の嵐が吹き荒れている理由、わざわざ所属のラングレ―基地からホワイトハウスに直接乗り込んでくるようなバカをやらかす理由などひとつしか思いあたらない。

「なぜぼくを前線から転任させようとするんです。知っているんですよ、さきほどラングレ―から搜索のためにスクランブルがあります。やつは、確実にここへきているんです、ここへ！」

デスクを指示指で叩くネロには、憤懣やるかたないようすがあらわれていた。巨大生物の動向について同じ推測をするあたりは、さすがに血をわけた親子らしいというべきか。

「このままやつが接近すれば、東海岸は戦場となります。まさに東海岸が前線なんです。それなのになぜいま、ぼくを、ぼくが率いるアンサン隊をラングレ―から遠ざけようとするんですか！」

「おちつけ」

ヒットリアはネロをなだめにかかった。そうとうな数の人間が好

奇の視線をふたりに浴びせていた。

「われわれの脅威はやつだけではない。アメリカが東海岸に戦力を傾注しているあいだに、よその国から攻撃を受けるかもしれない。それらの仮想敵にそなえるのもりっぱな仕事だ」

大統領はさとすようにいったが、ネ口の憤怒が減じることはいささかもなかった。

「詭弁がじょうずになりましたね、とうさん。なんといわれようとぼくはラングレーからは離れません。あらゆる戦力が必要なときです」

ヒットリアはふかく息を吐きながら椅子の背もたれにからだを預けた。

「ネ口。ここはホワイトハウスだ。この公の場ではわたしはおまえの父親ではなく、三億の国民のあすを預かる合衆国大統領であり、全軍を指揮する司令官なのだ。公私を混同するな」

「どっちが」ネ口の追及は休まらない。「どっちが公私混同しているんです。とうさんのことだ、どうせぼくを安全な任地にまわそうとして……」

「ネ口！」

ヒットリアの雷のような声で、一瞬、場は静まりかえった。ヒットリアは口調を落ち着かせてひとことひとこと、ゆつくりといった。「おまえはまだ若い。最前線で派手に戦い武功をあげたいと思うきもちはわかる。だがこの非常時におまえの希望だけを聞いてやることなどできん。おまえはよけいなことなど考えず、命令にしたがつていればよい」

ネ口の両の握り拳はわなわなと震えていた。

「空軍と海軍のちがいこそあれ、やつに殺されたのはまぎれもないぼくらの仲間です。それがいままた祖国に害をなそうとしているかもしれないのに、尻尾を巻いて逃げるなど、ぼくにはできない！」  
そのあまりに潔癖で凄烈なネ口の目にたえられず、ヒットリアは視線を外した。なぜたえられなかったのか、理由を考えなかった。

考えるのがおそろしかった。

「帰れ」

やっとそれだけいえた。

「わたしは公務中だ。子供の駄駄につきあっているひまはない」

ネロはさらになにかいいたそうにしていたが、振り切るようにして踵をかえし、入り口のところでもういちど父親を睨んで、それから肩で風を切って出ていった。ハリケーンのようなだった。

不自然な静謐に包まれていたのが、音量の絞りをもどすようにもとの喧騒に入れ替わった。

「アンサン隊は」ヒットリアは統合参謀本部議長たるチトーに命じた。「西海岸の空軍基地に配備しろ。ネヴァダでもかまわん」

「了解しました、ミスター・プレジデント」

ヒットリアの顔は憔悴しきっていた。

「あれで飛行隊隊長なんだからな。わが倅ながらよくまあ勤まるものだ」

チトーはあくまで真面目な表情をくずさなかった。「若いのに優秀なご子息ではありませんか」

ヒットリアは微笑したが、すぐに消えた。その青い瞳はさきほどまでチトーと話し合っていた地図を見据えていた。それは必ずしも地図そのものを見ているのではなく、地図を媒介として大西洋を鳥瞰し、そこにいるはずの“奴”を見ているのだった。

「来るなら……来い」

## 八 恐怖の上陸

アランはふだん通りに出勤し、仕事に忙殺される毎日に戻った。

キングス・カウンティ総合病院は連日大盛況をみせ、アランの心中などまるで関係なく患者は担ぎ込まれる。しまいには頭の芯が痺れるような感覚が襲い、なにも考えられなくなってくる。自分がメスを握って手術しているのか、それともメスがアランを操って手術を代行しているのか……いま世界に存在しているのはメスを握る自分と患者とスタッフだけしかないのではないか……むしろ患部とアランの左右の手しかこの世に存在していないとまで錯覚しはじめる。いま縫い合わせているこの傷口も、元を正せばただの複数のアミノ酸からなるたんぱく質を主成分とした細胞の塊にすぎない。この下には迷宮が潜んでいる。クレタ島のラヴィリンスとはちがい、この肉質の迷宮には出口がある。出口があるということは、答えがあるということだ。複雑に絡み合っているようでも、つねに入り口と出口は開かれている。それはなんと素敵なことだろう。行き詰まる袋小路もない、遅滞なき透徹な真理がそこに隠されている。アランはその迷宮の探索者になりたいと思った。どんなに迷おうとも、終わりがあると知っていれば耐えられる。それは抗いがたい魅力に満ちていた。出られるとわかつているならわざと迷うのも一興だろう。アランは恍惚として、日常にあつては皮の一枚に忍び、きょうアランにその姿をみせ、そしていままたアランの手によって人目のつかぬところへ押し込められているそれが、妍麗な笑みを浮かべて手招きしているような気がした。もういちどそれを強烈な照明のもとにさらけ出せたら、そしてニューヨークに吹きわたる夏風にあてることができたなら……。

「完璧です、エイブラムス先生。予定より三分はやく終わりました」  
助手のなんとかいう看護師の声で、アランは我に返った。そこは手術室の一室で、患者を横たえている手術台を中心に、何人もの若

い助手たちが、バイタルサインを管理したり、使用済みの器具をしかるべき方法で処分したり、麻酔の効きを厳密に調整したりしていた。かれらは任された仕事を忠実にこなしていた。なんの不平も不満も言うことなく！ アランは新たな自覚に目覚める予感がしていた。仕事に従順なかれら。まるできょうこの日のこの手術のためだけに、神がその場で創造したのではないかと思われるほど、個性を抑圧して仕事に取り組むかれら。かれらにも、他人からすれば些末な、しかし本人には重大にすぎる日常の苦悩があるのだろうか。取り返しのない失敗がもとで懊悩<sup>あうのう</sup>に情熱の熱量をうばわれ、解決の糸口さえ見せぬような、精神をぼろぼろに食い荒らす芋虫を飼っていたりするのだろうか。悩むあまり、その苦しみから解放されたいがために、大人も子供も、男も女も、自分も他人も分け隔てなく押し潰して抹殺する天の圧搾機のようなものを望んだりしないだろうか。悩み事が圧倒的な破壊の力でなにもかもご破算になってしまふような、恐るべき破局の到来を夢見たりは？……

アランはひとり胸のなかで自嘲した。むかし学校に寝坊して遅刻しそうになったときに、いつそのこと学校に隕石でも落下してくれないかなどと夢想していた幼い時分から、なんら成長していない。人間は霊長類のネオテニー<sup>ネオテニー</sup>とはいいうが、ここまで内面に成長が見られないのは我ながら嘲笑に値する。

アランは、傍らに置かれたステンレスのバットを見た。蒸留水を浅く張られたバットには、使用した鉗子などの金属製器具が沈められている。薄く血に濁った水のなかで妖しく光を反射するそれらの道具たちは、血を吸って喜悦に浸り、快楽の霊光を放っているようでもあった。アランは、飲み介な友人に見つかり、誘いの声をかけられているような感覚がした。鋭利なメスの刃先が、アランを虜にしていた。いまここでメスをとって、自身の首筋に刃を走らせたら……アランはその抗いがたい魅力に囚われそうになった。

しかし実際には、血に汚れたゴム手袋と手術着を丸めてゴミ箱に捨て、「あとを頼む」と助手たちに委ねるだけだった。助手たちも、

アランをとくに引き止めはしなかった。アランにしかできない工程は完遂されていたし、この時点で彼の連続勤務時間がすでに二十四時間を超えていることを知っていたからだった。

オペ室を出て煙草を吸おうと箱を取り出したが、目の前の廊下の壁に全館禁煙と書かれたプレートが掲げられているのが目に入り、右のポケットに押し込むように戻した。

仕事はまだ終わりではない。終わるのはあと十二時間後か、それともさらに二十四時間か。

しかしアランは、これまでとはちがい、際限なくのびていく勤務時間に、むしろ奇妙な感謝さえおぼえるようになった。こうして仕事に没入しているあいだは、ジェシカのことを……どこへともなしに消えてしまった妻のことだと思わずにすむ。アランの胸中に関係なくやってくる患者たちに、以前は憤りさえ感じたが、いまではその無慈悲さがありがたい。変に親切にされるよりもいつそ無視してくれるほうが心地よくなるときがある。そうしてつぎつぎ来る重傷患者を相手していれば、しだいにジェシカの家出や、その原因となったアランの失態といった嫌なことが、現実には起こらなかったことで、ただの悪い夢だったのではとさえ思えてくる。

携帯に電話をかけようと思えばいつでもかけられた。だがかけなかった。かけられなかった。もしジェシカが電話に出なかったら……よしんば出たところで、なんといって謝ればいいか。アランには勇気がなかった。謝る資格もないと、自分自身に言い訳をした。時間が経てば経つほど事態は悪化することを、心のどこかで感じながら。

「先生、救急です」

振り向くと、グレースが息を弾ませて走りよってきていた。ヒアシンスの巻き毛が激しく躍動していた。

「ビルの窓の清掃作業員なんですが、作業中に転落して……一命はとりとめたものの、左大腿骨が解放骨折、肋骨も何本か折れてそれが肺に刺さって空気が漏れています。脊椎にも骨折がみられるよう

で……」

「もう到着しているのか？」

「あと五分で救急車が。先生はさきほどオペを終えたばかりですから、ほかの医師をあたったのですが、救急隊の所見を見るかぎり、先生に頼むしか……もうしわけありません」

「きみが謝ることはないさ。頼られるうちが医者華だよ。助手を頼めるかい？」

グレースは肩で息をしながらいきおいこんで頷いた。

「喜んで！」

アランはふたたびすべてを忘れさせてくれる修羅場へ戻った。しかしこんどは、なぜかジェシカの横顔が脳裡にちらついて離れなかった。

夏のニュージャージー州はきょうも輝かんばかりの晴天に恵まれた。その一日は、天使の祝福にあずかるような壮麗なる日の出から始まる。大西洋より太陽が昇ると、マンハッタンの摩天楼をぬって射し込んでくる朝陽が黄金の光芒となって、ハドソン川で待ち合わせしていた靄と妖精のように戯れるのだ。人人はそんな神々しい光景のなかを、会社へ出勤し、また朝の日課にしているランニングの舞台にしていた。ニューヨークもまた朝空に目覚め始めていた。リバイティ島の自由の女神像も燦然と朝陽をうけ、光輝あふれる美しさで街を見守っている。

まだほの白さを残す青空の下、ニューヨーク沖の海は、なめらかな瑠璃いろをたたえている。すぐ西にいけばもうそこはロウワー・ニューヨーク湾だ。

海面を迂るようにモーターボートが走っていった。操縦していた彼は知っているだろうか。その真下に、鋼鉄の魔王が息を潜めていることを。

「USS<プロビデンス>より入電。ソナー監視システム、異常な

し」

「大統領より命令の変更は？」

「きておりません」

海中にてしずかに敵をまっているのは、四隻の原子力潜水艦だった。ロサンゼルス級攻撃型原潜USS<プロビデンス>とUSS<ピッツバーグ>、USS<オクラホマ・シティ>。そして、それら三隻を大きく上回る長軀をもつのが、キングス・ベイ海軍基地からやってきたオハイオ級弾道ミサイル原子力潜水艦、USS<ネブラスカ>だ。

原潜には、攻撃型原潜と弾道ミサイル原潜の二種類がある。攻撃型は、敵水上艦船や潜水艦を文字通り攻撃するために建造され、空母や艦隊の護衛をおもな任務とする。ロサンゼルス級は攻撃型原潜として代表的な艦だ。

弾道ミサイル型は、攻撃型では不可能な弾道ミサイルを発射する能力を備えたもので、つまり潜水艦そのものが弾道ミサイルのプラットフォームである。可潜深度が攻撃型より劣るなどの欠点はあるが、敵国ちかくの海から突如として核弾頭を搭載した弾道ミサイルが発射できるとあって、戦略上重要な存在意義をもつ艦である。

その弾道ミサイル原潜であるオハイオ級USS<ネブラスカ>がこんな近海で警戒行動をとっているのはほかでもない。米本土に接近しつつある巨大生物の脅威を水際で食い止めることにある。とはいえ、核兵器をこのような米本土の目と鼻の先で炸裂させるわけにはいかない。USS<ネブラスカ>は、弾道ミサイルだけではなく、巡航ミサイルの運用も可能としている。ソナーがそれらしき音紋をとらえしだい、重魚雷と長射程の巡航ミサイルで仕留めることを任務としていた。むろん、<ネブラスカ>は本懐たる核弾頭と弾道ミサイルも装備している。大統領からの命令さえあれば、<ネブラスカ>はいつでも核ミサイルを任意の座標に落とす用意があつた。核兵器使用による海洋汚染など、もはやだれも気にとめていない。すでにフロリダ半島からニューヨークの沖合いは汚染されている。

「本来なら、いまごろは南シナ海へ向け『快適しごくな』遊覧航行中のはずだったのだが」USS<ネブラスカ>艦長のベニート大佐が帽子を深くかぶり直した。「まさかブルックリンを背中に負うとはな。人生どうなるかわからぬものだ」

副長が皮肉げに笑った。

「潜るミサイルサイロとして敵国沿岸に隠密裡に接近するのがオハイオ級の運用思想だったのに、これほど本国のちかくで潜航待機するというのも、思ってもみなかったことですね」

そのとき、ソナー室から連絡があつた。

「艦長、こちらソナー。十二時の方向、五十海里に反応を探知。――潜水艦ではありません」

ベニート艦長がマイクを手取る。

「深度および針路は」

「深度、二〇〇フィート。針路2-7-0。こちらへ一直線です。速力三十ノット」

「総員、戦闘配置」

「了解、戦闘配置に移行。護衛潜水艦に連絡。魚雷装填、全砲門注水開始」

艦内の照明が赤色に変じた。臨戦態勢だ。

「艦長、ちよつと待ってください」

ソナーの焦燥を帯びた通信に、ベニート艦長は不意をつかれた。「なんだ？」

「アンノウンが停止しました。本艦より、距離、四十五海里前後でロスト。音源がないのでパッシヴ・ソナーでは搜索できません」

「よし、USS<ピッツバーグ>にピンガー（探信音）を打たせる。正確な位置が特定できしだい雷撃を開始する」

「了解」

<ネブラスカ>がピンガーを打たなかったのは、オハイオ級に探査用アクティヴ・ソナーが装備されていないためだ。オハイオ級は徹頭徹尾、弾道ミサイル発射のためだけに特化しているのだった。

USS<ピッツバーグ>のソナーがボタンを押し、探信音を発信する。巨大な鐘を金槌で叩いたような音響波が放たれ、それは音速の見えざる無数の手となって周囲の物体を探る。

探信音が反射して、<ピッツバーグ>のもとに戻ってくる。

「USS<ピッツバーグ>より入電。いました。距離、四十七海里。深度二〇〇〇にて定位。完全に停止しています」

「ロサンゼルス級に雷撃準備命令。攻撃は斉射でおこなう」

「アイ・サー」

潜水艦には、とうぜんだが窓はない。潜望鏡はあっても海中のようすを観察する用途には使えないし、海中を探查するカメラもない。つまり深海を潜航中の潜水艦は外を目視する手段がない。外界の状況把握はすべてソナー、音による類推で補完している。

もし、これらの原潜に、肉眼でもカメラのモニター越しでもよいから船外を見ることができる目があったならば、海中にて繰り広げられたその光景に息を呑んだに相違ない。

原潜四隻から九〇キロメートル弱離れたところで、深度六〇〇メートルの、暗い、わずかに青みがかった深海のただなかでとまった巨大物体から、だしぬけに、目もくらむ閃光がほとばしった。青白い閃光は指向性をもった一条の光線となって、探信音を打ったUSS<ピッツバーグ>を襲った。光条がもつ膨大な熱量に、行く手を遮る海水はことごとく瞬時に蒸発。あまりの超高熱に膨張速度が音速を超え、水蒸気爆発をおこして道を譲る。

<ピッツバーグ>らが定位していたのは深度二五〇メートルだったから、光線は斜め下の前方から突き上げるようにして<ピッツバーグ>を呑み込んだ。青い光条は排水量七〇〇〇トンの金属と最新電子機器の塊のロサンゼルス級原潜USS<ピッツバーグ>など存在しないかのようにやすやす貫通し、爆発的なエネルギーを解放して海をかき乱した。

<ピッツバーグ>の船殻を構成するチタン合金と無反響タイルは光条に吞まれた瞬間に、内部構造と、艦内で右往左往していた乗組

員ごと液化を通り越して昇華、つまり蒸発した。気体となった金属と百名あまりの人肉は爆散した海水と水蒸気にまぎれ、その一部となった。これほどの大爆発だと衝撃波は海中だけにとどまらず、ありあまる力を横溢させ、海上に出てもなお暴れ狂うだろう。その轟きは大気を割り砕き、マンハッタンにまでおよぶと思われた。

水中衝撃波が残りの三隻の原潜にも殺到した。空気中より水中のほうが衝撃のエネルギーははるかに伝達されやすい。これほどの爆音が轟いているなかではソナーなど役に立たない。

「なんだ。なにが起きている。なにをされている？」

衝撃で横に激しく傾斜する艦内でベニート艦長が叫ぶが、ソナーという目を潰された潜水艦に状況を知るすべはない。唯一わかっているのは、

「USS<ピッツバーグ>との通信途絶！ 完全にロスト！」

ただ、それだけだった。狂った楽士が調子つ外れな楽音を鳴らししているような狂気の海で、光線を放ったアンノウンが時速二〇〇キロちかい猛スピードで<ネブラスカ>に接近しつつあることにも気づかない。

突如、<ネブラスカ>艦長以下乗組員たちは、みながみな、だれかに背中を突き飛ばされたかのように、前方につんのめった。隔壁にしたたか頭を打ち、頭部がスイカのように割れたものもいた。赤い照明のなかにあつてさらに赤い花を壁面に咲かせ、倒れて転がる士官の頭の割れ目から壊れた水道管のように血が噴き出す。

潜望鏡につかまっていた艦長も、つかんでいる腕が肩から引きちぎれそうな重力に苛まれていた。

「どうなっている！」

「わが艦が……勝手に、勝手に逆進しています！」

「バカヤロー、勝手に後ろ向きに進むなんてことがあるか。機関全速、メインバラストタンク、ブロー。緊急浮上！」

機関室から悲鳴が届いた。

「こちら機関室！ 艦長、スクリューが回りません！ まるでゴリ

アテの手に驚掴みにされているかのように！……」

ベニート艦長と副長は、お互いに顔を見合わせた。恐怖と絶望に支配された顔だった。

ロサンゼルス級USS<ピッツバーグ>が光線に吞まれる十分ほどまえ、緊急搬送されてきた重傷の清掃作業員の治療を終えたアランは、幽鬼のような足どりでオフィスに向かい、山積みの書類と格闘していた。IT全盛ともてはやされるこのご時世でも、書類仕事は根絶されるにいたらなかったわけだ。

機械的に片付けているところへ、オフィスにもうひとりの医師が入ってきた。大柄な黒人医師だ。同僚のギャンボル医師だった。

「よう。勤勉だな」

黒人医師の挨拶に、アランは書類から目を離さず生返事をした。ギャンボルが自分のデスクに座った。

「景気の悪い面だな。よし、原因をあててやろう。おまえ、ジェシ」とうまくいつてないな」

はつとして顔をあげると、黒人医師の意地の悪そうな笑みが待っていた。

「凶星か」

「なぜわかった？」

「サイキック・パワー……」

不自然な沈黙が降り積もった。巨漢が人懐こい笑顔を浮かべる。

「冗談だよ。おれにも経験があるからな」

ギャンボルの逞しささえ感じる黒い肌と分厚い唇、大きな瞳で形作られた顔には、疲弊のいろがあった。

「人を助けてばかりで、子供の授業参観にも行けない、家族の急用にも駆けつけてやれない。因果な商売だ」

アランはギャンボルの述懐に、じぶんでも気づかず頷いていた。同じ穴のムジナ、といえば聞こえは悪いが、精神的な意味での仲間

を見つけたようなきもちだった。苦しいのはじぶんばかりではない。時としてそれは逃げる言い訳を喪失せしめるが、いまこの時だけは、ギャンボルのような存在が途方もなく頼りになる思いだった。

アランは、話すべきか話さざるべきか迷った。愚痴を聞かされて快い気分になる人間などいない。話せばギャンボルに対する甘えになる。

そのまま書類をやつつけていると、両手を頭の後ろで組んで椅子にのけ反っているギャンボルが、

「で、どうなんだ、実際。カミさんとはよろしくやってるのか？」  
誘導するような問いに、アランは、話してもよい許可証をもらったような心持ちがした。アランはペンを投げるように置いて、肘をついた右手で頭をかかえた。話し相手がほしくないといえ、うそになる。

「ジェシカが家出をしたんだ」

「ワーオ」

「結婚記念日に帰れなくてね……ぼくがことしこそはと約束したんだが、結果的にすっぱかしてしまった。笑えよ」

「はっはっはっはっは！」

ギャンボルが真顔でアランを見据えながら大笑した。白目が黄いろく染まったその目はまったく笑っていなかった。

包丁で切ったように笑うのをとめたギャンボルは、じつとアランを見る。

「くだらないな。まったくくだらない。おまえがひとこと謝ればすむことだろう。意地を張ってもいいことはひとつもないぞ。とくに男はな」

「謝ろうにも、電話をかけづらくて……こわいんだよ。別れようなんて言われたらと思うと」

「ガキかおまえは。そんなときゃそんなとき。人生なるようにしかならんし、人間てのは日頃のおこないの報いを受けるようにできてるのさ。おれなんてこのザマだぜ」

アランは思い出した。たしかギャンボルはおとしに離婚していたはずだ。

「おれも家庭を顧みなかった。仕事に打ち込んだ。医者の仕事はいやなことたくさんあるが充実してたし、なにより家族に経済面で不自由させなくなかったからな。金を稼ぐのがおれの役目で、おれとしては最大限の愛情表現のつもりだった」

ギャンボルは短く刈り込んである頭髪を大きな掌で撫でながらいった。

「ある日、一歳の息子、ジミーって言うんだが、そいつが熱を出した。医者から見りや子供が熱を出すなんてよくあることだし、べつにうるたえなきやならんようなことでもない。でもおれの女房、あいや、元女房はちがった。『いますぐ帰ってきて！ ジミーが死にそうなの！』。おれは仕事の真つ最中だし、そもそもおれの専門は消化器だ。だから、暖かくして、みだりに薬は飲まさず寝かしつけ、三日経って下がらないようなら小児科に行けっていったんだ。熱が出始めて三日経たなきや、ただの風邪なのかインフルエンザなのか、専門医でも判断できんからな。そうしたら元女房はこういった。『なんでもいいから帰ってきて。不安なの！』。むりに決まってるしおれが帰ったところで意味がない。仕事が一段落しておれが家に帰ったのはそれから四日後だ。けつきよくジミーの熱は軽い風邪で、おれが帰るころにはピンピンしてた。どっかいカミさんはカンカンだった。なんで帰ってきてくれなかったの、わたしがどれだけ不安だったか、あの子がどれだけ苦しがつてたか知ってるの。けつきよくあなたはわたしたち家族が死にそうになってもなんとも思わないひとなんだわ……。さすがのおれも頭に血が上った。だからこういつてやった。『おれが帰ったからといってそれでジミーの熱が治るわけじゃないだろう』。どうも禁句だったようだ」

ギャンボルが苦笑し、アランもつられそうになった。

「それで女房は出ていった。親権は彼女に譲ったよ。いまは寂しい独り身さ。ところで女ってのはどうして決まって仕事とわたしとど

「うちが大事なのって訊くんだろっな？」

おどけていうギャンボルに、ついアランも吹き出した。ぜんぜん身におぼえがないわけじゃない。男にとっては永遠の難問だ。

一拍か二拍の間があった。天使が通りすぎるようだった。

「おれはだめだったが……おまえにはまだ糸口があるんじゃないのか」

ゆっくりとした口調のギャンボルに、アランはしかし息を吐いた。「ぼくもきつとだめだ。彼女が許してくれるとはとうてい……」

ギャンボルはアランよりさらに長い溜め息をついた。

「バカなやつだな」

容赦ないひとことに、アランのからだが硬直する。ギャンボルは微塵も許さずつづける。

「いいか、たしかにおまえは医者としての腕はばつぐんだ。ニユーヨーク中をさがしてもおまえほどの逸材は見つからないだろう。だがおまえはバカだ。バカで幼稚な間抜けだ。クソがつくくらいにな。そんなおまえの面倒を見てくれる女が世の中にどれだけいると思う？　そこへきてジェシーはとても魅力的な女性だ。おまえが捕まえていなくてどうする？」

アランはこんどは両手で頭をかかえた。ギャンボルが畳みかける。「彼女はおまえが迎えにくるのをまつてる。いまこの瞬間もだ。なのに当のおまえはこんなところでいつまでもぐずぐずしていて、それでいいのか？　おまえは後悔するしか能のない女々しいオカマ野郎なのか？　あ？」

ギャンボルはまるで過去の自分自身に忠告しているかのように言い聞かせる。アランが煩悶を洩らす。

「どうしたらいいんだ」

「簡単なことさ！　おまえがしたいようにすればいいんだよ。どうなんだ。おまえは彼女を愛しているのか！　いないのか！」

「……ああ、愛しているよ。愛しているさ！」

「よし！　ならいますぐ彼女を抱きしめに行くんだ。相手が勝手に

こっちの心中を察してくれるなんて思ってたらとんだ勘違いだぞ。こっちからストレートに思いをぶつけるんだ。もしハート・ブレイク・ホテルになったら夜通し奢ってやる。そんな心配はいらんだらうがな！」

よっしゃあ！ みずからの両頬をたたいて気合いを入れ直したアランが立ち上がろうとした、そのとき。

眼前で落雷があつたかのような轟音とともに、オフィスが、キングス・カウンティー総合病院ごと激しく揺さぶられた。デスクと椅子が足踏みして不協和音を奏で、これでもかと積まれていた書類や分厚いファイルの山が崩れ、床に散らばつた。だれかのデスクの上にあつた飲み残しのコーヒークップがスケートのように滑って机上から転落、粉々に砕けて冷めきつたコーヒートをブチ撒けた。同時に電気が消えた。窓のないオフィスは朝なのに一寸先も見えない闇に早変わりした。ギャンボルはデスクにしがみついて突然の揺れに耐えていたが、立ち上がりかけていたアランはバランスを崩して無様に転倒した。建物が揺れたというより、ふたりにとっては、世界が揺れたような感覚だつた。

動揺がしだいに終息し、轟音も通り過ぎて遠雷のように残るだけだつた。消えた蛍光灯が軽い金属的な音を立てながらふたたび光を灯していく。

灯りが回復し、揺れも収まって、アランとギャンボルはおそろおそろ立ち上がった。あまりのショックに膝が笑う。それもあって、無意味な反応だけれども頭を低くし、わけもわからず警戒して中腰になつた。

「なんだつたんだ、いまのは」

ギャンボルが図体に似合わない震えた声でいった。なにかことを紡がなければ、という妙な強迫観念にとらわれて、アランも、

「いまのが、地震つてやつか？」

とどもりながら、だれともなく訊いた。アランもギャンボルも生粋のニューヨーク人だから地震の経験はない。地震と衝撃波のちが

いなどわからない。

つぎにふたりの脳裡をよぎったのは、患者たちのことだった。

弾かれるようにアランがドアを開けると、廊下は部屋から飛び出してきた入院患者とパニックに陥った通院患者、かれらを落ち着かせようと奮闘している病院のスタッフとで騒然となっていた。廊下から人が溢れんばかりになっており、身動きがとれない濁流のようだった。

人間の濁流のなかに、アランは必死に患者たちの混乱を抑えようとひとりひとりに説得にかかっている女性医師を見つけた。金糸で編まれた豊かな頭髮は乱れ、オリーヴの瞳には現状を把握し打破するための知恵を模索しているようすが窺えた。

アランは人の波をかき分けて近寄った。

「グレース！ 無事かい？」

アランが呼びかけると、反応したグレースが振り返った。グレースははっとしたのち、どこか安堵したように上気した頬をわずかに弛めた。

「エイブラムス先生、ご無事でしたか」

「ああ、ぼくは。しかしいったいさっきの揺れは？ 地震だろうか」

グレースは思案しながら、

「いえ……たぶんちがいます」

「どうして？」

「地震は、こう、なんていうか、地面ごと揺れが来るんです。でもさっきのはなにかちがう感じでした。わたしはカリフォルニア出身ですから、地震には慣れているんですが……」

「じゃあ、なんだろう」

グレースはわからないというふうにかぶりをふりながら前髪をかきあげた。さつき遠目に見たときは気丈さを感じたが、近くで見ると彼女の美貌には不安と焦燥が滲みでいて、それをどうにか理性で押さえつけているような葛藤と危うさに彩られていた。

「とにかく、パニックを収めないと……ギャンボル！」

アランにグレース、それにギャンボルも加わって、海瀟のように押し寄せてくる患者たちをとりあえずなだめにかかった。だが、安心して部屋に戻ってといくらいても、生まれてこのかた地震を知らない人間は恐怖におののくばかりでなかなか聞いてもらえない。それはそうだろう。アランもギャンボルも内心こわくて発狂しそうな始末だったから。

そうしているうち、同僚の医師が声を張り上げた。

「テレビで臨時ニュースをやってるぞ！」

こんどはそちらのほうへ人津波が流れ始めた。将棋倒しになってしまうことを恐れたアランたちの、落ち着いてという注意もまったく効果がない。

病院中のテレビというテレビに、患者や医師、看護師などなど、どこにこんなにいたのかというくらいの人数の人人がかじりついた。ブレイキング・ニュースが始まり、女性ニュースキャスターが困惑したようすで語りかける。

「さきほど二十分まえに、強い地震のような揺れがニューヨークで起こりました。揺れはマンハッタンやブルックリンなどでも観測され、ロウワー・ニューヨーク湾では潜水艦のような船が燃えながら浮かんでいるという情報もあり……」

「ロウワー湾なら、屋上に上れば見えるかもしれない」

だれかがそういったので、興味を覚えた人たちはぞろぞろ病院の屋上へむかった。

「いつてみようぜ、アラン」

ギャンボルに背中を叩かれ、アランも同道した。グレースも怪訝そうな表情でアランにしたがった。

エレベーターは止まる恐れがあったので階段を使った。みんな駆け足だ。小屋状の出入口の扉をくぐる。

屋上は平坦な空き地というわけではなく、避雷針や警戒灯がそそり立っているし、空調の室外機や配管もある。また一角にはドクタヘリ発着用に、屋上の床から一段高く組まれたヘリポートがある。

ロウワー・ニューヨーク湾はキングス・カウンティー総合病院の南西だ。ヘリポートのある一角がまさに南西だった。

キングス・カウンティー総合病院は建物が「コ」の字型をしており、凹んだ部分には駐車場がある。対して出っ張った部分はそれぞれ西側と東側で、ヘリポートは西側の端のほうにしつらえられていた。

いち早く屋上にたどり着いた物見高い医師たちがヘリポートに上がり、掌を目の上にかざして遠方を注視する。朝になったばかりなのに、すでに陽光は熱をもち、屋上のコンクリートを焼き炙っていた。

屋上に出ると、さっきの揺れで反応したのだろう、路上駐車していた車の防犯警報がおちこちでけたたましく鳴り響いて朝空にこだましていた。

「なにか見えるか」

アランが叫ぶように医師たちの背中に問うと、

「海から煙があがってるが、よくわからない」

とそのうちのひとりが答えた。

「あ？　なんだありゃ」

ヘリポートの上のだれかがいった。

ロウワー湾から白浪が孤峰のように高く立ち、朝陽をうけて銀いろの紗幕となる。その中心から、なにか黒い、葉巻型の物体が躍り上がるように飛び出した。一瞬、みなは、すわミサイルかと思ったが、黒い葉巻は不規則に捻りをくわえた回転を繰り返しながら空へと上昇。やがて重力にしたがい放物線を描いて下降を開始した。

黒い葉巻のようなそれが、しだいに大きさを増し、日光を撥ね返す金属の輝きがアランたちの目を射抜く。

かれらは知らない。それがニューヨーク沖で警戒を続けていた才ハ英才級戦略原潜USS<ネブラスカ>だということを。

知らぬまでも、その大きさが急激に増していくにあたり、本能的な恐怖が屋上の観衆の全身を貫いた。

「……まずい。こっちに来るぞ、逃げる！」

言うがはいか、屋上にひしめきあっていた人人は悲鳴をあげて逃げ惑った。出入口はひとつしかない。人ひとり通り抜けるのがやつとなドアに全員が殺到し、押し合いへし合いし、つまつて動けなくなった。振り返ったアランは息を呑んだ。USS<ネブラスカ>、その全長はじつに一七〇メートルをほこる。アランのアパートは六十階建てのビルだが、それがそのまま飛んでくるような圧迫感だった。摩天楼の高層ビルのように巨大な原子力潜水艦の黒い表面の仔細なディテールや、後部にスクリューがついているのまで確認できるにいたつて、間に合わないとなつさに思った。グレースだけはなんとか守ろうと、彼女の蜂腰を抱き寄せ、背中に覆い被さつた。

海から飛んできた巨体の頭部がヘリポートの一角に激突、それでも勢いを減殺できず、コの字型をしているキングス・カウンティー総合病院の西側を屋上の人間ごとさらうように破壊した。アランの目の前を漆黒の船殻が横切り、大質量が病院の東側にまで襲いかかる。

黒い魔王は東棟をウエハースのように半分ほど押し潰し、軋む音を断末魔として、やっと、やっと停止した。

半壊状態になった病院の屋上でひしめきあっていた人たちが、眼前でおきた信じがたい出来事に恐慌し、われ先に逃散しようとする。「どうしよう、どうしよう、逃げないと」

みな混乱しおびえきつている。ひとつだけの出入口にみなが押しかけるため、かえつてつかえて時間がかかる。

「神さま……神さま」

「くそ、なにがどうなってるんだ、くそ！」

同じ波形の波長が合うと増幅するように恐怖が共振と共鳴を呼び、パニックが人人に伝染していく。危険な兆候をアランはみた気がした。自然にことばが弾き出されていた。

「黙れ！」

腹の底からの怒声に、全員が首をすくめ、アランをみやる。

「ここでわめいていてもしかたがない。病院内の患者を避難させよう。このぶんだと病院が倒壊するかもしれない。そのためにはまづぼくらが落ち着くんだ。いま重要なのはアレよりも患者の安全の確保だろう。ちがうか？」

アランが潜水艦を示しながらいうと、みなが周りの同僚たちの顔を見回しながら納得したように頷いた。

「ありったけの救急車にスクールバス、なんでもいい。とにかく患者たちを搬送できるものをかき集めてくれ。助かった患者だけでも避難させるんだ。もうここはだめだ」

大声で指示するアランに、スタッフたちは秩序を取り戻して動き始めた。ニューヨーク中のあらゆる病院にかたっぱしから連絡し、避難させた患者の受け入れを要請した。

「崩壊が激しいところへはむりに行くな。われわれでは手がだせない。レスキューの到着を待とう。グレース、911に連絡してくれ」

「わかりました」

「ギャンボル手伝え。足が不自由な患者を運ぶ手助けをするぞ」

「よし！」

左足を折って入院していたダイエットの必要な男性に肩を貸して病院の外に出たアランは、飛来した魔神の威容にあらためて驚愕した。外観から潜水艦であろうことはアランにもわかる。潜水艦は、東棟にもたれるように倒れかかっていた。円みを帯びた頭部が駐車場のアスファルトにめり込み、胴体が建物の半ばにまでくいこみ、船尾部分は朝の薄い青空にたかだかと伸びていた。船尾にはスクリーンがあつたが、そのプロペラがいびつな形に歪んでいた。建造物や地面に接触して破損したというより、なにか巨人のようなものに握り潰された感じに見え、アランは身慄いした。

「なんでこんなもんが空飛んでくるんだ」

ギャンボルが真っ黒な顔を青ざめさせていった。その問いに答えられるものは皆無だった。

サイレンをけたたましく鳴らしながら消防とレスキュー・チーム

が駆けつけてきた。かれらも病院にもたれかかる大型潜水艦に度肝を抜かれながらも、さすがにプロというべきか、すぐに仕事に取りかかった。潜水艦の衝突で破壊された西棟と東棟の部分で人命検索をするのだ。

おくれて黄いろのスクールバスや市が運営しているバスなどが続々と集まり、患者たちを乗せて指定された病院へと向かっていった。病院周辺は、オブジェと化した潜水艦を携帯電話のカメラ機能で撮影しまくる野次馬でごった返していて、アランたちは野次馬を下がらせて車輛が入るためのスペースを確保するのに盡力を余儀なくされた。患者を病院から出すよりもむしろそちらのほうが苦労した。救急車はともかくバスは小ささまざまなのが後から後からつぎつぎ来る。バスの応援は、予想を上回る台数が集結してきてくれて、搬送手段が不足したらどうしようかと考えていたアランの心配は杞憂に終わった。嬉しい誤算だった。

あらかた患者を搬出し、いつのまにか全体の指揮をとっていたアランは、疲労を覚えて、駐車場に転がっていた、大木の切り株ほどもある瓦礫のひとつに腰をおろした。

両肩をつかまれて、ぎよっとして振り向くと、巨漢のてっぺんに据えられたギャンボルの顔が笑っていた。

「おつかれ」

アランも薄笑いを返そうとすると、妙なものが視界に入った。

キングス・カウンティー総合病院の駐車場に面するクラークソン・アヴェニューを、多くのニューヨーク市民がなにかを目指すように進んでいる。みんな、アランたちから見て右のほうへ、つまり、西のほうへ向かっていた。ほとんどの物は小走りで、スケートボードや自転車でそのマラソン大会に加わっているものもいた。

なにかあるのか？ アランは疑問を解消するべく立ち上がり、参加者のひとりのヒスパニック系をつかまえた。

「どうしたんだ？」

「わからない。でもおれが聞いた話じゃ、海からなんか、青い光が

空へ向かって伸びて、爆発音がして、そのあとその「彼は総合病院に倒れこんでいる原子力潜水艦を指差した。「そのでかいのが海からジャンプしたらしい。だから海に行けばなにがあったかわかるんじゃないかと思って」

ヒスパニックの血を受け継ぐ男性は早口でそうまくしたてると、ふたたびクラークソン・アヴェニューを駆けていった。道路は歩行者で埋めつくされていた。搬送作業があとすこしでも遅れていたら、バスや救急車がとんだ足止めをくらっていたかもしれない。

「行ってみよう」

アランがつぶやき、ギャンボルも応じた。

アランはグレースにいつて聞かせた。

「きみはここに残っていてくれ。なにがあるかわからん」

グレースは何度か小刻みに首を縦に振った。こういうとき、わざわざ見物にいきたがるのは概して男だけだ。

アランとギャンボルをふくめた群衆の群れは、格子状に形成されたブルックリンの街を南西に下り、海を間近に望める海岸へ向かった。アランとギャンボルとは、キングス・カウンティー総合病院から約十キロほど離れたカルヴァート・ヴォークス公園に集った。コニーアイランドにほどちかいこの公園は、都会のなかにあって計画的に植林された木々と緑に満たされた癒しのレクリエーション帯であるが、整然としたその佇まいは自然の雑木林とはちがい、無条件で人間を迎える笑顔のみで固定されている。美観を損なわぬように隅々まで整備の行き届いた樹木の集まりは、剥製のコレクションか、工場で大量生産された工業製品を陳列しているふうにも見える。葉を繁らせた本物の植物であるのにどこかコンクリート・ジャングルと似た人工的なおいが拭えず、結果、それは森という木の社会ではなく、あくまで木がただ並べられて、憩いを求めに訪れた人間が心地よく寝そべることができるように短く刈られた芝生との雑居房となっていた。

入り江のグレイヴスエンド湾を臨むこの美しくもいびつな公園に、

やはり海のようにすが気になる市民が大勢あつまって、アランたちもそのなかに混ざった。押しも押されぬ大集合に人いきれしそうだ。いま、ニューヨーク湾に面した海岸線は、どこもこのこと同様に多くの観衆で立錐の余地もない状態であろうことは想像に難くなかった。海は、たいしてそう荒れているという感じでもなく、朝陽を浴びておだやかに凪いでいた。右手にはベラザノ橋、少し海を進めばロウワー湾に出る。その外はもう北大西洋だ。

海上から運ばれる生ぬるい潮風とまばゆい陽光が目には沁みだ。

そのとき、芝生を踏みつけている革靴の底から、腹に響くような重低音を伴う揺れが伝わってきた。思わず足下に視線を落とす。

「いまの感じたか？」

ギャンボルも同様の震動を受けたらしく、背中越しにアランにいった。その声は不安に上ずっている。

「ああ」

アランが芝生に覆われた地面を見ながら返事をする。

また、重低音とともに、大地がわずかに揺れた。公園に集った大多数の市民たちもそれを感じ、驚きの声をあげながらあとずさった。グレーヴスエンド湾が、自然の波とはちがう表情をみせた。海面が煮えたぎっているかのように奔騰をはじめた。白い気泡が大量に海面で弾けているのだ。攪拌された海面は同心円状の波をつくり、それはアランたちのいるカルヴァート・ヴォークス公園にもさざ波となつて到達した。人人は一樣にぼこぼこ泡を噴く海を指さし、何事かと口々に言い合った。

しばらく海底火山の噴火のように立ち昇っていた膨大な気泡は、やがてその勢いを弱め、ついには海面から姿を消した。

そして今度は一転、海が渦を巻いて局所的に潮位を下げはじめた。まるでバスタブの栓を抜いたかのように穴が穿たれ、海水が吸い込まれる。渦の直径はしだいに大きさを増し、目測で二〇〇メートルを超えんとしていた。

大渦の魔手は海水ごと海上のあらゆるものを引きずりこんだ。公

園のすぐ横にあるマリナーから興味本位でもつとちかくで見ようと出てきた一隻のクルーザーが、おもむろに渦の外縁に触れた。その時点で手遅れだった。逃げようとするクルーザーの推進力などまったく問題にせず、渦は獲物を捕まえて放さなかった。まるで事象の地平面に踏み込んだかのようなだった。クルーザーはルーレットの玉とそっくりに渦の内周を旋回しながら、中心に船体を丸呑みにされた。みなが神の名を叫ぶ。

刹那、渦に全身を吸い込まれたクルーザーが、海に拒絶されたように、天地を逆さまにしながら海面から飛び出してきた。宙に舞い上がったクルーザーは、海の上を走っているときとは見違えるほどに大きく、きらめく雫の尾を曳きながら半弧を描いてアランたちのいる公園の波打ち際に落下、マストや操船室を押し潰して逆さの瀑布をあげる。野次馬たちはたじろいで一旦は後退したが、湾の渦がおさまっていくのを見て、ふたたび青い波の打ち寄せる汀にまで足を進めた。

地球上のすべての音が消失した気がした。

次の瞬間。

唐突に海面が持ち上がり、それは見上げるような丘陵のごとくに天へ聳える。まどつていた海水の衣が剥離するように流れ落ち、その中から、空を覆い地を踏みにじむような体躯が現出した。

それは異形だった。湾の海底を踏みしめる四本の脚は筋肉の束を撚り合わせたかのように太く、力強い。前肢は胴体からほとんど横むきに生えており、鈍い銀に輝く装甲のようなもので鎧われて、人間でいう肘か膝にあたる部分からさらに突出伸長して天空を突かんとしている。後肢は獣脚で、爪先だけを地につけているため、膝関節が二ヶ所あってひとつは逆方向に屈曲しているように見える。胴体を包む漆黒の鱗が太陽を裏切るように禍々しく光を反射する。その巨軀の後部は長大な尾へと流れるようにつながっていて、縦に幅のひろい側面に異国の文字のような紋様が刻み込まれた尾は先へいくほど細くなり、鋭い先端に収束する。

その胸の前部から垂直に生えているのは、同じく黒鱗に守られた腹部、威風堂々たる胸郭、装甲された広い肩幅と隆隆たる両腕。頂上に傲然と掲げられた頭部は、太古の恐竜のようだった。

幾本も屹立している角は威厳さえ感じさせ、大きく裂けた口腔には鰐のごとき獐猛な牙をそなえる。

そしてその眼は、黒目がなく白目をむいており、果てしない憎悪と憤怒に狂っているかのようだった。

その下の胸部には、小さな孔のようなものが……むろん小さいというのは、怪獣の軀に比較してのことで、じっさいにはトンネルほどの直径があるのだろうが……蜂の巣よろしくいくつも密集して開いており、どこかしら固着したフジツボの群れを思わせた。

全体としては、四足獣に人間型の上半身を接合させたような姿をしている。いうなればケンタウロスの形態をとった六肢の邪竜であつた。

むろん、アランたち群衆にそこまで詳細に観察できる余裕をもつたものなど絶無だった。アランを含めた人人は怪獣が現れたとき、それがあまりにも巨大だったので、眼前に幾星霜を重ねた荘厳な神殿が突如として顕現したような圧迫感に圧倒され、肝をつぶして反射的に逃げまどっていたのだ。また同様の理由で怪獣が視界に収まらず、全体像がまったく把握できなかったからだ。呆然と立ち盡くすのは、非現実的な光景に脳の対応が追いつかなくなり、逃走行動にまで思考がいたらない人たち。かれら彼女らは放心状態になって怪獣を虚ろな目でみつめている。

怪獣が顎あごを開いて呪詛の咆哮をあげ、大気をびりびりと慄哭させ大地を鳴動させると、そこではじめて緊急事態であることをさとり、雷に打たれたように仰天して逃走の波の尻に追いつがった。

悲鳴をあげ算を乱した市民の群れは、本能的に怪獣から百八十度うしろへ反転して遁走した。アランもギャンボルも無我夢中で走りまくった。道路を横切ろうとしたとき、アランに先んじて飛び出したブルネットの女性が左から走ってきたイエローキャブと衝突。ボ

ンネットに乗り上げ頭部をフロントガラスに強打した彼女は、四肢から力の抜けた状態で十メートルほども撥ね飛ばされ、受け身もとらずうつぶせにアスファルトに叩きつけられた。彼女はそのままぴくりとも動かなくなった。急停止したイエローキャブの後部に後続者がつぎつぎ追突し、玉突き事故となった。そんななかを縫うようにして、もつれる足をむりにまわして逃げる。

アスファルトが一瞬沈んで跳ねかえされるようにもどる地響きがアランの足元をすくった。上体だけひねってふりむくと、怪獣が湾からカルヴァート・ヴォークスパークに上陸し、木々を踏み倒しながら進行をはじめていた。樹木を薙ぎ倒し、へし折る四つの脚はそれだけでも強靱至極な怪物、指の先端から生える鋭利な鉤爪は死に神の大鎌よりも禍々しく大きい。圧倒的質量に、歩くだけで地震がおきる。

海から完全に上陸し全容を現した怪獣は、さらに巨大になったように見えた。

それは、体高一二〇メートル、頭頂から尾の先までの全長二六三メートルという堂堂たる威容。これまで地球に存在したいかなる生物をもはるかに凌駕する巨体だった。でかい。あまりにでかすぎる。怪獣とアランの距離はゆうに五〇〇メートルは離れていたが、アランはまるで怪獣がすぐ目の前にいるかのような錯覚をおこした。大怪獣は、四つの脚の右前肢と左後肢、左前肢と右後肢をセツトにして前へと進め、前進を開始した。巨大であるがゆえに一步の間隔がとてつもなく長い。スケールの大きさから見かけ上の速度は緩やかに見えるが、実際には疾走する自動車なみの速度で移動している。もうすでに広大なカルヴァート・ヴォークスの敷地を越えようとしていた。原始的な恐怖がからだを突き動かす。やつの真正面に逃げてはだめだ。追いつかれる。

「ギャンボル、こっちだ！」

怪獣の進路から真横にそれ、ギャンボルを大声で呼ぶ。気づいたギャンボルが逃げ惑う市民と垂直にぶつかりながらアランに駆け寄

る。

だが遅かった。

ギャンボルの姿が周囲の風景ごと影に吞まれ、直後、黒人医師をふくめた、影のなかの市民たちが消失した。

直上より降ってきた、空母のように大きい大怪獣の前脚によって、脚は怒れる神の杭のように地上に打ちつけられ、爬虫類に似て先から爪の生えた指をもつ足裏が、たまさかそこにいた市民を踏み潰した。アスファルトが爆発したようにはじけ、粉々になって巻き上げられる。それが破片の小雨と化して、アランたちに降りつける。小規模な地震様の揺れと吹きつける風圧に煽られて転がるように倒れたアランは、ただ愕然として怪獣の前脚に釘付けになるほかなかった。脚の重心が移動し、足裏が地面から剥がされる。前へ出された怪獣の右前脚は、自動車が詰まって数珠つなぎとなっているシヨア・パークウェイを踏んだ。足の裏の範囲にいた車や人間ごと。

自動車道路を越えた先はもう街だ。怪獣は進路上にあった、ブロックごとに区切られそのなかに押し込められた家々をなんの躊躇もなく踏み潰し、そして進撃した。四本の脚が歩く、ただそれだけで家が破壊され、爆発が起き、下敷きにされた人人が蛙のように潰れて内蔵と血をブチ撒け、深く沈んだアスファルトの一部となる。それを一二〇メートルの高みから見下ろす竜の頭部は、瞋恚の赫怒に堪えきれぬように吠えた。白目をむいたまま……。

怪獣の右側に逃げていたアランは、擬似的な地震と恐怖に足がすくみ、シヨア・パークウェイとクロップシーアヴェニューが鋭角に交わるところに植林された街路樹にしがみつき、荒い息に肩を上下させながら、目はしっかり悪竜のほうを見ていた。大怪獣は行く手にあるものをすべてを粉碎して進んでいる。

アランの背筋に、悪寒。暴風をともなった濁音が津波となって迫ってくる。

極度の緊張に耐えられなくなった下半身が脱力し、うつぶせに倒れる。起き上がろうとしても、足がいうことをきかない。

○・一秒にも満たない刹那、伏せたアランの頭上をなにかが超高速で掠め、軌道上に存在していたものをことごとく粉微塵に破壊し、それでも勢いを衰えさせず通過していく。アランが身を寄せていた、人ひとりの姿を余裕で隠せる大木も、頑強なセルロース構造からなるからだを真つ二つに叩き折る。のみならず、折られた大樹は踏み固められた地面から引き抜かれ、土煙をあげて放射状に広がる根を露出させ宙を舞う。

怪獣の、高硬度の鱗で覆われた尾が振るわれたのだ。膨大な質量と大きさというものがもつエネルギーが凄絶無比な破城槌となって、家も人も車もなにもかも叩き壊し、吹き飛ばしていく。ブロックのグリッドに詰め込まれた家や店が、まるで枯れ草のように刈られていった。直撃をつけた人間は、吹っ飛ぶどころか原形も残さない挽き肉となって爆散した。

いまだ吹き荒れる颶風にうめきながら、アランは上体だけ起こして、怪獣のいる方角をみた。尾は、まだ先端がすぐちかくで振られているが、怪獣のすべてを拒絶するような背は、すでに砂煙に霞むほどの遠方にあつた。歩いて巨体が鉛直に揺れるたびに起こる地面の震動も、だんだん小さくなっていった。

アランは、その後ろ姿にほとんど釘付けとなつて、両手で頭をかかえたまま視線を送り続けていた。一瞬でも目線はずしたらいつのまにかまた目の前に怪獣が立っているのではないかと、ありもしない妄想に囚われていたのだ。

すぐそばを、砂埃まみれの若い黒人男性が駆けていって、アランはぎくりとさせられた。ギャンボル、と声をかけようとした。けはいを感じて走りながら振り返ったその男性は、ギャンボルとは似ても似つかない別人だった。アランの伸ばしかけた手は虚空をさまよった。

慚愧の念に苛まれながら、アランはふたたび怪獣の去っていった方向へ首をめぐらした。怪獣は、海岸をシヨア・パークウェイ沿いにマンハッタン方面へ向かっているようだった。

地響きがほほおさまったところ、そこにはアランの姿はなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9196v/>

---

大怪獣現る

2011年11月9日03時11分発行